

連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 11 No. 1

第41号

June 2020

対人援助学会

NO. 4 1 M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-017
援助職の未来(1)	千葉 晃央	018-022
臨床社会学の方法(29)	中村 正	023-032
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団 遊	033-034
カウンセリングのお作法(23)	中島 弘美	035-040
集団精神療法について(4)	藤 信子	041-043
エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援(7)-	岡田 隆介	044-049
「続・家族理解入門」(11・最終回)	団 士郎	050-059
社会的養護の新展開 10	浦田 雅夫	060-061
幼稚園の現場から 41	鶴谷 圭一	062-070
福祉系対人援助職養成の現場から40	西川 友理	071-079
ああ、相談業務	河岸 由里子	080-083
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	084-086
ドラマセラピーの実践・研究・手法(1)	尾上 明代	087-092
対人援助学&心理学の縦横無尽	サトウタツヤ	093-104
きもちは言葉をさがしている(40)	水野 スウ	105-111
ノーサイド(休載)	中村 周平	
盆踊り漫遊(8)	竹中 尚文	112-119
周旋家日記(休載)	乾 明紀	
男は痛い！(35)	國友 万裕	120-125
役場の対人援助論(33)	岡崎 正明	126-130
臨床のきれはし(8)	浅田 英輔	131-134
新版K式発達検査をめぐる その31	大谷 多加志	135-137
講演会&ライブな日々	古川 秀明	138-142
家族と家族幻想(2)	坂口 伊都	143-147
周辺からの記憶 —東日本大震災家族応援プロジェクト—(27)	村本 邦子	148-167
病児保育奮闘記(23)	大石 仁美	168-171
対人支援 点描(22)	小林 茂	172-176
精神科医の思うこと(17)	松村 奈奈子	177-180
馬渡の眼	馬渡 徳子	181-182
東成区の昭和 やぶにらみ日記	柳 たかを	183-190
町家合宿 in 京都 (14)	山下 桂永子	191-193

そうだ、猫に聞いてみよう(18)	小池 英梨子	194-201
先人の知恵から (28)	河岸 由里子	202-207
私の出会った人々(休載)	関谷 啓子	
うたとかたりの対人援助学 (14)	鵜野 祐介	208-212
ああ結婚 (14)	黒田 長宏	213-215
PBLの風と土(13)	山口 洋典	216-221
接骨院に心理学を入れてみた(12)	寺田 弘志	222-232
現代社会を『関係性』という観点から考える(12)	三浦 恵子	233-236
マイクロアグレッションと私たち(11)	朴 希沙	237-241
保育と社会福祉を漫画で学ぶ(10)	迫 共	242-245
「余地」―相談業務を楽しむ方法―(10)	杉江 太朗	246-249
統合失調症を患う母とともに生きる子ども(10)	松岡 園子	250-255
生体肝移植ドナーをめぐる物語(9)	一宮 茂子	256-267
「盲ろう者」として、自分らしく生きる(休載)	中條 與子	
こころ日記「ぼちぼち」 part II	脇野 千恵	268-270
MSW という仕事～バイステックの7原則から再考する～(4)	高名 祐美	271-274
原田牧場 Note (2)	原田 希	275-277
みちくさ言語療法(2)	工藤 芳幸	278-280
新連載 かけだ詩(1)	川畑 隆	281-285
新連載 ブルーグレーの肖像(1)	天川 浩	286-288
新連載 応援、母ちゃん(1)	玉村 文	289-297
新連載 HITOKOMART	篠原ユキオ	298-301
編集後記	編集長&編集員	302-303



ハチドリの器 24

見野 大介

Mino Daisuke



上：ほんのり四角のお皿

中：リム深皿

下：耳付き花器





玉村 文 新連載

今号から執筆させていただきます。京都



府出身。現在、地域若者サポートステーション勤務。33歳で初めて出産し一

児の母。母親業と対人援助の仕事しながら生きる日常を書いていこうと思います。

趣味は、ヨガとイラスト描き。コロナ禍で、保育園の登園を自粛せざるを得なくなり育休を延長したことで、趣味が復活。去年まで住んでいた横浜市では、6月末まで登園自粛が延長されるそうです。コロナは育休を延長した方、在宅ワークに切り替えた方、仕事を辞めた方など、子育てしながら働く女性たちにも大きな影響を及ぼしています。東京で出産予定の妹は、病院の面会禁止、立ち会い出産もできず。目に見えない感染症のリスクを避けながら、子どもが元気にたくましく生まれ育っていただけるような環境を作っていけるようにと願うばかりです。

応援 母ちゃん！(1)

P289～

川畑 隆 新連載

退職したことに輪をかけてコロナ自粛で withdrawal な日々。歌詞を書いて曲を付

けて歌うのは若いころからやってきたことだが、歌の詞だとなるとなかなか進まない。ところが、歌を意識せずに好き勝手に書いてみると、割とペンが進む。

まだまだ書けそうな気がするから、連載でも大丈夫かな。さて、そうなると曲が置いてきぼり。「公募ガイド」は廃刊されたと思い込んでいたが、まだあるじゃないか。目に飛び込んだのが「わたぼうし音楽祭」と「こころ歌創作コンテスト」。

わたぼうしは障害のあるかたが書いた詩に曲を付ける役割が公募されている。昔、「やすらぎ音楽祭」で同様のことをやっていたので、さっそくとりかかった。こころ歌のほうの付曲応募締切はもうちょっと後だ。こんなふうに、詩と曲を別々にという手があった。

対人援助活動は、自粛の重しがちょっととれかかっているか、いくつか依頼がきてくれている。やっぱり嬉しい。

川畑隆・笹川宏樹・宮井研治[編著]『福祉心理学—福祉分野での心理職の役割』ミネルヴァ書房 が、5月30日付で発売された。多くの人が執筆している。

「かけだ詩 ①」

P281～

天川 浩 新連載

はじめまして。今回連載させていただく運びとなりました、天川浩です。

何でもカテゴライズするのは、あまりよいことではないかも知れませんが、私はHSPという聞きなれない性格の持ち主です。この性格の人のための啓発本・対策本などの多くがHSPの当事者向けに作られていて、それ以外の性格の方にはほとんど読まれる機会はないように思います。なので、今回、私は当事者として生きてきた46年の人生で、HSPとしてどうやって生きてきたのかをお伝えすることに決めました。関係のない人には不可解で、非合理的な生き方に映るやもしれない我々のカテゴリーですが、他者の目に触れられなければ、単なる「おっちょこちょい」や「心配しい」「気弱」として解釈されることになってしまうと思ったからです。

HSPは様々な精神疾患、発達障害と結びついて、時には普通に生活することも困難になりがちです。5人に1人という高確率で存在するにも関わらず、精神疾患

基準に合致しないために精神病理学会の歯牙にもかけられない存在。そこにスポットライトを当てて、難しく語るのはなく、一人の人間の見聞をお伝えすることにしました。非常にセンシティブな内容も多く記されることになるかと思いますが(後半にはもう一段上のセンシティブな問題にも触れます)誰かの一つの物語として、ご一読頂き、HSPという人間がいると認識してもらえることが私の目標であります。どうかよろしくお願いいたします。

ブルーグレーの肖像

P286～

篠原ユキオ 新連載

今号から皆さんのお仲間に入れて頂くことになった。大学を定年退職して2年目になる今年は、コロナのおかげでいささか最初の予定は狂った部分もあるが、やりたい事はほぼ全て思い通りに出来ているのでストレスはほとんど感じない生活を送っている。ひとり暮らしの自由さもあるが、映画DVDを毎日1本、ニュースにあわせた諷刺漫画を毎日1本、FacebookとTwitterで発表する事、なかなか読めないまま溜まっていた本を少しずつ読む事、日々思う事をテーマにしたエッセーと人生を振り返っての自分史を毎日1本ずつ書く事…。



これらがすべて悩まずに、楽しみながら出来ていることに自分でもちょっと驚きながら、アフターコロナに備えている。しかしこれがロウソクの消える前の輝きだと言われなように、少しばかりの運動も付け加えておかねばと思っている。

HITOKOMART

P298～

原田 希 第2回

北海道では、カッコーが鳴いたら豆をまけ、という畑仕事の合図がある。道東で鳴くのは 5/20 日ごろ。ただの原っぱに見える大地も、堆肥や肥料を入れ、牧草の種をまいて成育や刈り時を見守っているのです。6月末からは1番草の収穫がスタート。牧草の良し悪しが、牛の体調、乳質、生産量、年間の売り上げに関わってくるため、酪農家はみな目つきが変わります。大家族を無事に養うぞ！ 気迫と大型収穫機の爆音の季節はすぐそこ。真剣勝負のかっこいい酪農男&酪農女があふれますので、遊びに来るならこの季節をオススメします。

原田牧場 Note
p 275 ~

工藤 芳幸 第2回

新型コロナでこもってテレワーク。PC 作業が増えたせいか毎週末は片頭痛に悩まされ、能率が上がらない日々でした。2月半ばの言語聴覚士国家試験は無事に実施。ここまでは通常モードで進んでいたように思います。3月初旬に発達心理学会(大阪)で自主シンポジウムを企画していましたが「参集せず」ということになり事実上中止。予定は全てキャンセル。臨床現場の仕事も一旦中止。職場(大学)に出勤は継続していたものの、土日祝を埋めていたイベントが消えたので、2019 年6月の大阪北部地震以降長らく放置状態だった部屋の片づけが 90%終了。4月に入り緊急事態宣言が出てから完全に在宅勤務で学生のレポート課題にコメントを書いて過ごしました。4月中の記憶は曖昧ですが、感染対策をして臨床の仕事をぼちぼち再開。5月後半から大学の通常勤務も再開し、学生を迎え入れる準備中です。

みちくさ言語療法 (2)
p 278 ~

高名祐美

次女が、出産のため兵庫県西宮市から石川県七尾市の実家に里帰りしています。初めての出産で、大事をとって予定日より2か月も前に帰って来ました。予定日は5月28日。「対人援助学マガジン41号」が発刊される頃には、産まれていることと思

います。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、次女の夫は当初予定していたゴールデンウィークの帰省もままならないまま今日に至っています。彼は仕事も在宅ワーク、妻のいない自宅で一人寂しく過ごしていることを思うと切ない気持ちになります。そして、出産となっても病院は面会禁止。パパは赤ちゃんとは病院で対面することはできません。兵庫県も石川県も特別警戒区域。我が子に会いにくることすら、感染のリスクを考えると「自粛」を余儀なくされています。このような状況で母親になろうしている次女。出産と育児には厳しい環境ですが、この試練を娘とともに乗り越えていかなければと思っています。

大学入学と同時に地元を離れ、就職、結婚した次女との暮らしは11年ぶり。毎日が穏やかでほんわかしています。この先には赤ちゃんのいる暮らしが待っています。市内に嫁いだ長女は、孫二人(2歳と1歳)を連れて週末に我が家へやってきて、にぎやかに過ごします。91歳になる夫の母は、難聴で会話が困難ではありますが健康です。住職である夫は、お参りや法話の仕事がのきなみ中止となり、家やお寺の断捨離に励んでいます。私は3月で定年退職し、再任用として4月からも同じ職場で働いています。研修会や会議、出張など中止が続いている中、家で家族と過ごす時間が増えました。こんな毎日が「幸せ」だと感じます。新型コロナウイルスの感染が終息することを願いつつ、「ステイホーム」の日々。小さな幸せを積み重ねていければと思います。

MSWという仕事
P271 ~

大石仁美

新型コロナ対策の不思議

今年の2月はじめ、横浜港に停泊中の大型客船ダイヤモンドプリンセス号内で次々と感染者が報告された時、(ん？おかしい！ただの接触感染、飛沫感染ではないな)と直感。あとで、エアロゾル感染が関係していると分かりました。2月の半ばには世界中で広がり始め、(まさかパンデミック?)という言葉が頭をよぎりました。実際に3月に入って、WHO が「パンデミック」と認識を示した時、世界中が壊れていく

ような恐怖を覚えました。医療設備が整わず、手を洗う水もない、そんな発展途上の地域で蔓延したら、一つの民族、一つの国が滅ぶかもしれない。それは恐ろしい想像でした。感染を広げないためにはどうしたらいいのか。全く雲をつかむようで、何ひとつ浮かんできませんでした。

ただ、2003年にサーズが騒がれていた時、防護服とマスクで完全防備をし、陰圧のケースで患者を搬送する訓練の様子をテレビで見た記憶があり、「そこまでしないといけないのか」と驚き、心に深く残っていました。

幸運にもサーズは日本に入ってきていませんでしたが、訓練とはいえ、その時のマニュアルが残っているはずです。そのマニュアルはどうなったのでしょうか。まさか、単なるパフォーマンスで現実にはないと破棄したのでしょうか？

今回、初期対応の時、船内での検疫の様子などをテレビで見ましたが、抜け抜きの防御に啞然としました。

指揮官はだれなのか、国を代表する責任者は誰なのか、

専門家の指揮のもとに全員が動いていたのかどうか本当に不思議です。日本には偉い先生が沢山おられるのに、指揮体制がすぐに整わなかったのはなぜなのか。

多くの専門家たちの叡智を集めて事に当たらなければならないときに、歯車がうまく回っていない、横の連携が取れていないと感じるのは、今の政府の問題でしょうか、社会構造上の問題でしょうか？

不思議なことはまだまだあります。市中感染が広がり、病院が満杯になったことで、軽症者は自宅療養という選択肢を専門家がテレビで報道しました。(ん？これはどういうことか？一人暮らしの人は、隔離は出来ても、生活ができません。買物ももちろん行けないし、しんどい時に、あるもので食べろと言われても、どうしようもない、自炊などできません。家族のいる人は、たとえ部屋が2~3室あったとしても、だれにも移さないで、家族全員が暮らせるなんて出来るのでしょうか？いろいろシミュレーションしてみましたが、少なくとも私には出来ません。これはつまり、感染したのは自己責任で、家族に移ることも承知で、国は見捨てたのだと思いました。お

金のある人は、いかようにも出来るでしょうが、一般市民は身動きが出来ません。政府のお抱え学者が、堂々と言っているのです。何故でしょう。専門的な知識があるえらい方が堂々とおっしゃる。本当に不思議です。

いろいろ書くとき長くなるので、あと一つだけ。マスクについて書きます。

安倍首相が「全世帯に布マスクを配布する」と発表したときはズッコケそうでした。

なぜ布マスク？

市中からマスクが消えたとしても、一万分の一ミリという小さなウイルスが、布の網目を容易に通過することは誰でも知っているはずなのに、少なくとも医療従事者はそれを聞いて唖然とし、滑稽さに顔をゆがめて笑ったことでしょう。止める人が側近にはいなかったのでしょうか。今では、手作りの布マスクが お互いを思いやるコミュニケーションのツールとして流行になっていますが、その意味では効用があったといえるのかもしれませんが。

マスクは、中国だけに頼らず、国内の企業に働きかけて量産体制に入っていますが、思うように売れなくて、在庫がだぶつく日が近いうちに来るでしょう。本来使い捨てのサージカルマスクを、洗って使用してもいいとお墨付きを与えたのですから、購入する人が減るのは自明のこと。でもまあいいかあ 腐るものでもないし・・・ほんのつぶやきです。

病児保育奮闘記
P168～

岡田隆介

新型コロナ感染症で思うこと二つ。①32万人。これは、30年以内に高い確率で起きるとされる南海トラフの推定犠牲者数。39万人、こちらはかつての世界を席巻したスペインインフルエンザによる日本の死者。そして、新型コロナウイルスによる死亡者は 700人弱。未来と過去の3～40万と現在の約 700、不安の大きさは圧倒的に現在の新型コロナだ。過去は忘却の彼方にしまい込み、近い将来からはリアリティを消し去る鈍感さ。案外、これが心の平衡を保つ秘訣かもしれない。②PCR 検査を大幅に増やさなければならないと主張する学者が多いが、我が国の桁違いに少ない感染者および死者数からして、そ

もそも PCR 検査を軸にこの感染症を論じること自体が問題ではないかと思えてくる。

エア絵本 -ビジュアル系子ども・
家族の理解と支援(4)-
p44～

一宮 茂子

【新型コロナで世界秩序が変わる?!】メディアで連日報道されている新型コロナウイルス感染症。この感染症は第 2 次大戦以来の「最大の試練」(国連事務総長)であり、ウイルスは体内に長期潜伏する可能性や、免疫を獲得できない人もいる可能性があり、パンデミックの波は何回か発生し、それが 2022 年まで続く可能性が高いとのこと。アメリカ主導の世界秩序を構造的に大きく変化させるだろうとも報道あり。トランプ大統領は、自国第一主義を押し通し、新型コロナに関する WHO・世界保健機関の姿勢を中国寄りだとして抛出金の停止を宣言。覇権の拡大をうかがう中国は、これまで 11 か国に医療チームを派遣し、127 か国に医療物資を輸送したと発表して他国への支援をアピール。日本は、「生ぬるい」対応であるが、うまくいっているように見える不思議があるという。私の自己管理は、3密(密閉、密集、密接)を避け、外出時はマスク、手洗いは頻回、社会的距離をとることです。元の生活に戻るのは無理かしら？

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P256～

松岡 園子

4 月に緊急事態宣言が発令されてから、神戸で運営している学習塾では LINE のビデオ通話を使ったオンライン個別指導に切り替えて実施しています。オンライン個別指導をするのは、10 数年前に塾の生徒さんと香川県に引っ越すことになった私とで Skype を使い、パソコンで実施したとき以来です。その頃はまだ「Skype? 何それ?」という時代でした。

今ではスマホを使って大阪の自宅にしながら、神戸の生徒さんと勉強ができる環境を簡単につくり出すことができます。宿題も写真を LINE で送ってもらえばフィードバックを返すことができ、便利な時代だなあと思います。

今回私たちが学ぶ必要のあることは、どのようなことなのでしょう。私たちは強制的にでも環境が変われば、「何とかしたい」という気持ちに乗じて変化や工夫、チャレンジの方向へ進んでいくことができる可能性を秘めているものだと私は学びました。また、つながりや情報、人として存在することや時間など、目に見えないものの価値をもう一度、考え直してみる必要があるのではないかと感じています。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P250～

中條 興子

今号『盲ろう者』として自分らしく生きる」の執筆をお休みさせてください。

新型肺炎が流行りマスクをすることが、必須、マナーとなりました。自他ともマスクをすることになり、聞こえにくくて見えにくい盲ろう者としての日常も変化しました。緊急事態宣言中も、その前後も変わらず通勤をしているため、生活のリズムの変化はないのですが、お互いの命を守るためのマスクの存在は、私にとっては移動時もコミュニケーション時も、思った以上に影響が大きいです。

影響を受けたことを、少しだけでも文学にすることを試みました。できませんでした。日日、「今」に対する判断を考えることが精一杯で、その出来事を整理して書くという事まで広げることができませんでした。

ようやく今の毎日に、少しずつ慣れ始めている気がしています。次号では、今の日常を書くことができるように、継続して整理に努めたいと思います。今後とも、どうぞ宜しくお願いいたします。

「盲ろう者」として自分らしく生きる」

杉江 太郎

児童福祉現場で働く杉江と申します。新型コロナウイルスの影響もあり、近くに住む姉弟は、家にいることを余儀なくされ、シャボン玉をよくしている。それもストローで吹くものではなく、シャボン液をつけそのまま振り回すのである。さすがに息を吹き込むという行為は親に止められているらしい。弟君がすすると、シャボン玉にならず、シャボン液がそのまま飛び散ってい

る。それでもめげずに頑張っている。そういえば、古い漫画で、とてつもなく大きなシャボン玉を作る兄弟の物語を見たことを思い出した。シャボン液には砂糖を入れるとか、風呂に入ると石鹸なしで頭が泡立つというエピソードが懐かしい。調べてみると、杉山兄弟と言うらしい。もう 70 歳を超えているのか。新型コロナウイルスが終息する頃には雨が降るたびに道路が泡立ち、新たな杉山兄弟が生まれているかもしれない。いやいや、そうなるまでには落ち着いて欲しいものである。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P246~

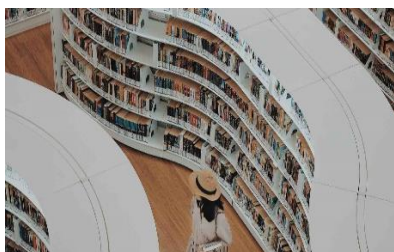
迫 共

ブックカバーチャレンジなるもののパトンを渡され、大人の自分が好きな絵本を紹介することにした。子どもの頃に好きだったのは「機関車トーマス」と「ぼちぼちいこか」だった。もちろん子どもに人気の名作絵本を読むのも楽しいが、大人だからこその読み方もある。少ない色数で、極限まで言葉を削って作った作品や、見落としそうな日常の隅々を描いた作品、読み手である自分自身や世界のなりたちについて考えるきっかけをくれる作品などだ。

たくさんある絵本棚から、自分はどういう絵本を探しているのという、パラパラと絵や写真を見て、惹きつけられるかどうかを試していることに気づいた。

絵本はページ数が限られているなかに、絵と言葉を分かりやすく配置しなければならない。厳しい条件の中でも視覚的に惹きつけられる作品は、自分にはたいてい面白く読めるようだ。いつか絵本論というテーマにも挑んでみたい。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P242~



朴 希沙(Kisa Paku)

私は普段マイクロ・アグレッションについて連載をしています。しかし今回は緊急企画として、新型コロナウイルスに関するインタビュー記事を書いてみました。インタビュー相手はかの有名なあの先生…!!ではなく、京都在住の一市民である某 I さんです(笑)某 I さんはご自身の興味や家庭の事情から、コロナ流行が始まったところから日夜新型コロナに関する勉強を深めてこられたそうです。今回は普段私が感じている素朴な疑問を色々聞いてみました。「〇〇の専門家」だけでなく、こういった一般の人たち、一市民たちが自分たちで情報にアクセスし、調べ、議論しあっていくことが大切ではないかと思っています。どうぞお楽しみに^^

マイクロアグレッションと私たち P237~

浅田 英輔

先日、久しぶりに県本庁での会議があった。参加者は 20 名ほどだが、一番大きな会議室を使い、かなり間を開けた配置となっていた。会議の中身は情報交換がメインだが、発言者がこちらをみて「オマエも言いたいことあるだろう?」みたいな目配せをしてきたり、「これはあの方のほうがよく知ってる」みたいにその人のほうに目を向けたり、そういう動きは Web ではどうやればいいかなーと思った。また、会議開始前後にほかの参加者と、あれはどうなった?これはどうしてる?という会議の本筋以外の情報交換をしたり、脇で話してる別の人の話が聞こえたので「それはこっちではこうしてるよ」とはまっていったりした。また、会議後には関係各課を回って、細かい話を聞いたりしてきた。新しい課長が下北の動きを実際に見たいらしい。など、こういうところは Web 会議ではできないよなあ。「こんな会議、Web で十分!いやむしろやらなくていいわ!」っていうものも多いのだけれど、たまには顔あわせて話したいものだ。

臨床のきれはし P131~

三浦 恵子

新型コロナウイルスを巡る状況はいま

だ厳しい。ステイホームが盛んに叫ばれた GW も過ぎたが、帰る家がない、家があっても安心できる居場所ではない人々に思いを寄せてくださった方が、少しでも多くいることを願いつつこの文章を書いている。

そうした人々を支援する人達や場もまた厳しい状況に置かれている。相談支援の場における感染防止対策もそうだが、フードドライブなどが休止されていることも大きなダメージだ。

依存症や障害をお持ちの方の支援に業務外で関わって長いが、イベント等の中止で授産製品の販路が狭まったり、啓発イベントの中止で収入が断たれるなどどこも苦しい状況だ。

「顔の見える関係」が大事だと言われた対人援助の形を改めて考えさせられることも多い。

様々な情報が瞬時に入ってくる現代社会だが、不安を煽る情報を探すのではなく、こうした情報に意識して触れたり考えたりすることができる時間を大切にすべきだと実感している。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という 観点から考える P233~

関谷 啓子

休載

私の出会った人々

黒田 長宏

本文で紹介を続けさせていただいている個人事業の『婚難救助隊』の確定申告を目指すために、マイナンバーカードや IC カードリーダーなど揃えたのだが、売り上げゼロということで今回は必要なくなっていたが、思わぬ特別定額給付金ということで、思わず出番がやってきて、結局オンラインで申請できた模様である。郵送だと 5月25日からで、オンラインだと3日が私の居住させていただいている自治体の期日だと自治体のホームページでみたので、22日も早期にオンラインだと申し込めることになる。しかしパソコンやスマホなどできない人はできないわけだから、そこらへ

んが格差というカリテラシーなのか、それを思ったが、私はできる側だったのでラッキーだと思った。やってみると、パスワードを忘れていたら、もしくは控えを紛失していたら、役所までいく必要がある。これは新型コロナウイルス密集の危険に入り込む可能性がある。実際、東京の某所がニュースでそうなってしまったと報道されていた。他にもいちおう私が世帯主ということなのだったが、母親の名前を書き忘れると私の給付金だけになってしまい、フォローが面倒なことになると思ったり、通帳やカードの写真をパソコンやスマホにアップロードしたりして、そういうことも必要だったり、誰もが楽にできることでもないと思えた。だいたいオンラインなどする人たちはもともとパソコンやスマホを常時使用していて慣れていたりして、その人本人にとっては結構便利にできたと思うだろうが、他人にとってはそういう人ばかりではなからうという思いもある。物覚えのスムーズな人ほど、他人の苦勞する仕組みだと思わず、便利とだけ発信してしまうものだ。しかし、最初の政府の30万円を一割の人々に給付するという案から、国民が不満を持ってアピールして、十割の人々に10万円という建前に変更できたというのは民主主義も機能することもあるんだと感じたが、本当なら、国や自治体のほうが、申請制度ではなくて、給付が国民全員にいきわたるように努力して配布しまくるほうが良心的な国家なのには思いが残る。しかし、これを書いている時点では、ゴールデンウィークは結構国民全体で辛抱したが、明けたら早速緩みが出ているようで、まだまだ収束してきたとは言えないんじゃないかという不安定な状況。次回はどんなっているんだろう。(5月9日)

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P213~

山下桂永子

この3か月間、学校は休校でも、職場の教育相談が休止になって面接はできなくてもやることはたくさんありました。考えさせられることもたくさんありました。人間の情報を扱う仕事だとは思っていましたが、この数か月ほど知識と情報を扱う力が問われることはないなと思っています。

そしてもう一つ思ったことは、人や物との関係性が問われるなということでした。普段から目に見えない人間関係の距離感に不安を持ちやすいならば、目に見えないウィルスとの距離感もうまく取れないで不安になると思うのです。不安は時に怒りや攻撃的な感情に化けてしまうので、とても扱いにくくなってしまいます。私自身は目に見えないものを割とおざなりに扱ってきたと思うので気を付けたいところです。

今回の町家合宿についての話は目に見えるお金というものを扱っていますが、やはり書いてみると目に見えないものを扱っているような気がします。読んでいただければ幸いです。

町家合宿 in 京都

P191~

尾上明代

ステイホーム期間に、多くの人々がそうしているように、私も頻繁に近所の散歩をするようになった。すると、かなり近くにちよとした山道と林があるのを発見。調べてみると多摩丘陵の「よこやまの道」という、古代の幹線道路が通っていたルートであることがわかった。



名前の由来は、多摩丘陵が万葉集で「多摩の横山」と呼ばれていたことからだという。その登り口の一つが、家のすぐ近くの住宅街にあり、(介護もあるので本格的ハイキングをする時間はないが)ちよとだけ登って森林浴をして帰ってくるくらいでも充分な楽しみの一つになった。こんな素晴らしいところが、すぐ近くにあったなんて！ 林の中に身を置いて深呼吸をし、鳥のおしゃべりを聴くことで、ここまで癒される感覚になるのは、今までの人生ではなかった。ずっと忙し過ぎて、近所では駅との往復と車で買い物しかしていなかったこ

とを大反省するとともに、この状況からの感謝すべき贈り物だと思った。

登り口付近の野草や山道に咲くお花たちに出会うことにも幸せを感じる。最近、数日ぶりに行ったとき、美しい素敵なお花が、忽然と現れて咲いていた。写真に撮り、花の名前がわかるアプリで調べたところ、キンランという蘭の一種だとわかった。なんか嬉しくて、可愛くて・・・こういうことにこんなに心躍ることも今までなかった。それだけ、自然の命が感じられるものを無意識に求めていたということなのだろうか。そして二日後、「またあのキンランさんに会いに行こう！」と思いながら(大袈裟ではなく、本当に「会いに行く」という感覚だった)現場に着くと・・・あれ？・・・ない！！突然消えてしまったかのように、根こそぎなくなっていたのだ。相当ショックだった。かなりへこんだ。誰かの家の庭ではないけれど、それでも、そのキンランさんは、その山道に属していたものなのでしょう。そこを通る人たち皆の目を楽しませてくれる存在でしょう・・・。花泥棒、ということばがある。私のものを盗まれたわけではないけれど、確かな喪失感があった。今ごろ、どこにいるんだろう。

その子孫(?)が、まだ少しでも土の中に残っていて、もしもまた来年会えたらすぐ嬉しいのだけれど・・・。期待してみよう。

ドラマセラピーの実践・手法・研究

P87~

松村奈奈子

コロナ禍。

いろんな方がいろんな事を発信していて、共感したり考えさせられたり。

ただ、たくさんの方が感じている様に、私も自然をより強く意識するようになりました。職場への車から見えるいつもの町並、春の新緑がより強く見えたり、初夏のキラキラ太陽がやたらとまぶしかったです。自然はいつもどおりなのになあと思います。人間があたふたと、いつもと違う時間を過ごしているからなんでしょうね。

精神科医の思うこと

P177~

鵜野祐介

今年も毎夜ヤモリ君が自宅書斎の窓ガ

ラス越しに現れ、羽虫や蛾をハンティングする時候になりました。セクシーな白い腹をペタッとガラスにくっつけて息をひそめ、やおら身体をくねらせて獲物の方へ駆け出していく、その静と動の妙を愉しんでいます。

うたとかたりの対人援助学 P208～

柳 たかを

夏の高校野球

5月中旬の現在、外出自粛徹底の効果と思われる新型コロナウィルスの新たな感染者が減少してきていることを受け、日本政府の緊急事態宣言が一部の都道府県を例外としながらも解除となった。

コロナ禍による自粛在宅期間が長引くなかで、人は社会的肩書きで評価される社会人ではなく、両親から生を受け人生を歩む生活者であることを思い出されているように思う。

春の選抜高校野球の中止に続き夏の甲子園も中止になるかどうか、20(水)に高野連の発表があるという。(発表前に書いています)

いろんなイベントやプロスポーツ大会が自粛や無観客試合を選択せざるを得ないのも気の毒だが、高校生の選手一人一人は二度とない青春に汗と努力の末の真剣勝負をコロナのせいで諦めざるを得ないのは彼らに長く消えない心の傷を残すのではないかと心配する。

知恵を絞れば三密を避け観客も応援も無し、実況放送は出来るだろうし必要最小限のスタッフと選手たちだけで「投げて・打って・守って・走る」試合、高校野球精神の初心にかえれば開催出来る道があるのでは？

満員のアルプススタンドからの大声援を背にプレー出来ない悔しさは残るだろうが、開催されないよりははるかに幸せだと思いたい。

「感染者が出たら誰が責任をとるのか？」という問題をないがしろに思っていない。でも「コロナは危険なんだから自粛！」分かるが、まだどうぶんは続くだろうコロナとの戦いに気を抜かずモチベーションを保ち続けるためにも創意工夫のある戦いかたを皆で考えたいものだ。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ P183～

齋藤 清二

3月以来のCOVID-19(新型コロナ肺炎)のパンデミックに、世界中が巻き込まれ、翻弄され続けてきた数か月でしたが、日本ではようやくそれなりの落ち着きを取り戻しつつあるように見えます。大学と大学院の授業は全て遠隔授業に切り替えられ、大きな生活の変化の中でこそ見えてくるさまざまな新しい気づきを、どのようにして生活の中に落とし込んでいくかが次の課題となっているように思えます。

さて、これまで、約5年間にわたって「『あ！萌え』の構造」と題したエッセイを対人援助学マガジンに連載させていただきましたが、一応、前回の第40号をもって終了とさせていただきます。私にとっては、純粋にボトムアップで執筆していくという他の場所ではほとんど行なうチャンスのない試みをこのマガジンで続けさせていただき、そのため毎回の内容はどこに落ち着くか分からないグダグダであったり、苦し紛れの再録であったりして、読んでいただく方には迷惑をおかけしました。「萌え」概念が、社会的にみてももはやあまりにも一般化してしまったことと、近年台頭してきた「推し」概念についてもある程度の把握ができたということでした。このへんで筆をおこうと思います。

「志向性」「指向性」「嗜好性」というような抽象概念でくられる「私たちにとって根本的に重要な何か」についての考察は、機会があれば何らかの形でまとめてみたいと思っています。

小林 茂

少し暖かくなって衣替えをしたら、このところまた寒くなって体を冷やしてしまいました。少し風邪気味で過ごしています。

大学教員生活2年目に入り、昨年よりも多少落ち着くかと思っていたら、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業対策に追われるようになりました。どこか、ふつうに生活を送りたいという気持ちでいるのですが、なかなかそうはさせてくれないようです。

しかし、大学で教養ゼミナールという任意で開講できる科目を通じて死生学を講

じています。そのためか、あらためて歴史に残るような出来事の渦中を過ごすのは得難い経験であると感じるようになりました。生きていけば、いろんなことが起こることを思われます。

＜温泉紹介＞

☆北のたまゆら 江別店(北海道北海道江別市野幌屯田町48-1)

江別3番通り沿いにあるスーパー銭湯「北のたまゆら 江別店」。温泉はコーヒー色の「炭酸水素塩・塩化物泉」で、ヌルヌルとした浴感があるのが特徴。その他、電気風呂、ジェットバス、サウナなどもある。

料金:大人450円(13歳以上)

温泉質:ナトリウム - 炭酸水素塩・塩化物泉(弱アルカリ性・低張性・温泉)

泉温 加温あり・加水なし

浴用適応症:神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、関節のこわばり、打ち身、くじき、痔疾、冷え性、慢性消化器病、病後回復期、やけど、慢性皮膚病、慢性婦人病、きりきず

営業:8:00～深夜1:00(受付終了0:00)

年中無休

対人支援 点描 P172～

中島弘美

家族カウンセリングをしている中島です。緊急事態宣言により対面での面接をお休みしていました。今少しずつ再開しています。相談に来られた方から「やっぱり電話とかよりも、実際に会って話すほうがいい」ということでした。

担当している大学や専門学校の授業は、遠隔授業や課題提出型授業に変更になり、教材づくりをもくもくとしているところで

す。今後、第二波に備えて、電話や画面を通してのカウンセリングを増やしていきたいと考えていますが、パソコン等の画面を通してのカウンセリングについては、家で落ち着いて話せないとか、できれば直接会う方が話しやすいとか、面接のために大阪駅周辺に出てくるのがたのしみだから対面がいいなどの皆さんの思いを確認しつつ、新しいスタイルも試みていきたいと思っています。

カウンセリングのお作法 P35～

藤 信子

この5月は、若葉はきれいだけれど、雨が
多く気温の変動も大きく、風薫るという
感じにはあまりならないのが残念だった。
緊急事態宣言の中、長めの散歩ができな
いのは、お天気のせいではなく、1月下旬
に脚を怪我したので、今は以前の様に長
くはまだ歩かないでいる。怪我をしてわか
ったことは、あまり使わないで瘦せた筋肉
を戻すのには、結構時間がかかるという
ことだった。今も室内でステップ運動をし
ている。

そう考えると、3月に退職するまで長い
間使ってきた身体も、偏った使い方をし
ていたのかもしれない。特に脳。今更バラン
スよい身体や脳を、とは望まないけれど、
この機会にしばらくゆっくりして、身体と頭
をほぐしておこうと思っている。

集団精神療法について P41～



団遊

読書が好きだ。特に巣ごもり中はやる
ことがないから、本ばかり読んでいる。新
刊が出るたびにいち早く購入するお気に
入りの作家が何人かいる一方で、ガッカリ
するのを避けたくて、読むのを控えている
作家もいる。思い出は良い形で取ってお
きたいからだ。

ところが、あまりに時間があるので、そ
んな作家の新刊もいくつか読んでみよう
と思ひ手に取った。かつて直木賞も取ったS
さんの上下巻組新刊だが、読後、やはり
止めておけばよかったと思った。20年前
から、書いていることが何ら変わらないよ

うに、ぼくには思うのだ。読者の勝手な感
想で甚だ恐縮だが、読み進めるうちに、な
んだか気の毒なキモチになってくる。

少し前のことだが、音楽業界の友人が、
「サザンオールスターズはどうして常にヒ
ット曲を出せるのに、長渕剛は結局往年
のヒット曲に戻るのか」という話をしてく
れた。

両者と仕事をしたことがある彼は、「発
信したいメッセージを常に進化させてい
るかどうかの差だ」と言っていた。桑田佳祐
さんは、若者の文化や時代の空気を吸収
したいという意欲が非常に強い一方で、
長渕剛さんはその点が欠けるという。結
果的に、コンサート会場の顔ぶれが常に
フレッシュになるサザンと、お馴染みさん
で染まる長渕剛の差を生むという。

表現者として、どちらが幸せかは、価値
観の違いだから一概には言えない。常連
さんキープに骨を折り、売上の安定を図る
というのは、戦略的には正しい面もある。
ただ、少なくとも私は、サザンのようにヒッ
トを生むことができなくても、メッセージを
進化させることに貪欲な自分でいたいな
あと、話を聞きながら思った。

人を育てる会社の社長が、 今考えていること P33～

村本邦子

コロナ禍で在宅リモート、この3ヶ月まっ
たく外食していない(正確に言えば、3月
に一度だけ東京出張したので、その時の
み例外)。毎日、食べ物中心に生活が回
る夢のような日々だ。

食べることは生きることだし、生きること
は食べることだ。細部にこだわらなければ、
たいがい自分で作れるし、それなりに
おいしい。ふだんは自分で買い物に行く
暇がないので、季節の物ははずしてしまう
が、散歩ついでに店先をのぞいて、ざるに
山積みされた安い野菜や果物を見かけた
ら、それは旬の物だ。あれにしよう、これ
にしようイメージが膨らむ。最近は、オン
ラインで仕事も日常化しつつあるので、時
間のやりくりとともに段取りするのも楽し
み。もちろん、その場の気分で予定を大き

く変えることも多々あり、思いがけないメニ
ューになるのもまた楽し。

木々の緑や花々、雲の形、鳥の鳴き声、
風の香り…季節の移り変わりを感じなが
ら、自然の恵みを存分に楽しんでいる。地
球というひとつの船を共有しながら、しみ
じみと命が繋がっていることを感じる。

周辺からの記憶 —東日本大震災

家族応援プロジェクト(22) P148～

國友万裕

加藤直哉さんの『人は死んだらどうなる
のか』という本を読みました。

死生学というか、臨死体験をした人たち
のデータを分析して、真面目に死後の世
界について考えた本です。この本を読む
と、どうやら、人を傷つけるようなことを
すると周り回って自分が傷つけられ、善行を
施すと自分にも徳が帰ってくるという因果
応報の法則は古今東西の研究で共通し
ているようです。

世の中には自分の都合で罪もない人を
踏みつけにするような人というのは確か
に存在します。僕もそういう人から負わさ
れたトラウマを背負っています。もちろん
僕のほうも知らず知らずに人にトラウマを
負わせてきている可能性はあります。

この本によると死ぬと走馬灯のように自
分が傷つけた人の姿が現れるのだそう
です。僕が死ぬほど憎んでいる人、復讐し
たい人は死ぬときに僕の姿が彼らの脳
裏に浮かんでくるんでしょうね。そして、僕
が死ぬときにも誰か僕が傷つけた人が現
れることになる。さて、誰なのでしょう？
往々にして人間は自分を傷つけた相手の
ことは覚えているけれど、自分が傷つけ
た相手のことは忘れていくことが多いで
す。

死後の世界で、そのことに直面すること
になるんですね。そう考えれば、これから
は真摯に生きなくてはという気持ちにな
ります。いい本でした。

男は痛い！ P120～

古川秀明

新型コロナウイルスの影響で2月から

講演会＆ライブはすべて中止になりましたので、今回はいつもの「講演会＆ライブな日々」ではありません。それはそれで新鮮でした。

講演会＆ライブな日々 P138～

西川友理

京都西山短期大学で、保育士・幼稚園教諭の養成をしています。それから、支援者に向けた当事者研究会や勉強会を定期的に開催しています。その他社会福祉士養成などにもちょっと携わらせていただいています。

本誌連載、「接骨院に心理学を入れてみた」の寺田先生が、去年の12月のご自身のブログに、わたくしの連載を紹介してくださっていたのを最近発見しました。患者さんにも紹介してくださったとの事。なんと嬉しい……ありがとうございます！

皆さん、寺田先生の施術はほんとに科学的なのに、魔法のように体を解き明かしていける不思議体験です。すごかったですよ！コリや痛みのある方、ぜひぜひ！

ここ最近、フェイスブックで「7日間ブックカバーチャレンジ」がなんとなく流行っています。「1、7日間、自分の好きな本の表紙をFBにアップする 2、毎日1人にバトンを回す 3、本についての説明はしない」というのが基本ルール。とはいえ、このルールはゆるゆるで、「1日で7冊UP」「3日間だけ実施」「誰にもバトンを回さず、自分だけで終了」など、皆好き勝手に解釈して実施しています。私のところにもバトンが回ってきましたので、バトンは数名だけにわたす、ということにして実施しました。

いつどこから始まったのか、少し調べたのですがまだはっきりわかりません。どうやら2018年ごろに海外にすでにあった、という噂もネット上で見つけましたが、明らかに今年の4月くらいから爆発的に広まっているように感じます。おうちにいることで本を読む機会が増えた、なんとなく周りとのつながりが欲しい、といった、コロナの影響も大きいと思います。

これ、やってみて感じるのが、「本を紹介するのもされるのも楽しい」ということ。そして「本をUPした上で、説明をしない、

というのはなかなか難しい」ということです。ついムズムズと言いたくなってしまうのです。だって好きな本ですから。このチャレンジをしている友人の記事を見ても、ほとんどの人が紹介文を書いています。

私は昔、人前でしゃべるときに緊張するたちでしたが、ある時、「私が見られてる、と思うから緊張する。私が好きなもの、興味があるもの、価値があると思うモノを「ほら、すてきでしょ」「面白いでしょ」「すごいじゃない？」「すごいでしょ」と、紹介するつもりで話してみてください。みんなはあなたを見てるんじゃないで、あなたといっしょに、その“すてきなもの”を見てる。あなたは自分の感じるそのすばらしさを紹介するだけでいい」と教えてもらってから、ほとんど緊張しなくなりました。

好きなもの、すてきだなとおもうものを語る時、みんな少しだけうきうきして、その言葉も踊っています。いまさらながら、好きって強い、と思います。

福祉系対人援助職養成の現場から p71～

坂口伊都

娘が一人暮らしを始めたのですが、このコロナ騒ぎで長いこと家に滞在していました。こんなことなら夏以降からにすればよかったと思ってしまいますが、緊急事態宣言が解除になり、そろそろ戻ろうかなと娘が言い出しているので、自分でやろうという気持ちが出てきているようで、まあいいかなとも思っています。

娘の引っ越しを期に我が家の方も模様替えをしました。寝室だった部屋を私の部屋にし、夫には夫の部屋を作りました。めでたく家庭内別居です。もちろん、先人たちの夫婦の距離の取り方を参考にしました。近過ぎない方が上手いくと言っていました。自分の部屋を持つのは、20年以上ぶりです。娘の部屋に残っていたお下がり家具を持ってきて、恐ろしくて触っていなかった所にも探検に行き、坂口さん家の掘り出し市から出てきたいろいろなモノが目の目を見ます。子ども達の赤ちゃんグッズとかも出て、「懐かしい」「かわいい」「若い～私」と手が止まることもしばしばでしたが。

この部屋ができたおかげで、思いもしなかったテレワークも落ち着いてすることが

できました。2階に働きに行って、1階に帰るという気分です。でも、職場で寝るのでたまに仕事をしている夢を見る率も上がったような気がしなくもないです、はい。

家族と家族幻想 P143～

河岸由里子（臨床心理士）

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

【zoom, zoom】コロナウィルスの関係で、あれこれ zoom で行うことが増えた。会議は zoom、カウンセリングも zoom、大学の講義も zoom、飲み会も zoom。全く初めて使うというわけではなかったのですが、比較的スムーズに使えてはいるが、色々とお金も増えた。

持ち運び可能な Wi-Fi のギガ数を普段以上に使うことになったので、ギガ放題に切り替えた。家で使うものは Air があるので問題ない。ただ、家で zoom を使うには、部屋の配置でバーチャル背景がうまく使えなかったで、グリーンスクリーンをセットで購入。売り切れになってしまったヘッドセットもあちこち探してようやくゲット。ライトもと思ったが、それは娘の机上スタンドを活用。こうして、準備万端。

さっそく大学の授業の第一回目の講義を zoom で行った。それに向けて、大学では moodle というシステムを使って授業登録や出欠管理、資料配布、連絡などを行うことになり、私も授業一週間前までに資料をアップしたり zoom の ID とパスワードを送ったりと増えた手順をこなしていった。当日は、大学の教室から講義を行った。

それは無線ランを使えるからで、家や事務所からだとしても Wi-Fi を使わずに得ず、そうすると不安定さが出るし、ずっと家に籠ってばかりいるので、大学で行う方が気分も変って良いかと思ったからである。

そして、指定された教室に行き、パソコンをセットして、学生さんたちが zoom に入ってくるのを待った。8時50分からの授業に対し、8時50分までには待機室に入っているようにと伝えていたが、案の定、8時50分すぎってから、ポロポロと入室許可申請が画面に出る。1回目なので9時までには良しとして、自己紹介やらガイダンスなどしながら、入ってくる学生への許可をしていた。しかしその間も、「入れない」「入

ったけど落ちた」「もう一回入りなおす」「どうしたらよいか？」などのチャットが送られてきて、それへの回答もしなければならず、てんやわんやであった。

結局授業最後の小レポートの提出も、moodle でほとんどの学生さんが出してくれたものの、数名これができず、メールで送ってもらうことになった。早速送られたレポートにコメントを入れた。今回の登録者はいつもの半分くらいなので助かる。その後、zoom に入れなかった人を対象に、個別の zoom ミーティングを数回設定し、上手く入れることを確認、第2回目の授業で待っていると伝えた。これで一件落着。ふ一つ。

一体いつまでこの形で授業を行うのだろうか？サポートに来てくれた大学職員の人とは今年度いっぱいとは考えているとか・・・。

Zoom, Skype, Teams, etc. 色々なツールが増え、便利になった。メールでのやり取りも頻繁にある。パソコンはじめ Tablet やスマートフォンにも慣れた。それでもやはり直接会って話す方が疲れない。昭和の間だからだろうか？

ああ、相談業務

P80～

先人の知恵から

P202～

岡崎正明

私たちは毎日いくつもの強制参加クジを引いている。ときどき、そんな風に思うことがある。

クジの名前は「病気」「事故」「天災」など多種多様。それは生きている限り絶対に引かなければならない。金持ちだろうが老人だろうが、美人だろうが赤ん坊だろうが関係ない。棄権はできない。そして当たりが出たら否応なく従う。そういうルールだ。「運」といってしまえば身もフタもないが、しかしそうとしか言えないものが存在していると思う。そんな境遇の人をたくさん見てきたし、おのれの人生でもたまに「よりによってなんで俺？」と思う瞬間に出会ってきた。

もちろん若干の努力が認められる余地もあり、例えば適度な運動や健康に気を使っている人は、「病気」のクジを引くとき、当たりが少ない箱になる。反対に不摂生

なヤツは当たりが数倍の箱から引くことになる。でも、それもあくまで確率の問題で、当たりが少ない箱の方でも当たる運の悪い人はいるし、反対に当たりが数倍の箱を長年引いても、まったく当たりを引かないのかもしれない。そういうヤツは「体質」とか「遺伝」とかのクジで、イイ方の当たりを持ってたり(笑)

だから私は「自己責任」という言葉があまり好きではないのかもしれない。そして、そんな不条理と付き合っていくしかないのが人生だからこそ、やれるだけのことをやろうと思う。できないことは嘆いてもしようがない。それでも後から「もっとこうときゃよかった…」って思うこともたくさんだが、まったく後悔のない人生なんてのも味に深みがない。だからよし！

ちなみに、「時代」「出自」「家族(パートナーをのぞく)」「上司」なんかも選べないからクジだけど、「政治」は選べるから一応クジじゃないハズ。そう思って徒労感を感じても、なるべく選挙には行くようにしている。

役場の対人援助論

P126～

大谷多加志

4 月から生活が大きく変わりました。前職を退職し、大学の特任教員になり、新しい非常勤の仕事を3つ始めました。そして、その全てが新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、それぞれに対応を要する事態となっています。人生で初めての転職で、不安の中の船出でした。予想外の危機もあり、一方で、思いがけない巡り合わせもありという状況の中、この先どうなるのかという不安と、まだ見えない展望が開けるかもという希望との間で揺れながら、日々を過ごしています。何にせよ、樂觀にも悲觀にも決め込むことはせず、今の環境をまずは楽しみにしながら、自分にできることをひとつずつ着実にやっていくことに、まずは全力を注いでみようと思います。

新版K式発達検査をめぐって

P135～

馬渡徳子

皆様、如何お過ごしでしょうか。先ずは、今、こうしてあること、こうして連載に投稿できたことを、素直に喜び、感謝

したいと存じます。

振り返ると、この三か月間に、関連する様々な職能団体の総会や学会が、中止又は延期となりました。関連する諸会議も、様々なツールを駆使して、事を前に進めてきました。

今、私のパソコンのデスクトップには、新たに三つの「オンライン会議ツール」が、でんと乗っかっております。元々、機械ものを苦手と決めつけて、トリセツなるものも流し読みしながら、とりあえず実行!の大雑把な私にとっては、かなりしんどい(not 面白くも)プロセスでした。

しかしながら、私には、図々しい!という、強みがあります。大学院には、様々な国の留学生がいることから、国によっては、政策として、就学児の時期よりタブレットを活用してきた経験を持つ方々もおられることが判明。そこは、おばちゃんパワーで、スマホ片手に電話やメールや写メを駆使して、パソコンに向き合いながら、粘り強く教えて頂き、何とか今があります。

一方で、歴史的なアナログ手段の価値や、人生の先輩方の素敵な対応や、改めて地域の社会関係資本について、気付くことも多くありました。

そこを、今回は「馬渡の眼」で記載したいと存じます。皆様、今後とも、心を込めて、どうか、ごきげんよう! 深謝のうちに。

馬渡の眼

P181～

団士郎

コロナ禍の渦中、わが家にも緊急事態が起きました。本人の了解を得て、正確にお知らせしておきたいと思います。

5月4日、GW まっただ中、院内感染のニュースも騒がしい時期に、痛みと出血を訴える妻を、病院の救急外来に連れて行くことになりました。

CTの後、そのまま入院。大型連休明けの諸検査の結果を12日夕刻、医師の指示に従い、関西在住の次男を伴って聞きました。

胃癌、腺癌、ステージⅣ。CT画像ではあちこちのリンパ節に転移がみられ、内視鏡映像は、自分の胃カメラ映像を見たことのある私と次男が、オオーと声を揃える厳しいものでした(素人目にですけど)。

そして、今後の対応として、抗がん剤治

療と緩和ケアの説明を受けました。手術や放射線治療など、局部治療の段階ではないということです。

翌日、知人の医師に状況を伝え、意見を聞きました。妻も友人関係の消化器内科医から助言を受けました。

そして SOX 療法を開始する事になりました。この後は定期的な通院点滴治療になるとのことで、19日に退院、自宅療養となりました。

この間、コロナで病棟は面会禁止、家族の立ち入りも制限されていました。自宅に戻っても、病人にとってコロナも要警戒です。厳しい状況ではありますが、出来ることをして過ごしたいと思っています。

私にはほとんど馴染みのなかった看護生活が約一ヶ月経ちました。

あらためて、こういうことに遭遇するのが家族だなあと噛みしめているところです。

「続・家族理解入門」最終回

P50～

鶴谷 主一

新型コロナウイルス予防下の幼稚園をレポートしました。

この期間、僕自身は、職員が交代勤務で自宅待機している中毎日毎日出勤していました。気がつくと4月下旬から5月下旬までたった2日しか休んでませんでした。

イレギュラーって、ほんとに忙しいですね、計画変更や対応のためのガイドライン作り、情報の収集、発出する文書作りなどなど…その間に、パソコンの入れ替えも2台やりましたがね。

それにしても、たまに出勤した職員のお喋りが止まりません！次から次へと立ち話が続く、ああ～密が濃い密が…と思いますが、仕方ありませんよね、人とのふれあいが好きで仕事にしている人種ですから。ひとしきりお話を楽しんでもらいましょ。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P62～

水野スウ

この数ヶ月の新型コロナ下、マガジン執筆者さんたちはどのような日々を過ごされたのだろうと、今号の短信を読ませていただくことをいつも以上に楽しみにしています。

今回の私の原稿は、コロナの影響を受けつつも、20年続く金沢の市民アクション、「ピースウォーク金沢」を、いつもとは違うスタイルで、でも私たちが実現させるまでの物語と、緊急事態宣言が出てから思い立ってはじめた「#離れているけどつながってる ぷろじえ」とのことを。

4半世紀前に書いた本『出逢いのタベストリイ』を、5月いっぱい、ご希望の方にプレゼントします、と宣言して、連休中もそのあとの5月の日々も、この本を発送し続けていました。お金を介在させないものの発送は、経済活動には結びつかないけど、それに代えがたい、きもちのやりとりがひんぱんに行き来して、本を贈った以上の有形無形のお返しをたくさん、今現在も受け取っています。つながりの再確認もあれば、あらたなつながりも生まれています。



週一の「紅茶の時間」はコロナ中も今も、ひっそり静かにお寺のように毎週あけています。緊急事態宣言の出ている間は誰も来ない日が何週も続き、これは37年間の紅茶の歴史始まって以来のこと。紅茶の時間って、そこに器だけあっても、紅茶の時間にならない。ひとが自由に集まって、顔あわせて、きもちを語りあう、という中味があってはじめて、紅茶の時間になるのだなあ、としみじみ感じています。今また少しずつ仲間が戻ってきつつありますが、

これまで以上にはやらないでしょうから、その分、初心にもどって、丁寧に一人ひとりを聴いていきたいと思っています。
#離れているけどつながってる ぷろじえ
くを紹介する記事もここに。

きもち言葉さがしている

P105～

荒木晃子

「研究者になりきれない」。これが正直な今の気持ち。調査対象が当事者であること、ヒアリング調査や質問票により客観的なデータ、統計を導き出すこと、こういった作業が私は苦手だと最近気がついた。私にとって、当事者とは援助を必要とする人々であり、援助者は、当事者を援助するために存在する。援助者は皆、これまでも、そして今も、これからも学び続ける一私自身もしかりである。

ではなぜ、自分は研究者であり続けるのか。いくら自問自答してみても、今のところ答えはみつからない。強いというならば、援助は目の前の当事者に対して行うことはできるが、そこから汎化することは、まずあり得ない。しかし研究は、その成果如何では、多くの援助者、研究者、教育者、医療・福祉従事者の目に留まることがあるかもしれない、という望みがある。望みがあることには、チャレンジする価値がある。それを信じ、行動に移すこと―それが、心理カウンセラーとして、常に私がクライアントと共に目指す援助のかたちである。クライアントにいつも伝えていることを、自ら実践するのみだ。

生殖医療と家族援助

P84～

中村 周平

申し訳ありません。今回、私の見通しが悪く、原稿を書き上げることができませんでした。次回以降、またよろしく願いいたします。

前回、短信を書かせていただいた頃は、聞きなれない言葉ばかりだったものが、今となっては聞かない日は無い日常になってしまいました。歴史を遡れば、このようなことは幾度となく起きてきたことかもしれませんが、実際に身近で、しかも通りを2つ挟んだ向かいの病院で未知のウイルスが発生したと知れば、本当に生きた心地

がしない毎日です。少しでも、日常を取り戻していければと思いつつ、自身のやりたいこと、やるべきことをしっかりとこなしていきたいと思います。

ノーサイド

山口洋典

おそらく気づかぬまま「コロナ禍」を「コロナ渦」としている表記を何度か目に見ています。渦のような不可抗力に巻き込まれているという身体感覚が、無自覚なままにその表記へと誘っているのかもしれませんが。ちなみに立場もあって、緊急事態宣言の発出に伴い「明日からキャンパスが閉鎖になる」ということを、学生よりも少しだけ早く通知されたのですが、オンライン授業となっているにもかかわらず校内に足を運んでキャンパスライフを楽しんでいる学生たちの姿を目にして、情報の非対称性によって物事や出来事への認識は大きく異なるのだらう、ということを痛感しました。転じて、仮に「世界は明日で終わるよ」ということを知っている人がいても、私はそれを知らずに自らの日常を楽しみたいという人は多いだろう、などと、在宅にて思考実験を重ねることが多い「ウィズコロナ」な今日この頃です。



4月7日 15:16 の立命館大学
衣笠キャンパス東側広場の風景

PBLの風と土
P216～

見野 大介

コロナウイルスの影響により、予定していた展示会やイベントが中止になったのは痛手でしたが、工房兼住居でひたすら制作しているのが日常なので、普段の生活に関して言えば以前とほぼ変わってないのが現状です。マスクの消費量も少なく、5枚も使っていないと思います。

変わったことと言えば、保育園が閉鎖されて利用できなくなったことで2才の息子

が工房内でやりたい放題して、仕事の邪魔をしてくることくらいかと。息子の年齢的には今が一番色んなことを吸収する時なので、保育園で息子が皆と楽しく大騒ぎする日が戻ってほしいです。

仕事にもっと集中したいという、父のワガママもあることは否定できませんが(笑)

ハチドリ器
P4

千葉晃央

4月から通勤ががらりと変わった。これまでも私は京都に住んでいることを結構楽しんでた。古いものが基本的には好きなのである。夢は「嵐電で通勤」と思っていたが、それも実際にする機会があった。とはいえ、16年ぐらい車通勤が中心だった。一つの職場にしか行かない日(めったになかった)は数百歩しか歩いていないとスマホに言われることもあった。

現在は、公共の交通機関、自転車、徒歩ばかり。1日8000歩ぐらいは平均してもいいのではないかな。一気に体重が落ちる。昼食の量のコントロールも体にきいてみるとわかってきた。着る服の幅が広がり、体が軽い。足の筋肉もいい感じで疲労も適度にある。健康には近づいた実感が強い。

仕事場が変わったので歩いて移動すると街がよくみえる。この間、コロナの影響はすさまじかった。南座の前のバス停を下車して、花見小路を通り、風神雷神の臨濟宗本山建仁寺の前を通り、八坂の塔を見て通っている。

もう一つの仕事場は、五条楽園という元遊郭街の近く。現在はオサレ化してその名残を生かして、その風情も印象深い。京都に住んで、20年以上たつがこういったところはめったに行かなかった。

清水のあたりにおられた以前の利用者さん親子を思い出す。今は、お母さんもご本人も亡くなってしまった。「ハッピー六原で買い物してん！」とよく話されていたのはここだったんだ！と。そして、お母様の凛とした姿勢も生き様も、この街並みを見て、暮らす人々を見て、今ならわかることが増えた。ハタチそこそこの学生に毛が生えた私には何もわかっていなかったなあ。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

援助職の未来

P18～

脇野 千恵

前回、マガジン40号の原稿を送ったのが2月下旬。3ヶ月の間に、社会の暮らし方がこんなにも劇的な変化をするなんて…誰も想像しなかったでしょう。テレビもラジオも新聞も決まり文句は「新型コロナ」。現在教育現場に近い部署で働いていますが、聞こえてくるのは、教員の多忙さと益々煩雑化する勤務体制への不満です。子どもたちが3ヶ月間学校へ登校しないという初めての経験。先行きは不透明のままの学校再開です。

「自粛と要請」といったちぐはぐな言葉の羅列や、ソーシャルディスタンスなどカタカナ言葉にイライラする毎日。そして、数字ばかりを追いかけて、感染者一人ひとりの顔や生活があることを忘れてしまっている自分に気づき、もし自分が感染したら？と想像し不安になってしまったり…。感染させてしまうリスクを考えなくてはならないのは自分なのに。

ごく最近手にした本で、感染渦中に若いイタリアの作家が著した『コロナの時代の僕ら』があります。彼は、「今までと違った思考をするための空間を確保しよう」と言っています。私も含めいつまでも元の生活に戻りたいという人々へのメッセージ。そうだよと頷いてしまいました。今できる事をしておこうと思います。

こころ日記「ぼちぼち」part II
P268～

竹中 尚文

ステイホームで、お家で料理をする人が増えたという。同好の仲間が増えるのは嬉しい。今回は、これまであまり料理経験の少ない人を意識して料理を紹介したい。素人料理の場合は失敗する楽しみを大切にしたい。失敗したときこそ、次の料理のエネルギーだ。

今回の料理はシーフードリゾット

【準備するもの】

トマトソース(市販のものを購入もあり)、

トマトソースを作る場合(ニンニク、タマネギ、トマト、紙パック、塩、胡椒、オリーブオイル、赤唐辛子、あれば月桂樹の葉)

冷凍シーフードミックス、ツナ缶、チューブ入りニンニク、チューブ入りショウガ、チューブ入りアンチョビ、お湯、コンソメ顆粒がキューブ、冷ご飯、胡椒、粉チーズ、オリーブオイル

【手順】

トマトソース(市販のものを購入した場合はこの手順はカット)

最近トマト缶より、紙パック入りのトマトが多くなった。紙パック入りは、容器を捨てるのが簡単。何より、安全である。トマト缶を購入するときの注意は缶がへこんでいないこと。賞味期限より大切。トマトは酸が強いので缶の内側がコーティングされている。へこんでいるとコーティングが破れている可能性がある。

トマトパック1箱(私はカットトマトが好み)、タマネギ中3個

- ① タマネギをみじん切りにする。できるだけ細かく。
- ② ニンニク2かけほどをみじん切りにする。厚底鍋か大きめのフライパンにオリーブオイル多めに引いて、ニンニクと赤唐辛子1本入れて軽く炒める。みじん切りのタマネギを入れる。塩を加える。塩は気持ち少なめ、そのための赤唐辛子。タマネギは焦がさないようにしっかり炒める。ここで甘みを出す。赤唐辛子を取り出しておく。
- ③ トマトパックを投入。胡椒と月桂樹の葉を入れて、焦げ付かないように混ぜながら煮込む。味見をして終わり。塩味を控えめに。

※ 多めに作って、分けてストックするのもいい。

シーフードリゾット(量はご飯の量を決めて、それに合わせてシーフードの量を決める)

- ① 厚底鍋に多めにオリーブオイルをひく。鍋が熱くなればニンニクとショウガとアンチョビを入れてシーフードミックスを入れる。(イカやアサリやエビを別々に買った方が美味しい) ニンニクとショウガはシーフードの生臭みを消すため、アンチョビは塩味のため。そのつもりで量を考えてほしい。
- ② シーフードは何とか火が通った程度で、ツナ缶を開けて投入。熱いお湯を入れる。お湯の量はご飯と同じくらい。コンソメの素を加える。味が濃くならないように注意。

胡椒を入れる。

- ③ 冷や飯を入れる前に、電子レンジで少し暖めるとほぐれやすい。ご飯をゆっくり煮込む。見た目で食べなくなったら、火を止める。
- ④ 食べるときに、塩分が足りないと思えば粉チーズをかける。

今回のバックミュージックは“Disney Songs the Satchmo Way”邦題「サッチモ・シングス・ディズニー」

もう3~40年前に友人がこのアルバムは面白いよと教えてくれた。ルイ・アームストロングがディズニーソングを歌う。人生に何度か下を向いたときに、この曲が元気をくれた。カラ元気だけども、前を向かせてくれた。

『盆踊り漫遊』

P112~

サトウタツヤ

オンライン授業、いろいろ迷ったすえ、説明入りPPTとツイキャスによるラジオにしました。金曜午後3時、定時のラジオ配信は思ったより大変で、構成作家や音響技術者やディレクターが必要だとわかりました。幸いにも定時配信は多くの学生さんに好評ですが、ツイキャスというシステムのわかりにくさ故の苦情もあります(Youtubeにしてほしいとか)。前期の間はニューノーマルで頑張っていきたいと思います。

対人援助学&心理学の縦横無尽

P93~

中村正

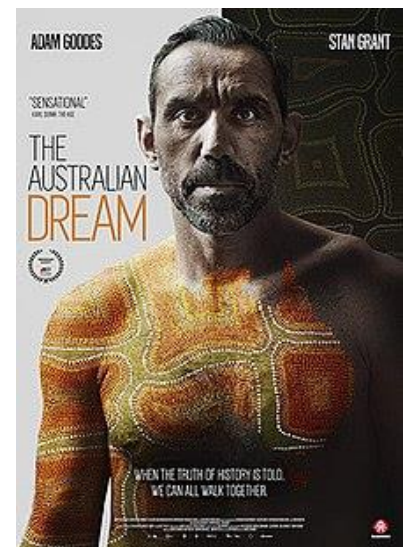
前号の近況で記したようにコロナ禍が全世界を覆い尽くす直前の今年2月にオーストラリアにでかけた。利用したカンタス航空で「The Australian Dream」という映画を観た。感銘を受けた。著名なフットボール選手、アダム・グッジ Adam Goodes の物語である。

2013年5月13日の試合中のこと、観客席から「猿！」と彼に向かって悪罵が投げつけられた。彼はアボリジニである。それは13歳の少女の声だった。グッジは彼女を指して批判をした。その後、教育がなされていないことが問題だとしてオーストラリアあげての取り組みへと発展していった

様子を彼のライフストーリーとしてドキュメンタリー化したフィルムである。

そういえばこの視察で不思議に思ったことがあった。いくつか訪問したが、会議が始まる前に主催者が「ここは先住民の土地です。そのことに敬意を払います。」と必ず述べていたことだ。これは以前にはあまりみられないことだった。この事件以降のことだろう。もっと調べてみたいと思った。残念ながらこのフィルムは日本では観られない。かろうじて予告編をネットで観ることができるだけだ。

このことをここに記そうと思ったのは、アメリカでまた黒人が警察官によって暴力を受け亡くなったからだ。コロナ禍はあらゆる世界の脆弱性を浮かびあがらせている。しかしそれは以前からあった問題でもある。オーストラリアではこのことを契機にして教育用のサイトが整備されている。このフィルムのことも紹介されている。映像教材もあり、学校教育から社会教育までいろいろな角度から視聴できるよいサイトが構築されつつある。



臨床社会学の方法

P23~

乾 明紀

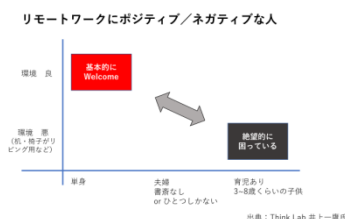
41号は休載とさせていただきます。

コロナ禍で保育園が休園となり、未就学児2人を抱えて思うように仕事ができませんでした。子どもたちにテレビやスマホを見せ続けることなどでできず、連日、朝から夕方まで生まれたばかりのバッタやハナムグリなどの昆虫を採ったり、カエルやトカゲ追っかけたりしていました。また、お

風呂に寝かしつけと本当に子供中心の生活でした。

そんな子守が続く中、大学の授業が始まり、一時は精神的にもかなり追い込まれたりもしました。下図のように単身だったら生産性は大いに上がったのだろうなと思いつつも(そんな焦りやイライラを抑えながら)、子どもの将来のためと自分に言い聞かせながら、非常に濃密な時間を過ごしました。

仕事が多忙で溜まってしまい、現在リハビリ中ですが、次号には復帰できるようにしたいと思います。



周旋家日記 休載

寺田 弘志

3月から5月にかけて、新型コロナウィルス感染を避けて、通院を自粛される患者さんが寺田接骨院では相次ぎました。患者さんが減った分ひまになった…ということではなく、従来以上に感染防止対策を講じたため、施術以外の業務が増え、忙しくなりました。

また、感染防止対策について調べなければならぬことが増えたり、対策に必要なものを探するのに時間がかかったり、注文したものがなかなか届かなかったり、やっと届いたと思ったら不良品だったりして、そういうことにも時間をとられました。

対人援助に関わる皆様も、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、日々さまざまな取り組みをなされていると思います。

当院では、新型コロナウイルス流行の前から、アルコールや塩化ベンザルコニウム(逆性せっけん)などを使って、感染予防をしてきました。また、マスクやアルコールなどの衛生材料を多めに仕入れて、患者さんにも安く(医療用サージカルマスク50枚200円、アルコール500cc300円、塩化ベンザルコニウム500cc350円など)お分けしてきました。

いつもなら安くても少しずつしか売れな

い衛生材料が、新型コロナが流行りだしたとたん、あっという間に売り切れてしまいました。

困ったのは、アルコールが仕入れできなくなったことです。治療機器やベッド、枕をアルコール消毒しているので、結構、アルコールを消費します。塩化ベンザルコニウムは薄めて使うので、当分もちそうですが、アルコールは薄めずに使うので、早く底をついてしまいます。しかも、塩化ベンザルコニウムはウイルスに対しては効果が不十分だと厚生労働省の資料にあるので、アルコールの代用品にはならないようです。

たまたま叔父がアルコールを輸入する仕事をしていたので、入手できないかたずねてみました。しかし、アルコールが高騰して採算がとれないため、取扱いをやめてしまったというのです。日本国内ではアルコールは生産しておらず、中国やブラジルから輸入するしかありません。中国は輸出を制限しており、ブラジルに注文が集まっていますが、ブラジルで感染爆発が起きています。国内で酒造メーカーが、消毒に使えるアルコールを作り始めましたが、生産量も少なく、割高です。

幸い、叔父が取引先からアルコールを譲り受け、送ってくれたので、しばらくはしのげますが、これからもアルコール不足が続くそうです。アルコールが不足する中でもしっかりと除菌していくために当院で取り入れたことを、記事のほうで紹介してみます。

接骨院に心理学を入れてみた P222～

浦田 雅夫

ズームによるオンライン授業の毎日です。「起きてすぐ 時計を見たら もうお昼」という学生の川柳にあるように自粛期間は昼夜逆転の学生もいたのだと思いますが、オンライン授業の出席は皆さんすこぶるよい感じです。

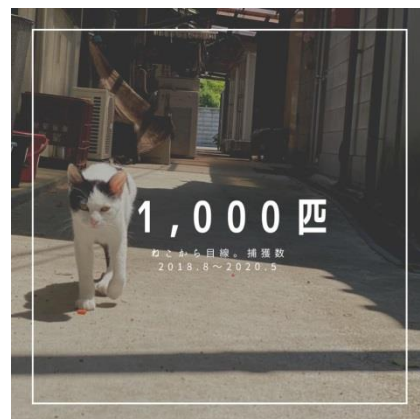
社会的養護の新展開 P60～

小池英梨子

私のライスワーク兼ライフワークの「ねこから目線。～ノラ猫専門のお手伝い屋さん～」ですが、開業からの捕獲成功頭数

が1,000頭を超えました。

ボランティア活動をやり続けるためには、脱ボランティアをして、継続できるシステムを作ることが本当に大切なんだなと実感しました。



そうだ、猫に聞いてみよう P194～

援助職の未来

1: 100年

千葉 晃央

中盤戦

人生100年といわれるなかで、47歳になった自分がいた。本当に100年であるならば、まだ私は中盤である。人生の後半を迎えるにあたり、今しておくべきことは何か？そう考え、少し自分を自由にしてみることにした。それまでは週6以上のペースで自ら納得をして、仕事をさせてもらってきた。そして、かかわってきたものの、ほとんどが10年以上させていただいていた。それらの経験を踏まえて、自分ができることをしてみたいと思ったのである。

そして、所属している組織が解決したい社会課題については、私以外にも先輩や後輩がその任にあたっている。そこにはハードもソフトも実績も信頼もある。私がもし新たな社会課題に挑んだなら、それはまだ手つかずの課題かもしれない。とにかく始めるしかないのではないかと思った。

自分で決めて、勝手な話ではあるが、本当にさみしいことであった。自分と職場は一心同体のように感じてきた。当然である。朝5時台にいたり、深夜まで熱中したり。

それを24年したところである。今の私は、ほとんどその職場の経験でできている。その職場の経験とは、当然自分だけのものではない。一緒に働いてくださった先輩、同僚、後輩、上司の方々の存在があつてこそである。さらに、未熟な私に付き合ってください利用者さんと、そのご家族の皆さんの存在は感謝してもしきれない。

まず一歩

何から始めるべきか？まずはそのあたりの本を数冊読むところから始めた。読んでみると、今後どんなことが自分の人生の課題になるかが見えてきた。本だけではなく、その課題について、その専門の方にお時間をいただき、教えてもらうことから始めよう。そう思ったのである。もうこの時点で、それまで自分が経験したことがない領域に足を踏み入れていた。不安と希望を抱えながらである。

いつもお世話になってきた、信頼できる社会保険労務士の先生にお時間をいただき、事務所にお邪魔をさせていただいた。今、

自分が考えていることをお伝えした。そして、その場合の課題、解決策を伺った。奥様が紅茶とお菓子まで出してくださった。何しろ、その先生自体が起業された大先輩でもいらっしゃる。そして当然、保険の面からもいかに対処してくかについて御教授をいただいた。

感謝

それまで深く考えたこともなかった社会保険料。被雇用者である限りは、給料から天引きされる。そして組織の昇給だけでなく社会保険料の増減他でも手取りの額は当然変わる。そこまでわかったら、それ以上は詳しくなっても被雇用者の自分の生活にはあまり直結しないのできいても覚えるこ

ともできなかったし、結果無自覚に過ごしてきた。

こうして一から制度、仕組みを自分事として伺うと、健康保険、社会保険のありがたみを感じた。結構な高額で、それをずっとこれまでの職場に払ってもらってきたことの有難みを深く、深く感じた。自分に対して、ひと月でうん十万も出してくれる。そして、そのために保険に関すること全てをしてくださっていたのである。やっとそのお世話になった方々の苦労と思いがわかってきたのである。

オフィス

では、自分の日常をどうするか。若いころに人生の大先輩に教えてもらっていたこ



とが一つある。退職したとしても、何十年も家を出て、通って仕事をしてきたので、その動きは継続した方がいいということである。これは、ずいぶん若い時に聞いてず

っと頭に残っていた。たぶん、それは自分の実体験と重なるからだろう。私の祖父は県庁を10代から定年まで勤めあげた。そして退職後間もなく体を壊した。時間ができ



た祖父はグルメに走り、肥満も手伝い、体を次々と悪くしていった。脳の血管が切れて半身麻痺になった。そして、祖母が祖父のケアを20年するという晩年を過ごした。その姿をみると、違いかたちでの人生の終盤戦にも非常に関心が高かった。とはいえ、この経験が私がこの仕事に就いた遠因の一つであること確かである。

そう、毎日通うところ…。私にはお邪魔したことがある開業しているカウンセラーさんの事務所のイメージがあった。ネット上で試しに賃貸物件を検索した。「これがいいなあ」「ネットフリーやん！」と見て楽しんでいたら、ハタと気づく。これを借りるとなると毎月の収入ノルマができる。そらそうだ。こんな家賃を払って、なおかつ生きていくには…と自分のわかっていなさぶりに強烈に驚いた。

そこで教えてもらったのが「シェア・オフィス」というところ。地元でも複数ある。早速、時間をみつけて1か所に行ってみた。下が輸入車のディーラーで、とてもおしゃれなところであった。様々なビジョンを持ち、日夜動いている方々が出入りをしている雰囲気があり、その姿を感じられる場所で刺激的であった。利用料は事務所を借りるより安価。またいろんな出会いもありそうで、興味深く感じていた。

激 励

同時にあるのは、「私は何をして生きていくのか？」という問いである。福祉学を学び、障害者福祉の現場から始まり、家族療法を学び実践、心理学も学んだ。そして、

2001年から始めた家族をテーマにした事例検討会は19年が経過した。家族のことを継続するのはできるなあと感じる。おかげさまで家族のことを援助職の方々に伝える機会もある。そのための準備も今まで以上にしっかりしていきたいと日夜思ってきた。そのためにも欲しかったのは時間である。

そして、税理士の先生にもお時間をいただいた。以前にも相談にお邪魔したことがあり、またお会いしたかったので伺った。税理士の先生も一人でお仕事を始めた大先輩である。お邪魔すると自分の体験も重ねて、たくさん話してくださった。そして強く激励をいただく。「とにかく自分の本業を確立することに徹しなさい」とご助言をいただいた。「もう自分は次の時代の人々に貢献する世代だから、いくらでもサポートする」とおっしゃってくださいました。「始めはみんな枠組み（税やら、法人やら）のことを気にするけど、そんなのは後からでも何とでもなる！大事なことは自分自身がどうやって生きていくかという本業をしっかりと作っていくことである！」と話してくださいました。なんとありがたい話だろう！

自分で決める

私の場合、次の就職先を見つけて職を離れたのではない。自分を自由にする、それを自分で決断をする、自分のタイミングでするということである。そんな経験も人生に、そう何回もないのではないか。それを可能な限り若い時にしておくのは、今後の選択決定にも影響するし、いいだろうと思った。なんせ、人生の中盤なのだから。そ

して、生活、仕事を見つめながら、できることをしていこうと思った。

そして、地元の地域活動、市民活動の活性化を目的にする京都市市民活動総合センターのスモールオフィスを教えていただいた。その利用に向けて、エントリーすることにした。センターの目的と機能、NPOの立ち上げのサポートをしてくれること等も含めて魅力を感じた。そこにはお金儲けではなく、社会への貢献という同じ思いを持ったスモールオフィス入居者が複数いる。そして、その活動をサポートしてきたスタッフの方々がいる。新たな出会いも可能性になる。エントリーに当たっては審査があった。書類では、会則、会員等の書類があり、家族をテーマにした事例検討会の方々が協力してくださった。そうしてエントリー、審査、面接を経て、3月に正式に利用が決まった。

家族支援と対人援助

ちばっち

そのエントリーに際して、付きまとうのは「屋号」である。そんなものはつけたことがない。先日の対人援助学マガジンの合宿では皆さんも一緒に考えてくださった。結局「家族支援と対人援助 ちばっち」にした。「ちばっち」。私をそう呼んでくださる方々が以前からいてくださることからである。

「家族支援」というのはよく使われ始めた言葉ともいえる。1990年代初頭に日本には家族を単位にした支援の枠組みが少ないというのが諸外国との違いであることを学んだ。そして、現場に出るとそれは事実であった。2020年の今の状況を見ても基本的には変わらない。そう感じているなら、そこに対して自分ができることをするしかないと思った。

「対人援助」とは、広く人にかかわる様々なアプローチの知恵を持ち寄って共有し、分野を超えて人に尽くす技術や理解を深める「対人援助学」の考え方が好きだからそこからいただいた。こうして「家族支援と対人援助 ちばっち」に決まった。 続く



臨床社会学の方法

(29) リアリティとは何か

ー「ひとりだけど、ひとりじゃない」世界から考えるー

中村 正*

*Ritsumeikan University

1. リアリティとは何かを問うことの意味

「リアリティショー」なるものがあり、その出演者でプロレスラーとして活躍していた若い女性が自死した。22歳だという。いや、自死に追いやられたという表現が適切だろう。いくつか目に止まったネット上での論議がある。そのなかの一つ、真鍋厚「木村花さんの死が問う『虚構に踊る人々』の愚鈍ー誰に強制されるでもなくスマホに呪詛を吐く」『東洋経済 online』2020/5/30<https://toyokeizai.net/articles/-/353701>、2020年6月1日最終閲覧)は、リアリティショーなるものの特質が生んだ自死だということと SNS の匿名の名誉毀損にあたるような投稿の問題を指摘している。そこでは、あくまでも番組としてのリアリティショーは構成されたものであること、スポンサーもいて、番組のシナリオどおりに構築された「リアリティ」があり、出来事は自然なことでもなんでもないことが的確に指摘されている。だからメディアには「出演者」を守る責任があるし、SNS での発言についてもこうしたことを理解すべきだし、人格攻撃等、発言者には責任があるということが述べられている。

シナリオがないというシナリオがあることに関係者が巻き込まれていく危険な面をもつ番組の構成となっていると私は思う。不自然な、つくられたリアリティを

構成しているのは視聴者や SNS の投稿者でもあり、それらがすべて折り込みずみで、その枠のなかで字義通りの「リアリティ」を観ているのではなく、あくまでもそれはショーとして商品になっている「リアリティ」を楽しんでいることになる。リアリティショーという言い方がそれを物語る。現実には家族も含めた共同生活には何らかのトラブルや葛藤はつきものだ。問題があれば諍いとなり、口論となり、場合によっては紛争になる。よくあるもめ事として日常生活でやりくりされていくが、ショーとして世界に流された公共的な世界がつけられ、SNS でのコミュニケーションも含めて構築されたリアリティとなっている。この事件は、「羅生門的現実」、「ワードがワールドをつくる」、「社会構築主義」として繰り返し記してきた本稿の関心と重なる事件である。特に、リアリティとは何かについていろんなことが想起される。

第 1 に、まずはコロナ禍の現在だろう。大学は年度当初より閉鎖となり、何週かの休講を重ねつつ、オンライン授業となり、5 月末現在でもそれは続いている。とくに一回生は大学に来たことがないどころか大学所在地のアパートにも来る事が出来ずに実家にいる学生もいて、大学生になったという実感がなくしかし授業だけはネットで続く事態となっている。おそらく不思議な事態のなかにいる。「私は誰なの

か」という所在なげなリアリティ感覚のなかにいるのだと思う。リアリティとは何か揺れていることのなかで加速された負の憎悪が活気づいた事件ともいえるだろう。

第2に、しかし世界は近くなり、情報だけはメディアをとおして入ってくる。コロナ禍でなくとも情報を得るための行動は多くなる。ネットに拘束されている感じだ。ソーシャルディスタンス social distancing という正確ではないワードが流通してしまった。本来はフィジカルディスタンス physical distancing であるし、こうした事態だからこそソーシャルコネクション social connectionこそが重要となる。世界保健機関 WHO も言葉を言い換えている。ワードが的確でないとワールドがうまくつくれないからこのワードは変更されるべきだろう。いずにしてもコネクションの背景にあるのはネット社会の急速な進展だ。すでにインターネットがスタートした段階から予想されたことではあるが、ワードが変化を求められ、メディアが多様になり、ワールドがグローバルになり、さらにコロナ禍を経てフィジカルディスタンスを超えるためにはネットは不可欠である。それが放つ負の力が自死事件の契機となった。SNSが無責任なコミュニケーションの媒体とならないような、合意のとれる範囲での規制と倫理が要請されているのだろう。

第3に、コネクションとは逆の事態が生じた。それは排除と分断である。コロナ禍対策をとおしてこの社会の脆弱性がクリアになりつつあることをみれば分かる。医療崩壊という言葉とともに「いのちの選別」という言葉もいつの間にか正当性をもって登場してしまった。Stay Home の名の下に家族の問題が従来以上に顕在化した。コロナ DV、コロナ虐待、コロナ離婚等である。さらに営業自粛もされたので家に居づらい人たちが「家出」できなくなった。

問題のある家族に閉じ込められた。テレワークできる人とそうではない人がはっきり区別された。社会を支える人々、つまりエッセンシャルワーカーという言葉ができたくらいに働き方の差異が浮かびあがった。しかもこうしたコロナ禍対策の最前線の人たちへの、感染症に関わることへの特有の差別と偏見が生じた。枚挙に暇がない程に社会病理的な事態が浮かびあがる(なお、このコロナ DV・虐待についてNHK ラジオから請われて話をした。14分程度だが、その音声がYouTube にアップされている。2020年4月22日 [「三宅民夫の真剣勝負」](#)で検索して聴くことができる)。

こうしたリスクを意識しつつも、コロナ禍のフィジカルディスタンスをソーシャルコネクションを多様に創出する機会とすることで別の世界をつくることのできる。副題に掲げた「ひとりだけど、ひとりじゃない」という世界である。映画の想像力を借りつつ考えてみることにしたい。

2. 「羅生門的現実」や「ワードがワールドをつくる」ということ言いたいこと

リアリティとは何かという問いは、この連載の基本的な問いでもある。社会病理の現実とはどんなものなのか、一体何が起しているのかという問いと重なるからである。それに応答する考え方としての「羅生門的現実」や「ワードがワールドをつくる」という言い方をしてきた。これらはたんに現実が多様性に富んでいることやワールドが任意なワードによってつくられているということをいいたいのではない。そしてそうした多様性を否定することまで許容しているわけではない。「羅生門的現実」を否定するのも多様な表現の一環にあるものとして承認するが、それ以上、「羅生門的現実」を破壊するような論にならないような決めつけ的意見までも認めてい

るわけではない。言い換えると、すべてが構築されたものだとして相対主義のなかに放り投げていくわけではない。その中心には何が実在しているのかを絶えず吟味することも重視している。現代社会では、個人の人格、基本的な人権を中軸においた実在的なものを想定する。

こうした経緯で多様にワードが変化してきた様子が見て取れる。いくつか紹介しておこう。

例えば肌色というワードがある。少し前を知る人は肌色がクレヨン、クレパスや色鉛筆に存在した。2000年頃からそれはなくなった。肌色というワードは消え、ペールオレンジと変わった。「ワードがワールドをつくる」からすれば日本人の肌色しか想定していなかったことになる。確かに肌の色はあるが、特定の肌色は世界に存在しない。肌色はスキンカラーとかナチュラルカラーとして表記はできるが色の特定はできない。たくさんの色を並べるしかないのでクレヨンの色のワードに使うわけにはいかない。

こうした観点からみて、他にも消滅したり、出現したりしたワードは多い。例えば、不登校がそうだ。「どの子にも起こりうる問題」と文部科学省が定義する前は、「長期欠席・不就学ー学校恐怖症ー登校拒否ー不登校」とワードが変遷してきた。あまりにも変化が激しいと思う。それぞれのワードが想定するワールドをみるとその揺れは激しい。どんな問題として定義するか揺れているということだ。これらの言葉の変遷は、そこで想定されているワールドがある。それはワードが想定する背後仮設として存在している。「貧困や児童労働ー医学的病理化ー反逆的な意思ー定義できない事態」がそれぞれのワードの背後にあるワールドと分析できる。このままいくと、不登校という言葉自体がなくなるのだろうし、そうすべきだと思う。行きたくても行けない現実を子どもの問題として説明すべき

ではなく、そうなる環境総体を説明するワードが要るのだろう。そうした時に構築できるワールドは学びの多様化に他ならない。

また、ひきこもり、発達障害も比較的新しいワードである。統合失調症、認知症等言い換えられてきた。旧式の社会病理学において離婚は「家族解体」として表記され、認知されていた時期が長くあった。ドヤ街を「解体地域」として表記することもあり、差別的なワードが学問の世界にも存在していた。事実婚と内縁関係は同じ現実だが印象操作に使われることもある差異の大きさがある。

こうしたワードの変化は偶然ではなく言葉・概念・文脈の一組のセットがあり、制度や政策を構成し、公式の定義を発することで権力の現実構成作用があり、メディアをとおして人々の認知の地平がつくられていく。そうした統合の結果として私たちのものの見方がつくられる。それは問題をみる認知的な環境世界を成すともいえる。この環境世界は自然な常識として私たちを拘束する。また、ものの見方という認知的な作用だけではなく嫌悪、憎悪、好感、快楽、不快等の感情作用も加味される複合体を成していく。

別言すると、ワードをとおして独自の「社会ー政治ー経済ー心理の複合体」が構築されていく様相も把握されてきた。専門が精神病理学、神経心理学、臨床てんかん学である兼本浩祐さん(愛知医科大学教授)が『なぜ私は一続きの私であるのかーベルグソン・ドゥルーズ・精神病理』で紹介している事項が印象的である。「色彩感覚の異常を考えても単純にそれが十全なものから何かが欠けた状態と考えるのは難しい側面がある」という。「たとえば色彩に対する感受性を有する錐体細胞を多くの人には三種類持っていますが、それが三種類ではなく二種類しかない狙撃兵の方が、いわゆる正常の色覚を持っている狙撃兵を持

っている狙撃兵よりもカモフラージュに惑わされにくく標的をより容易に察知できる場合がある」という研究を紹介している。そして、次のように結論づける。「そもそもある特性が『障害』となるか才能となるかは、その場で必要とされている環境との関わりのなかで決まることであり、より多く見えること（赤と緑が区別できること）は戦場の狙撃兵という環境の中ではむしろ障害になってしまうということもありうるわけです。」（第1章）と。狙撃兵の環境世界からするとそれは色覚障害ではなく特性となっていくのだから。

類似の事項は歴史研究においても指摘されている。例えば色覚異常についての研究がある。馬場靖人さん（早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員）の『視覚文化叢書 6 〈色盲〉と近代—十九世紀における色彩秩序の再編成—』（青弓社、2020年）である。これは近代ヨーロッパと日本における〈色盲〉という概念の形成や色覚検査器具の開発の歴史をたどった丁寧な研究である。

近代的な〈色盲〉概念の系譜を明らかにして、きたるべき「色覚多様性社会」の構想を示している。一般的には「異常」や「障害」としてネガティブにとらえられがちな〈色盲〉。だが、そのイメージは「近代」によって作られたものだという。その歴史的な構築の過程を跡づける。現代の私たちが知るものとはまったく異なる〈色盲〉の姿だ。構想すべきは「色覚多様性社会」だと結ぶ。印象的な研究である。

この著者は当事者である。強度の緑色盲である馬場さんは、一般的に「緑」は見たことがないはずと言われるのに、実際にはピカソの「青の時代」の絵画が緑に見えた経験を紹介している。「色盲」の世界は複雑で豊かだという。「色盲者」は単なる色覚の差異であり、マイノリティの知覚でしかないという。しかし馬場さんは近代が「色盲」を発見し、そしてそれを能力の「欠如」と

みなしたという。それ以前は、そもそも「色盲」という現象が存在することさえ知られていなかった。

この課題が社会的医学的に表に躍り出たのは、1875年、スウェーデンの列車の正面衝突事故だったという。生理学者のフリーティヨフ・ホルムグレンが、事故の原因は列車の運転士か機関士が色盲者だったために赤信号を「進め」の白信号と見間違え事故が起きたと主張した。これをきっかけにあらゆる公共交通機関で色覚検査が義務付けられていく。日本でも軍医だった石原忍が、私たちも経験した点描式の検査用具を発案し、戦中戦後の色覚検査を制度化していった。色盲検査ではそこに見える数字を読めるかどうかで審査する。しかし色盲者の知覚は、そのような事態だけでは判定できない。馬場さんは点描された検査表をアップにすると、草間彌生さんの点描をもとにした作品になるという。これらの点描表象を「クローズアップすることにより、ゲシュタルトの安定性は崩壊し、数字は消滅し、自我は眩暈にも似た感覚のなかで、自己消滅する」と指摘するのである。私も実際に人間の身体を点描していき背景も同じ色彩の点描にしていけば身体は図に埋め込まれていく絵を観たことが在る。近代は、「色盲」というマイノリティを洗い出し、制度的支配をし、そしてそれを極めることで「自己消滅」する可能性を秘めているのであると結ぶ。

こうしてみると、色覚異常や色盲というワードはいったいどういうワールドをつくりだしているのかという問いは基本的なものの見方を揺るがす。その虚実をみることをとおして描きたいのは「羅生門的現実」という多様性の様相と連続した差異である。境界はつくられており、マイノリティとマジョリティが社会的に構築される。

3. 想像と虚構の側からリアリティを透視すること

盗み見するような「リアリティショー」でもなく、野次馬的に悪罵を投げつける無責任な SNS での炎上のようなでもなく、「羅生門的現実」とおして、再構成されたワードをとおして、私たちの周りには豊かな想像の世界というワールドがあふれている。多様な文化表象がそうだ。こうしたテーマをもつ映画をもとにして「羅生門的現実」や「ワードがワールドをつくる」ということを積極的に把握するための試みをした。ものの見方に影響を与えるメディア支配を乗り越えたいと思い映画で学ぶことを企画した。日常生活というリアリティのなかへと自らを解き放つために想像の世界の力をかりることとした。虚構というフレームをとおして見えてくるリアリティの輪郭を捕まえたいと考えた。

2008 年から 2013 年にかけて立命館大学の朱雀キャンパスにおいて計 15 回にわたる講座を開催した。[公開講座「シネマで学ぶ人間と社会」\(立命館大学人間科学研究所\)](#)である(詳細は検索してご覧いただければと思う)。当時、アート系の映画館、京都シネマの支配人をしていた神谷雅子さんと一緒に企画・運営をしていた。毎回、監督や関係者を招き上映後に対談するというそれなりに豪華な企画だった(予算の都合でいまはやっていない)。本マガジン編集長の団さんや連載している村本さんにも登壇いただいたことがある。そのうちのシリーズ5(2010年5月から8月に開催)はこうしたリード文だった。

(今回のテーマは)「ひとりだけど、ひとりじゃない。-虚構というリアル-」です。その人らしく、その人にとっての重要な他者のあり方について、少し異なる視界から眺め、つながり方の多様さを考えます。リアルな日常の中の関係性の綻び=傷を直視し、そこからの回復の手がかりを得たいと

思います。「あなたは誰？」と問いながら、「他者」という存在の意味を、その深まりと広がりへと解き放ちたいと考えます。

取り上げた映画は次のもの。『空気人形』(是枝裕和監督、2009 年)、『リリイ・シュシュのすべて』(岩井俊二監督、2001 年)、『ラースと、その彼女』(グレイグ・ギレスビー監督、2007 年)、『トニー滝谷』(市川準監督、2004 年)。人形、歌姫、リアルドールあるいはラブドール(いわゆるセックス人形)、亡くなった妻によく似た別人が主役で、そこにかかわる人間の苦悩や希望が描かれている。

『空気人形』は人形(ラブドール)が動きだす。古びたアパートで持ち主の秀雄と暮らす空気人形は、ある朝、本来は持つてはいけない「心」を持つてしまう。彼女は秀雄が仕事に出かけるといそいそと身支度を整え、一人で街へと歩き出す。メイド服を着て、おぼつかない足取りで街に出た彼女は、いろいろな人に会って行く。ある日、レンタルビデオ店で働く純一と知り合い、そこでアルバイトをすることになる。ひそかに純一に思いを寄せる。人形をとおして心とは何かを問いかけている。映画のなかで吉野弘の「生命とは」が引用されている(末尾に掲げておいた)。

『リリイ・シュシュのすべて』は、中学1年の雄一が主人公。同じ剣道部の星野や仲間たちと、偶然不良たちから奪いとった金で旅行にいくなどやりたい放題だった。ところが夏休み明け、星野はクラスのワルを倒したことで豹変し、子分を従えて雄一をいじめ始める。インターネット・ノベルが元になっている。リリイ・シュシュという歌姫に心を許し、そこに関係を閉ざしていくが最後はどう解決できるのか少年の苦悩が痛い。

『トニー滝谷』は村上春樹原作の同名短編を映画化。ジャズ・ミュージシャンの息子として生まれ、「トニー」という名を付け

られた主人公がイラストレーターとなり、仕事先の編集部員、英子と結ばれる。幸せな結婚生活で唯一の問題は、英子が次々と新しい洋服を買うという依存症だった。その妻が亡くなる。妻の残した衣装を身につけさせ、思い出とともに生きようと決め、瓜二つの女性を雇う。その彼女に妻を演じさせる。しかしいつまでも続くわけではない。最後はすべてが燃えていく。着せ替え人形のようにして別人を代用することはできない。

これらは虚構のようなもの、想像の世界に執着して、いじめから、悲しさから、空虚さから逃れてなんとか生きる少年や男の物語である。それを集めた企画だ。

これに類似の映画はたくさんある。たとえば『人魚の眠る家』(堤幸彦監督、2018年)は二人の子を持つある家族の物語。娘の小学校受験が終わったら、離婚すると約束した夫婦のもとに、突然の悲報が届く。娘の瑞穂(みずほ)がプールで溺れ、意識不明になったというのだ。回復の見込みがないわが子を生かし続けるか、死を受け入れるか。究極の選択を迫られた夫婦は最先端技術を駆使して前例のない延命治療を開始する。治療の結果、娘はただ眠っているかのように美しい姿を取り戻していくが、その姿は薫子の狂気を呼び覚まし、次第に薫子の行動はエスカレートしていく。それは果たして愛なのか、それともただの欲望なのか。過酷な運命を背負うことになった家族の最後はどうなるのか。

『ロマンスドール』(タナダユキ監督、2019年)はラブドール製作工場で働き始めた北村哲雄が登場。やがて彼はある女性と結婚するが、自分がラブドール職人であることを妻に隠し続けていた。毎日が平穏に過ぎていく中、哲雄は仕事にのめり込み、妻とは次第にセックスレスになっていく。そんなある日妻はずっと胸の中に抱えてきた秘密を哲雄に打ち明ける。

『トルソ』(山崎裕監督、2009年)は、男

性の体の形をした人形を恋人代わりに生きる独身女性と屈託のない妹を通し、女性の心に潜む深い闇と再生を描く。

さて、『ラースと、その彼女』に戻ろう。27歳になる孤独な青年ラースが主人公である。そして恋人役のビアンカ。彼女はラブドール。彼を支える兄夫婦と街の人の心の葛藤と変容が描かれている。アメリカの小さな街に暮らすラースは、優しく誠実だが、少々対人関係が上手くない。何か心の問題をかかえていそう。理由ははっきりしない。なかなか恋人ができない。どちらかといえばひきこもり気味である。そのラースが兄夫婦に彼女を紹介したいと言い出した。彼女の名前はビアンカ。なんとそれは等身大のラブドールだ。ネットで突然、注文した。どれにしようかなというパソコンの通信販売のサイトの画面はリアルである。本当にそうしたサイトがあるのだろう。その彼女に恋をしていく。シャイなラースは兄夫妻の家の裏にあるガレージでひっそりと暮らしていたがその生活が一変する。なんとビアンカは出身もしっかりしている。説明書によると「元宣教師で、ブラジルとデンマークのハーフ」だという。

連れてきて紹介したいと兄たちにいう。恋愛妄想に取りつかれたようにもみえる。私はこの映画をとおして「傷ついた男性性とそこからの回復」を取り上げたかった。ラースの恋する心と行動を観るために、ラース自身の分身としてのビアンカをとおして見えてくることがあり、それが男性理解につながると思ったからだ。

何らかの理由で寡黙でシャイなラース。ラースは観ている観客から顔をそむけつづける。理由は一貫してわからない。が、生まれた時に母が亡くなっただけのことから推測はできる。そのラースの対人関係と表情が変化していく様子を映画は綴る。そして、ビアンカと話をし、恋人のように振る舞う姿をとおして周囲の人との関係性自身が柔らかくなっていく。観ている側は

事態が読み解けず、家族が反応する様子からラースを理解することになる。だんだんとラースはビアンカをとおして感情豊かになっていく。観ている方も安心して観ることができる。

この不思議な主人公に最初は戸惑う。何が起きているのか。観客はラースの周囲の人と同じ目線である。兄夫婦や親戚や街の人びとの様子に変化していくのでそれにあわせて観ている自分も変化していくことを体験する。その変化の中軸にいるのは単なるラブドールである。にもかかわらず、ラースをとおしてビアンカが生きているようにみえてくる。ビアンカは何もしないがラースの能動性をひきだしていく様に引き込まれる。何もしないという存在感がある。それはとても強い。そのラースを周囲は心配してみるが二人の恋を受けとめる。兄の妻、義姉カリンをはじめとしてビアンカを受け入れていく。女性たちは話をしないビアンカの代わりになってラースの心の内を伝える役割を発揮している。女性同士のつながりである。女性たちはすんなりビアンカを受け入れる。反対に兄はなかなか受容せず、理解できない。

私はあまり気づかなかったのだが、映画の裏話によるとビアンカは数度のメイクが施されていたという。ラースがまるで生きているかのように相手をするなかでビアンカの表情も変化していくことがわかる。ラースの家に来たときは、箱に入っていたのでデフォルト状態だ。ラブドールらしい派手な濃い化粧だ。恋人としてラースの家で過ごすうちにナチュラルメイクが施されていく。ビアンカがラースとの生活になじんでいくさまが、これらの装置によって表現される。リアリティはこうしたところにも構成されていた。

そして私が感銘を受けたのは地域の人々の姿である。車椅子でその町をビアンカとともに動き回るラースを実に自然に受け入れていく街の人びとの姿はこっけいだ

が暖かい。決して奇妙な目で見ない。ラースの想像の世界と付き合う様子が自然である。

この映画は、繊細で優しいラースの世界を描いている。ラブドールを相手にするような自立できない男性としてラースをみていない。見方によっては、ラースは、ひきこもり、対人恐怖、失感情症、場面緘黙、感情障害等、何らかの障害や病気を想起させもする。また、ラースを更生させるための、支援や援助を描いているわけではない。自然なかたちでの対人関係の結び方を再生するためにビアンカが登場する。何かの対人関係の課題や支援を考える際にも有効なはずだ。設定はとても奇妙だが、ラースのような人はいる。ラブドールを愛した男性の姿を描いただけだが観ている人の想像の世界を拓いていく。現実的ではないが現実的になっていく。不思議なことに、リアリティがあぶり出されてくる。他者とは誰かを考えさせてくれる。人には想像の世界が必要なことがみえてくる。

観ながら、そういえば誰もが生きてきた道を示してくれていることを考えていた。それは私の子どもが就学する前の頃だ。その時、子どもはドラマの世界に生きていた。いつも「ごっこ遊び」をしていた。人形や絵本を相手に本当に空想の世界に生きていた。私の連れ合いはその遊びによく応答していた。私は絵本読みをとおして付き合う程度だったが、空想の世界で母子はよく遊んでいた。ドライブをしている間、後ろの座席でその世界に入り込んで物語を創りあっていた。そういえば、私もそうした時期があった。昭和30年代、ゲームも何もない時代だったが、やはり男の子らしい空想の世界だった。もう大半は忘れたが。ラースとビアンカの関係をみていてそうした子ども期に憧れた。今はすっかり現実に汚染されているからだ。日常にまみれて生きているからだ。そうしたことをラースとビアンカの戯れにもみえるやりとりを観

ながら思っていた。ラースにとっては現実の世界そのものだ。家族や地域の人にとっても現実の世界のように事がすすむ。「リアリティショー」のような愚劣なことではない。義理の姉は「彼女は本物で、実在している」とまで言う。確かにビアンカはそこに存在している。ビアンカはラブドールなのか元宣教師なのか。そんなことはどうでもよい。いずれにしてもラースの恋した女性である。それとして観客も巻き込みながら周囲は受け入れていく。

映画では人は多かれ少なかれラースのような嗜好があることが示唆されている。アクション・フィギュアを大切にしている同僚がいる。クマのぬいぐるみを友人のように思っている少女がいる。街の人たちの反応は虚構ではない。そういえば、ラースは最初から、シャイなのではなく人と向き合おうとしていた。教会で子どものおもちゃを拾ってやり、重そうな造花を老婆の代わりに運び、身重な兄嫁を気遣っている。町民たちは皆、その姿に接していた。だからこそビアンカを受け入れた。

そうこうするうちにビアンカが街のなかで働き始めた。そしてボランティアにも通うようになり、美容院に行き、友人もつくる。そのなかで、ビアンカはラースから自立していく。街の人々から「彼女は一人前の女性なのよ」と怒られる。独り占めはできない。すごい地域だなと思う。

しかしラースはいつまでもビアンカと付き合っているわけではない。ビアンカとの別れがくる。ラースが現実の世界へと再生するためにはこの想像の世界は終わりを遂げる必要がある。ラースの大人化のためには何か象徴的な死と再生の物語が挿入されなければならない。映画のラストはそうした場面だった。成長と変化のためにビアンカと別離する。物語として、ラースが創った想像の世界を破壊させることになる。

4. 対話的協働のもつ力—多様性をとおして「希望」の方へ

この映画企画は毎回の上映後に対話を行った。『ラースと、その彼女』の回は、本マガジンでも連載している同僚の村本邦子さんに対話をした（詳細は、http://www.ritsumeihuman.com/cinema/cinema5_3.htmlで読める）。

対話ではジェンダーの視点からの解説が多く部分を占めていた。私はこの企画のタイトル、「ひとりだけど、ひとりじゃない。」はかなり考えて名づけたことから話した。重要な問題意識として孤独と孤立の違いがあること、その人にとっては必要な孤独があること、その時にそれを支える周りの人たちのまなざしやかかわりがあること、その独特さや個性的な面を扱いたかったと。最初に記したソーシャルコネクションのことと重なる。孤立に追いやらずに周りがいろんな関係を作って生きていて、うまい具合に、その人だけじゃなくて、周りもいろんな変化が起こっていくあたりを考えたくてチョイスした作品群である。ラブドールを買っていくのも男性たち、『リリイ・シュシュ』も歌姫に埋没する孤独な男の子のテーマ、『トニー滝谷』も妻を亡くした男性の話である。

私は、男性研究、「男性性」とか「男性問題」で括りだしたテーマに関心があり、男性と感情にも強い関心をもっている。そしてジェンダー秩序が強くある日本社会における男性の傷つきにも関心がある。それは暴力となっていく場合もある。この「傷つきと男性」とか、そんなテーマに関心があり、ずっとこの種の映画を観ていた。『男性学（新編 日本のフェミニズム 12）』（天野正子他編、岩波書店、2009年）という共著本があって、私たちの研究仲間が男性に関するいろんな論文を書いた。「男性」のテーマで描かれるべきテーマをとりあげている。暴力、戦争、同性愛、子育て、介護、

老い等だ。私はDV男性のこと書いた。でも「傷つきと男性性」の項目はない。従来の「男らしさ」像から降りていく、あるいは変化していく、つまりマッチョな男が、いかにしてこの社会の中で鎧を脱ぎ捨てていくかというテーマの主題が多いのが男性研究である。そのなかで「男もつらいよ」という言い方で主題化する論題があってもよいかと考えてきた。少ないのは、他者を傷つけることも多い男性なのでその両面をみる必要があるからだ。特権としての男性性こそに注目すべきだという指摘はジェンダー論の定石でもある。

とはいえ、男性の不器用さ、コミュニケーションの困難さ、親密さへの関与の恐怖(コミットメントフォビアというワードがあるくらい)、自律性を剥奪されることへの恐れ等の面もあり、広い意味での「傷つきと男性性」をテーマにしたくて今回のラインナップとなったことから話し始めた。

そんな中で、女性としてどう観たかを村本さんに聞いた。村本さんは、それに頷きつつ応答してくれた。『ラースと、その彼女』は女性たちが活躍している映画だという話をしてくれた。そう言われてみると確かに両面から映画を観ることができる。ジェンダーは関係性の議論なのだが、確かに私は主人公の男性としてのラースに感情移入をして観ていたことが相対化される対話ができた。「羅生門的現実」が豊かに対話できたと思う。

さらに結論をどう観るかで面白い対話ができた。最後の方にあるお葬式の場面。確かに悲しいんだけど、なんか元気が出るような、最後の2人の姿を対話で取り上げた。対談の一部を紹介しておく。

村本:「そういうなかで自分の思い通りにならなくなっていく。ラースは、自分の存在に、とても自己否定感っていうか、罪悪感をもっているんで、誰かに自分の欲求を押し付けたくないし、押し付

けたくないからこそ深い関係をもたなかったものが、少しずつ回復していく中で、愛着関係や執着心ができてきて、怒りが出てくる。その怒りを通して、今度は街のおばちゃんですよね、助けてる。そのおばちゃんが、自分自身の気持ちを代弁する形で「あんたも、うちの夫と一緒にだね」っていう形で自己主張を始めていくっていうかな。そのあたりのダイナミックスがすごく面白いなと思って。」と。

中村:「そうでしたね。教会にデビューするっていう。多分、あれ、お母さんぐらいの年齢の女性たちなんですよ。最後の悲しい場面で一緒に編み物しながら、一緒に時間を過ごしてくれたり。なんかするわけでもなく、そこに一緒にいる。「とにかく食べなさい」と。ああいうの、よかったですよ。それからあと、ピアノカも一人の人間だから、人生あるんだからって言って、余計なお世話のおばちゃんとかね。ああいうのもいいですよ。」と続けた。

村本:「だからあそこのシーンはね、ある種、子宮の内部的なんですよ。おばちゃんたちが、みんなで編み物しながらそっと寄り添って、ラースが部屋の中でのくまれているっていうか。あれがあって、あの湖なんですよ。あの湖、どう思いましたか?なんでピアノカは、もう死ぬ直前なのに湖に入らなきゃいけなかったのかって。それ、私の疑問なんだけど。水に入るでしょ、2人で。どっちかが先に入ったのか、わからないけど。あれはどう見ましたか?」と聞く。

中村:「あれはやっぱり、葬式とかね、最後の場面全体につながるトーンだなと思って。最後、キスしましたよね、直前にね。あれ、リアルドールだから、本当は性の話がね、性の話までいくと私としては面白くなかったの、あそこで、よく止まったなと思うんですよ。それで、さっき言ったように、あの、ピアノカのある種の妄想の一部、幻覚の一部、あるいは物語の一部が、母親性があるとする、あそこでやっぱりキス以上のことしてしまうとね、やっぱりラースの立ち直りによくないなって思ったんですよ。それでさらに、それ以上やっぱり、自分で死を、ある種、きちんと処理するためには、ピアノカは死ぬはずないわけ

で。人形なんだからね。やっぱり死ぬはずがないものが、やっぱり死んでいく。それは自分の次の人生をスタートさせるために必要な作業なので、別に恋人のようなものも現れたりするとね。葛藤を収めざるを得なかった。そのためには、湖の死って是非いるなと思ったんですよ。やっぱり「水」っていうのがもっている象徴的な作用があるかなって見てたんですけど。」

村本：「私も、そこいつも疑問に、シーンをね。なぜ、わざわざ水に入る必要があったのかって思いながら、とりあえず今のを聞いて、同意見なんだけでも、やっぱり死ぬ、生から死に移る区切りのところで、難しいんですよ、人形だからね。危篤状況になっても救急車が呼ばれて治療を受けたりしてしまうし。どこで、死っていうところに移行するかって時に、この映画は彼が子ども時代、少年を生き直して大人になる、ある種のイニシエーションなんで、彼が主体的に自分で殺すっていうことをせざるを得なかったと思うんですね。それがさっき言った、子宮体験の後に続く「死と再生」というかね、そういう意味をもっているのかなあって、私は見てました。とても象徴的でしたね。」

こうして男性性と女性性のことから始まり、象徴的な死と人間的な生の反復、日常と非日常の関係、想像の世界をもつことの大切さ等、面白く対話できた。対話をとおして『ラースと、その彼女』というワールドがどんな想像の世界を拓いてくれたのか、ワードを重ねる対話の協働でみえてきた。

映画のラストは物語らしく終わる。「羅生門的現実」のその先にはビアンカとの別離と悲しみをとおしてラースの自立という「希望」があった。それは平安朝末期の乱れた京都。廃墟と化した羅生門で繰り広げられる、人間の闇と病みを経て黒澤明監督がみた、映画『羅生門』のラスト。羅生門に佇む男たち。あるところから赤ちゃんの泣き声がこだまして、荒んだ男たちがその子を抱き上げる。そのラストには生きると

いうことへの希望がある。

・・・

生命は

自分自身で完結できないようにつくられているらしい
花も めしべとおしべが揃っているだけでは 不十分で
虫や風が訪れて めしべとおしべを仲立ちする

生命はすべて そのなかに欠如を抱き それを他者から
満たしてもらうのだ 世界は多分 他者の総和
しかし 互いに 欠如を満たすなどとは
知りもせず 知らされもせず
ばらまかれている者同士 無関心でいられる間柄

ときに うとましく思えることさも許されている間柄
そのように 世界がゆるやかに構成されているのは
なぜ? 花が咲いている すぐ近くまで

蛇の姿をした他者が 光りをまとって飛んできている
私も あるとき 誰かのための蛇だったろう
あなたも あるとき 私のための風だったかもしれない

(吉野弘 『生命は』)

2020年6月1日受理
中村正/立命館大学
(社会病理学・臨床社会学・男性研究)

人を育てる会社の社長が 今考えていること vol. 6

コロナが教えてくれた、自律性を育むことの難しさ

勤務地が東京、自宅が神奈川の私は、3月上旬から巣ごもり生活を続けていた。午前中は中1と小2の子どもたちを相手に団塾をひらき、午後は金策を考えたり、散歩をしたり
の毎日。社のメンバーにも基本的に自宅待機を推奨した。売上は当然低迷するから、経営者としては苦しい時期だと言えるが、一方でこの数ヵ月、「人が育っているなあ」と感じ、嬉しくなることが数多くあった。難局を、工夫で乗り切ろうとする動きが、期せずして生まれたからだ。

例えば、服飾小物を扱うサルビアというブランドでは、4月1日にオンラインショップが開店した。自社商品のハンカチを加工したマスクの販売も始めた。また、自宅時間を楽しんでもらうために、家族で一緒に楽しめるワークショップキットを無償提供している。

舞鶴で展開するカフェ「カンマダイニング」では、かなり早いタイミングからテイクアウト商品（お弁当）の提供と、近隣の売上落ち込みが激しいメーカーを助けるために、商品の委託販売を始めた。

名古屋で展開する雑貨屋「くらしのものがり」では、3月上旬から「入店予約制」を始めた。密を回避するため、予約外のお客さまは店舗に入れないこととし、入店人数と時間にも制限をかけた。今でこそ同様の取り組みが増えたが、当初は新しい取り組みだった。

いずれも、ぼくが提案や指示をしたものではない。
どちらかと言えば、後から聞かされたものだ。

今回のコロナ禍、経営者仲間と話をしていると、同じような社員の自律的行動に感動する声を聞くこともあれば、タイミングの悪さを嘆き、先を悲観し、ひとり苦しむ声を聞くこともある。

「今、何ができるのか、自ら考えて動け」と口にするのは簡単だ。多くのマネージャーは部下がそうなことを期待し、また、そのような人材になることは、成長だとも思う。だが実践するのは案外難しい。目の前で起こる、これらの自律的行動を見ながら、なぜ彼・彼女らが率先して自ら動けたのか改めて考えてみると、「その仕事が好きだ」という基本要素以外に、以下の二要因があったからだと感じた。

一つは、責任範囲と期待が明確であること

二つは、失敗しても責任を問わないこと

私はこれまで、「好き」も含めた3要素を、ほぼ全員に提供しようとしてきたし、ある程度できていると考えていた。しかし、難局を前にフリーズしてしまうメンバーを見て、案外そうでもないことを、コロナは気付かせてくれた。仕事がいつも通り回っているときは、それぞれにやることがあるから、その差に気付きにくかった。もしかすると、どこかで業務遂行の安定性や効率性を優先したマネジメントが顔を出していたのかもしれない。

人を育てるための一丁目一番地は、環境設定だ。一部メンバーの自律性が封印されてしまったのは、個々人の資質の問題ではなく環境問題だと痛感した。今回のコロナで、その不十分さに気付けた私の目下の課題は、コロナ禍での振る舞いから、環境設定に改善が必要なメンバーを洗い出し、来たるAC（After COVID19）でどう再設定するか考えること。実に厄介者なコロナだが、被害を受けているばかりではつまらない。コロナがあったからできたことを、ひとつでもふたつでも、生みたいと思っている。

文／だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な8つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開。独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国で講演も行う。

団遊の組織論； <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論； <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに： <https://aoo.al/bFQdpC>

カウンセリングのお作法

第二十三回

CONカウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美



子どもの不安

私たちはいま、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、新しい生活様式を取り入れつつあります。

この生活のなかで、もしも、子どもが不安になっているのであれば、どのように対応すればよいかにについて考えてみましょう。

いつもとは違う

まず、子どもはどう感じているでしょうか？ 例えば、就学前の子どもについて考えてみましょう。

平然としているけれど、実は怖がっている

遊んでいるときは忘れている

わかっているようでわかっていない

何かがいつもと違うとは感じている

コロナで死ぬかもと心配している子どももいる？

最近おかあさんがこわい

など、感じている可能性があります

心境

子どもの心境はころころ変わります。

基本的には健康ですが、手洗いをていねいに行っているかと思えば、全く忘れていたりします。急に機嫌が悪くなったり、元気がなかったり、何気ないことで怖がったり、これはいいの？ダメなのと確認を繰り返したり、大人から離れなかったり、落ち着きがなくなっていることが予想されます。

大人も緊張感をもって生活していることが多いため、ゆとりがありません。子どもたちのちよつとした気持ちの移り変わりなどを見逃さないよう心掛けたいです。

関係性

大人にはあり得ないようなことを、子どもたちが考えることがあります。

自分と何かを関係づけて考えます。

子ども自身が自分の正しくない行動のせいで、何かのトラブルが起きていると考えることです。

全く別の問題にもかかわらず、子どもなりの精一杯の想像力で考えた結果

「お母さんの言うことを聞かなかったから」

「僕がいい子にしていなかったからこうなった」

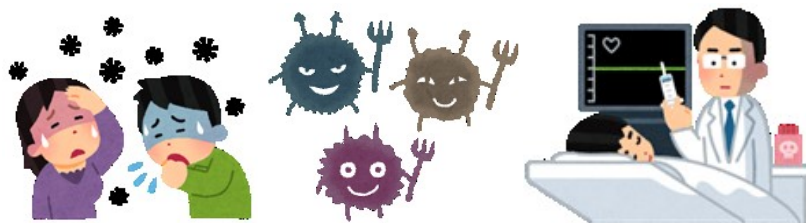
と、自分のよくない行動による結果であると思い込むのです。

また、

「いい子にしていけないと病気になる」

とも、考えがちです。

子どもの心境は？



ウイルスがうつったら死んじゃうの？
外に出たらだめなのでしょ



関係性

僕がいい子にしていなかったら、こうなったの？
いい子にしていないと病気になるの？





子どもの不安

そんなことしていたらうつるよ↓○○していたら大丈夫だよ

では、子どもとかかわる仕事をしている人や周囲の大人は、どのような接し方をするによいのかについて、考えましょう。

不安を大きくするような言動はしない

「怖がりだね、そんなに心配しなくていいよ」

「こんなことを気にするなんて、弱虫!」

など、冗談やからかうような言動は、避けましょう。

子どもは子どもなりのプライドを持っています。それに反するような言葉は、ときにダメージになります。冗談で何かを言ったり、からかったりするようなことが日常的にある場合は、要注意です。

子どもは本気にすることがあります

委縮させない

「そんなことしていたら遊べなくなるよ」

と、言われると、おどされている気分になります。

この表現によって、子どもが委縮し、不安になります。少し厳しめの言い方のほうが効果的と考えるかもしれませんが、何が大切であるかが伝わりません。

手を洗っていたら大丈夫だよ

「手を洗わないとうつるよ、病気になるよ」という言い方の代わりに、

「こうやって手を洗っていたら大丈夫だよ」と、手洗いの大切さと安心感を伝えます。

すると、子ども自身も自分がちゃんと、できていることがわかります。

正しい行動をしていることを自覚します。

漠然としたものへの対応は子どもも大人も簡単ではありません。漠然であるからこそ、その不安な気持ちが膨らみます。

忙しい大人

子どもたちの中には、今忙しくしているお父さんお母さんに心配をかけてはいけない、最近ずっと怒っているからと、妙に明るく振舞い、不安な気持ちをわざと隠すことがあります。子どもなりに考えての対処法なのですが、そのようなことも、承知しておく必要があります

どんなことでも話していいと日ごろから伝えることができていれば安心です。

おどすような言い方はさける



「手洗いしないとうつるよ！
病気になっても知らないよ！」
子どもたちが委縮する



「手洗いをしていたら大丈夫だよ」

からかわない

そんなこと気にしているの！



弱虫だね×

怖がりだね×



気持ちを言語化できるように

何が心配かお話して教えて？
ほかには？何が気になるの？



子どもの不安

子どもに「何が心配？」 気持ちを言葉にできるように

どんなことが心配なの？

大人だけでなく、子どももこの生活のなかで、イライラが増えているかもしれません。

子どもたちの喧嘩が増えると親は

「なんで喧嘩ばかりするの！いい加減に、やめなさい」

と、怒鳴って疲れます。そして、子どもは黙ってしまいます。

「なんで！」

と、親から言われても、話し出すのはむずかしいです。怒られたと感じたり、理由を説明しても、それが、言い訳に聞こえたりするので、話が進みません。

喧嘩している子どもたちそれぞれに、何かの事情があるかもしれません。

「なんで！」

よりも

「どうしたかったの？お話しして」

大人から、自分の気持ちを言葉にする問いかけがあれば、冷静になれると考えます。

子どもの喧嘩の理由を詳しく理解するといふよりも、話しやすい、言いやすい場づくりがポイントです。

また、何か、子どもが怖がっているときに

「なんで怖いのか？」

よりも

「何が心配？ どんなことが怖いのかな？」

と、声をかけて、話し始めるのを待ちます。

「他にも、気になることはどんなこと？」

と、子どもが話すペースに合わせて、話を聴かせてねという態度で、待ちます。

これまでと同じ行動を多くする

生活のリズムなどいままでと同じ行動を多くすることも心がけたいことです。

いままでと違う生活のなかでも、いままでと同じ習慣を続けることで、変わらず行動できる安心につながります。

同じ時間に起きて、着替える 食事 夕食 後に入浴 寝る時間など、いつも我が家が行ってきたことを改めて確かめましょう。

生活に支障が出れば相談機関へ

こまめな手洗いや、マスクの着用が当たり前になりました。その習慣が自然に身につくと良いのですが、中には、過剰な手洗いやマスク対策によって、生活に大きな支障をきたす状態になることがあります。そのような場合は必ず、専門相談機関を利用する必要があります。



CON 子さん 心理カウンセラー

これまでの生活と同じようにできるところは続ける
起きる時間 寝る時間 生活リズム



「手洗いできたね」



オッケー



「マスクをつけて手洗いができていたら大丈夫だよ」

集団精神療法を

振り返る

藤 信子

4

コロナウィルスによる感染症拡大防止のために、出かけたり、人と集まったりすることができなくなって、いろんな研修会ができなくなった。毎年5月から次の年の3月まで実施していた、月1回の月例グループ体験も始めることを一応9月まで延期している。22年間メンバーは少しずつ変わりながら、継続してきたグループなので、延期を決めた時には喪失感があった。延期を決めた時点では、すでに10名の人から2020年度のグループへの参加の申し込みがあったので、その方たちにとってのグループという「考える場」が一時的にしても無くなることになり、グループという場を作る私としては、こんな状況下だからこそ、話したい

ことが多いだろうと気になった。

「集団精神療法」という場を作ることからすると、「集まるな」ということは、基本的なセッティングが無くなることを意味するので戸惑った。考えてみると、これは「集団」でなくても、家族以外の対人場面を避けるようにということは、対人関係で育ったり、癒されたりすることが制限されるということである。実際、福島からの避難者の支援をしている知人は、交流会ができないことに加え、高齢者宅には訪問を遠慮しなければならないので、孤立しないようにするためにはどうしたら良いだろうと悩んでいると聞いた。今回も惨事というか災害と言えると

思う。何か見えない怖さ、というものは以前の体験を呼び覚まして不安になっている人も少なくないと想像される。人は安心して話す場面が無くなると、一人の考えに閉じこもりがちになってしまうことが気かりである。知人は時間をかけて築いた関係が保たれなくなることで、高齢の避難者の方が相談しづらくなるのではないかと、そして孤立してしまうことを案じている。人が人と会えない事態の中で、精神保健の問題が、あちこちで起きているに違いない。

集まることができないために、会議や研修会、大きな集まりでは今年度の学術大会もオンラインで開催されるところも出てきた。そのような中で、ある研修グループがオンラインのグループを始めたので参加することにした。その研修グループの企画に参加するためには、これまでは新幹線で出かけなければならなかったけれど、オンラインの場合は移動のコストはかからない点では、参加しやすくなった。この状況で集団精神療法（以下、グループ）に関心のある人と話したいという思いと、もし9月以降も私たちの月例グループ体験が開催できないようになる場合、オンラインでのグループを開催することも考えなければならぬと思う、オンラインのグループ体験を経験する中で、従来の同じ空間に集まるグループ体験との違いは何かを考えたいと思ったこともある。

従来のグループ体験とオンライングループを比較する時に、一応名前を付けよ

うと思う。「従来の」とは、あまりにも漠然としている。だからこの従来のグループ体験を一応「スペース（space: 場所、座席）グループ」と呼ぶことにする。今、ここで思いついたので、いずれもっと良い呼び方があったら、変える可能性はある。ただ、場所を同じにする、座席がある、というニュアンスを持たせたいイメージである。一方は「オンライングループ」と呼ぶ。グループ体験としてのオンライングループは、まだ2回しか経験していないから、今まで40年くらい経験してきた数々のグループと比較してよいのかという問題はあるが、とりあえず印象で考えてみようと思う。

このスペースグループとオンライングループの違いの一つ目は、隣に座る人がいない、向かいも斜めもない、一緒に部屋にいないので気配を感じない。しかしオンライングループで気配がないかというと、それは少し違う。実際に同じ部屋の中での気配とPC上で感じられる感じをどのような言葉で表すか、言葉を探している。メンバーの顔はPCの画面に平面に並んでいる。だから、スペースグループなら遠い近いというそれぞれの座った位置からの距離が違うところが、皆同じになる。そして時にメンバーの後ろに移る部屋等の背景が見えて、スペースグループなら見えないその人のパーソナルな部分が垣間見えることがある。これを消すためにバーチャルな背景を使用することもあるが、やはりそれが不自然に見えることもある。次に、かなり奇妙な体験になるのだけれど、自分の顔が見え

るのである。これはスペースグループでは、というか現実の生活ではありえないことなので、奇妙だけれどすぐ慣れてしまう。技術的には、自分の顔を消せるのだろうけれど、今のところ消そうとかそういうことにはなっていない。お互いPC画面を見て話すので、発語する時は周りの気配を感じながら、ということ無く割にストレートにことばが出てくるという感じもあるが、これは、PCやそのような環境への慣れとか、それも含めての個人の特徴が出るのかもしれない。

まだ回数は少ないけれど、私自身は参加して良かったと思っている。外出できない中で、とにかく人に会える感じが持てた。皆で話ができるような気もしている。そして普段は遠くてなかなか参加できないところのグループに参加できるのは良かった。しばらく続けてみようと思っている。そして私たちの研究会の月例グループ体験を9月から実施することについて、スペースグループにするか、オンライングループにするかは8月には決

める必要があるだろう。夏の間は感染が弱まっていっても、冬になると次の感染拡大が始めるかもしれないので、そのことも考える必要がある。スペースグループをオンライングループに切り替える、というのは避けたい。オンラインかスペースかというのは、セッティングが違ってくるので、途中で変えることは「同じグループ」という安定感を無くすことになるのではないかと思う。この機会に今まで、まだ考える必要がないと思っていたオンラインのグループを体験することになったけれど、これからはスペースグループとオンライングループを、実施していく中で、それぞれの特徴が見えてくるのだろうと思う。

PCやスマホでツールを上手に使える、情報がある人は良いけれど、そのような手段を使うのが苦手な人たちに、どのようなやり方ができるのかという課題は残っている。どうしたら人と人がつながることができるか、良い手段を知っている人がいないだろうか。

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

八 子どもとのやりとり



家族援助あれこれ

「子どもからこんなことを聞かれたのですが、先生だったらどう答えますか？」、外来でのよくあるやりとりだ。それを思い出しながらまとめました。

こうした問いかけに正解などなく、これらは一つの例に過ぎないことをお断りしておく。

いつものように、マンガは作者の団士郎氏の許諾をいただき、木陰の物語と家族の練習問題から転載しました。

(1) 断りを言えず困ってる

嫌な誘いを断
りたいとき、どう
言えばいい？



とにかく即
答しない！



「ごめん、それ、マジ無理！」
って言いたくても言えないとき
は、「お母さんに聞いてみるか
ら待って」とか「お兄ちゃんに
相談してからでいい？」と時
間を稼ぐのがいいと思う。

(2) 決められれず迷っている

決められずに迷っていることがあるんだ。
どうしたらいい？



結末予測付き
の選択肢を！



もし〇〇の方を選んだら、
～になると思う。もう一つ
の△△だと、～になるん
じゃないかな。決まったら
教えてね。

(3) 上手な頼み方を知りたい

友だちに頼みたいことがあるんだ。でも、言い出しにくくて。どう言えばちゃんと聞いてもらえるかな？



キモは
前振り！



「オレの都合で悪いけど、ちょっと頼まれてもらえない？」と前振りするのよ。そして、「～してくれると有り難いんだけど」、「ごめん、そうしてもらえると助かる」と続けてごらん

(4) 手助けを迷っている

困ってるともだちがいて、なんとか力になってあげたいんだ。でも、ウザイとかお節介って言われるのはイヤだし



薄めの
テイストで！



そういうときは、「手伝えることがあったら言ってね」とだけ伝えて、後は待つくらいがちょうどいいんじゃないかな

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

団士郎

最終回のテーマは「親密関係間の暴力」。これを家族の構造的要素の中のパワーの中に位置づける。親密さを前提とした上での暴力には、背景に依存や甘えが漂っている。原則的に言えば、一過性ではない一方的な加害行動が断続的に繰り返される。これは、突発的な加害/被害事件や、暴力事件とは違っている。ネガティブとは言い切れない関係の中で暴力が使われる。繰り返されてしまうのは暴力がと言うより、関係が持続継続されるからである。原則的に容認すべきモノではないし、そんな対応がエスカレート of 誘因になるから、甘いことを言っていてはならない。「家族間」暴力より、親密関係間暴力と呼ぶのは、恋人同士のような関係にも同様な事が多く見られるからだ。婚姻のように制度的拘束があると思ってしまったところのDVではなく、親密関係以外に拘束はないはずのところ、デートDVと呼ばれる関係が多々見られる。

関係であるから暴力を含まない関係に修復することは可能だ。元々存在したものではなく、関係経過の中で形成されてきたものであるから再構築は可能だ。もっと言えば、そんな関係に入り込んでいかない知恵を、相互関係の中で形成できるはずだ。人はしばしば、起きてしまったからの解釈に熱中してしまうところがある。しかし、そういう現象がしばしばあることを理解したら、そうならない工夫の関係づくりが出来るはずなのだ。これは相手ばかりに任せる問題でも、責任を問う問題でもない。

そうでなければ、人は用心深くなればなるほど孤立するしかない。深く関わらなければ、親密間暴力のような定義にはまる状況は成立しない。それを望んでいる人はいないだろうから、結果として世の中にDVの訴えは繰り返されてしまう事になるのだろう。

誰が悪いかの問題ではなく、どうすれば良いのかを考える課題にすることこそが、親密間暴力解決への道筋だと思う。

十一 パワー ④『暴力』

暴力

昨今、家族と暴力というと、配偶者間暴力と児童虐待が思い浮かぶ。加えて、高齢者や障害者を抱え、介護を一身に引き受けたところでの暴力行為も広く知られてきた。これらを受けて、児童虐待防止法、高齢者虐待防止法、障害者虐待防止法が定められた。

更に、耳にすることが増えたのが、長期引きこもり青年の家族間での暴力である。中・高年化している引きこもり者と高齢化している保護者の関係は、ままならない現実の先細り感から、双方が追い詰められ、時として双方向の暴力の場と化す。

いかなる暴力も許されないとか、体罰は容認すべきではないという意見は正しい。しかしそう述べているだけでは、主張でも何でもない。戦争が一部の人間によって行われていて、市民は誰もが平和を望んでいる、などと言っているだけでは責任が果たせていないのと同じである。

人類が始まって以来、戦を経験せずに生きられた時代や人が希である事実を見過ごすべきではない。団塊世代以降、たまたま直接的戦争行為のない日本で、生まれて育った幸運に無自覚なまま、口先だけで非暴力を語ってはならない。人が暴力や、不幸への指向性を内在せずに生息したことはない。

私は暴力など行使しないと、安易に言い切ってしまう人は、歴史にも、人間である己にも、洞察力を欠いている。実際に今あるかどうかではなく、人間はずっとそのようにあって、私たちが、それと一線を画するような、別物として暮らしていることはないこと

は忘れない方がよい。

おそらく、大多数の人々の心の内に、平和を求める願いが無いわけではなく、「誰もが安心と安全を求めている」というメッセージへの共感がないわけでもない。

それにもかかわらず、人は争いを止めたことはなく、更に新たな紛争や諍いが起こる。そして主張の対立と、対立状況打開の手段としてしばしば暴力は登場してしまう。

だから不幸なことが何も起きないユートピアを目標だなどに見誤ってはならない。絵空事は社会システムの到達目標にはなり得ない。

家族の中の暴力

親密関係間の争いにとって、暴力は必然ではない。諍いのない家族はないが、暴力のある家族とない家族には分かれる。

ここでパワーのひとつとして「暴力」をとりあげるのは、被害者側からの訴えによる家族内事件の問題認識からではない。家族の構造的要素のひとつであるパワーというキーワードに照らして、「暴力」を考えてみると、そのメカニズムについて、手がかりが掴みやすいのではないかと考えるからである。

構造的家族療法のキー概念として、境界、サブシステム、パワーの三つを述べてきた。そのパワーの中の下位キーワードとして位置付く「暴力」である。

パワーの構成要素として、「決定」、「コントロール」、「金」、そして「暴力」と並べた。それぞれ随分違ったレベルのものであるが、家族システムの中における「チカラ」と断ったところで、社会システムも視野に入れながら論じた「家族の中の暴力」である。

学習

暴力は学習とその結果の行動化だとよく言う。確かに殴る、殴られるの頻発する家族や小集団がある。

体育会系の部活に一時まで頻繁に見られたしごきや制裁はこれだろう。先輩から引き継がれ、やられた後輩が翌年には加害側になっていく。そしてそこには、その結果、優勝できたとか、部内が引き締まったなどの成果報告が付いている。

殴られた者が「有り難うございました！」と叫ぶ図も、あちこちで見たパターンである。果たして本当に暴力によって手にした成果があるのか、引き締まった精神があるのか、その証明は難しい。しかしその小集団構成要員がみんなでそう言えばそうだという物語になる。

体罰容認の学校教育文化も長い歴史を持っている。むろん、効果があるかどうかと、体罰を容認するかどうかは別の話である。

効果がないのなら殴ることに意味はないが、意味があるなら殴っても良い！と言い切れる人は少ない。なのに、何となくの体罰容認が漂うのは、どこにその根拠を担保しているのだろう。

ずっと以前、耳にしたK市内の中学校の話だ。体罰も辞さない体育会系のマッちょ教師がいた。校内暴力の話題が全国で沸騰していた時代にもかかわらず、彼のいる中学校は落ち着いていた。

問題生徒は火種の小さい内に、マッちょ教師を中心としたチームが強力にコントロールしていた。体罰もかなりはっきり使われていた。やんちゃな中学生達の親からも、同意を得てのことだった。周辺中学校の軒並みの荒れ具合を耳にしていた一般生徒

の親たちも、教員仲間也大歓迎だった。

その後、彼は他の荒れた中学校の校内暴力対策要員に請われて転勤していった。彼ひとりだけの成果ではなかったから、その後も中学校は安泰かに思えた。

ところが翌春、中学1年生とはとても思えないような大柄の生徒が転入学してきた。小学校時代から様々な暴力事象の噂のある子だった。教員集団に体力で対抗できそうな者はなかった。

以前ならトラブルが起きると、マッちょ教員の所に駆け込んで対応して貰っていた女性教員が不安になった。そして、体罰も辞さずで名の知れていた中学校は、大きな方向転換をした。「体罰は一切禁止。根気強く話し合いで指導する」というのである。

耳にした周辺校の教師達は一様に、体力で勝てない生徒が入学したら、体罰禁止ってどういう方針転換？と、冷ややかに語った。

確かにだらしない話だと思うが、こういう力学は、しばしば我々の社会にみられる。

家族もまったく同じである。父親の鉄拳制裁は愛の鞭、そう定義しているだけでは不十分だ。押さえ込むことはできたかもしれないが、けっして良くは育たず、やがて父親をしのぐ体格になると、仕返しのように家庭内暴力が始まったなどと聞かされることが少なくない。

暴力は短期的抑圧効果は持つが、長期的に見た場合、しばしば事後処理の難しい学習効果をもたらしてしまう。成人した息子を恐れながら暮らす老親などという逆転劇を見ることも少なくない。

被害の集中化

又、暴力は関係の間の産物だともいう。殴る人はしばしば殴るし、殴られる人もしばしば同じ目にあう。

そんな馬鹿なことが・・・と思うが、確かに殴り役、殴られ役の、役割固定の存在を否定できない。

これも随分前の記憶になったが、全く理不尽な暴力被害を、赤の他人から受けた女性と同席した。一同驚いたし、その後の対応では、私もささやかながら役目を果たすことになった。

彼女のショックも癒えて数年が経ったころ、思いがけない報告を受けることになった。彼女が通り魔事件の被害者になったというのである。またもや関係のない相手からの理不尽な暴力被害だった。幸い命に別状はなかったが、ショックは大きく、二度目の被害からの立ち直りは、非常に困難なことになった。

この話を聞いた私は、飲み込みがたい嫌な感じがわき上がって消えなかった。暴力被害者に責任などあるはずがない。二度とも、全く関係の産物などではない。私が同席目撃した最初の被害の方がまだ、加害者の姿が見えているだけ不気味ではなかったし、何が起きたのかを、場と関係について思案もできた。二度目の事件は全く酷い話だった。

振り返りながらこの話していたある場所で、「全く不合理な話だけれど、そういう被害が、集中してしまう人があるのは事実だ」と語るのを聞いて、自分も考えたことがあった着想とすりあわせた。

被害者にも落ち度があるなどと言いたいのでは断じてない。ただ被害が繰り返された事実を当事者は、もっと人間行動科学的に分析、理解しなければならないのではないかと思った。

被害者は被害を重ねたいなどとは、さらさら思っていない。当たり前である。だから、被害者が悪いわけではない。あらためるべきは加害者や、加害容認的な社会である。まったくその通りだが、そう言ってい

るだけで気が済んでいていいのだろうか？

通り魔事件や社会システムが相手では、個人のできる努力には限りがあるだろう。しかし私はここで、家族の学習行動パターンについて触れておきたい。

面接室の暴力

家族合同の面接を三〇分ばかり行ったところで、いったん休憩をして後半につなげると伝えてセラピストは部屋を出た。

通常は家族にも別室で待って貰って、再会と共に再入室して貰う。しかしこの日、いつも待合室に使う部屋が詰まっていた。そこで面接室でそのまま家族には待って貰うことになった。

部屋にはビデオカメラが設置され、面接が録画されていることは伝えてあった。加えて、ワンサイドミラーの背後で、担当ケースワーカーやスーパーヴァイザーが面接を観ていることも伝えてあった。だから父親がそのことを承知していなかったわけではない。

家族以外の人と同席する場での息子の態度に、父親がイライラしているのは感じていた。セラピストが退室した直後、父親が立ち上がって息子の腕を掴んで部屋の隅に連れて行った。そこはビデオカメラからは死角になるところだった。

「いい加減にしろ！」と叫ぶといきなり息子を殴った。カメラは死角だったが、マジックミラー越しには丸見えの場所での息子への暴力に観察室は騒然とした。

繰り返されるようなら飛び込んでいかねばならない。しかし、うずくまってしまった息子に父親は強い戒めの言葉を吐いてトイレに立った。

強い憤りの中でもカメラを避ける判断は実行された。しかし、ミラー越しに見ていると認識しているはずの私たちの存在(ひょっ

とすると、私達も別室で面接後半の打ち合わせをしていると思っていたのか)は、抑止力を持ち得なかった。

誘発要因

暴力は対象の弱さが誘因となって行動化される面が少なくない。相手が対抗力を持っているとわかることで、抑止力の働く面を否定できない。

S. ミニューチンの「家族と家族療法」の中にこんな話がある。

檻の中に三匹のチンパンジーを入れて、その一匹だけにストレスを与える。

一番強いのにストレスをかけると、周囲に当たり散らし、暴力的になる。二番目のにストレスをかけると、自分より弱い一匹にその発散行動は集中する。そして一番弱いのにストレスをかけると、自傷行動にはしる。

この実験から、暴力誘発要因がストレスであることは言えるが、それがどこに向かうかは、その場の力関係に左右されていることが分かる。

思春期、青年期の家庭内暴力、カップルのDV被害の多くは、親密さの中にあるパワーバランスを了解した上で、繰り返されている行動だと言える。

修復へ

「家族再統合」は、子ども虐待のことが大問題になった日本で、急速に大きなテーマになった。しかし私は、自分の実体験に則して、理解、説明すれば可能というモノではないと考えている。だからメソッドが喧伝されてもうかうか近づかない。今日の家族再

統合のメカニズムも、成果も詳細には知らない。このスタンスで在り続けるのが私の現状認識ということだ。

家族間の行動や関係の力動は、生活習慣に近いところがあって、そう簡単に変化するものではない。無論、プログラムやエクササイズを通して、何かが変化することが全くないとは思わない。しかし、それによって人が認識を改めるのはとても難しいことだと思う。

暴力や腕力による支配は、相手が対抗手段を手に入れたとたんに逆転する可能性を秘めている。

分かり切ったことのように思うかも知れないが、そういう事件が少なくない。加害者の常識と被害者の常識には隔たりが大きい。それくらいのことで、そんなことまでするだろうか・・・は鈍感な加害側の視線になっている。

最大の暴力といえば戦争だが、今、世界中の歴史経過のある紛争が、新たな火勢を増していて、本当に危うい。次の事態への展開誘発要因いっぱいに対峙する姿が、暴力そのものだ。

加害側は済めば忘れてしまうが、被害側は蓄積させる。これを理解するのは難しくはないが、いつも自分の中で持ち続けるのは難しい。

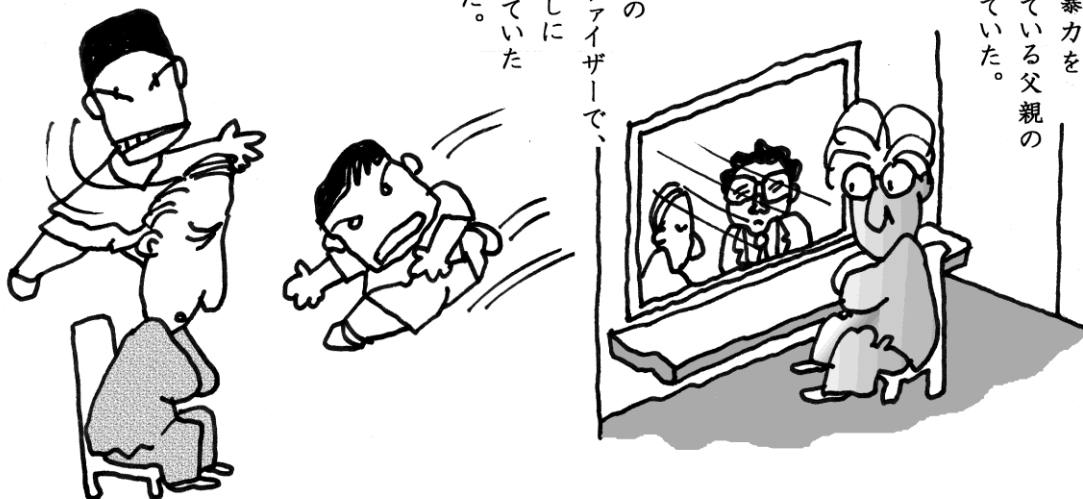
大量破壊兵器の存在など、事実無根に攻撃してしまったイラクのその後が作った世界を見ると、暴力の持つ力の絶大さと思う。

常人はついつい、自分をニュートラルな立場にいたいと思いきや、思っている。しかし、大きな力の前で、どこにも属さない自分を確保して、安心したがるのは既に暴力に踏み込まれている。Noと言わない人間はYesと言っているのだと深く噛みしめて今の時代を考えたい。

息子達の暴力を受け続けている父親の面接を見ていた。

家族面接のスーパーヴァイザーで、ミラー越しに観察をしていた時のことだ。

中2と小6の男児が連日のように父親に乱暴しているという。



第122話

贖罪

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士郎

父の被害は酷いもので、肋骨のヒビは一、二度の事ではなかった。



仕事帰りに面接に来るのだが、椅子に座っていることさえ辛そうだった。

話によると、帰宅すると深夜まで、連日のように暴行が繰り返されているらしい。

帰宅が遅ければ、その時間も短縮できるだろうと、映画でも観て帰ったらかと担当者は話していた。



しかし父親は
弱々しく笑いながら、
ありがとうございます
と言って帰宅した。



だんだん事情が
分かってきた。

きっかけは
妻の病死だった。



体調不良を
訴える妻を、
彼なりに
気遣っては
いたのだが、
仕事に追われていた。

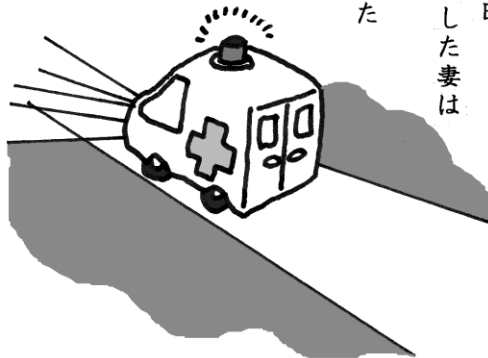


受診をすすめても腰の重い妻に、
それ以上は聞けなかった。

病院
行け...



そんなある日、
体調が急変した妻は
救急車で
運び込まれた
病院で、
あっけなく
亡くなった。



誰も想像しなかった
驚きだった。



そして身近な人々の怒りは
彼に向いた。

妻の両親は葬儀の場で、



と深い悲しみと共に
怒りをあらわにした。

40歳にもならない一人娘の
いきなりの
訃報に触れた
両親の悲しみは
想像に難くない。

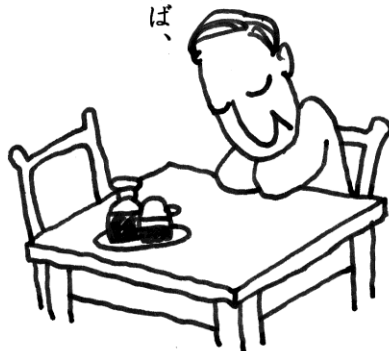


「今後、一切関わりたくない」と絶縁宣言し、遺骨も持っていつてしまった。



彼自身、何故もつと強く受診をすすめなかったのかと己を責めた。

無理矢理にでも病院に連れて行けば、事態は違っただろうと思った。



しばらくして子ども達二人が、

と言い始めた。



父の後悔は、子ども達によいことはもたらさなかった。



やがてあれこれ、ワガママをぶつけ始めた。



幼くして母を亡くさせてしまった二人に、父親は済まないと謝罪した。

しかしこれは事態を悪循環に導くことになった。



学校を急げ、夜更かししているのを、たしなめると、母親のことを持ち出して、怒りをぶつけた。



手当たり次第にものが飛び、そのうち兄は二段ベッドの上から、跳び蹴りを食らわすようになっていった。



しかし父は、
それをたしなめる
気持ちになれなかった。

自分を傷つけることで、
贖罪が叶うかのような
態度をとり続けた。

弟も手を出す
ようになり、
父親は
ぼろぼろに
なりながらも
仕事を続けた。



事態に変化が生まれたのは、
隣家の住人の親切な
働きかけだった。

学校にも行かず、
昼間家にいる兄弟を、
あれこれ世話し始めたのだ。



やがて
お裾分け
と言って、
自宅の夕飯に
用意したものを、
男三人の世帯に
届けてくれる
ようになった。

隣のおばちゃんの
心遣いや心配には、
兄弟が素直に
応じるようになった。

こんな女神が
登場することが
あるのだ...と、
人々の繋がりと
暖かさが胸にしみた。



おわりに

家族の構造理論を掲げて、今の家族を考えし続けてきた。これからも可能な限り続けることになるだろう。

変化は事象の必然である。家族も変化するのは当然だ。もし変わらずあるとしたら、変化しない事を目的にした強い動機が内在しているということだろう。それは本来、目的にされるものではないから、必ず変化は起きるし、変化を起こすことはできる。課題はその方法である。

社会的養護の新展開 10

—都道府県社会的養育推進計画—

浦田 雅夫
京都芸術大学

都道府県社会的養護推進計画

日本の社会的養護は、厚生労働省の方針のもと、各自治体が2015（平成27）年度から15年間かけて、施設の小規模化、分散化、里親委託の推進を進める「都道府県社会的養護推進計画」を作成している。2019（令和元）年度末は、各自治体でコロナ対策が行われているなか、2020（令和2）年からの第2ステージの5年間に向けての計画を策定する時期である。

2015（平成27）年度の15か年計画時点では、2011（平成23年）7月に出された「社会的養護の課題と将来像」が取り上げられ、「現在、9割が乳児院や児童養護施設で、1割が里親やファミリーホームであるが、これを、今後、十数年をかけて」（a）概ね3分の1が、里親及びファミリーホーム、（b）概ね3分の1が、グループホーム、（c）概ね3分の1が、本体施設（児童養護施設は全て小規模ケア）という姿に変えていくことが目標に掲げられた。

2015（平成27）年4月1日現在では、本体施設入所児童の割合が76.4%、グループホーム入所児童の割合が7.9%、里親・ファミリーホームへの委託児童の割合が15.8%であり、これを最終年度までにそれぞれ「概ね1／3」ずつにすることを目標としたのである。

ところが、平成28（2016）年度の児童福祉法改正、そして「新しい社会的養育ビジョン」の突然の登場により急激に里親委託シフトへと舵取りが行われた。遅々として進まない、里親やファミリーホームによる養育を一気に推し進めようというねらいだ。

また、第2ステージからは、要保護児童のための「社会的養護」から要支援児童を含む「社会的養育」「家庭養育」へと移行している。そのため名前も「都道府県社会的養育推進計画」と名称変更されている。この第2ステージの基本的な考え方について、厚生労働省「『都道府県社会的養育推進計画』の策定について」では、「子どもの権利保障と子どもの家庭養育優先原則を実現する計画を立てる必要がある。その際、国会審議において明らかなように「社会的養護の課題と将来像」を全面的に見直して、『新しい社会的養育ビジョン』で掲げられた取組を通じて、「家庭養育優先原則」を徹底し、子どもの最善の利益を実現する必要がある。」とし、「社会的養護の課題と将来像」を前面否定している。これまでもみたが、急激な舵取り変更に社会的養護関係者からは大きな批判がでた。

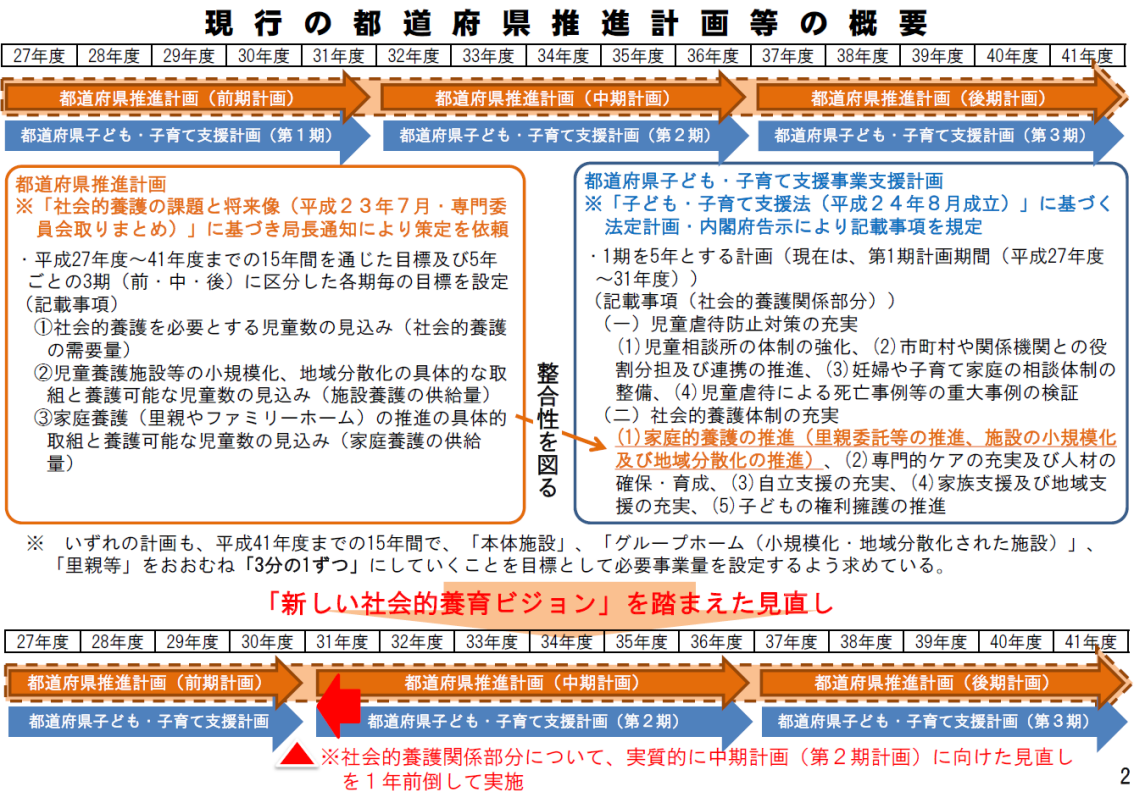
なかでも、「3歳未満については概ね5年以内に、それ以外の就学前の子どもについては概ね7年以内に里親委託率75%以上を実現し、学童期以降は概ね10年以内を目途に里親委

託率 50%以上を実現する。」「施設での滞在期間は、原則として乳幼児は数か月以内、学童期以降は 1 年以内。（特別なケアが必要な学童期以降の子どもであっても 3 年以内を原則とする。）」といった数値目標が独り歩きし、大きな議論になった。

都道府県社会的養育推進計画の策定

各自治体では、2020 年度からの 5 年間のステージおよび最終年度である 2030（令和 11）年度末の里親委託率をどのように計画するかが大きな課題となっている。厚生労働省では、各自治体の全体状況の公表には至っていないが、すでに 9 割の自治体で数値目標をクリアしていないの報道がなされている。

こういったなか、里親による養育を推進する団体等は、厚生労働省あてに、各自治体が推進計画を見直すよう、要望書を提出している。



第 21 回社会保障審議会児童部会社会的養育専門委員会
資料「現行の都道府県推進計画等の概要」（2017）

41・コロナ休園

〈休園した44日間にやったこと〉

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

■全国休校要請！第一報下の園長の日。

安

倍首相が唐突に、最初に全国の小中学校と高校、特別支援学校に「3/2から春休み明けまで臨時休校要請」を発表したのは2月27日木曜日。鶴谷はニュースを見ながら「えっ！来週の月曜から？明日一日しかないじゃん！」と慌てて情報収集に没頭していった。

保育園は除外という情報は早く取得できたが、幼稚園の対応についてどこにも記載が無い。幼稚園と幼稚園型こども園は、法律上学校という扱いだから、学校と一緒に休園するのか、それとも除外なのか？ニュースをいくら見ても幼稚園には触れられず我々は宙ぶらりんだ。関係省庁のHPを検索するが28日になっても文科省のHPには幼稚園の記載はない。「無いということは対象外なのだろう…」しかし、はっきりした文言が示されないから迷うのが心情。

沼

津市私立幼稚園協会会長という立場の鶴谷の元へは、市内の数人の園長から電話がかかかってきていたが、頼りの沼津市学校教育課も市立幼稚園の休園を決めかねている。そんな状況だったのでいくら電話で話したところでラチがあかない。

ちなみに幼稚園協会という団体は各園の経営判断には何の強制力も持たない。幼稚園同士が協力して子育て支援活動や、教員の研修、幼児教育の振興のための活動が主な目的で所属しているので、近隣の園は良い意味でも悪い意味でも競争相手ということになる。

だが、こんな時には判断材料となる情報がほしい、そこで僕は普段からSNSでチャット会話をしていた親しい園長同士で盛んに「会話」した。お互いにゴールは違っても人の意見を聞いて自分の判断が決まってくる。これはホントに助かった。地域も園の形態も規模も違う環境だが、仲間がいたことを感謝した。

私

学は建学の精神が基本で、他園がどうしていようが自園は自園の教育方針で運営していくので教育方針から費用まで違ってあたりまえ…なのだが、今は同じ市内の他園の動向が気になる。あとで聞いた話だけど「こんな時に園バスを走らせている園があるけど、けしからん！」という市民の意見が教育委員会や協会事務局に届いたという話を耳にした。そんなことがあるから「他はどうしてる？」ということが気になるのだ。この際協会長としてある程度の判断を示さねばならないだろうと考え、厚労省の情報を優先することにして「保育園に準じて平常保育を続けても良いのでは？但し私学の判断は園が行うのが原則」というコメントを付けて、市内の幼稚園20ヶ園にGoogleフォームで作成したアンケートを送信したのは28日12時28分。それぞれの判断を答えてもらい、市の担当課とも共有した。

その後HPを検索していたら文科省から新しい文書が発出されていた「あった、幼稚園は対象外！の文字」ホッと胸をなで下ろした。正式な通知メールが県から届いたのは14時11分、園児が降園したあとだった。

この期間で休園したのは3園、あとの27園は平常保育もしくは自由登園で開園していた。もっとも半数以上の11ヶ園は認定こども園なので、2号児対象に子どもを預かる必要があるのだ。

バ

ス送迎が終わって職員室に戻ってきた教員は、はじめて事態を知り驚いている。来週から園がどうなるのか、どうするのか…職員も結論がまとまるまでは帰れない。休園措置はとらなかったのか、来週から保育の中で感染予防をどう実行していくのかを職員達が具体案を検討する。やっと目処が付いて「来週からも保育継続」のメールを保護者に送信したのが19時39分。職員も退勤し、ようやく情報収集と発信に明け暮れた一日が終わった。

お そらく他園も、教育委員会や学校はこんなもんじゃなく対応に追われていたことだろう。幸いなことに静岡県内の感染率も低く、沼津市には発生していなかったので、年長組のお

別れ遠足などが中止になったりしたが、なんとか規模を縮小して卒園式、終業式まで行うことができたことは感謝だった。

《休園に際して有効に使えたICT環境》

①		有料	毎日の出欠やバス利用、バスの到着メール、預かり保育の申込、園からのお知らせやアンケートなど、アプリやメールを使っている通信手段が多機能で、重要な連絡でも手紙を添付してお知らせできるので、保護者へのほとんどの通知はこのアプリを使って行い、職員も内容を共有します。
②		無料	無料バージョンの一部機能を使用しています。園から発行されたお便りをPDFで配信したり、クラス活動の様子などを、各担任のブログ形式で不定期に発信しています。父母だけでなく祖父母や親戚も申請すればどなたも閲覧できるようにしています。休園時は普段使わない連絡帳機能を使用して保護者からのリアクションもできるようにしました。
③		有料	園日誌、保育日誌、研修や業務の連絡など、職員間の連絡に使います。時差勤務の職員もこのツールで連絡事項を共有します。ちょこっとした連絡を素早く伝えたいときは、職員LINEを使用します。

■第二報！ついに休園

そ れは、感染予防に配慮しながら緊張感の中行った**入園式**を土曜日に終えて、続く月曜日に進級児の**始業式を終えたばかりの4月6日にやってきた**。沼津市の近隣で感染者が発生し、子育て支援課から市内の各保育園に「**4月7日から19日迄登園自粛のお願い**」の文書が発出された。幼稚園はどうするのか市に問い合わせたところ、「あくまでも各園の判断だが、市立幼稚園は休園するので…鑑みて…」と言葉を濁す。**あくまでも判断はそちら**、というスタンスを崩さない。「感染の確率は低いのだろうけど、ここは忖度するしかないのだろう」

保 育園の保護者が自粛している中で幼稚園バスが走り回っていたら、市民からクレームが出る可能性がある。まして感染などが起こったらどんなバッシングを受けるかわからないし、幼稚園全体のイメージダウンにもなりかねない…ということを忖度し、協会としては異例の「足並み揃えていきましょう！」の半強制力を発動し、「実質の休園要請」と題したメールを各園に配信し、Googleアンケートも実施した。

今回はさすがに**20園全園が休園措置**を取り、預かり保育のみ実施する園が多かった。

す でに感染状況が悪くなってきている時期だったので、「**休園します、預かり保育は行います。**」というメールを夕方5時には保護者に送信することができた。明日から2週間休園だ。新しいクラスではじめて顔を合わせた担任と子どもたちは、翌日からお休みに入った。でも2週間だ、まだこの時はそう思っていた。

そ の後、市内感染や緊急事態宣言の発令により2回の休園延長があり、2回目の再延長の頃には、もう慣れてしまって「これまで同様」というメールを余裕を持って送信できるほど…経験って強いですね。

そ して、園は5月21日から分散登園を開始し、6月からの平常保育を予定しています。このマガジンが掲載される頃はどうなっているのでしょうか？

■休園期間にやってきたこと

休 園が決まったとき、いかに幼稚園と子どもたちをつなげていこうかまっ先に考えました。とにかくバタバタしながらも頭を捻って

試行錯誤しながらやってきました。滅多にない経験を振り返ってみたいと思います。

■休園2日目☆第1弾☆教材配布

最 初は短期間のつもりでしたので、園でやるはずだったカリキュラムをお家でやってもらおうという発想でした。各学年で、教材と道具を個人別にセットして、園に取りに来て頂きました。子どもたちにとっては初めての宿題だったでしょうね。

《登園再開後のエピソード》

ほ とんどの教材はお家でやって頂いたお陰で、再開後にはみんなが持ってきて頂いた教材がバッチリ揃いました！ 家庭で保護者の皆さんがしっかりと、子どもと向き合ってくれたことが感じられて感謝でした。

■各学年が渡した教材説明お手紙（年少組）

おうちで あそぼう!!

4/4(土)に行われた入園式 皆様のご理解ご協力の
おかげで 全員出席! 無事に行事ことが出来ました!!!
本当にありがとうございます😊

月曜日 おやすみで 火曜日から 待ってるわー♡と
さようなら したと思たら... コロナウイルスにより 休園。
楽しみにしていた 4月が 止まっちゃって ショックを隠しきれませんが、
こころは 命を守るため 元氣張らねば!! ですわ。

みんなに 今すぐにも 会いたいところですが、おうちで
出来ちゃう 楽しい おやこま"を用意させて頂きました!
プチ小学校 みたいで ちょっぴり お兄さん お姉さん気分♪
おうちで 楽しんで下さい😊 幼稚園が はじまった日に
持ち来て下さいね♡ (今のところは 20日までです)

1 こどものはら、はら / おべんとうを おいしく かきましょ

2 こどものはら、はら / かふんぞろ! マスクをかいてあげよう

3 おりがみ / 11円

4 はさみ / はさみで あそぼう * ひんげ" pizza

5 はさみ / はら、はら

↑ おあたら
おうちにある シールを 見返、ちゃたりして♡
楽しんで下さい♡

ゆい
せんせい

(ずんずんはおい
みんなにあえるのを
たのしみにしてるわ♪
ナニー いすき♡)

はる
せんせい

Let's チャレンジ!!

4/6(月)に行われた始業式から、年中さん
『スタート!!!』と意気込んでいた最中....

早速 コロナの関係でみんなと会えなく
なってしまうショックを隠しきれません...
ですが! またみんなと笑顔で会う日のために
頑張って乗り越えていきましょう😊
そご、おやごでできちゃう楽しい『おせんぼ
アイテム』を
用意させて頂きました!

ゆりぐみ隊員、ばらぐみ隊員になれる

Missionをクリアしてみてください♡

幼稚園が始まった日に持ち来て頂ければと
思います☆ (今のところは20日まで!) ゆりぐみばらぐみに
元気に会える日を楽しみにしています☆

卒業してしまったり
お母さんや
お父さんへ
お別れを
おねがいします!

「かわいい ゆりぐみ たのしい! ばらぐみ たのしい! に
なまために、おしゃんを くりあ しよう!!」

＜Mission 1＞ 会員証をつくろう!! (お当番表)

ゆりぐみ たのしい、ばらぐみ たのしいに なまために は、
おがの、かいいんしょうが 1人1つようど! じぶんの おがの を かいて みよう!

※ 白い正方形の画用紙にクレヨンで自分の顔を書いてみましょう!
金曜を見たり写真を見たりしながら書いてみてください♡

＜Mission 2＞ たくさんのこいのぼりを救出しよう!

ようちんこ おめめ が ない こいのぼりが たくさん いる!! おめめを きて
ようちんこ こいのぼりを かんせい させよう!

※ 太さの丸が書いてある画用紙を紙にのりして切ってきましょう!
大・小 1色ずつ好きな色を選んで下さい! こいのぼりの目玉になります♡

＜Mission 3＞ みんなで宇宙にとびだそう!

たのしい たか が の ための ろけっと を つくって みよう!

※ 別紙の折り紙の ロケットの作り方を 見て、ロケットを作ってみましょう!

＜Mission 4＞ モンスターが あらわれた!

うちゅうへいし たら もんすたー が あらわれた!!!
あらわれた もんすたー を かいて みよう!!

※ モンスターの目を書いてある紙にみんなが考えたモンスターを
書いてみましょう!!!

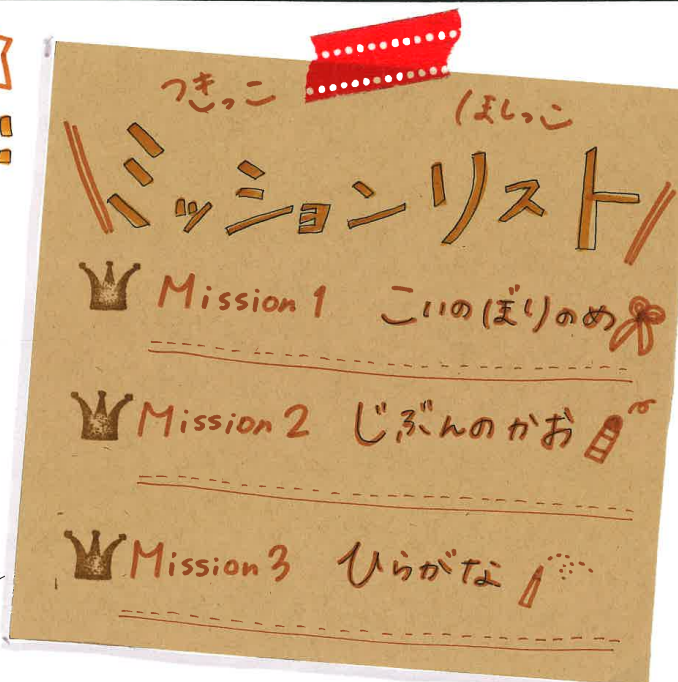
おしゃんを くりあした きみたちは
かわい たのしい だ!!

＜ご不明な点がありましたら 担任までご連絡下さい＞



つきほし MISSION!!

先日は始業式を無事にやる事ができ、
かわいい つきこ ほしこ に会うことができて
とても嬉しかったのですが...
新年度 2日目にしてまごの 休園 日も
私たちにみんなと またあいにねー!! と
バイバイしていたので 驚きをかくしきれません。
ですが こは みんなが安全に、平和に過ごすために
ごん がまんでね♡
みんなが お家じかんを 楽しく過ごすために
おせん Mission を 用意しました!!
一足はやく 小学校の 練習!! じ!!
ママたちも 普段 みんなが 幼稚園でやっている活動を
お家でぜひ一緒に できて下さい♡
幼稚園が始まった日に 持ってきて下さい♡



■休園3週目☆はらまちテレタイムと動画配信

(テレタイム2回目5/11～)

休 園が延びたぞなんとかしよう！、ということ
で『ホームカリキュラム』という考え方を導入し、家庭と園を繋げるカリキュラムを考えました。ZOOMなどの双方向テレビ電話も検討しましたが、子どもが扱うには難しいし一人ひとりの声を聞きたい！ということもあり、一つは電話にしました。幼稚園には電話回線が2本しかないため一人ずつ順番に、ということで予定表を作って電話させて頂きました。先生たちは、緊張しながらもお母さん方と楽しいお話ができて、子どもたちの声を聞いて

安心しました。さらに、会話の中で、今後どんなことをやっていったら良いかリサーチし、後半に実施する「キッズリーでの双方向コミュニケーション」を実施するに至りました。

《登園再開後のエピソード》

年 少組でテレビ電話しか経験の無い子どもがいました。なので声だけの電話に慣れていなくて、先生が見えないことに戸惑って会話が成り立たないお友だちもいたようですが、2回目には慣れたのか大丈夫でした。(^^)

ホームカリキュラムのお知らせ

2020年4月17日 鶴谷主一

15日にお知らせした、自宅で行うホームカリキュラムの準備ができましたのでお知らせします。

■1つ目は電話保育（はらまちテレタイム）を実施します。

ねらいとしては、担任とお子さんのコミュニケーションの時間を確保することです。また、保護者の皆様ともお話ができれば、とも考えております。時間としては5～10分ほどを予定しております。別紙に予定を組ませていただきましたのでそちらをご覧ください。

はらまちテレタイム手順

- ・開始時間から順にお電話をかけさせていただきます。
- ・そのタイミングでお出にならなかった場合は次の方にかけます。（コールは10回）
- ・かけたタイミングでお出にならなかった場合は、予定時間内の最後にもう一度からかけ直しますので、折り返しは必要ありません。
- ・都合が合わない方は、メール連絡もしくは電話連絡を20日月曜日の15時までにご連絡ください。

■2つ目は、幼稚園の先生による動画配信です。

これは、おうちでも幼稚園の歌やダンスをして楽しい時間がおくれるように、また規則正しい時間がおくれるように決まった時間（①10:00②13:00）に動画を配信します。ぜひ親子で配信と一緒にみなながら楽しいおやこんぼタイムを過ごしてください。以下のQRコードとパスワードから閲覧可能となります。

https://youtu.be/ApluTm_Thmo



なおこの動画は、原町幼稚園のお友達のために作成いたしました。

著作権の都合上、休園期間を過ぎましたら限定公開に切り替わりますので、動画の転載はご遠慮いただきますようお願いいたします。

■絵本とお手紙のお届け

毎

月購入して頂いている月刊絵本が4、5月号が園に届いていたので渡す方法を検討しました。先生が届けるのも感染が心配だし、玄関先で顔を見ているのに距離をとるのもごちなくなる

だろうし・・・ということで4/21付けで宅配便にて配送しました。この時のお手紙やメールで、YouTubeの公開やキッズリーでのコミュニケーション開始が伝えられました。

■YouTube https://youtu.be/ApluTm_Thmo

卒

園式では担任がメモリームービーを作ってYouTubeに限定配信したりしていたので、動画配信は当初から選択肢に入っていました。カリキュラムを意識して、固くならない楽しい雰囲気が伝わるように考えました。内容検討と撮影段取りな

どの打合せに2日程度かかりましたが、得意分野の〈歌・ダンス・絵本〉が決まり、劇などいくつかの案は没になりました。※期間限定でYouTubeは削除して専用アプリに移行する予定。

■メディア接触と絵本読み聞かせ動画

子

どものメディア接触の問題を感じていただきに、YouTubeにアップすると一気にメディア接触を解禁することになるのではないかと、園のチャンネルを見たあとに他の動画まで見てしまうのではないかと懸念はありましたが、非常時なので仕方がないと割り切って踏み切りました。

配

信前に確認したのは著作権です。音楽はJASRACという著作権団体が教育機関向けの期間限定フリー措置を打ち出してくれていたのでOK！しかし絵本は、出版元の福音館に電話してみると「本来絵本は読んで聞かせるもので・・・」とそもそも論を言い出す始末。すったもんだ反論しましたが著作権の仕組みは複雑で打ち破れずYouTube限定公

開となりました。

その後世間の流れに押された感じで絵本も限定フリーになってきたと耳にしましたが、もう少し早く対応してほしかったもんです。

《登園再開後のエピソード》

動

画の効果は登園再開後に見られました。クラスでの歌やダンスの曲をかけてみると・・・なんと一度も教えたことのない歌を歌ったり、一緒にダンスができるではありませんか！年少さんもです。お家でホームカリキュラムをやってくれたんだなあ、と感謝感謝です！(^^)アリガト!!!

■アプリ/キッズリー・れんらくアプリによるアンケート

テ

レワークという言葉も一般的になりましたが、れんらくアプリやキッズリーという通信システムが威力を発揮しましたね。ふだんキッズリーでは、担任からの一方的な保育のお知らせだったところ、テレタイムで情報収集すると、お母さん方からのレスポンスもしたい、という希望も聞いて、お母さん方から「ウチでこんなことやってます！」の投稿も活発になりクラスごとに盛り上がっ

てきていました。とくに、まだお母さん方が顔を合わせる前に休園が始まった年少組では、クラスの交流ということが、少しでもできて良かったと思います。

れ

んらくアプリでは、休園中のホームカリキュラムの活用状況や、ストレス度、困りごとなどのアンケートをとり、結果を公表したり、その後の対策に生かしました。

■GWばんきっこ

市

内の公園が使いづらかったり閉鎖されたこともあって、平日の預かり保育をやりながら、そして連休中や土日も、園庭開放を実施しました。受入体制は、休園で勤務日の減った非常勤職員の手上げを優先して勤務時間を確保することにし、常勤職員にはボランティアで手を上げてもらいまし

た。（ありがたいことに、ほぼ全員エントリーしてくれました。）

園庭でお父さん方と遊び回る子どもの姿は、ホントにこの時しか見られない光景でした。バッチリおやこんば*だなあ！と微笑ましい時間でしたね。

(*マガジン9号参照)

5月の連休に園庭開放を行うことをお知らせした手紙

ゴールデンウィーク限定げんきっこについて

2020.5.1.原町幼稚園 園長 鶴谷主一

子どもが身体を動かして遊ぶことは、単なるストレス解消だけでなく、食べることと同じレベルで成長発達に欠かすことのできない大事なことです。

夜に分泌される成長ホルモンはぐっすり眠っているときに出ます。適切な時間にぐっすり眠るためには、日中に身体を動かして体温を上げなければなりません。昼間にしっかり身体を動かして遊ぶことが、子どもたちの心身の発達を促していくのです。

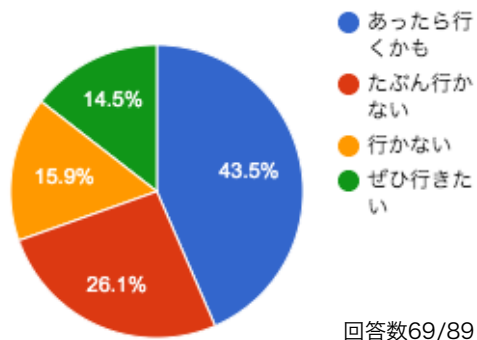
大人が大変な状況の中で、政治家の皆さんも世間も、小さい子どもにまで意識が向かないのは残念なことです。各地の公園や屋外施設も次々に閉鎖、利用制限され、子どもたちの発達機会が奪われていることに心を痛めています。沼津市学校教育課にも公園閉鎖については意見を申し入れましたが「感染予防」と言う大前提の前では、対応策は難しいという返事でした。

火曜日に各クラスのテレタイムが終了して、ほぼ全園児の皆さんが担任とお話頂きました。こんな状況下でも務めて明るく一生懸命子どもと向き合って最善を尽くされている家族の皆さんに頭が下がります。そして、そろそろ限界も感じているという声も少なからずありました。

そんなことから、ゴールデンウィークは預かり保育も保育園もお休みなので、園庭を子どもの発達機会の場として利用して頂くために、『ゴールデンウィークげんきっこ』を先生たちの協力を得て実施することになりました。

「感染予防を配慮した上で！」ですので、人数制限、利用制限はありますが以下の利用の手引きを読んで、お子さんの発達を促すことと、おやこんば時間の活用に、ぜひご利用ください。

ステイホーム週間のげんきっこ実施について



《参考資料》

子どもの生活リズムと身体の発達について
前橋明／医学博士 早稲田大学人間科学学術院教授のサイトです。
合い言葉は「食べて、動いて、よく寝よう！」です。
https://yab.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/society_150803.html
もしくは「日本の子どものための幸せな未来づくり」で検索

[お家で使える「ふれ合い体操」をキッズリー〈園からのお知らせ〉にUPしました。](#)

トクベツなげんきっこ始まる！ ゴールデンウィーク限定げんきっこ

感染予防	<u>感染予防については以下のように対応します。</u> ○来園人数を制限します。2時間枠ごと10家族迄。（兄弟も可） ○来園者は必ず検温をして、家族や濃厚接触者に発熱や風邪っぽい症状の方がいないことを確認してきてください。（検温結果は担当の先生に口頭で伝えて下さい。） ○園に入るときと、遊び終わったときは手を洗うか、備え付けの次亜塩素酸水で消毒して下さい。 ○できればマスクをして下さい。マスクをしていたほうが顔を触りません。 ○保護者同士の会話は距離をとって小さな声でお願い致します。 ○遊具を介して感染することもありますので、遊具の手に触れる部分には光触媒を塗布し、紫外線により付着したウイルスは無効化されるようにしています。また2時間おきに職員が消毒液で消毒いたします。お手伝いいただける保護者の方は一緒にお願い致します。 ○室内には入れません。外のトイレは使用できます。 ○担当職員は距離をとるため基本的に一緒に遊びませんが、ご了承下さい。
服装 持ち物 あそび	○保護者と一緒にまたは保護者の見守りのもと園庭で遊べます。 ○範囲は幼稚園と保育園の園庭です。サンカフェは使いません。 ○身体を動かす遊びのほか、砂場で水を使って遊ぶこともできます。念のためタオルや着替えもお持ち下さい。 ○園児は名札着用、カラー帽子です。 ○水筒持参で登園して下さい。 ○休憩時のおやつ持参OK、ゴミはお持ち帰り下さい。 ○食べながら遊ぶのはNGです。 ○お弁当持参もOK、外のテーブルで食べて下さい。
対象	在園児と弟妹、在園児兄妹 (小学生は小さいお友だちと一緒に遊んであげてを条件)
時間	4つの時間帯に分けて利用できます。※雨天中止 ①9時～11時 ②11時～13時 ③13時～15時 ④15時～17時
利用方法	○事前にアプリ「あそびっこ連絡」→「GWげんきっこ」にて希望の時間帯を申し込んで下さい。定員は10家族なのできょうだいの場合是一人のお名前でお申込下さい。 2時間刻みで、申込〆切は開始時間です。 - すいていれば2コマ申し込むことも可能です。 ○来園したらタブレットで【入室】を押して下さい。帰るときは先生に声をかけるだけで結構です。 ○幼稚園児及び未就園児が安全に遊べるように園庭を開放したいので、小学生は危なくないようにご配慮をお願いします。

■実施してみて：「子どもの声がうるさい」「近所で遊ぶのはやめて欲しい」というクレームを近所から受けていた親子が通ってくれることが多かったです。元気な男の子はとにかく声も大きいしわけ分からず叫び声を上げるし、集合住宅や近所では気が気では無いと思います。「大勢来てください！」と積極的に言えない状況でしたが、安心できる親子の時間を提供できたことを嬉しく思いました。

■まだ続きます

新 型コロナとの共存者会までは、まだまだ時間がかかるといわれています。園の環境や保育の方法も新しい生活様式に対応していきつつあります。計画も変更に次ぐ変更でしょっちゅう計画を見直しています。これは園長一人ではとてもできるものではなく

職員同士でアイディアを出し合って、試してみて方法を模索していく日々が続いています。なかなか時間がかかり疲れも感じますが、臨機応変に柔軟に！これからも続けていかねばならないでしょう。



原町幼稚園 園長 鶴谷主一 (59)
HP : <http://www.haramachi-ki.ed.jp/>
MAIL : office@haramachi-ki.jp
Twitter : @haramachikinder
Instagram : haramachi.k

▶ご感想・ご意見ご質問等ありましたら

気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- 第1号 エピソード (2010.06)
- 第2号 園児募集の時期 (2010.10)
- 第3号 幼保一体化第 (2010.12)
- 第4号 障害児の入園について (2011.03)
- 第5号 幼稚園の求活 (2011.06)
- 第6号 幼稚園の夏休み (2011.09)
- 第7号 怪我の対応 (2011.12)
- 第8号 どうする保護者会? (2012.03)
- 第9号 おやこんぼ (2012.06)
- 第10号 これは、いじめ? (2012.09)
- 第11号 イブニング保育 (2012.12)
- 第12号 ことばのカリキュラム (2013.03)
- 第13号 日除けの作り方 (2013.06)
- 第14号 避難訓練 (2013.09)
- 第15号 子ども子育て支援新制度を考える
- 第16号 教育実習について (2014.03)
- 第17号 自由参観 (2014.06)
- 第18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09)
- 第19号 こんな誕生会はいかが? (2014.12)
- 第20号 ITと幼児教育 (2015.03)
- 第21号 楽しく運動能力アップ (2015.06)

- 第22号 〔休載〕
- 第23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12) 2019
- 第24号 お話あそび会その1 (発表会の意味)
- 第25号 お話あそび会その2 (取り組み実践)
- 第26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える)
- 第27号 おもちゃのかえっこ (2016.12)
- 第28号 月刊園便り「はらっぱ」 (2017.03)
- 第29号 石ころギャラリー (2017.06)
- 第30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09
- 第31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12
- 第32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03
- 第33号 〔休載〕 (2018.06)
- 第34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09)
- 第35号 働き方改革って難しい (2018.12)
- 第36号 満3歳児保育について (2019.03)
- 第37号 満3歳児保育・その2 (2019.06)
- 第38号 プールができなくなる!? (2019.09)
- 第39号 跳び箱 (2019.12)
- 第40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉 (2020.03)
- 第41号 コロナ休園 (2020.06)

福祉系 対人援助職養成の 現場から^{④①}

西川 友理

「あ、そっか…
今月マガジンの原稿締め切りだ」

と、気付いたのは5月2日、団編集長からの「締め切りのお知らせ」メールを確認した時でした。

新型コロナウイルス（Covid-19）のおかげで、日々、イレギュラーなことが多過ぎて、ずいぶん振り回されている状態です。「このご時世に、このマガジンは、コロナの影響を全く受けずに通常営業できるシステムやん。最強やな…！」と思いつつ文面を読んでいると、メールの最後に「まったくコロナ禍の影響を受けることなく、11年目に突入します。」と書いてあって吹き出してしまいました。

今回はコロナの事を書く方が多そうだな、と思うとそれ以外の事を書きたくなるアマノジャク。しかし、このマガジンは「書いたことがやがて、その時代のその分野の記録になる」という意味もあります。バックナンバーを読んで、あとから気付くことの多さに驚きます。

ならば今回は思いっきりベタに、そして視点をぎゅっと絞って、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う養成校の一教員としての混乱を書こうじゃないですか。きっといつか、見返す時が来るような気がします。

というわけで以下、このところの混乱を、総花的に記します。

どうぞ来年の今頃、笑って読めますよ

うに。

2月中旬

卒業式、入学式どうする問題

「ね、御校ではどうされます？卒業式。」
「うち、やる予定だよ。」
「えっ、やるの？」
「やるの？といわれると、不安になるな…やっぱやめといた方がいいかなあ…。」

「いやいや、やり方次第でしょう」
ある保育士養成校の教員が集まる研修会。参加者全員、マスク着用で、プログラムも短縮版で実施されました。研修の内容はもちろん意味あるものであったのですが、会の前後の雑談は、どの養成校も情報交換に必死。この時期は、さしあたり卒業式をどうするか、という話題で持ち切りでした。

「学長のあいさつを ZOOM を使って小部屋で放送、卒業生は小部屋に分かれて聞くという案が出ててね…」
「えーっ、そこまでやる？」
と、まだ笑いながら話していました。

このころ、半年かけてじっくり企画してきたある全国大会について、開催数日前に延期を決定。なぜか私は今年に限って、2月から3月にかけて、5つもの企画委員や運営委員や実行委員会を掛け持ちしており、それらすべてが延期・中止となりました。それはもちろんショックでしたが、あまり落ち込んでいる時間ありませんでした。というのは、最終的に延期や中止と一言で書いてしまい

ますが、そこにいたるまでの話し合いと逡巡と説得と折衝と…自分の頭で考え、思い切りよく判断することを、いつも以上に行った日々でした。何を中止にして、何を延期にして、何をオンラインにするか。返金はするのか、しないのか。関係者への連絡につぐ連絡、それでもおこる連絡ミス。正直、大変疲れましたが、漠然と、当たり前と考え、感じていたことをしっかり考えるチャンスになりました。

さらにはその連絡調整の中で、新型コロナウイルスの情報共有をするシステムが2つ生まれました。

2月下旬

実習をどうする問題

とある地方の保育者養成校に努める友人から電話がかかってきました。

「実習先の自治体から、来月からの実習を全面中止にしてほしい、という連絡があった！」との悲鳴。

そして各々の学校の情報交換をします。本学は、ちょうど、2月29日で実習が終了予定でした。どの実習先も、とりあえず2月中なら実習を終わらせてくれそうな状態。その次の実習は6月を予定していました。

電話を切って、そうか、もしかしたら6月の実習は出来ないかもしれないな、そうなった場合どうしようかな、そういうことも考えなきゃいけないな、と思っていた矢先のことです。

もうすぐ実習を終える学生から微熱、体調不良との連絡。緊張が走ります。

通常ならば「病院に行って、感染性のものかどうかを診断していただきなさい、診断書を書いてもらってね」と伝えるのですが、果たしてそれでいいのでしょうか。そもそもまず、病院に行っていないのでしょうか。学生本人、学生の保護者、実習先交えて、今後の対応を検討しました。

その結果 37 度 5 分以下の発熱であったため、解熱後、1 週間自宅待機で、実習を再開。何とか無事に実習を終えることが出来ました。

3 月上旬

厚労省から、実習に関する通知が出る

非常勤先の社会福祉士の実習先である高齢者施設に巡回指導訪問。

施設の入り口では検温、体温を記録、記名。手指の洗浄、殺菌、消毒。

同行していた養成校の事務担当の方に「これから実習どうなるんでしょうね」と伺うと、2 月 28 日付で「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」という実習に関する通知が、厚労省から出ている、とのこと。

帰宅後、慌てて調べてみると、確かに、社会福祉士や介護福祉士の実習についてのガイドライン通知が出ています。保育士実習は？幼稚園教諭実習は？すでに出来上がっていた情報交換コミュニティに疑問を投げると、「今日ちょうど保育士実習についても出ましたよ！」という連絡が。

3 月 2 日付け、厚労省発「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」がその通知です。これを見ると「…実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない…」とあります。実習に代わる演習や学内実習とは、どういうものになるのでしょうか。実習にとって代われるような彩り豊かな経験が、学内で出来るのでしょうか。

同時期、卒業式の中止を決定、卒業生に通知。通知後、書類の手続きなどで、学校にちらほらと卒業生が訪れます。

「卒業式しなかったな…。ほら見て、先生。私これ着るつもりだったの。」

皆、試着した羽織袴姿の写真を見せてくれます。そうだね、女の子たちは皆、ちょっと思い切ったおしゃれをしてもいい日だったよね、と胸が痛くなります。衣装レンタル屋さんや、美容院の売り上げの打撃はいかばかりか、と考えます。

3 月中旬

新年度準備に向けて

関西圏のいくつかの養成校と様々に情報交換をする中で、実習にかかわる状況が具体的に見え始めます。2 月～3 月に時期を分散させて実習に行く大学は、2 月実習は可能であったが、3 月は実習ができない、つまり同じ学年で、実習に行けた学生と行けない学生がいる、という状況も生まれているようでした。5 月実習は既に延期という養成校が増えて

きました。いつ頃実習が再開されるかはわかりませんが、少なくともしばらくは中止、延期の方向で話が進んでいます。

気になるのは新年度に2年生になる学生たちです。果たして卒業までにあと3回ある2週間実習をすべてクリアし、資格を取得することが出来るのでしょうか。まだどうすればいいかはわかりませんが、なんとしてでもその環境を整える必要があります。

入学後に実施される健康診断について、京都府医師会が「安全のために、しばらく健康診断は出来ない」との通知をしてきました。6月に実習に行く準備書類として、健康診断書は必ず必要です。結果が出されるまでの期間を考えると、どんなに遅くとも、5月に入るまでには健康診断をしなければなりません。健康診断書がないと、実習に行くことはできません。一大事です。ほかの養成校はどうしているだろうか…と情報を集めました。すると、大きな大学は「学内の医療センターで実施したから問題なし」、小さい大学でも「3月中の入学前に慌てて実施した」などの答えが。皆さん先見の明がおありで…これはちょっと失敗したな、と、頭を抱えます。

24日、文部科学省から「令和2年度における大学等の授業の開始等について」という通知が出されました。三密を避ける事、遠隔授業の実施方法の検討、入学式などの学事のあり方、留学生への配慮、授業料についての考え方等…。この日、学内では、入学式の中止を決定しました、

4月上旬

遠隔授業、教科書販売、実習

……次々と考えることが。

4月2日ソーシャルワーク教育学校連盟（ソ教連。社会福祉士と）が「6月末までの実習を見合わせる」との声明を出しました。社会福祉士、精神保健福祉士の養成校の先生と電話で話すと「とりあえず、実習はなしにしたけど、だから次にどうする、というのは全く考えられてないんだよね…」とのこと。対人援助職養成の実習がある大学は、どこも皆先が読めずに、右往左往する余地もなく、じっと耐えて待っているような状況です。

4月3日、文部科学省から「令和2年度における教育実習の実施に当たっての留意事項について」という、教育実習に関する通知が出されました。いわく、「秋以降に実施することを検討していただきたい」「時間数や機関については弾力的に対応していただきたい」などなど、はっきりと明言は避けるけれども、なんとなく察してください、というような文章。なるほど、これは頭がいいといひうかなんといひうか…弾力的な対応ってなんやねん…と妙に感心してしまいました。いずれにせよ、6月に実施予定であった教育実習（幼稚園実習）もこれで全面的に実施出来ない、と判断しました。秋以降の実習スケジュールで、何とか対応が出来ないか、学内で検討し実習先にも相談します。

4月7日 7都市に緊急事態宣言が発

令。とりあえず4月中頃までの休校は決まりました。

様々な保育士養成校から「休講中の課題として、マスク作成を課しました」との報告が。私たちも、学生に「縫って作らなくていいから。折って作るタイプのマスクをさっと作れるようにしておくこと」と指示しました。

「なんか、みんなでマスクを作ってるなんて。防空ずきんか千人針みたいやね…」と同僚の先生がおっしゃいます。そうか、私たち被災しているのだな、と気が付きます。世界中の、新型コロナウイルスの影響を受けている国々の人が、皆一斉に、多かれ少なかれ、今は被災しているのです。

学生たちに、休講中に勉強できる課題を郵送。しかし、コピー代も郵送代もばかになりません。教科書がないと、授業の実施や課題の指定が難しいですが、テキストを手に入れるだけのために、公共交通機関を使わせ、学校に来させるかどうか…。

また、うちの学校でオンライン授業をするなんて、どこまで実現可能でしょうか。しかし今やほとんどの学生がスマホを持っているはず。何とかしようと思ったら、何とかできるのではないだろうか。

その他諸々、うちのような小さな大学だからこそできる事はたくさんあるはずです。

テキストについて、大手の大学は、大きな書店から直接郵送されてくるとのこと。わが校は規模が小さいので、近所の本屋さんが窓口になってくれています。事務職員がそろって

「配送料、かかりすぎるんやったら、学生一人一人の家に、僕たちがテキストを車で持っていきます！」

と言ってくれます。なんとありがたい…。しかし、それで何かあった時には、感染源として疑われる危険もあります。本屋さんと事務が話し合った結果、本屋さんがまとめて郵送し、代引き手数料を負担してくださるとの事。なんとありがたい…。

みんなの協力のおかげで、教育できる環境が徐々に整っていきます。

大手携帯電話会社三社が、学生の教育通信学習支援としてデータ容量を無償でグレードアップすることを相次いで発表しました。オンライン授業を行う方法も本格的に模索し始めました。

4月中旬

方向性が固まり、具体的な動きへ

フェイスブックの「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」に加入。この時点でグループメンバーは1万人を超えていました（5月23日現在、メンバーは1万9千人を超えています）。TEAMS、ZOOM、Google Classroom、YouTube、Remo、などなど、皆が試行錯誤しつつ、新たなスキルを磨いていく書き込みを見て、焦ります。

4月16日、緊急事態宣言が、全国へ拡大。ゴールデンウィーク明けまでとのこと。いや、どう考えてもゴールデンウィークには収束しそうにないでしょう。腹をくくって、オンライン授業の準備を進

めます。勤務先は Google Classroom のシステムを採用することになりました。慣れないシステムを理解し、教えあい、やっと理解してきたころに「このやり方はマズい」と教えられ、「この方法の方がいいよ」とまた一から覚えなおす、その最中にまた問題が指摘される。教員も職員も必死です。一同、思う存分振り回されています。

文部科学省や厚生労働省の通知を受けて行っていた、実習期間の再設定もなんとなく目鼻立ちが付いてきました。どの実習先も、出来るだけ何とか実習をさせてあげたい、と思ってくださっていると感じます。

実習先とのやりとりの中で、実習が滞ると、新入職員の募集に大きく影響が出る、という相談もされます。確かに、実習に行った学生が「まだ就職先決まっていないうちの試験受けない？」って言われちゃいました」とホクホク顔で返ってくるのがよくあります。1～2回の面接試験のみよりも、10日間の実習を過ごして、お互い様子がわかっているほうがいい、ということで、実習は就職に直結する太いルートの一つになっています。このような各園の新規職員採用のための取り組みが例年通りにはいかず、さらには各地の就職フェア、就職説明会も軒並み中止、延期。新年度に向けての人員確保計画が滞っているようです。

「今はまだ様子をうかがうしかないけれど、いずれ何か具体的な取り組みをしていこう」と、一緒に考えます。

4月下旬

学生の負担をどう減らすか問題

4月22日、学生団体Free!による調査で、コロナの影響のため、大学生13人に1人が退学を検討しているという事が判明したとニュースになりました。本人のアルバイト先が自粛中で収入が見込めなかったり、親御さんの仕事に影響が出てしまったり…。

同調査では、大学にある3分の1のサークルが新入生を獲得できていない、あるいは獲得に苦労している、というデータも発表されました。さらには、大学に入ってきた新たな友人は0人、という学生が2割。この数値は2年～4年も含めているので、新入生だけを見てもっと多そうです(クロス集計の結果は出ていません)。実家から離れて、一人暮らしをしている学生が多い大学は、どのように対応しているのでしょうか。

このころ、明治学院大学が、就学支援として、全学生に5万円したとのニュースが出ました。「学費を返したの？」と思って調べてみると、このお金は奨学金積立金から捻出と発表されていました。学費の一部を返却するのではなく、卒業生や父母から集めた寄附を含めたものが財源であるということ。なるほど……。これから後、各地の大学が様々な学生支援策を打ち出していきます。

授業料、データ容量、通信インフラ、学生のメンタルヘルス、生活費。学生の心と体と生活を、どこまで視野に入れて、どのように支援ができるのか、毎日考え、

話し合う日々です。

4月の終わり頃、やっと Google Classroom の操作にも慣れ、授業の計画も立て直し、なんとかまともに授業を作り始められるようになりました。

その矢先、私のパソコンが大クラッシュ、ブルースクリーンから動かない！

「何なのもう、このタイミングでこの仕打ちは……」と半分泣きながら初期化し、必死で復旧作業にかかります。都合2日かけてなんとか復旧。へとへと。

5月初旬

ゴールデンウィーク突入。

オンライン授業準備、いよいよ大詰め

パソコンに向かって、授業動画の作り方を研究する日々。こんなにPC前に張り付いて、切迫した思いで過ごすゴールデンウィークは初めてです。

やがて、気づいたことがあります。

知識を流すだけの授業は、もともと対面授業でも無意味だと思っていたけれど、遠隔授業となると、いよいよ意味がない。それよりも自分で深く調べる事、物事の意味を理解する事、何度もやって習熟する事、文献を読み込んで思考を巡らせること、自分で調べてたどり着く面白さを、きちんと気づくことが出来る勉強方法を、もっと充実させることが出来るかもしれない。

これはちょっと面白い授業が出来そうだ。と思い始めます。この状況だからできる学びを考えよう、という欲が出てきます。

5月2日、大学生協による全国の大学生への調査結果が発表されました。4月20日～30日の調査の結果、アルバイト収入が減少した学生は4割、何らかの経済的な不安を訴える学生は6割。確実に何らかの支援が必要だと感じます。

5月4日、フレッツ光、docomo、ソフトバンク等々で通信障害が発生。これが授業中に起こったら、と考えると、やはりオンタイムの授業というのはなかなかハードルが高そうです。動画配信の方が、トラブルは少なそう。でも、リアルタイムのやり取りが出来るオンタイム授業はやはり魅力的です。

5月8日、来週から始まるオンライン授業に向けて、オンラインオリエンテーションを実施…のはずが、ちょっとしたトラブルのため、8日に実施することが難しいことが7日に判明。翌9日に急遽日時を変更、学生それぞれに手分けして連絡します。

5月9日、画面上とはいえ、久々に顔を見る学生たちです。基本的な今後のスケジュールと、オンライン授業のルールをつたえます。2年生は久々に顔が見られて嬉しそう。カメラやマイクをONにすることにそれほど抵抗がありません。「お、〇〇や、元気?!」「〇〇ちゃん〜!」というやりとりも見られます。

1年生はなかなかカメラをONにしません。自分の顔が画面に出るのが恥ずかしい様子。

「皆さんも、私たち教職員も、全員オンライン授業はド素人です。教えあいながら、頑張って乗り切りましょう!」

と伝え、オンラインオリエンテーションを終了。学生全員がオンラインの部屋から退出したことを確認し、ふーっとため息をつきます。よし、オンラインで全員の顔を見ることが出来た。なんとかなりそうです。

5月中旬 オンライン授業スタート。

5月11日、いよいよオンライン授業が開始。

1日目、2日目はシステムに乗り切れない学生からの「〇〇ができません」「どうすればいいですか」という質問や注文が毎時間ごとに入りました。学生の親御さんからも何度か連絡が入ります。教職員もどうすれば学生全員をシステムに乗せられるか、必死に対応を考え、試行します。

しかし、一週間もたたないうちに、学生たちは「システムに乗れないままで別の方法でフォローする道を自分で考え、教員に申告する」という方向にシフトしました。その週の最後には「なんとかしてください」「どうしたらいいですか」ではなく「〇〇〇のようにしましたが、××でした。▽▽しておきましたが大丈夫ですか。」という聞き方をする学生が増えました。何かが出来ない環境にいる友達を、自然にクラス内メンバーが助けます。助けられ方も助け方も、上手になっていきます。これと同時進行で、教員もどんどん経験を積んでいきます。

オンタイムの生中継の形式の物（オンライン）、あらかじめ動画を撮影し、そ

れを視聴する形式の物（オンデマンド）、いくつかの指示が出され、その部分を自習する形式の物（課題指定）など、それぞれの授業で先生方が工夫されます。どの授業形式にも一長一短があります。授業内容に合わせて、適宜使い分けます。

またどのような授業形式でも、例年に比して質問が出やすいという事に気づきました。皆の前で声を出したり、手を挙げたりといったことがなく、文章で質問するために（オンラインでも基本的にマイクは使わず、チャット機能というLINEのやり取りのような方法で発言することが出来ます）、質問する事へのハードルが低いのではないかと考えられます。対面授業のように、空気感の共有や表情の確認が出来ないというつらさはありませんが、情報のやり取りの双方向性は、技術的な理由だけでなく、進んでいることを実感します。

5月下旬 出口が見えてきたからこそ、 考えなければいけないこと

5月14日、緊急事態宣言が地域により緩和。ただし、職場のある所はまだ緊急事態宣言が続いています。しかし、なんとなく出口が見えてきた感じです。

対面授業の再開を考えます。教室の配置はどうするか、遠方の学生の通学への配慮をどうするか、ピアノの個人レッスン室の換気はどうするか（窓を開けると音が外に漏れるのです）、駅からのスクールバス内の三密をどう回避するか…。

とりいそぎ、学生の通学方法や対面授

業開始に際しての心配事についてアンケートをとります。これと同時に、共有スペースの椅子机の配置の整備を検討、事務局カウンターにある筆記用具はすべて撤去(学生は絶対自分のペンを持っているはずですから)、全教員分のフェイスシールドの購入手続き…と、ハード面の整備を整えていきます。

5月21日 京都。大阪、兵庫の緊急事態宣言解除。さあ、これから、どう動くかです。

5月24日 これまでの振り返りと、 これからのこと。

ここ数か月、を振り返って思う事。

まず、私達はよく話をしました。相談をしあいました。何度も何度も会議をし、トライ&エラーを繰り返しては、その結果についても何度も話しました。

それから、遠隔授業についての知識がシンプルに増えました。何年分かのFD(ファカルティディベロップメント、教員の能力向上のための取り組み)を、ここ数か月で一気に実施した感じです。そ

れは単純にIT知識が増えたという意味だけでなく、こんな時でも変わらない学びを、むしろこんな時だからこそできる学び方を考えることで、深い理解と面白さにいたる授業の在り方のヒントを日々、見つけられているということです。

そして、顔を見る事や実際に同じ空間を共有する事の意味を強く感じるようになりました。

今後何がどう動いていくのか、まだ先は見えません。おそらく、第二波というものもあるでしょう。うろたえるなといわれても、否が応でも翻弄されると思います。

こんな情勢下で、対人援助職がどんな役割をはたしていくのか。卒業生たちは皆、保育所、幼稚園、福祉施設と、三密この上ない現場で働いています。

世界中が一緒に何かを学んだ経験になりそうな、でも、喉元過ぎればやはり元に戻ってしまいそうな(いや、元に戻ってほしい部分もあるけれど)、それでも「みんなと一緒にこの苦難を経験した」という事が、何か今後の生活の、何かがはじまるタネになるのではないかと思います。

ああ、相談業務

～茜さんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

はじめに

新シリーズを始めるにあたり、私の相談業務の経歴をお伝えしておきたい。スタートは家庭児童相談員であり、養護・養育相談、不登校、非行、障害・発達相談に従事していた。これらの相談は、児童相談所とほぼ同じ内容で、児童相談所と連携が欠かせない内容も多かった。その後、スクールカウンセラーや行政の相談業務を行う傍ら、私設事務所を開設し、子どもに関わることでなく、より幅広い相談にのるようになった。こうした中で、私が実際に行ってきた相談対応を元に、ケースへの対応を何回かに分けて伝えていこうと思う。但し個人情報保護の問題もあるので、全て架空のケースであり、実在の人物とは一切関係ないということをお断りしておく。

以下のケースは私が相談業務を始めて間もないころに扱った。

茜さん家族

茜さんは身体障がい者手帳を持つお母さんである。耳が不自由で、恐らく途中で聴力を失った

と思われ、両耳補聴器を使ってはいるが、発音や聞き取りに違和感はなかった。お子さんを4人生み、育てている。この方と関わることになったのは、お子さんのうちの一人が不登校になったことからである。

茜さんから、長女、美穂ちゃんの不登校の相談が始まったのは、夏休み明けてしばらくたったところである。相談にいらした時は、次男をおんぶ紐でおぶって、疲れた表情だった。美穂ちゃんは夏休み前も時々お腹が痛い、頭が痛いと訴えて、学校を休むことがあったが、まだそれほどでもなく、あまり心配していなかったのだが、夏休み明けから2週間、丸々行けていないというのである。

当時は不登校が中学校を中心に増えている時期で、まだ適応指導教室などは出来ていなかった。

家族について学び始めた私は面談するときに、必ず最初に家族のことをお尋ねすることにしていった。

茜さんは、34歳。目がくりっとして、ショートヘアーの小柄なお母さんで、専業主婦。お仕事は高卒後事務をしたことがあるということだった。手が器用で、裁縫や手芸なども得意だそうで、おんぶ紐も手作りだった。ご両親は健在だが遠方

に住んでいて、お産の時はその都度ご実家に1か月ほど帰ったが、子育てを手伝ってもらうことは難しく、兄弟も兄がいるが、結婚しておらず、手伝いにはならないとのことだった。つまり4人の子育てを一人で頑張るというお母さんである。

ご主人の義男さんは36歳で公務員。この方も小柄な、どちらかというと無口で大人しい方である。義男さんのご両親は他界していて、兄弟はいるものの疎遠とのことだった。

美穂ちゃんは、小学5年生。とても家族思いの優しい子で、勉強は普通で。運動が得意とのこと。先生との関係も悪くなく、仲の良い友達もいるということであった。

長男の健太君は小学3年生。元気のよい、活発なお子さんである。勉強はあまり得意ではなかったがスポーツは得意で、かけっこはいつも一番。運動会ではリレーの選手ということだった。

次女的美紀ちゃんは、幼稚園年中の5歳。発達面も健診等で問題なく、楽しく園に通っていた。

次男の豪君は生後4か月の赤ちゃん。発達面での問題を指摘されたことはなく、順調に母乳で育っていた。

相談が始まる

美穂ちゃんの不登校について、一通りお話を聞いた。5年生と言うのは友達関係が難しくなる時期で、ご多聞に漏れず、仲良しの友達から省かれたり、無視されたりと言うことがあって、少しずつ行きづらくなったと本人は話しているようである。家でどのように関わっているのかと聞いてみると、母親は「あまり無理に行かせようとはしていない。」という。母親自身、耳が不自由なことで、小さいころから沢山いじめにあっていて、学校という場に対しあまり良い印象を持っていないこともあるようだった。学校とは連絡をとっているか、担任からはどのような話があるか、学校と話をしてみてもよいかな等、ある程度お決まりの話をやり取りしてから、母親の表情の冴えなさに、

何か気になることが別にあるのではと感じて、話を更にきいた。

ポツポツと話し始めたのは、母親自身がどれほど嫌な思いをしてきたかということ。周りの人が、母親に対して陰口を言ったり、馬鹿にしたり、ロボットと言ったりするなどである。聴覚障害を持つ方は、周囲の人に対し被害者意識を持つことがあると聞いたことがあったが、半分は事実で半分は過剰反応なのかなと思いつつ話を受け止め、辛かったであろう日々を思いを馳せ、と同時に、そんな中、頑張って高校を出て、仕事もし、そして結婚して4人の子育てを頑張っていることを認め、褒めた。母親と良い関係性を作れなければ、次の面談を持てない。面談の継続が美穂ちゃんや母親支援の第一歩である。母親が自身のことを吐露してくれるのは良い兆候で、何とか、関係性を作ることが出来た。母親が安定することで子どもが安定することも良くある。もしかしたら、美穂ちゃんも母親の安定で変わるかもしれない。そんなことを思っていた。

転機

その後数回の面談を続けていた。子どもの不登校は、簡単に解決する場合もあるが、時間が経ってしまうと中々進まなくなる。母親が焦って登校させようとするとう悪化することも多い。母親は学校に無理に行かせようとはしないので、美穂ちゃんのはのびのびと家で手伝いなどをしていると聞いていた。小さい赤ちゃんの面倒もとても良く見てくれているという。学校に行くことが全てではない。家事や育児を手伝うことで学ぶことも多い。美穂ちゃんの様子を聞いていて、一度会ってみたいから家庭訪問をしても良いかと尋ねると、母親からは構わないとのこと、その後まもなく家庭訪問をさせてもらった。家は、平屋の公営住宅で部屋数は三部屋、家の中は子どもが多い割には物が少なく、片付いていた。初めてお邪魔したこともあり、最初から美穂ちゃんと話せるとは思っ

いなかったが、案の定、私の来訪と同時に美穂ちゃんは家から飛び出していった。学校に行っていないことが、きっと罪悪感に繋がり、抵抗感があったのだろう。そんな時は無理に話そうとはしないので、元々書いてきていたお手紙を母親に渡して、帰ろうとすると、母親が「実は・・・」と話し始めた。最初に家族の話を聞いたときには出てこなかったが、父親がおかしいというのである。

（以下「」は筆者、『』は茜さん）

「え？どんな風におかしいの？」

『怒りっぽくて、怒鳴り散らすし、美穂にも下の子たちにも、何もしていないのに怒鳴ったりする。』

「それは最近始まったの？」

『今年になってから少しずつ増えている。体調も悪いのかもしれないが。』

「体調が悪いって、どんなところが？」

『何か身体が思うように動かないと言ってイライラしている。』

「病院は行ったのかな？」

『まだだと思う。身体が悪かったら公務員は続けられないから、診断されても困るのかも。』

「でも病院に行くよう説得しましょう。どこがどう悪いのかわからないと、お母さんも困るし、子どもたちも困るでしょう？」

『それはそうなんだけど・・・。言ってもきかないから・・・。』

「職場で健康診断があると思うけど、そこで引っかかったりしていないの？」

『去年の健診では引っかからなかったみたい。』

「まだ若いから何かあっても進行が速いということもあるから、一度大きい病院で見てもらった方が良くないかも。」

『そうですね。一度言ってみます。』

というやり取りの後、父親の件はしばらく保留となって、美穂ちゃんのこと集中した。美穂ちゃんは学校の先生との関係も悪くなかった。ので、時折家庭訪問を入れてもらいながら、

少しずつ別室登校をすることもあったが、大きな変化があるということも無く時間が過ぎて行った。父親から怒鳴られることも不登校に影響しているのかと心配していた。

は？

そんなある日、突然母親から電話が来た。『もう何もかも嫌になった。子どもたちと死にます。』と言ってガチャンと電話が切れた。

「え・・・？」私は正直、何を言っているのか一瞬解らなかった。ただ、子どもたちを道ずれに心中すると言っているのだとすぐに気が付き、その時の上司に報告。直ぐに訪問したいと伝えた。上司も心配して一緒に来てくれるとの事、二人で直ぐに駆けつけた。

玄関の戸は固く閉まったままで、ベルを鳴らしても返事がない。「茜さん、河岸です。開けてくれませんか？」と声を何度もかけていたら、やっと来た返事は『話すことはありません。死にます。もういいです。』と取り付く島もない。「そんなこと言わずに、先ず話をしましょう。今まで頑張ってきたじゃないですか、死んじやだめです。」後何を言ったか覚えていないが、兎に角「死なないで、話をしよう、ここを開けて」を繰り返していたと思う。

30分くらい粘ったと思う。その甲斐があったのか、母親が玄関を開けてくれた。まだ表情は暗く、余り人を寄せ付けたくないという雰囲気。ムンムンだったが、へこたれずに玄関に入り込み、話し込んだ。一体何があったのかを聞かせて欲しいと懇願したところ、茜さんが重い口を開いた。

『父親の病気は小脳変性症だった。だんだん身体が動かなくなるそう。病名がわかったのは良いが、治らない病気と言うこともあってますます父親が荒れだした。赤ちゃんを窓から投げたり、物も投げようとした。』

「え？赤ちゃんを投げた？大丈夫だった

の？それいつの話？」

『ちょっと前。夏の終わり位。赤ちゃんは美穂がたまたま外にいてキャッチしてくれた。こんな状況では生きていけない。父親が働けなければ、生活も成り立たない。死んだ方がいい。』
と言うのである。

夏の終わり？随分前の話ではないか。もしかして、病気のことはずっと前に分かっていたのか？今まで伝えてくれなかっただけか？死にたいというのは何か別の意図があつてのことか？など、頭の中を駆け巡った。それに、心中しなくても、離婚して働くとか、子どもがまだ小さいから生活保護を申請するとか、方法はいくらでもあるだろうにと。

真実なのかどうかもわからなかったが、取りあえず、今後のことを一緒に考えながら、子どもが危ないということなら児童相談所に入ってもらって一時保護という方法もある、或いは父親の病状を確認して入院加療という方法もあるのではないかと、職場の上司と相談することも良いのでは、などを上司と一緒に話し、母親になすすべがまだあることを認識してもらった。そして、何があっても心中はいけない、お手伝いできることはするからと説得し、何とか母親も落ち着きを取り戻してもらった。

結 末

その後、結果的に父親は入院、生命保険が満額出ることなどがわかり、母親は落ち着いて行った。元々父親のこうした行動が、美穂ちゃんの不登校にもつながっていたようである。早くにこの話を聞けていたら、もっと早く対処できたが、人は中々最初から本音を出してはくれないものだ。家庭が落ち着いてきたことで、美穂ちゃんも少しずつ学校に戻って行った。

母親は、保険金があるとはいえ、まだ小さい子がいるので、今後のために保険金は貯金するとし、お金を稼ぐことを考えた。元来の器用さ

を生かして小物を作り、雑貨屋で販売してもらうなど、積極的に動き始めた。

まとめ

家族の問題では、家族の中で問題となる人がその症状を出さず、当の本人以外の方が症状を出すことがある。特に子どもは、症状を出しやすい。不登校や非行の子どもの多くが家族の問題を抱えている。家族には借金や夫婦関係、嫁姑問題など様々な問題がある。子どもには関係のない問題であっても、敏感な子どもたちは、家族内の不穏な空気に気づいたり、実際に狭い家の中で繰り広げられる諍いに心を痛めたりしている。

茜さん家族の問題に関わって、最初、母親のいじめ体験などから来る不安定さが、美穂ちゃんに影響しているのではと仮説を立てたりしたが、家族の問題と言うのは、当事者の語る話が全てではないと学んだ。最初の面談で、家族のことをあれこれ尋ねるようにして居たが、もっとしっかり聴くべきであった。特に父親の状況については、十分に聴き取れていなかったと思う。そして、この家族が抱えている本来の問題を探るために、家族の語る物語、語っている人の表情、意図、物語の陰に隠れている別の物語があるのかないのか、聴きとることの難しさを改めて感じた。

子どもや誰かの症状にばかり気を取られていても、真の問題解決には至らない。家族はその歴史の中で様々な絡み方をしてきている。その絡んだ糸をどこから手を付けてほどいて行くか、その手掛かりを正しく見つけられれば、スルスルともつれた糸がほどけていく。しかし、手掛かりを間違えると、もっともつれてしまい、二度とほどけなくなってしまうことさえある。他人の家族に関わるということは、その責任をシッカリと胸に留めておく必要がある。そんなことを学んだ事例であった。

生殖医療と家族援助

～LGBTQ とアライ～

荒木晃子

援助者であること

前号で、「悩みはつきない」と括った筆者は、長年、心理支援の専門職といわれる心理カウンセリングを生業にしている。カウンセリングは対人援助職のひとつであるが、“人のことをどう援助するのか”と問われても、ひと言で語ることが難しい職業でもある。（答えは心理学がご専門の学者にお任せしたい。）職務について今年で 25 年ほどになるが、その間、精神科臨床に始まり、現在も生殖医療の臨床現場、開業カウンセリングルームで多くのクライアントと出会う。悩みを抱えるクライアントに向き合う日々が、いつしか筆者の日常となっている。

心理の実務家とは別に、筆者には研究者という別の側面がある。当事者の心理支援、「家族形成に課題を抱える当事者・カップルの援助を考える研究」に共通のテーマは「家族」である。いずれも当事者の悩み・苦しみ、その意志やニーズの理解から、そこにある課題・問題の解決をクライアントと共に目指している。それは、社会的、法的、心理的、対人関係性における課題・問題であり、その解決は時に容易ではない。一方で、個別の思考・認知・行動の変容から、また対人関係においてはその関係性の変化から、解

決へと向かうことがある。その分岐点に心理カウンセラーの視点や判断が活かされる。心理職、研究者の両側面は、当事者を援助する者として欠かせない要素であり、「語るリスク」を持つ当事者にとって、「語ることの意味」を付加できる二足のわらじと捉えている。

注意すべきこと

心理支援で気をつけなければならないのは、病院臨床で伺った話は、カウンセラーに守秘義務があるため口外できず、また、研究の一環としてヒアリング調査、インタビューにご協力いただいた方々から伺った内容も、ご本人の承諾無しに口外することも、文章にすることもできないことである。ただし、“私が知ったこと”は誰にも伝えることができないけれど、“援助を必要とする人たちがいる”ことを伝えることはできる。「語ることのリスク」に怯えつつ、支援の必要性を訴える当事者にとっての「援助者」である/となるために、“自分はどうあればよいのか”を共に考えることも可能である。ただし、援助者であるためには、まずは当事者を理解することから始めるべきであろう。

当事者が何を語り、何に悩み苦しみ、誰とどういう暮らしをしているのか。誰がどう生計を立て、人生を設計しているのか。パートナーとの関係、原家族との関係、職場や近隣との関係性はどうか、「子どもを持つ/持たない」など家族計画に不具合は生じていないか、など当事者理解のための情報は、対人援助に直結するものばかりであり、同時に、家族援助、家族形成のための支援にも共通する。これらを、問いたただすのではなく、詰問するのではなく、その方の思考と語りに添いつつ、丁重にご提示いただくという姿勢で傾聴することを心がけている。

援助者の多くには、聴く力が備わっている。語ることにリスクを生じさせない“ラポールを築くスキル”を習得している持つ者も少なくない。これらは、セクシュアルマイノリティと称されるLGBTQの支援者（＝アライ）になるための資源となりうる。その資源を活かし、積極的にアライであることを表明することから、セクシュアルマイノリティ当事者の援助が始まることが期待できる。

残念ながら、誰に相談すればよいか、自分たちの存在をどれだけ知っているか、果たして、LGBTQ（あるいはSOGI）の意味を援助職がどれだけ理解しているかを知る当事者は少ない。対して、対人援助に従事する専門職であっても、セクシュアルマイノリティ当事者の理解に、最低限必要な情報を習得している援助者も多くはない。この現状に一石を投じることが、今の筆者にとっての課題となっている。

以前務めた精神科医療施設では、多様な悩み苦しみを抱える多くのクライアントに出会った。（以前、連載のどこかで触れたこともあるが）そこで出会ったあるクライアントの語りが、いま、心理の実務家、そして研究者である筆者の問題意識に結びついていることを、今更ながら懐かしくも不思議に思う。

かつて精神疾患の分類にカテゴリーされていた「性同一障害」という疾患が、現在では「性別違和」という名称に代わり、精神疾患から除外された。国際基準で、精神疾患ではない、とカテゴリーされたのである。援助者は、その前提で当事者と向き合い、支援の必要がある。この情報は、援助者のみならず、医療者にさえも、さらには介護福祉現場にも浸透しているとはいえない国内の現状がある。セクシュアルマイノリティ支援の必要性の周知がない現状では、当然、従来の間違った理解が訂正されることなく、今でも社会一般の常識として定着し続けている。怪我や病で病院を受診しても、障がい・疾病があり福祉サービスが必要であっても、医療・福祉それぞれの現場で、何かしら不自由なおもいをしたり、傷つくことがあるとの声を頻繁に耳にする。当事者をどう理解すればよいのか分からない状態で、援助することの危険性を象徴するエピソードだと感じている。当事者に関心を寄せ、彼らが発信する情報を確実に受け取り、その声に耳を傾けることから理解は始まる。そこが援助のスタート地点なのである。

自戒を込めて



当事者の活動に積極的に関わり、そこに自ら足を運び、アライであることを行動で示す。言葉を交わし、メール Address を交換する。イベント情報を提供していただき、友人知人を伴い参加する。気持ちだけでなく、行動を伴う援助者でありたいと、常日頃思う日々でもある。

次号では、筆者の活動を承知した上で、自らに起きた出来事、困りごと、相談や人間関係・家族関係の悩みや問題・課題を語る当事者から得た学びを資源に、セクシュアルマイノリティの方々の援助者であるため/になるためにどうすればよいのか、また何ができるかを皆さんと共に考えたい。

ドラマセラピーの実践・研究・手法

尾上 明代

前回までは、高齢者施設での実践を詳しく記してきました。高齢者の方々のさまざまな「力」を再発見して、また読者の方々からのフィードバックも励みにしながら楽しく記述することができたことに感謝しています。

さて今号からは、さまざまな目的と対象者への**実践**の様子、**研究**、**手法**を解説する新しい連載を始めたいと思います。連載ではありますが一話完結の形で、そのときどきの興味深い実践体験や、海外の研究などをご紹介しますと思います。

新シリーズ最初の今号では、新型コロナウイルス出現後の自身の実践について報告します。

1 ものごとの多側面を見る

—新型コロナウイルスを「楽観視」することと「危険」を認知すること—

どんなもの、どんなことにも表と裏、プラスとマイナス等の両面があるが、もちろんそのような二極だけではなく、常に「多」側面がある。ドラマのセッションで、ひと、もの、出来事などを探索するとき、私は、必ずそれらを多面的に見ていくようにしている。

ソシオドラマの授業

今年2月初め、立命館大学の大学院でソシオドラマの集中講義をした。ちょうど新型コロナが流行り始め、武漢で罹患した人が自分の家に閉じ込められている映像がテレビ等で流れて話題になったり、日本でもマスクが品薄になりかけたときだった。ドラマでは、当然、新型肺炎のテーマも扱った。まだ、クルーズ船のニュースもなく、国内の感染もほとんど報告されていなかったときだったが、院生たちが希望した設定は日本の病院で、結果的にその後の社会状況を先取りしたようなかたちになった。罹患の可能性のある人や、他の重い病気で待合室にいる患者たち、看護師など、その場にいる人たちが、それぞれの立場で、感じ方や言動がまるで違うことを皆で演じて「体感」し、すべての立場を深く理解し合った。大変リアルに医療現場の大変さ、感染者への差別や感染への恐怖などを描くことができた。また履修生には本物の医療従事者が何人かいて、実際の患者へのケアや配慮を、ドラマという形の中で、鮮やかに見せていただくこともできた。

別の日には、さらに視点を拡大させて、「コロナウィルス」と人間とのドラマをやってみた。東日本大震災のあとや、北海道胆振地震のあとにも「激しく揺れた地球」と会話したり「和解」したドラマを多くのクライアントたちと創ったので、それらの体験も思い出しながら、人間以外の生物や環境などもドラマの役を担い、人間を超えるパースペクティブが体験できるという、ドラマセラピーが創り出す可能性のいくつかを授業で伝えたかったのだ。

ウィルス役の人たちからは、「なって」みて初めて感じることに、言いたいことが多く出てきた。「人間をいじめたいんじゃないよ、自分の仲間を増やしたいだけなんだけど・・・」というウィルス君もいた。人間側としては、強い意志で「絶対負けない！」とウィルスと戦う役者や、やはりウィルスとの「和解」をした役者もあり、文字通り多側面、多視点を体験してもらった。

オンラインでのセラピーの「実践」

その後、オンラインでの活動があつという間に世界中に広がり、各種セラピーも ZOOM 等で提供されるという状況になった。国内外で安易に行われている様子も見受けられる。特に身体性があるセラピーやグループで複数参加者と実施するセラピーは、オンラインでの功罪、またその場をきちんとホールドし、クライアントを心身の危険から守れるか等の観点から、実施にあたっては熟慮が必要である。

そのようなセラピー分野は、対面で実際の中を共有し交流してこそ、価値ある活動とも言えるが、一方では、何もできないよりも、対策を練りつつ現代の便利なツールを使うことにチャレンジするということも大切である。必要に迫られてというきっかけがあったにせよ、結婚式も生の演劇鑑賞も、ほとんど何もかもオンラインでやるような状況に時代が急変した。セラピーにおいても、人数や、初対面か既知のクライアントか等を考慮して内容を慎重に選択していけば、可能性は広がると思う。

4月に緊急事態宣言が発令された直後から、それまで継続的に関わってきたある施設のグループ（10人程度）と ZOOM でつなぎ、定期的にセッションを実施している。その施設では、可能な限り普段の生活を保って、メンバーたちの孤立を防ぐ必要があるため、クライアントたちは、感染予防に最大の注意を払いながら現場に一緒にいる。つまり施設の PC と私の自宅の PC をつないで実施するため、1人ずつが別々の PC 画面で参加するという形態ではない。相手と一緒におり、ドラマに慣れた助手のスタッフたちも同じ場所にいるので、安心して行うことができている。

コロナの流行に対して不安がまったくない人はいないだろうが、特に強い心配や不安は心身を疲弊させ免疫力を弱めるので、メンバーたちが（コロナ以前のセッションと同じように）リラックスして笑える時間を作ることがとても大事である。そのために、深い呼吸がたくさんできるワークや、さまざまな感情を表現して共有するワーク、どんな困った状況からでも良い側面を即興で見つけるゲームなど、いつも以上に工夫して実施してきた。今回は、その中のあるドラマワークを紹介したい。

疫病神：コロナバージョン

セッションでは、ときどきおとぎ話を使うことがあるが、私は「今やってみるべきは『疫病神』だ!」と思った。そこで、参加者の近親者で新型コロナウイルスに罹った方がいないことを確かめてから、次のように伝えた。「コロナウィルスは、当然世の中で大変な悪者になっているけれど、今日のドラマでは、今起きていることに対して全然違う視点から見る目的で『コロナ』になってみましょう!」と。そして、物語を創り変えて脚色した「疫病コロナ神」を皆に語った。

* * * *

むかしむかし、与平さんというまじめな漁師がいました。彼は、夜遅くにな

っても、一生懸命に働いていました。ある夜、いつものように真っ暗な中で魚を獲っていると、沖の方からがやがやという声とともに、大きな船がこちらに近づいてくる気配がしました。耳を澄ますと、その船の乗組員たちがざわついており、どうやら船を接岸できずにどうしよう、どうしよう困っている様子でした。親切な与平さんは、「おーい、こっちだぞー！」と彼らを岸に導き、助けてあげました。真っ暗だったので、どんな人たちか最初はよく見えなかったのですが、岸に上がってきた乗組員をよく見ると、どうも「人」ではないような・・妖怪のような生き物（？）だったのです！するとその中のチーフが、与平さんに挨拶をしました。

「ご親切に助けていただきありがとうございます。わたしたちは、コロナウィルスと申します。ここの村全体に広がって、仲間を増やすというミッションをもって、皆さんのところにやってきました。」

それを聞いた与平さんは「やばい、ウィルスを助けてしまったのか！」と愕然としたのですが、時すでに遅しでありました。「これから私たちが、村人のひとりひとりに乗り移り、広まっていく予定なんです、実はそのとき、人によっては、重い病気になったり、肺が苦しくなったりすることもあるんですよ。それで、与平さんには、助けていただいたお礼に、あなただけには、病気にならない方法をお教えします。私たちは、これから手分けして明け方に一軒一軒の家に入っていく予定です。『コケコッコー！』と雄鶏が鳴くとき、与平さん、あなたは『わっはっはっはっはー！』と笑ってください。実は、笑い声が聞こえた家には私たちは入れないことになっています。」

与平さんは、心の中で「これは良いことを聞いた！」と膝を打ち、夜中の暗いうちに、これこれしかじか、と村中に伝えて回りました。ほどなく「コケコッコー」の時間になり、コロナたちが気合を入れて一軒一軒の家に出向いていくと、何とどの家からも「わーっはっはっはっはー！」という笑い声が聞こえてくるではありませんか。あっちからも、こっちからも。「入れない！仕方ない、ここでは仕事はできないな・・」とコロナたちは海の向こう退散していききました。

その後、その村人たちは、これをきっかけによく笑うようになり、皆はとても健康に暮らしました。

* * * *

語りが終わると、参加者にはコロナチームと村人チームに分かれてもらい、コロナのチーフになりたい人や与平さんになりたい人を募ってドラマ化した。

まずチーフが、子分たちに「これから日本の村に行って、わたしたちはあそ

ここに根付くぞ、おーっ！」と団結式を行い、船に乗り込むところからやってもらった。アドリブでどんな家に行きたいか話してもらうと、「独り暮らしのところはかわいそうだからやめておこう」「お金持ちの家に行きたいなー」などコロナのいろんな考えが出て来て印象的だった。皆はこれまでのセッションで培ったアドリブ力を駆使し、コロナチームは手分けして家々に入る手はずを整えたり、村人チームも、有益な情報を分かち合って相談をした。

ついにそのときが来て、私が「コケコッコー！」と叫ぶと、ZOOM 画面を通して向こうから、はじけるような村人たちの笑い声がずーっと続いた。コロナ軍団も負けじと笑い始めた。笑い声は、誰からともなく「コロコロコロコロ！」になっている。「あーっはっはっはっ！」「コロコロ、コロコロコロッ！」どちらのチームもドラマを楽しんでいるのが伝わってきた。

そしてコロナたちは、笑いながら去って行った。

このドラマを実施したのは緊急事態宣言直後で、参加者たちは、セッション前にさまざまな不安を表明していた。どのようなものごとも、違う視点から見ってもらうことは、日ごろのセッションでも実施してきたが、「笑いは免疫機能を高めることもあり、こういうときこそいつも大切にしているプレイフルネスを発揮してほしいくてやってもらった」ということを参加者に再度伝えた。メンバーたちからは、「やるべき対策をやった上でこのような安心感を得ることは大事」「笑えて良かった、コロナは可愛かった」「今一番敵視されているコロナになる体験はなかなかない」「ほんとにコロコロどこかに行ってくれればいいな」「コロコロ笑って楽しかった」「笑いとはせて良かった」「実際に動いて、演じて、そのイメージをもって帰るのは大事」などのコメントがあり、心身が非常にリラックスできた様子だった。

このように、想像力と創造力を使って、現状を心配しすぎずに楽観することは、一つの重要なことである。

危険の認知

だが、その「危険性」の認知に関しては、楽観だけではいけないのはあまりにも当然である。このようなときに私が思い起こすのは、フロム＝ライヒマン（ユダヤ人の精神科医）のクライアントのエピソードだ。

第二次世界大戦前のヨーロッパでのこと。強い不安を持ったあるユダヤ人の若い女性が、フロム＝ライヒマンの精神分析を受け、3年かかって「恐れ」を克服し、セラピーはみごと成功した。フロム＝ライヒマンは、その後すぐに米国

に逃れたのだが、そのクライアントは、恐怖がなくなったので逃げずにいたため、セラピー終了の2, 3週間後にナチスに捉えられ、強制収容所に送られてしまったのである。

このできごとは、危険というものの認識が、命を守る上で大切であり、そのことを心理療法家は自覚しておかなければならない、という教訓となった。まさに、新型コロナウイルスにも当てはまる。

* * * * *

新型コロナウイルスの影響で、さまざまな苦難の状況が生じた方々が世界中に多くいる中、それによって、(真偽はわからないが)自殺者が減ったとか、以前より健康になったと発言している方々がいるなど、良い結果に結びつく事実も多くある。どのようなできごとに際しても、その多面性を広く認識することは言うまでもなく必要である。

ドラマでは、複数の他者とともに、架空の内容も含めて、身体と感情を使って探索するところに意義があると考えます。上記の参加者の1人がまさに「実際に動いて、演じて、そのイメージをもって帰るのは大事」と述べていたとおりである。

新型コロナウイルスの状況を多面的・動的にとらえることは、コロナウィルスとの関係も、そして、それに対応する人間社会の側も、楽観や恐怖の両極に分断されないことにつながるだろうし、そう願いたい。今後も、ときには人間の視点を超えることで、今の人間社会だけの利害にこだわらない視点も提供していきたい。

対人援助学&心理学の縦横無尽（28）

新型コロナウイルスの拡散とそれに関するリスク:オンライン調査の結果

サトウタツヤ・上村晃弘・卒田卓也・田中千尋・土元哲平・伴野崇生・
宮下太陽・横山直子・木戸彩恵

国際的共同研究の一環として新型コロナウイルスの拡散とそれに関するリスクに関する調査を2020年4月に行った。ここでは速報的に公開しておきたい。なお、データ全体を示しているものではないが、データに立脚してストーリーラインを提示してある。

オンライン調査の結果:新型コロナウイルスの拡散とそれに関するリスク

参加大学(国)

ジュスティーノ・フォルトゥナート大学(イタリア)	シドニー大学(オーストラリア)
オスロ大学(ノルウェー)	エクス＝マルセイユ大学(フランス)
サレルノ大学(イタリア)	ジークムント・フロイト私立大学(オーストリア)
バイーア連邦大学(ブラジル)	ルクセンブルク大学(ルクセンブルク)
タリン大学(エストニア)	華東師範大学(中国)
立命館大学(日本)	ガジャ・マダ大学(インドネシア)

日本の調査は立命館大学総合心理学部サトウタツヤと人間科学研究科(文化心理学ゼミ)大学院生が担当。

方法 2020年4月1日～16日にSNS(FB等)で拡散。

参加者数:267名(海外居住者も含む)。

参加者の特徴は以下の通り;(20-65才の「社会的中心層」が回答を寄せたと言える)

居住地

特定警戒都道府県(13=北海道・東京・茨城・埼玉・千葉・神奈川・石川・岐阜・愛知・京都・大阪・兵庫・福岡)の者が84%(うち 首都圏 48%、中部圏 5%、関西圏 25%)

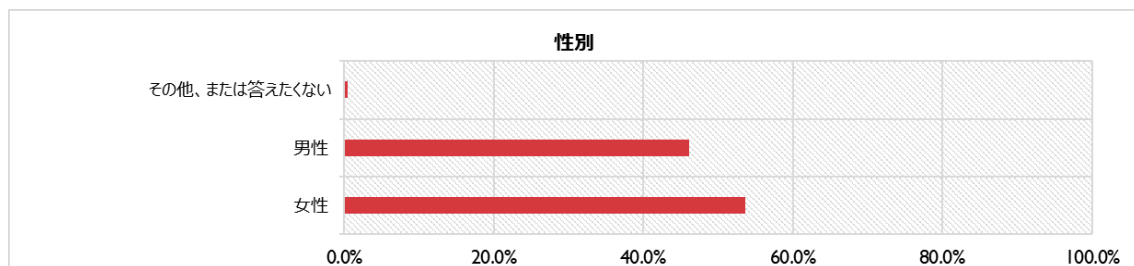
学歴

学歴については、大卒:高卒が約 10:1 であった。

性別

性別

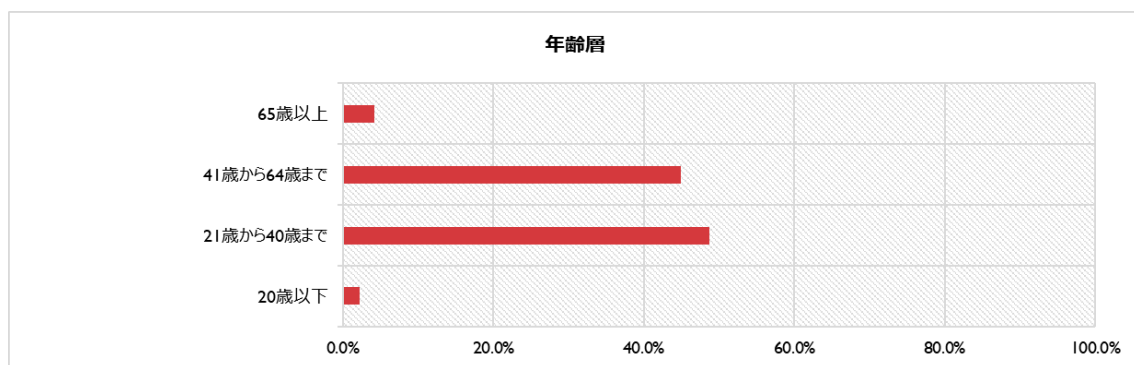
	度数	パーセント
女性	143	53.6%
男性	123	46.1%
その他、または答えたくない	1	0.4%
合計	267	100.0%



年齢層

年齢層

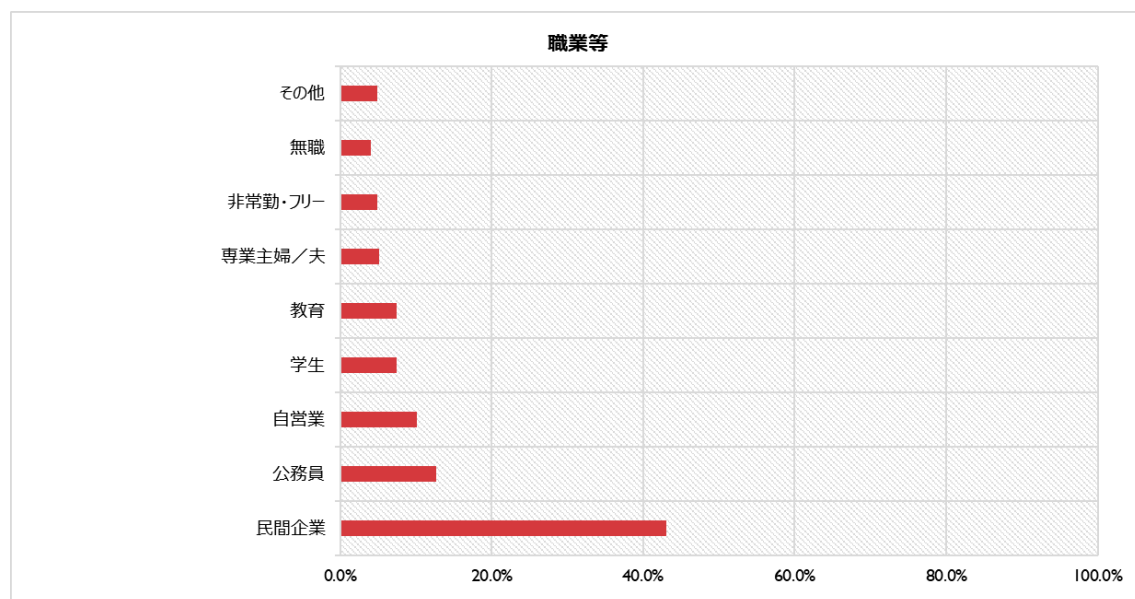
縦 (項目) 軸	度数	パーセント
20歳以下	6	2.2%
21歳から40歳まで	130	48.7%
41歳から64歳まで	120	44.9%
65歳以上	11	4.1%
合計	267	100.0%



職業等

職業等

	度数	パーセント
民間企業	115	43.1%
公務員	34	12.7%
自営業	27	10.1%
学生	20	7.5%
教育	20	7.5%
専業主婦／夫	14	5.2%
非常勤・フリー	13	4.9%
無職	11	4.1%
その他	13	4.9%
合計	267	100.0%



回答項目

情報取得の方法、新型コロナウイルス感染への態度、将来の見通しなど。量的調査の他、質的調査も行った。

回答方法

量的調査：各項目に対して、「あてはまる～あてはまらない」の5件法を用いた。

質的調査：「新型コロナウイルスはA*****、しかし、B*****」という文を作ることを依頼した。Aの部分
は、今の不確定な状況についての評価であり、Bの部分は不確定なりの見通しである。

分析結果のストーリー化

量的調査については、5件法を3件法(はい、わからない、いいえ)に再コード化した。

全体の度数分布ならびに、性別・年齢別の比較を行った(結果的に性・年齢による違いはあまりなかった)。

質的調査についてはKJ法に準拠してカテゴリを生成してAとBの関係を見た。

量的調査からわかったことから4月上旬におけるストーリーラインを描くと

今回の回答者である20-65才の大卒・「社会的中心層」は、

現在の状況は非常に厳しく、長期的な影響があると見ている。経済に関しては地域・国内・国際、全てに大きな影響があると懸念している。(自分が受け取る)発信されている情報は不明確で分かりにくいと感じているが、自分たちなりに信憑性をチェックしている。利用されるのはSNSやインターネット等およびおそらくそれらを通じた公的情報で、新聞はさほど利用されていない。

政治も科学も宗教もあてにならないしあてにしていないが、あえて言えば(医療を含む)科学技術には信頼しており、その進歩により治療法が見いださされるという期待がある。これまでに提案された予防ガイドライン等は遅かったし不十分だと感じているが、一応従うことで個人として予防を実践している。一部では生活必需品の買いだめも見られる。

今は数日先のことも不明確で不安である。経済への悪影響も懸念しているが、新しい方法で人とコミュニケーションをとるなど、工夫をしている。

社会制度(政治・科学・宗教)を信用できないのではあるが、科学に対しては治療の開発などで期待を寄せている。したがって世の中(世界)に対する態度は不信というよりは「信」であり、だからこそ、個人(人類の一員)のような感じで行動をしていくことを重視し、そのうち元通りになるという期待と見通しをもっている。

なお、上記の結果について男女差や年代差はほとんどない。学歴については大卒:高卒が10:1のデータであり学歴による比較は難しいが一定の傾向はある(聞きたい方はご質問ください)。

→

質的調査を見た上(分析したのは一部の質問のみ)で上記の結果に付け加えるとしたら

感染症は自然現象であり薬の開発など時間が来れば克服できるという期待のもと、親密圏や世間というところの信頼を頼りに、個人でできることをやっている。感染症の歴史もふまえて、今回の試練が社会が良い方向へ変わるきっかけになる可能性もあると考えている。

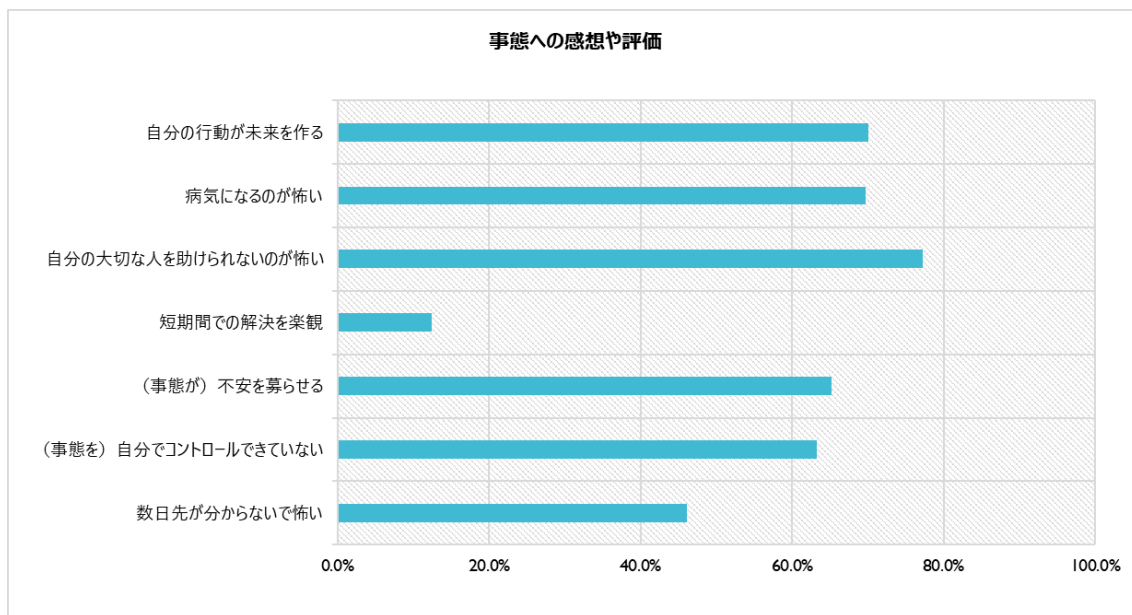
次ページ以降、主なデータ

%の数値は、当該項目に対して「あてはまる・ややあてはまる」とした者の割合である。

事態への感想や評価

事態への感想や評価

	「はい」の度数	パーセント
数日先が分からないで怖い	123	46.1%
(事態を)自分でコントロールできていない	169	63.3%
(事態が)不安を募らせる	174	65.2%
短期間での解決を楽観	33	12.4%
自分の大切な人を助けられないのが怖い	206	77.2%
病気になるのが怖い	186	69.7%
自分の行動が未来を作る	187	70.0%



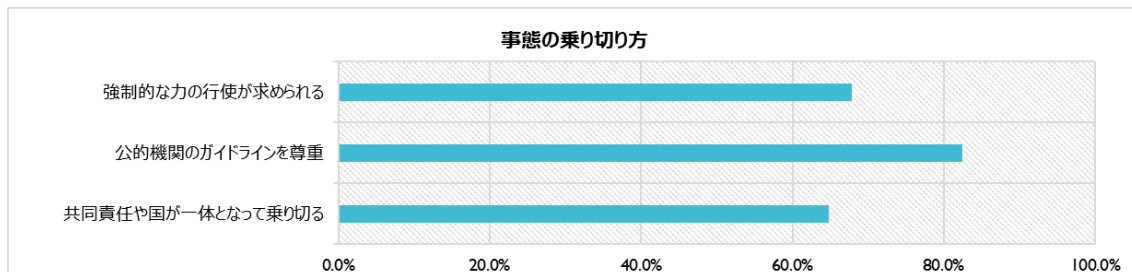
現状の評価:

状況は自分のコントロールをこえており(60%)不安である(60%)、そして病気になるのが怖い(70%)
楽観している者は少ない(10%)。しかし、自分たちの行動で未来を変えられると思っている(70%)

事態の乗り切り方

事態の乗り切り方

	「はい」の度数	パーセント
共同責任や国が一体となって乗り切る	173	64.8%
公的機関のガイドラインを尊重	220	82.4%
強制的な力の行使が求められる	181	67.8%



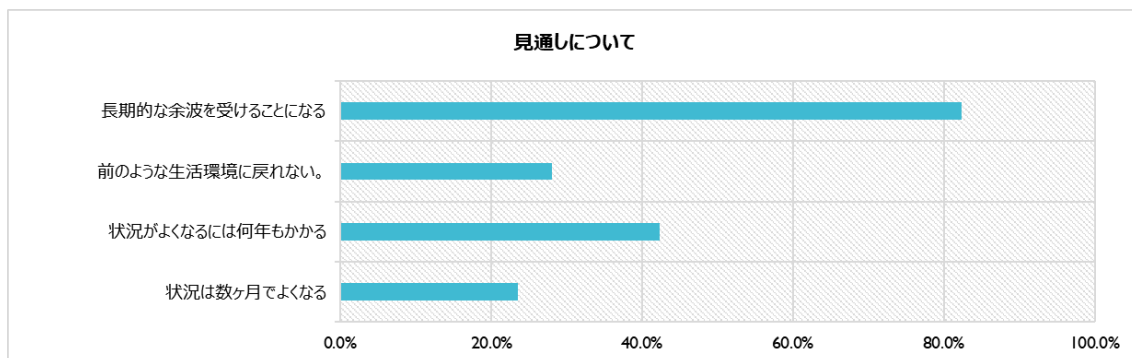
ガイドラインを尊重すべきとする者が多く(80%)、強制的な力の行使についても(70%)が容認傾向。しかし、個人が努力して乗り切るべきだという考えが最も多い(90%)。

→主体的な行動が必要という意識が強い。

見通しについて

見通しについて

	「はい」の度数	パーセント
状況は数ヶ月でよくなる	63	23.6%
状況がよくなるには何年もかかる	113	42.3%
前のような生活環境に戻れない。	75	28.1%
長期的な余波を受けることになる	220	82.4%

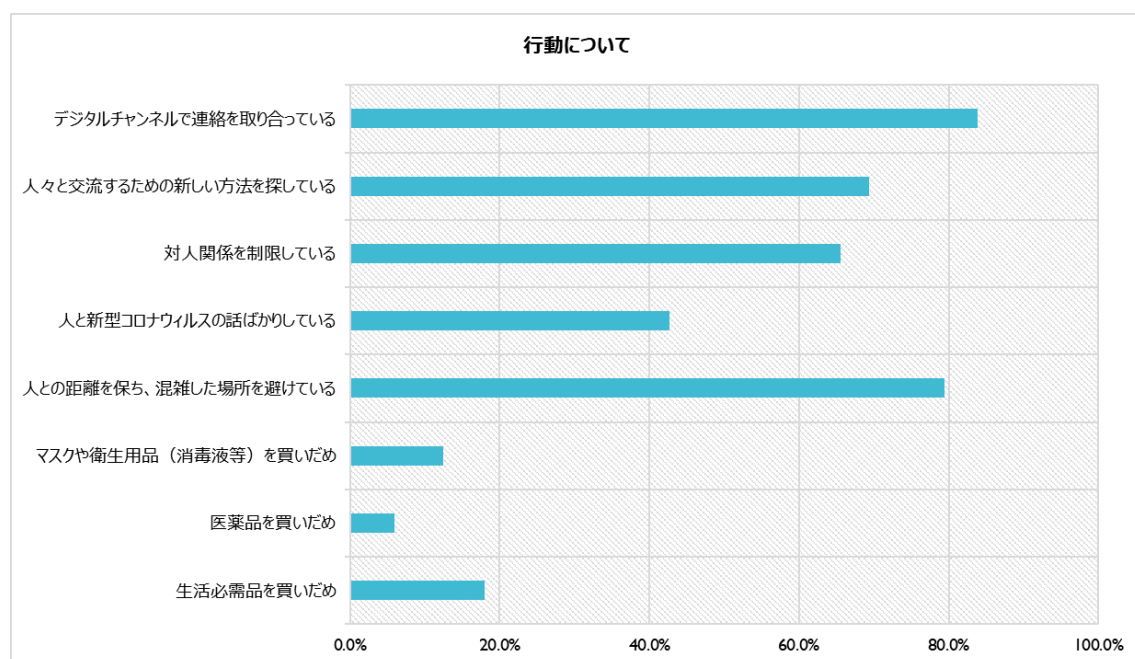


状況は数ヶ月で良くなるとは思っておらず、長期的な余波をうけると考える(80%)が、前のような生活に戻れないと思っている人は少ない(30%)

行動について

行動について

	「はい」の度数	パーセント
生活必需品を買いだめ	48	18.0%
医薬品を買いだめ	16	6.0%
マスクや衛生用品(消毒液等)を買いだめ	33	12.4%
人との距離を保ち、混雑した場所を避けている	212	79.4%
人と新型コロナウイルスの話ばかりしている	114	42.7%
対人関係を制限している	175	65.5%
人々と交流するための新しい方法を探している	185	69.3%
デジタルチャンネルで連絡を取り合っている	224	83.9%



買いだめに関しては、マスク・衛生用品で 10%、生活必需品で 20%の人が日頃よりストックを多くしている。対人関係を制限し(80%)、混雑をさせている(70%)が、新しい方法を探し(70%)、デジタルチャンネルを利用している(80%)。しかし話題は新型コロナウイルスのことが多い(40%)

→

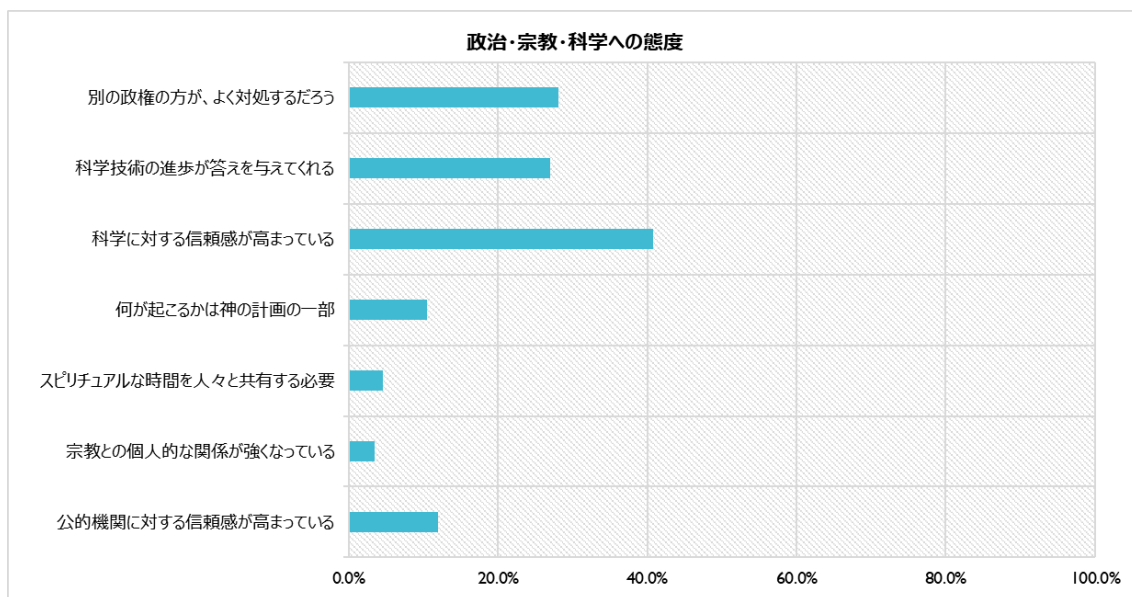
いわゆるコロナ疲れが心配

買いだめ(確保パニックになる可能性)もある程度は存在した。

政治・宗教・科学への態度

政治・宗教・科学への態度

	「はい」の度数	パーセント
公的機関に対する信頼感が高まっている	32	12.0%
宗教との個人的な関係が強くなっている	9	3.4%
スピリチュアルな時間を人々と共有する必要	12	4.5%
何が起ころかは神の計画の一部	28	10.5%
科学に対する信頼感が高まっている	109	40.8%
科学技術の進歩が答えを与えてくれる	72	27.0%
別の政権の方が、よく対処するだろう	75	28.1%



政治や公的機関は信頼できていないが、かといって、野党が信頼できるわけではない。

宗教に時間を使うわけではないが、科学技術も信用できるわけではない。

科学技術に関しても過半数には達していないという意味では信頼しているわけではないが、他に比べれば信頼できるという見方もできる。

→

何も信じられない状況でどうする？ 個人でやるしかないという覚悟？諦め？がある。

科学を信じられる人は、そこに依拠しながら個人でやるしかないという覚悟？諦め？がある。

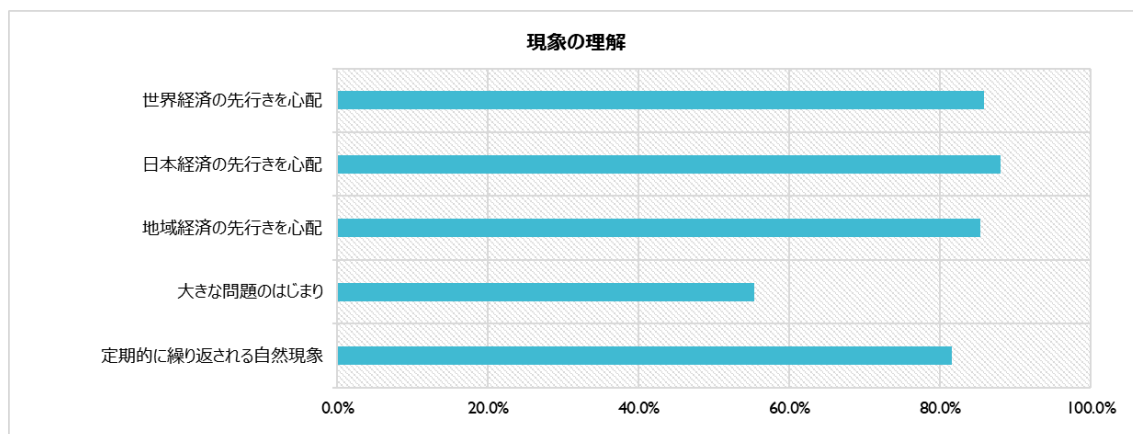
なお、日本の安倍政権だけが「コロナ危機で支持率低下」という状況もある。

<https://president.jp/articles/-/34684>

現象の理解

現象の理解

	「はい」の度数	パーセント
定期的に繰り返される自然現象	218	81.6%
大きな問題のはじまり	148	55.4%
地域経済の先行きを心配	228	85.4%
日本経済の先行きを心配	235	88.0%
世界経済の先行きを心配	229	85.8%

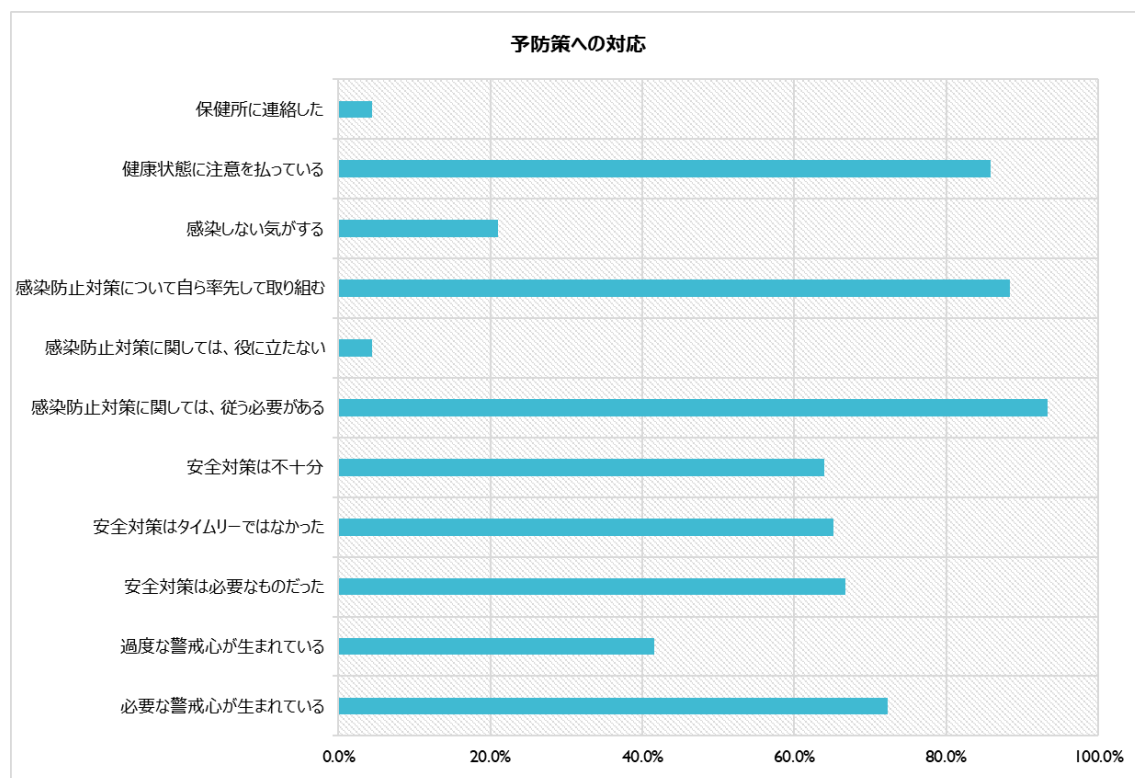


新型コロナウイルスの感染症は自然現象とする者が 80%、経済の先行きについては、地域・日本・世界、いずれも 90%が心配している。

予防策への対応

予防策への対応

	「はい」の度数	パーセント
必要な警戒心が生まれている	193	72.3%
過度な警戒心が生まれている	111	41.6%
安全対策は必要なものだった	178	66.7%
安全対策はタイムリーではなかった	174	65.2%
安全対策は不十分	171	64.0%
感染防止対策に関しては、従う必要がある	249	93.3%
感染防止対策に関しては、役に立たない	12	4.5%
感染防止対策について自ら率先して取り組む	236	88.4%
感染しない気がする	56	21.0%
健康状態に注意を払っている	229	85.8%
保健所に連絡した	12	4.5%

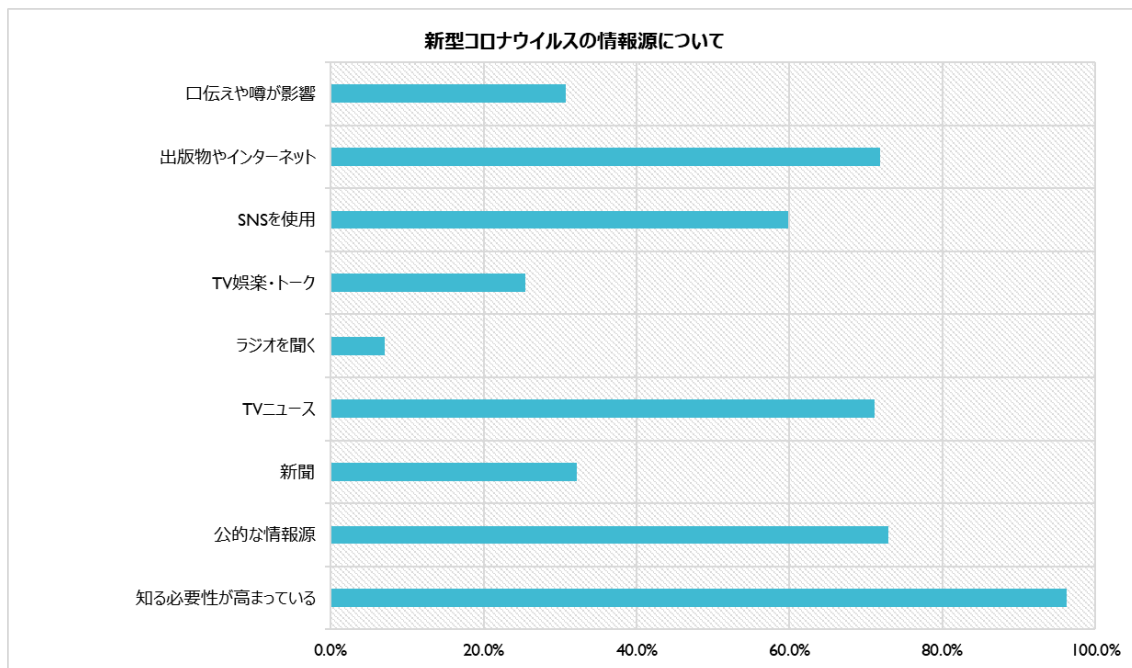


安全対策に従う必要があると思うが(90%)、不十分であり(60%)、タイムリーではなかった(70%)。必要な警戒心があり(70%)、自ら率先して防止策に取り組む(90%)。自分が感染しないとは思わず(80%)、健康状態に注意を払っている(90%)。

新型コロナウイルスの情報源について

新型コロナウイルスの情報源について

	「はい」の度数	パーセント
知る必要性が高まっている	257	96.3%
公的な情報源	195	73.0%
新聞	86	32.2%
TVニュース	190	71.2%
ラジオを聞く	19	7.1%
TV娯楽・トーク	68	25.5%
SNSを使用	160	59.9%
出版物やインターネット	192	71.9%
口伝えや噂が影響	82	30.7%

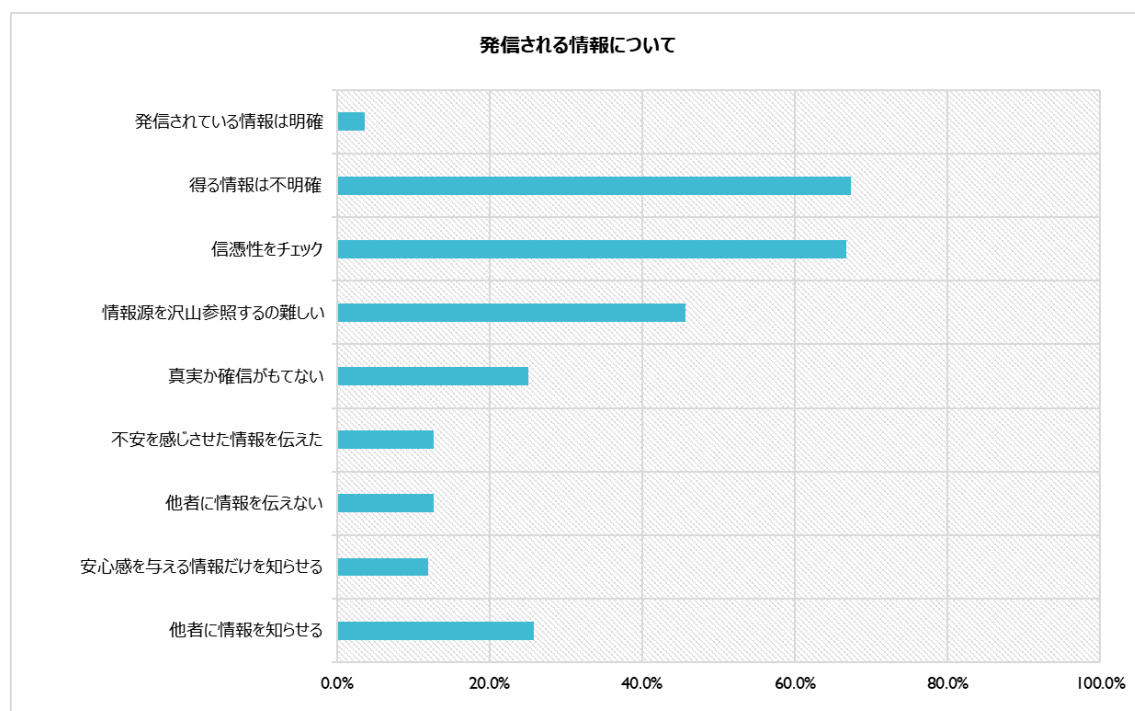


新型コロナウイルスについて知る必要があるとするのはほぼ全員であり、TV ニュース、省庁の情報、出版物・インターネットを参照し(70%)、SNS を 60%が利用している。一方で、新聞は 30%で TV の情報娯楽番組と変わらない。ラジオは 10%にとどまる。口伝えや噂が影響しているとする者も 30%いる。

発信される情報について

発信される情報について

	「はい」の度数	パーセント
他者に情報を知らせる	69	25.8%
安心感を与える情報だけを知らせる	32	12.0%
他者に情報を伝えない	34	12.7%
不安を感じさせた情報を伝えた	34	12.7%
真実か確信がもてない	67	25.1%
情報源を沢山参照するの難しい	122	45.7%
信憑性をチェック	178	66.7%
得る情報は不明確	180	67.4%
発信されている情報は明確	10	3.7%



発信されている情報が明確と思っている者はほぼおらず（5%未満）、自身が得る情報は不明確だと思っており（70%）、情報源をたくさん参照するのは難しいが（50%）、信憑性はチェックしており（70%）、真実なのか確信を持っていない人は多くない（30%）。他者に情報を伝える人は少ないが（30%）、全く伝えないとするものが多いわけでもない（10%）。安心感のある情報を伝える者、自分が不安になったものを伝える者、いずれも少ないとはいえ10%ほど存在する。

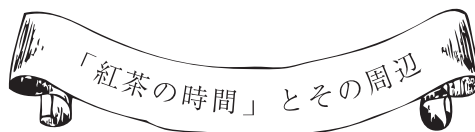
この研究は立命館大学文学研究科・人間科学研究科の新旧大学院生によって翻訳され実行されたものである。

以上、質問は立命館大学総合心理学部サトウタツヤ

（satot@lt.ritsumei.ac.jp もしくは satotster@gmail.com）

をお願いします。

きもちは、 言葉を さがしている



第40話

水野 スウ

今年の、ピースウォーク金沢2020のこと

9.11の同時多発テロをきっかけにはじまった金沢の市民アクション、「ピースウォーク金沢」。前号マガジンには、その20年の歩みをふりかえって「ピースウォーク金沢ものがたり」という文章を書き、その最後に、今年は「グローバル気候マーチ金沢」という新しいグループ、気候危機を自分ごととして活動しはじめた子育て世代の人たちとコラボしながらピースウォークします、と記しました。

ところがそこへ、新型コロナウイルス！ 2月末、安倍首相が突然、大きなイベントの自粛要請、続いて全国一斉休校の要請を発表したあたりから、コロナをめぐる社会の空気がどんどん変化していき、金沢でもマスク姿が目立つようになってきました。こんな状況で、はたして今年、数百人で集まってのピースウォークができるだろうか、日も近づいているし、もう延期しかないのじゃないか。実行委員会にたくさんの異なる意見が出される中、何度も話し合

いを重ねて、その結果、私たちは予定通りの日の3月20日、いつもとはちがうかたちのピースウォークを実現させました。

前号はピースウォーク金沢のこれまでを、今回は、今年のウォークがどういう経過を経てようになったのか、記録の意味もこめて書いてみようと思います。

「延期はゼロと同じ」

3月5日、第8回実行委員会。メインの議題はもちろん、今年のウォークをどうするか、です。まず最初に、その日参加できないメンバーたちが、その日までに委員会で共有しているFacebookのグループページに書き込んだ意見をすべて読み上げてから、そこにいる一人ひとりが順に自分の考えを言葉にしていきました。延期を希望、延期した方がいい、の声が圧倒的に多い中で、今だからこそ歩こう、という声もあります。不思議なことに、中止、という単語は誰からも出ません。

こういう時、手っとり早く多数決で決めないところが、いかにもピースウォークらしいのです。平ら

に話しながら対話して、よりよい方向をさぐっていかうとする。ピースウォークを今年するかしないか、いずれ結論は出さなきゃならないけど、今日はまだ、悩んで考えて一人ひとりが言葉を発していく日だ。話し合いにかかる時間や手間ひまを、めんどくさくても省略しない。それが長い間に培われたピースウォーク金沢の、おおげさにいえば伝統だからです。

私はといえば、このご時世だからまずいでしょ、って理由でやめるのも、萎縮と忖度からの自粛、という3つの「く」でやめるのもいやだなあ。とはいえ、不安なきもちで歩く人がいるとしたらそれはピースウォークが目指す、本来のピースではなくなるし、何より、ウォークに行く？ 行かない？ と訊くことでピースウォークを踏み絵にする、なんてことは決してしたくない。Facebookのグループページに寄せられた意見、そしてこの場で聞いた意見、総合すれば延期の方が多いし、私自身も今年は延期するしかないかなあ、という気持ちでいたのです。

意見がほぼ出つくしたころ、今年から実行委員に加わった「グローバル気候マーチ」代表のKさんが、こう発言しました。

「自分にとって、延期はゼロと同じなんです。3月20日にまったく何もしないのは、中止するのと同じ意味。気候危機は今年が正念場って言われてます。大きなマーチは延期でも、たとえば小マーチとか、街を歩くのが不安な人はおうちから発信するとか、離れていても参加できる、そんな方法を探りたい。そして自分は、少人数であっても歩きたいと思っています」

その言葉を聞いた時、延期以外ないと思い込んでいた私の気持ちが、ゆらり、動きました（きっと他にもそういう人、いたと思う）。そうか、実際のウォークに参加できなくても、違う方法で参加する、という手が今はあるんだ。コロナが気がかりだから大勢では集まれない、それを逆手にとって知恵をしばればいいってことなんだ。ピースウォークのこれまでのかたちを取っ払って、今の状況でできることを考える。まして「グローバル気候マーチ」メンバーには、そういうことに詳しい若い人たちが何人もいたことに気づかされまし

ピースウォークのウォークは文字通り、「歩く」だけれど、街を行進するだけがウォークじゃないんだと思った、その夜の実行委員会でした。

知恵とユーモアで

3月10日、次の実行委員会。ウイルス感染は、日本国内、そして県内にも拡大して、屋外での市民のイベントすら、開催が難しくなってきました。その日の話し合いのテーマは、具体的にどう歩くか、どんなかたちのウォークにするか、でした。

「やっぱり当日、歩きたい。外だし、間隔を開けて歩けば大丈夫なんじゃないか」という意見。「いや、この時期、たとえそう大人数でなくても、街を練り歩くこと自体、どう見られるかを考えないと。長年これまでみなで大切にしてきたピースウォークに、マイナスのイメージがつくんじゃないか」「いや、こういう時期だからこそ歩きたい、歩くべきだ」「ピースウォークはそもそも個々人の集まりなんだから、歩きたい人が歩けばいいんじゃない？」「それはそうだけれど、それでもやはり、ピースウォークという団体が歩いている、と見られることになってしまうよ」などなど。意見は大きく分かれて、その場の空気がぴーんと張りつめていくのがわかりました。

その時でした。実行委員の一人で、ライブ喫茶の店主、そして金沢市議でもあるMさんが、いつものようにひょうひょうとした口調で、「ピースウォークは延期します。ってお知らせのために歩けばいいのでは？」と発言したのです。

そのひと声に一同どよめき、それまでの緊張が一気にはじけて大爆笑になりました。なんと痛快、まさかそんな発想があったとは！ そこへすかさず別の人が「“延期します”と書いたボードの裏に、“でも平和は延期できません”って書こう！」グローバルマーチのKさんが「“気候問題も延期できません”ってボードもいるね！」と続けます。

知恵とユーモアと頓知^{とんち}とちょっぴり風刺のキャッチボールで場が一気に活気づき、次々アイディアが生まれてきました。どこからでも、おうちにいても参加できる方法として「ピースウォーク 平和と気候のWebアクション」を、ネットで広く全国に呼



びかけよう。平和と気候変動へのメッセージを紙に書いて、それを持った自分を撮影して、その写真をウォークの日をはさむ4日間、ハッシュタグ「#peacewalk2020」をつけてSNSにあげていく。金沢、石川はもとより全国から投稿してもらおう、というテレワークならぬ「Webでウォーク」の提案です。

加えて、これまではウォークに参加した人だけが受け取ることでできたピース割引MAP(このMAPをピース割引協力店で提示すると、食べ物やドリンクがちょっとお得になる)を、今年はWebアクションに参加した人もMAPを使えることにしよう、となりました。

2014年からはじまったピース割引の取り組みは、年を追うごとに協力店の数がふえて、ウォークする金沢の中心市街地界隈のお店のほか、今年は県内24もお店からご協力をいただいていたのです。コロナの影響でどのお店もお客様が激減と聞き、日ごろからピースウォークを応援してくださっているお店の方に、こんな時こそ感謝を伝えるいいチャンス、できるだけ多くの人にお店のことを知ってもらおう、と考えたのでした。

延期お知らせウォークとWebでウォーク

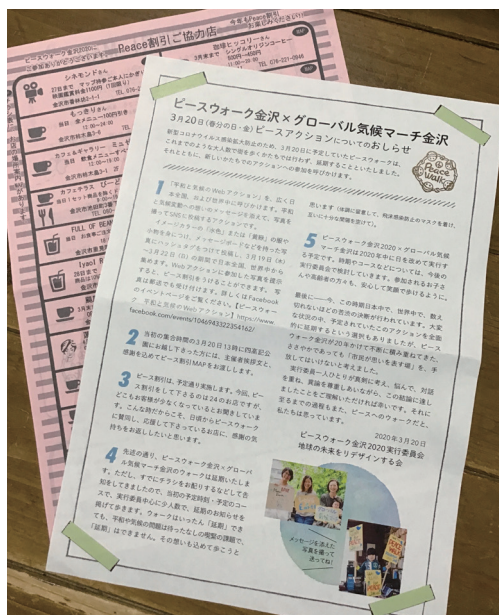
3月20日ピースウォーク当日。集合場所は毎年、金沢香林坊近くの四高記念公園です。延期のことは

新聞でもSNSでもできる限りお知らせしたけれど、ピースウォークはいつも、誰が突然飛び入りで参加してくれるかわからないオープンなイベント。延期を知らずに例年のようにやってくる人がいるかもしれない。そんな人たちのために、実行委員の何人かは、ウォークのスタート予定だった場所で待っていることに決めていました。

その時間に集まった人たちは、実行委員も含めて40人弱だったでしょうか。いつものような開会の集会をしない代わりに、主催者側から短い挨拶で、今年のピースウォークがいつもと違うかたちになったことを説明し、そのことを記したご挨拶文*とピース割引MAPを配りました(*最終ページ参照)。

青空の下でピースウォークに賛同したロックシンガーさんが1曲歌い、みんなの心がホッとあったまってから、実行委員を中心に歩きたい人、あわせて約20人によるこじんまり&ゆったりウォークが、時間通りにスタートしました。

この20人という人数も、実行委員で事前に話合っただけのもの。全員、マスクをして、間隔を空けて、「ピースウォーク金沢×グローバル気候マーチ 今は延期」「でも平和は延期できません!」「でも気候の危機はすぐに止めたい!」とはっきり描かれたボードを手に手に掲げて、予定通りのコースをゆっくり歩きました。前代未聞の、静かだけれど色



とりどりの「延期お知らせウォーク」をしたのです。

ウォーク組を公園で見送った人たちは、解散場所の金沢市役所前広場に先回りして、小一時間後に戻ってくるウォーク組を出迎えます。私も迎える側の一人に。おかえり〜と迎える側も、ただいま〜と帰ってくる側もみな、例年以上に、笑顔、笑顔。なんだろ、この不思議な達成感。

人数だけで見たら、こんな少人数のピースウォークははじめてです。どんどん世の中が非常事態に近づいていく中で、だけど、今年も歩くことができた。いろんなことに配慮しながら、私たちらしさを失わず。ウォーク組を笑顔で迎えながら、私自身は歩いてないのに、ああ、今年も歩けたね〜って、一緒に歩いたようなきもちが、じょわ〜んと足元から満ちていくような気がしました。

何度も実行委員会を重ねて、対話をくりかえして、中止でなくて延期するけど、それもただの延期ではなくて、延期しますのお知らせウォークを少人数でし、ウォークに参加してねと呼びかける代わりに、Webでウォークに参加してね、とよびかけた、今年のピースウォーク×グローバル気候マーチ。

コロナのことがなければおそらくここまで知恵を出しあえなかったかもしれません。コロナ状況が日毎に変化していく中、誰もが慎重に行動しなければならなくて、歩くこと自体をとりやめる選択肢もあ

ったけれど、制限のいっぱいある中、できることをみなで必死に探した、考えた、案を練った。その中心にあったのは、ピースウォーク金沢がずっと大切に守ってきた「市民が思いを表す場」を簡単に手放してはいけない、という個々の意思でした。

決して大人数ではない実行委員一人ひとりが、誠実にそれぞれのしごとをしたことがすばらしかった。仕事で実行委員会に一回も出られなかった人も、表に見えないところで、その人その人の特技をいかしてサポートしてくれた。そのおかげで、短期間にたくさんのことを生み出していきました。

ピースウォークのこれまでとこれからを考え、いつも全体を見て冷静な判断をした、前号に登場したピースウォーク第1回からの呼びかけ人の小原美由紀さん、「延期しない」と宣言して、Webアクションの発信と仕組みをつくったKさん、「延期しますウォーク」のアイディアで議論の突破口を開いたMさん。他にも、ネット空間に寄せられた数々の写真とメッセージを拾い集めて一ヶ所に集める作業をした人、実行委員会の詳細な記録を委員会ページに毎回あげ続けた人、手間暇かかるピース割引MAPをつくった人、たくさんのお店に声をかけて協力店をふやした人、延期ウォークをはっきり知らせるボードのデザインをした人、ピースウォークの前日、丸一日かけてそのボードを何枚もつくった人たち、関わったすべての人が自分のできるしごとをせいっぱい。それがあってのピースウォーク2020。そんな仲間たちをいつも以上に誇りに思いました。

ここに至るまでの紆余曲折の道のり、一人ひとり悩んで考えたことを言葉にして、対話を重ねて一つひとつ決めていった、この話しあいの過程そのものが、民主主義の練習だし、何よりピースウォーク＝平和への道なのだ、と実感しました。

ピースウォークの日をはさんだ前後4日間、「平和と気候のWebアクション」には、金沢、能登、県内はもとより、北海道から九州から、関東、関西、瀬戸内、東北、アメリカからも、100人を超える人たちが思い思いのメッセージと写真を送ってくれました。





「遠いけどWebで参加できてうれしい」「メッセージボードを作りながら、子どもと一緒に平和の意味を考えました」「勇気出して表現しました」「こんなやり方があったんだ!」とうれしい声が続々寄せられました。それらのメッセージはいつの日か、実行委員のMさんのお店で平和と気候のメッセージ写真展として開催したい、という計画をじっくりあたため中です。

たった2ヶ月前の出来事だけど、あの時より少しでも遅かったら、実行委員で顔を合わせて話し合うことすらできず、延期お知らせウォークの実現もなかったでしょう。奇跡のタイミングに感謝しながら、前号に続いてピースウォーク物語その2を書いた次第です。いつの日かコロナと共存しながら、みんなで歩くマーチとしてのピースウォーク×グローバルマーチができる日の来ることを願っています。

『出逢いのタペストリー』

ピースウォークの日から半月ほどが経ち、新型コロナ拡大防止のためと言って出された緊急事態宣言。どうやら在宅生活がしばらく続きそうだと感じた4月末に、思い立ってあることをはじめました。1996年に書いた『出逢いのタペストリー』という本を、ご希望の方に5月いっぱいプレゼントする、名づけて、「#離れているけどつながってる ひとりぽろじえくと」です。

どうしてそんなことをはじめたかという。これまでのように自由に誰かと逢ったりおしゃべりしたり、ができなくなった分いっそう、会えない人たちと、離れているけどつながってる、の感覚を大事にしながらこの日々を過ごしたい、と強く思ったからです。物理的距離は必要だけど、そのせいで心まで遠くなるのは悲しい。もしかしたら、ひとりぼっちだと感じてる人がいるかもしれない。そんな人に、ねえ、どうしてる? つながってるよ、あなたのことに気にかけてるよ、と声をかけるようなきもち——本を贈る行為の、根っこのところにその想いがありました。

私が『出逢いのタペストリー』を書いた90年代というのは、エイズが一つの社会問題になっていた、そういう時代でした。当時学校でできんに行われていた“エイズ教育”は、これこれで感染する／しない、がクイズ形式で出されて、怖い病気だから感染しないように!という伝え方ばかり。そのことにとても違和感がありました。うつらないための“予防教育”を熱心にすればするほど、自分からHIV/AIDSが遠のき、自分には関係のない病気になってしまって、その分、感染した人への差別が大きくなっていくんじゃないのかな、と思えてなりませんでした。

その頃私の周りには、全く違うとらえ方でHIV/AIDSのことを伝える人たちがいてくれたのです。その人たちと出逢う中で学んだこと、その学びを小学生に出前授業したこと、AIDSで亡くなった人の名前や思い出を縫い込んだメモリアルキルトのこと、差別について考えたことなどを、『出逢いのタペストリー』の中で綴りました。

今、私たちの暮らす社会を見回した時、新しいウイルスに感染した人へのバッシングや、その人の家族や近しい人たちを極端に避けたり、時には監視したり、はたまたコロナこわいこわいと連発して、見えない敵と闘おう! 打ち勝とう! といった勇ましい言葉のとびかう空気感が、全く同じといわないまでも、80年~90年代のHIV/AIDSに対する世間の空気感とすごく似ている気がしたのです。

AIDSという病気から、少なくとも私は学んだことがいっぱいあったように、このウイルスからも、

気づいたり考えさせられたりすることがきっと何かあるはず。この本が少しでもそのヒントになればいいな。何より本のしあわせは、人に読まれること。なので、あなたにも読んでいただけたらうれしいです——そんな文章をSNSにあげると次つぎ、その本読みたいです、というメッセージやメールが届いて、それからひと月余り、郵便局に毎日通う日々が続きました。

離れているけどつながってる

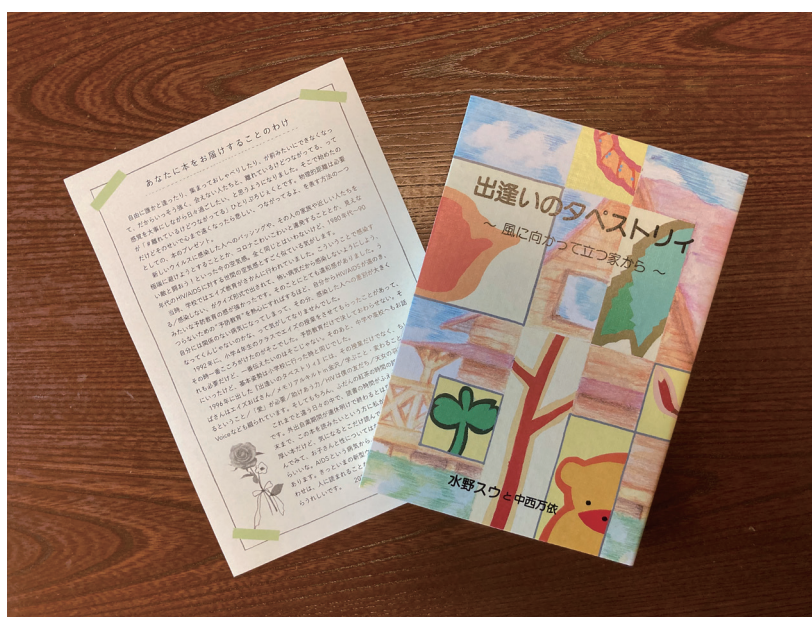
日を追うごと、予想外にたくさんの返信が届きはじめました。子育て中のママから「自分が受けたのはまさしくエイズ“予防”教育だった。小学校の授業で、エイズは怖い病気、というイメージだけが残りました」。お孫さんのいる方から「うつらないことだけを気にしすぎたら、知らないうちに誰かを排除していることになる」とあらためて。感染した人の不安なきもちを考え、支えあう大切さを孫たちに伝えたいです」「コロナウイルスを敵視して有事とか国難とか、それを利用しての国の企てにも目を光らせてないといけないですね」「コロナのおかげで、いのちと政治がこんなに直結してると実感。必ず次

の選挙に行きます」「どの章にも支えあって共に生きるというメッセージ。こんな時期だからこそ読んでほしいと願ったスウさんに深く感謝」などなど。

本をプレゼントします、と呼びかけた当初は、それで何がどうなるの？と自分でも正直思っていたのだけれど、メッセージが届くごとに、誰より一番多くのプレゼントを受け取ってよろこんでいるのは、間違いなく私だった！と気づきました。本を口実に、ここのところとんとご無沙汰していた人に、用事がないからと遠慮して連絡していなかった友に、コロナ時間が与えられたおかげでこちらから手をのばして、貴重ないくつものつながり直しができたりもしているのです。私こそ、あなたとつながっていたい、そう強く願っていたこと、今更のように実感したのでした。

「離れているけどつながってる——私の片手を差し出して、私をとって反対の手で誰かとつなぐ、二本の手を、誰かと、別の誰かとつないで知らず知らず大きな網ができたらいいな」ある人からのリスポンスに、私も全く同感です。

2020.5.25



ピースウォーク金沢×グローバル気候マーチ金沢

3月20日(春分の日・金) ピースアクションについてのおしらせ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月20日に予定していたピースウォークは、これまでのような大人数で街を歩くかたちでは行わず、延期することといたしました。それとともに、新しいかたちでのアクションへの参加を呼びかけます。



1 「平和と気候のWebアクション」を、広く日本全国、および世界中に呼びかけます。平和と気候変動への想いのメッセージを添えて、写真を撮ってSNSに投稿するアクションです。

イメージカラーの「水色」または「黄緑」の服や小物を身につけ、メッセージボードなどを持った写真にハッシュタグをつけて投稿し、3月19日(木)～3月22日(日)の期間で日本全国、世界中から集めます。Webアクションに参加した写真を提示すると、ピース割引をうけることができます。写真は郵送でも受け付けます。詳しくはFacebookのイベントページをご覧ください。【ピースウォーク 平和と気候のWebアクション】<https://www.facebook.com/events/1046943322354162/>

2 当初の集合時間の3月20日13時に四高記公園にお越し下さった方には、主催者挨拶文と、感謝を込めてピース割引MAPをお渡しします。

3 ピース割引は、予定通り実施します。今回、ピース割引をして下さるのは24のお店ですが、どこもお客様が少なくなっているとお聞きしています。こんな時だからこそ、日頃からピースウォークに賛同し、応援して下さいいるお店に、感謝の気持ちをお返ししたいと思います。

4 先述の通り、ピースウォーク金沢×グローバル気候マーチ金沢のウォークは延期いたします。ただし、すでにチラシをお配りするなどして告知をしてきましたので、当初の予定時刻・予定のコースで、実行委員中心に少人数で、延期のお知らせを掲げて歩きます。ウォークはいったん「延期」できても、平和や気候の問題は待ったなしの喫緊の課題で、「延期」はできません。その想いも込めて歩こうと

思います(体調に留意して、飛沫感染防止のマスクを着け、互いに十分な間隔を空けて)。

5 ピースウォーク金沢2020×グローバル気候マーチ金沢は2020年中に日を改めて実行する予定です。時期やコースなどについては、今後の実行委員会で検討していきます。参加されるお子さんや高齢者の方々も、安心して笑顔で歩けるように。

最後に——今、この時期日本中で、世界中で、数え切れないほどの苦渋の決断が行われています。大変な状況の中、予定されていたこのアクションを全面的に延期するという選択もありましたが、ピースウォーク金沢が20年かけて不断に積み重ねてきた、ささやかであっても「市民が思いを表す場」を、手放してはいけなかったと考えました。

実行委員一人ひとりが真剣に考え、悩んで、対話を重ね、異論を尊重しあいながら、この結論に達しましたことをご理解いただければ幸いです。それに至るまでの過程もまた、ピースへのウォークだと、私たちは思っています。

2020年3月20日

ピースウォーク金沢2020実行委員会
地球の未来をリデザインする会



メッセージを添えた
写真を撮って
送ってね!



盆踊り漫遊

竹中尚文

第8回 第2次世界大戦と強制収容

5. キャンプ

第7回の連載と重なることがあるかと思いますが、わかりやすくお話をしたいと思います。

1942年(昭和17年)2月20日 デウィット将軍は日系人の強制収容の実施責任者に就任しました。

1942年3月24日 デウィットは日系人の西海岸からの退去命令をだしました。

1942年3月31日～8月7日 カリフォルニア州・オレゴン州・ワシントン州で日系人すべてが集合センターに集まるように命令がでました。町のいたる所に集合を命ずる張り紙があったそうです。集合の準備期間には6日ほどだったそうです。持ち物は携行可能なものに限られました。多くの人が手提げトランクひとつで集められました。鞆に入りきらないものは売り払ったそうです。「ブランケ担ぎ」(「盆踊り漫遊」第6回『対人援助学マガジン』第37号に記述)から始まって一所懸命に働いていろんな物を手に入れて、そのほ

とんどを限られた時間で処分しなければならなかったのです。状況をみた人たちから安値を提示されて、捨てることにした物もあったようです。情けない思いだったでしょう。

この状況を聞くうちに、ある人が阿弥陀さまを鞆に入れていたとおっしゃいました。当時、日系人の半数は仏教徒でした。そのほとんど人が、鞆に仏壇からはずした阿弥陀さまと位牌を入れていたそうです。彼らは特別の仏教徒でもなく、普通の仏教徒なのです。彼らにはそれがあたりまえのことでした。今の日本で暮らす仏教徒と明らかに異なる行爲です。

とにかく、彼らは集合センター(文章末の地図の○印 Assembly Centers)に収容されました。集合センターといっても元々そのような場所があったわけでもなく、競馬場の厩舎や農業市場の家畜小屋などを改装した物でした。そこで100日前後すごしてから、日系人を太平洋沿岸部に置いておくことは危険だという主張により、日系人は内陸部に

送られたのです。

彼らが送られたのは 2 種類のキャンプでした。ひとつは再定住センターであり、もう一方は抑留収容所でした。

地図上で■印で表される所が、再定住センターと呼ばれるところです。ほとんどの日系人が再定住センターrelocation centers に収容されました。私が出会った多くの人が、「トゥーリレイク(カリフォルニア州)だった」とか「ポストン(アリゾナ州)だった」とか「ギラリバー(アリゾナ州)だった」と聞きました。●印の所は司法省の抑留収容所でした。“internment camp”をどう訳すか悩みました。たぶん「捕虜収容所」と訳すのでしょうが、日系人は捕虜ではありません。一方、ノースダコタ州のビスマルクにはドイツ人やイタリア人捕虜も収容されていたそうです。仏教の開教使の多くは抑留収容所としてのニューメキシコ州のサンタフェやテキサス州のクリスタルシティーに送られました。先に紹介した松浦師(「盆踊り漫遊」第7回『対人援助学マガジン』第39号に記述)はビスマルクに送られました。

ここまで、私は日系人と記しました。実際は日本人及び日系米人です。当時の張り紙には「日本人及び日本人を先祖に有する者」と書かれていました。具体的には日系移民一世と二世でした。一世は日本人です。前に記し

たように日本人はアメリカ国籍を取れなかったのです。しかし、二世はアメリカで生まれたのですからアメリカ国籍になります。日系米人です。この行為はアメリカ人の自由を違法に奪ったのです。その主導者たちも違法行為であると分かっていたからこのような表記になったのかもしれませんが。

ここに収容されたのはアメリカ合衆国本土の前記三州に住む日系人でした。他に日系人が多く住むハワイの日系人は強制収容されなかったのです。その理由は収容責任者デウィットが本土西海岸の司令官であったからです。ハワイにはエモンズが司令官としてハワイの国防を担当していました。彼はハワイの人口の3分の1を占める日系人を収容することが現実的ではなく、日系人の存在が国防の妨げにならない上、社会に必要な存在であるといって日系人の強制収容をおこないませんでした。そうすると本土の日系人強制収容はデウィット将軍ひとりの考えによるものかと思われませんが、そうではありません。当時の大統領であるルーズベルトの決断でもありました。当時、FBI 長官フーヴァーは大統領に日系人の反国家的行動の恐れはないと強制収容に反対をしました。また、アイゼンハワーをはじめとする多くの軍人も日系人強制収容は不要な行為であると反対しました。私は日系人強制収容の主因はルー

ズベルトとデウィットの人種偏見であると思います。

6. 忠誠登録審査

1943年(昭和18年)2月 強制収容が始まって半年から一年が過ぎた頃でした。収容所の日系人に対して忠誠を問う質問状が配布されました。それは、戦争を遂行している時に兵士になり得る若者を閉じ込めておくことの無駄を指摘する意見が強くなったからです。こうした声は軍部から出るようになりました。一方で、収容所の中の日系人の若者からも兵士として働きたいという声があったそうです。また、合衆国議会で日系人を収容して無料の食事を提供していることに批判する意見があったと言います。

日系人の志願兵を募集するにあたり、日系人の忠誠心を調査することになりました。そして42項目からなる質問状が収容所で配布されました。その中の第27番目と第28番目の質問が問題となりました。

第27項目「あなたは合衆国軍で、命令されるいかなる所でも、戦闘任務につく意志がありますか？」

第28項目「あなたはアメリカ合衆国に対して無条件に忠誠を誓い、すべての合衆国内外からの攻撃に防衛し、日本の天皇やいかなる

外国政府や機関に忠実であったり従順であったりしませんか？」

この二つの質問に多くの日系人は憤りを感じたものでした。一世に対してはアメリカ合衆国の国籍取得を拒絶し、アメリカ国籍を有する二世には不法に拘禁したうえ、何があってもアメリカ合衆国に対して忠誠を誓うか、アメリカ合衆国のために命を捨てる覚悟があるかという質問でした。この質問は日系人に強い理不尽さを感じさせるものでした。

人間としての誇りを優先した人は「ノー」と答えました。日系人の将来を考えた人は「イエス」と答えました。

イエスと答えた若者は収容所から出征して行きました。彼らは日系人ばかりの第442連隊戦闘団としてヨーロッパ戦線に投入されました。この戦闘団はアメリカ軍史上、最も多くの勲章を受けました。同時に最も高い死傷率を記録しています。また、ハワイ出身の日系人を中心に編成された第100大隊も同様の働きがあったと記録されています。ところで、日本軍の特攻隊を狂気の戦術といいます。日系二世の兵士たちは精神的退路を断たれた中で、激戦地に投入されたのです。日本軍の特攻隊とどれ程の違いがあるのでしょうか。出征した二世の多くは勲章という変わり果てた姿となって親元に帰ってきたのです。一世の親たちはどんな気持ちだったでし

よう。夢を見てアメリカに渡り、苦労を重ねた結果が息子の戦死だったのです。それは、日本の特攻隊の親たちにも同様の悲しみがあったように思います。

ノーと答えた人たちはイエスと答えた人たちに対して、明らかに少数でした。彼らは「ノーノーボーイズ」と呼ばれアメリカ政府に対して反対の意思を表明する行動をとりました。収容所内のデモをし、収容所の管理に反抗していきます。そうした彼らは、もともとノーノーボーイズの多かったトゥーリレイクに集められました。そこでの反政府運動を続ける者たちは、さらに司法省管轄の抑留収容所に送られています。さらにはアメリカ国籍を捨てる者もいました。前回で紹介した映画『愛と哀しみの旅路』(Come See the Paradise)で、カワムラ家の息子チャーリーは、ノーノーボーイとなって捕虜交換で日本に渡ります。実際に戦中でしたので、捕虜交換で日本に渡った日系人は少数だったようです。多くは終戦後に日本に渡った人たちです。また、戦前に排日運動の高まるアメリカ社会の中より日本で教育を受けさせようと考えた一世は、子どもたちを日本の郷里に送った人もいます。その多くは上手くいかなかったようです。一世にとっては自分たちが育った日本で教育を受けさせた方がいいと思ったでしょうが、軍国教育の日本にアメリカ

で育った二世を送ったわけです。その多くが再びアメリカに戻っています。こうした人たちのことを「帰米二世」と呼びます。彼らは日本社会でもなじめず、再び戻ったアメリカの社会でもなじむのに大変苦労をした人たちです。私は、アメリカで何人かの「帰米二世」の人たちに会いました。その話を聞かせてほしいと頼むと、即座に拒否されました。彼らには思い出したくない苦しい過去です。

話を忠誠登録審査に戻しましょう。この審査を経て、アメリカの日系人強制収容政策は変化します。第一には、第 442 部隊のように兵士となって収容所から出たことです。デウィット将軍の強い反対にもかかわらず日系人部隊は編成されました。そして、その部隊の戦果は全米の知るところとなります。とても大きな代償を払った日系人への見方が少し変わりました。第二には、イエスと答えた若い女性を労働者として東部で使い始めました。戦争を遂行するアメリカ社会は労働者不足でした。この労働力を補うことと、若い日系人が収容所をでるという思惑が一致したのでした。

1943 年 9 月に、デウィット将軍は日系人強制収容の任を解かれています。しかし、強制収容所が閉鎖されるのはもう少し時間がかかりました。ジェローム(アーカンサス州)が 1944 年に閉鎖されましたが、ほとん

どの収容所は終戦の 1945 年の秋でした。
ツウーリレイクの閉鎖は 1946 年まで待たねばなりませんでした。

7. 声

私が 2000 年に日系人二世の人たちに聞き取りをした声を紹介します。この年は、早く聞き取りをしないと当時のことを知っているひと(日系二世)がいなくなってしまうとアドバイスを受けたからです。2000 年に、二世の人たちは 70 歳から 100 歳ほどでした。

Yさん(1922 年ハワイ生まれ。二世)

真珠湾攻撃のあった日は、クリスマスの準備の買い物でホノルルの赤十字病院のすぐ隣にいました。急に負傷者が運び込まれてくるのを病院で友だちと一緒に手伝っていました。気がつけば日も暮れて、自宅に帰るバスが戦争勃発のために運休になっているのを知りませんでした。通りかかった白人が友人と一緒に自宅近くまで同乗させてくれました。初対面の人が日系人の私を乗せてくれたことに、あとになって驚きました。家に着くと、電灯も点けず真っ暗でした。電灯で部屋の中を明るくしていると、誰かに銃弾を撃ち込まれるのを恐れていたことでした。そうし

た心配はしばらくのことで、ハワイでは日系人に対する差別をあまり感じませんでした。その後、兄が出征して 442 部隊に配属になり、弟も出征して MIS(陸軍情報部：語学の得意な者を集めて、日本軍の無線傍受や捕虜の尋問などをしました。終戦後、日本の統治にアメリカ軍が進駐したときに、日本との接点になったのも彼らでした)に配属されました。開戦前に高校を卒業したのですが、私はハワイを出て都会で働きたいと希望していました。家族から二人も出征している状況で、家を離れることはできませんでした。ある日、軍のジープがわが家に向かってやって来ました。父親は、きっと 442 部隊の兄が戦死をしたことを知らせに来たと思いました。普段は厳格でしっかりした父親がしゃべれなくなりました。軍の用件は、わが家で飼っている犬を軍用犬として提供してほしいということでした。父は、即座に「どうぞ、どうぞ。犬でよければ、いくらでも」といいました。

終戦後、兄と弟は無事に帰ってきました。そして、私は都会で働きたいと思っていたのでニューヨークに行きました。ニューヨークには母の妹が住んでいたもので、叔母を頼りに行きました。ニューヨークでは、東京銀行に就職しました。終戦後間もない頃、日系人に一般の就職のチャンスはありませんでした。

私はタイプライターを打って書類を作る仕事を中心でした。私のボスは小野さんといって、長女のヨーコちゃんが有名になりました。

その頃、私はヨーロッパ戦線から帰国した主人に会いました。彼は 442 部隊ではなかったのですが、ヨーロッパから帰国してお姉さんのいるニューヨークに帰ってきました。彼は、もちろん日系人ですよ。私たち二世は日系人以外と結婚をするなんて、一世の親は許しませんでしたよ。でも私の子どもたちは、誰も日系人と結婚した子はいないわよ。私の友だちもみんなそうですよ。

主人と結婚して、主人の故郷であるカリフォルニア州に引っ越しました。1953 年でした。50 年代になると、カリフォルニア州の人たちは誰も日系人に差別をしませんでした。それまでは、カリフォルニアが一番、日系人に対する差別はきつかったのです。40 年代は日系人を雇う会社はほとんどなかったけど、50 年代になるとどの会社も差別なく雇ってくれました。

センヨウ・ササキ師（1930 年、カリフォルニア州生まれ。浄土真宗開教使）

祖父が本願寺からの開教使としてカナダに渡りました。祖父は、祖母と幼い父を連れての開教でした。父もアメリカで開教使になりました。（アメリカでは三代にわたって僧職

につくケースは大変珍しい）

父はサクラメント（カリフォルニア州）の仏教会の僧侶でした。戦争が始まって、父は FBI に逮捕されました。父を含めて、私たち家族はトゥーリレイクに収容されました。ほとんどの開教使、たぶん全開教使が逮捕されました。そのまま司法省の特別のキャンプに入れられた開教使と家族と同じ一般的なキャンプに収容された開教使がいました。この違いがなぜなのか、私は子どもだったので分かりません。たぶん、本人たちも分からなかったと思います。しかし、トゥーリレイクに入れられた父は「イヌ」と呼ばれたこともあります。

トゥーリレイクでは反米的な人が多かったし、他のキャンプからも反米的な人が移されてきました。そんな人たちは仏教徒が多かったように思います。だから、キャンプでも父を中心に日曜日のお参りをしたり、法事をしたりしました。お葬式もしましたよ。フェンスの所で射殺される人もいましたので、その人のお葬式を父がしていました。私たちは戦争が終わるまで、トゥーリレイクにいました。

匿名さん（1930 年カリフォルニア州生まれ。父が一世、母が二世）

父が浄土真宗の開教使だったので、戦争が

始まるとすぐにFBIに逮捕されて、サンタフェ（ニューメキシコ州、抑留収容所）に送られました※。私たちの家族のいるキャンプに合流したのは1944年10月でした。やっと家族4人が一緒になれたといっても、弟と私と両親の家族ですね、戦争はそれから間もなく終わりました。キャンプを出てから、日本に帰りたい人は帰ってもいいというので、日本に行く船が出ることになりました。父は自分の生まれた滋賀県のお寺が心配でした。戦争前におじいちゃんが亡くなって、おばあちゃん一人になっていたはずなので、心配して日本に帰ることにしました。私たち家族全員で日本に帰ることにしましたが、日本に帰る人はそんなに多くなかったと思います。

船は1945年12月25日に横須賀の浦賀に着きました。浦賀には、いろんな国から日本に帰ってきた人たちがいました。私たちはアメリカから帰ったのでそんなに栄養状態も悪くありませんでした。中には、やせ衰えて上陸するとすぐに亡くなる人もいました。浦賀に帰国者収容施設のような建物があって、その中でも亡くなる人もずいぶんありました。余りにもたくさんの人が亡くなるので、建物の横に寝かせてありました。

私たちは、アメリカのキャンプでずいぶんとひどい目にあったと思っていましたが、もっと大変な目にあった人たちがたくさんい

ました。

私たちは滋賀県の行くために大船まで歩きました。大船駅で列車に乗ろうと思っても、余りにたくさんの人なので何度も乗れませんでした。何度か横須賀から大船まで歩いて、ようやく列車に乗れました。米原で降りて、ちいさな列車に乗り換えて父の生まれた町に到着しました。お寺に着いたのは1月1日でした。私たちを見たおばあちゃんは、言葉もなく立ち尽くしていました。戦争中は手紙もやり取りができずに、おばあちゃんはお寺を守っていたのです。

私は滋賀県で高校に行きましたが、日本の生活になじめませんでした。私は早くアメリカに戻りたかったのですが、母が高校を卒業するまではアメリカに帰ってはならないと言いました。高校を卒業して、やっと母方の祖父母がいるサリナス(カリフォルニア州)に帰ってきました。その2年後には弟が高校を卒業して帰ってきました。両親はそれから数年後にアメリカに帰ってきました。

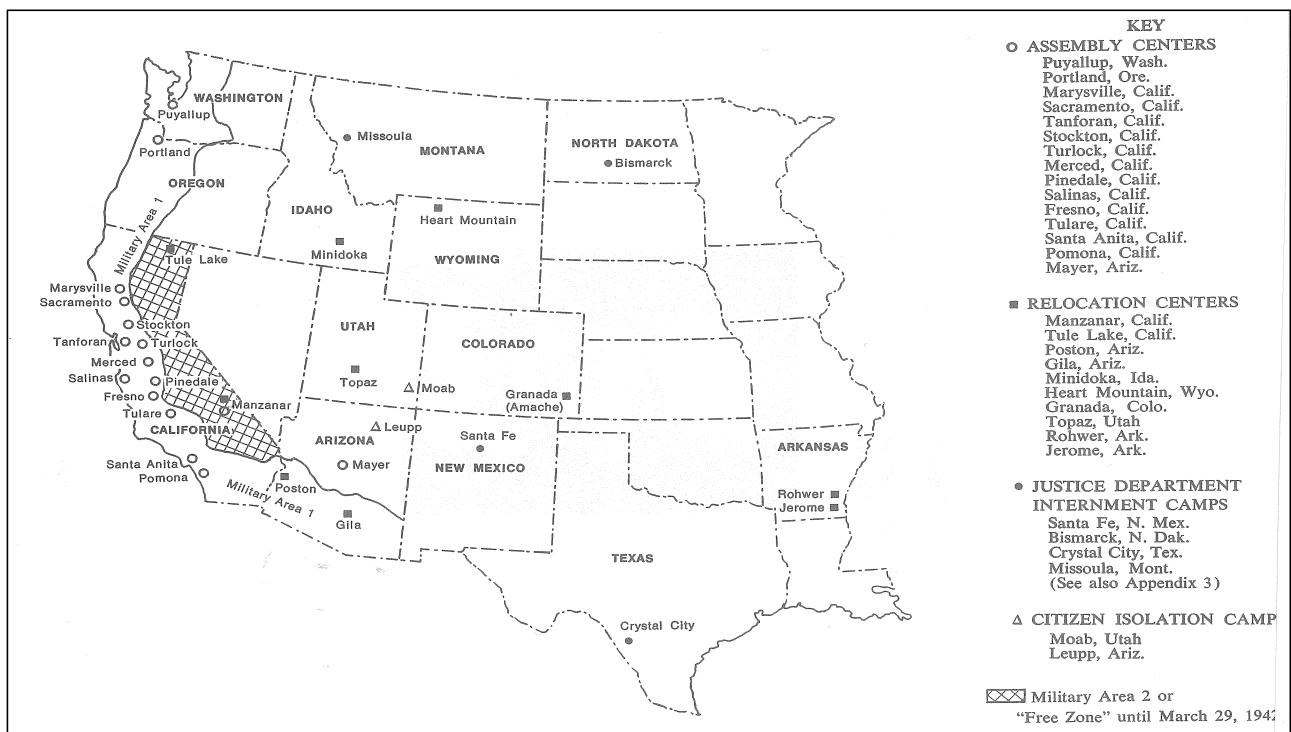
※インタビューの後で私は彼女の父親の開教使記録を調べました。彼女の父親はサンタフェからテキサス州のクリスタルシティに送られていました。開戦の直前に一年余りの間、日本に帰国したのが理由かもしれません。それはおそらく父親の死去にともなうことではなかったかと想像できますが、それが疑われて長期間、それも2ヶ所の抑留収容所に入

れられたのではないかと思います。

私は、カリフォルニア州で収容所の話を聞いて回った頃には一世は亡くなっていて、二世の話すら十分に聞いていません。はじめは一世の話を聞きたかったのですが、それは不可能でした。かつて一世のこんな話を聞いたのが、私の日系人の歩みに関心をもつ始まりでした。それは、多くの一世が収容所を出て、太平洋を眺めながら異口同音にいった言葉です。

「太陽が太平洋の西の彼方に沈んでいく。西の彼方に私の故郷がある。アメリカに渡って一旗揚げて故郷に帰るのが夢だった。キャンプに入れられて無一文になった。もう自分の人生は最晩年である。故郷に錦を飾ることなどできない。戦争中、日本に残してきた親や兄弟の安否すら分からない。極楽浄土は西の彼方にあるそうだ。西に沈む夕日に手を合わすだけだった」

全米の収容所の配置図



“YEARS OF INFAMY” Michi Weglyn 1976 より引用



男は 痛い



國友万裕

第35回

『ヒキタさん！

ご懐妊ですよ』

1. コロナ前夜

今年は2月の半ばくらいからしんどい日々が続いていた。

3月の上旬に親友が引っ越すので、彼がこれまで持っていたものを大量にくれることになった。これまで一人暮らしをしていた彼は、お父さんが亡くなったので、お母さんと同居するため実家に戻るようになったのだ。

ベッドももらえることになった。俺のベッドは元々壊れかかっていたので、早いうちに整理しておこうと2月の半ばにベッドを放した。その後はフローリングにマットを引いて寝るという状況だったためなんとなく落ち着かないし、背中が痛い。

春休みに入って比較的時間はあったのだが、心療内科でもらった薬を飲んででは眠るという生活が続いた。ただ、多少でも生活を楽しくしようとあちこち外食して回ったりしたものだ。本当に至る所に美味しいお店はたくさんあることに気付かされたものだった。

森林食堂は近所で最も評価の高いカレー屋さんだが、入るのに相当な時間並んだ。若い女性が一人でやっているの、いっぺんに大人数は入れない。最初に入ったグループの人たちが食べ終わって出てきた後、次に並んでいた人たちが中に入るということになる。待っている間、一緒に並んでいた男の人と立ち話となった。その人はなんと岡山からきているとのこと。食べ歩きが趣味の人みたいで、昼はパスタを食べに他の店に行って、森林食堂も初めてじゃないとおっしゃっていた。

Facebook で繋がっていた男性からは Coconicafe というお店を紹介してもらった。ここも目立たない場所にあるのだが出会って良かった店だった。女性が2人でやっているが、心がこもった家庭料理を出してくれる。

知り合いのお兄さんが働いている居酒屋 Dare-yame にも行った。ダレやめとは鹿児島などで疲れをとめるという意味なのだそうで、魚料理

が中心である。このお店で話に聞いた、その近所のカレー屋ひろしにも行った。ここはマスターが北海道で修行していたとのことでスープカレー。出町座で映画を見に行った際にばったり知り合いの人と会って、その人の勧めで出町ロコロというお店にも行って、店長と話した。出町カラビнкаという小さなカレー屋では黒カレーを食べた。ある学会の懇親会では門という店で美味しい鍋。10年ぶりに近所の中華料理屋大鵬できんし井も食べた。ここは当時京都にいた友人が教えてくれた店だ。彼が東京に移ってから早いもので10年が過ぎているが、きんし井は相変わらずで店も繁盛しているようだった。みんなで広げよう、食べ歩きの大輪！というか、色々な人から色々なお店を聞いて食べ歩きしていくことで人間関係も広がっていく。これからもどんどん店を開拓しようと心は高鳴っていた。

この頃からお店で出る話はコロナの話だった。すでにボチボチ、イベントなどの中止や延期が伝えられていた。しかし、この頃までは事態が深刻化するとは夢にも思っていなかったのだった。

2. 部屋をリニューアル

3月の9日、いよいよ親友のところから荷物が運び出されることになった。場所は大阪である。経費節減のために運送屋の人は一人だけ頼んだ。冷蔵庫だけは一人では持てないから手伝ってくれとの事だったので、俺が彼の家まで行って、その後京都まで運送屋さんが助手席に乗せてくれるとの事だった。

その運送屋さん、おそらく40代半ば過ぎくらいである。もう大人になった子供が3人いるとのことと子供の話をしたがる人だった。こういう男の人っている。こういう人見ると羨ましくなる。家族のためにあくせく働いて、それが幸せだと思える男性。俺はそういう男の人っていいなあと思いつつも、ジェンダーへの抵抗がそれにブレーキをかける、とんでもない病と闘っているのだ。

国道を走りながら、「この仕事していると景気の

ことがよくわかるんです。今はコロナのことがあるからものすごく空いているでしょう。リーマンの時もそうだったんですよ」と話してくれた。

仕事でほとんど日本の津々浦々まで運転しているらしい。しかし、観光の暇はなくて、途中で温泉やうどん屋によるのが楽しみだと言っていた。本当に人が生きていくということは厳しい。うどん、温泉、子供たちの成長、そういうささやかなことを支えに普通の男の人たちは生きているのだろうか。俺にはそういう殊勝なまねはできないのだ。

確かに道は空いていて、1時間も経たないくらいで京都についた。運送屋さんにはお礼をこめて2000円チップをあげた。

それからがまたしばらくは大変だった。大量に持ってきた荷物は片付けなくてはならない。それまでのもので要らない家具は解体して捨てなきゃいけない。大型ゴミに電話したが、ゴミの回収は週に1回なのだそうで、運悪く丸ごと1週間待たされることになった。大型ゴミは、早朝にマンションの前に出すので、それまでは部屋の中が片付かない。狭いマンションなので、解体した家具にぶつかりながらトイレに行かなくてはならなくなった。いつになったら落ち着くのか、やれやれ。

大量に持ち込まれた家具を収納するには部屋の中につぶり溜まっている本も捨てざるを得なくなった。捨てるのはもったいないから実家に送ろうかと思ったのだが、母から断られた。「実家に送った本なんて、もう2度と読まないでしょう。自分の出身地を言うのさえ嫌なくらい、故郷を嫌っているあなたが実家に帰るのはたまになんだから。断捨離したほうがいいわよ」と。それもそうだなあと思い、ブックオフに引き取ってもらうことになったが、本を入れるためのダンボールがない。近所の激安食品店に行って、「段ボール譲ってくださいませんか」と頼んだ。店で働いているのはまだ高校生くらいの男の子で、「はい、どうぞ」と言ってくれた。ここで3箱ほどもらったが、いざ本を入れてみるとこれでは足りなかった。近所のコンビ

ニやスーパーなど、いろいろなところで箱をもらって、結局8箱となった。ブックオフの方は翌日に即取りに来てくれたので段ボールはすぐになくなった。

さらにDVDをどうにかしなきゃいけない。友人の話だとタワーレコードにDVDカバーが売っていて、ケースを捨ててこれに整理すればスッキリするというので、カバーを買った。これも思っているより多くて、カバーは一箱では足りず、3回くらいタワーレコードに行くことになった。店にも在庫がなくなってしまい、取り寄せなきゃいけないというので結局、1週間くらいかかった。DVDの整理カバーなんてあまり売れないのだろう。DVDなんかいっぱい持っている人はマイノリティなんだなあと痛感した。

せっかく綺麗なテーブルをもらったのだが、動かしているときに大きな傷をつけてしまった。ショック。Amazonで調べると傷を目立たなくする絵具が売っている。それを買った。でも最初買ったやつはワインレッドで色が合わないことに気づき、もう一度他のものを再注文。今度はうまくいった。まあ、いいかテーブルに多少の傷があるのはレトロな喫茶店風でむしろ風情である。

そんなわけで、なんかかんかで落ち着かない生活が続いたが、3月の下旬になって、どうにかそれまでのゴミゴミした生活からは解放された。テーブルや椅子やソファがきたので、部屋は部屋らしくなった。これでお客さんが来ても大丈夫。炊飯器や新しい電子レンジももらった。本当にいい親友を持ったものだ。これから新しい生活だ。

3. 初めてパンダを見る！

3月終わり。親友と一緒に大阪で食事をした。ここまで来たんだったら、動物園に行こうかという話になった。俺は生まれてこの方パンダを見たことがなくて、一度見てみたいと彼に話したことがあった。2月の27日で56歳になった。もう人生が終わりに近づいてきているから、これまで未経験のことはできる限りしておかなくてはならな

い。

神戸王子動物園に向かった。動物園はコロナのため見ることができない動物がいるとのことで、無料で開園していた。ラッキーである。しかし、肝心のパンダを見ることができなかつたらきた甲斐がない、一瞬心配になったが、タンタンは顔を見せてくれた。結構たっぷり外に出てきたので、写真や動画も撮りまくることができた。やはり動物園ではパンダが圧倒的人気で、パンダのいるところの周りには多くのカメラを持った家族連れが集まっていた。

俺は子供の頃から変わった子だった。だからパンダに親近感を抱く。俺とパンダはお互い絶滅危惧種なのだ。動物園では変わった動物の方が人気があるのに、人間の世界はなぜ変わったやつをいじめようとするのかと考えた。

自分のことをパンダと思ってしまえば、俺の人生は悪くない。パンダのようにユニークで、貴重で、色々な人が群がってくる。可愛くて、おっとりしていて、太っていて、そういうおじいさんになろうと思った。

パンダ見物は思っていた以上に癒される経験だった。パンダが笹を食べている姿を動画にとったが、何度見ても癒される。俺はこれから自分のことをパンダと思おうと思った。パンダは異性交際もほとんどしないと聞いている。ずっと一人で生きてきた俺にぴったりだった。

パンダのぬいぐるみと並んで写真を撮り、それをFBやLineの新しいプロフィール写真とした。

4. 映画カフェ

次に新たな出会いが起きた。FBで繋がっている映画関連の仕事をしている人から、映画のカフェが近所にあると聞いた。調べてみると俺の住んでいるところから目と鼻の先のところで、ありがたいことに自転車置き場もある。ここにしばらく連日のように通うことになった。カフェセバークというお店である。

店主のおじさんは70くらいの人だが、一人でこ

の店をやっていると言っていた。店の中は映画のポスターが何枚も壁に貼られていて、パンフレットも大量に置かれている。映画関連の本も置いている。

料理もとても美味しくて、パンは毎朝焼いているらしく、トーストも絶妙。コーヒーも美味しい。これはいいお店を見つけたと思ったものだった。

おじさんは相当映画をご覧になっていて、暇があれば映画館を梯子すると言っていた。これまで俺が繋がっている映画ファンは大学関係者や映画関連の仕事をしている人たちで、あくまでも趣味で映画を見ている人との出会いは初めてかもしれない。

俺はすっかりこの店のファンになって、当然 SNS でも繋がったのだった。

毎週、映画ファンが集まる集いもやっているみたいで、そこにもそのうち参加しようかと思った。

5. 外食から自炊へ

一方で、この頃から、コロナが一気に仕事に影響するようになった。卒業式と入学式の中止は早くに決まっていたが、さらに大学の授業の開始の延期が発表され、しかも、その延期の期間がどんどん伸びていく。あっという間に春学期(前期)は対面授業ができないからオンライン授業に代替することになり、オンラインの講習会に出かけたり、毎日送られてくるメールでの対応に追われたりする毎が続いた。

そして、ついに全国に緊急事態宣言。あれよこれよとしているうちに、映画館、スポーツクラブ、近所の TSUTAYA、全て休館となり、飲食店は弁当屋になってしまった。

コロナは俺だけじゃなくて、みんなしんどいわけだから仕方がないと思いつつも、どこにも行かない日々は辛くて、戦争中はこんなものなのかと思ったりもしたものだ。56 年も生きてきて、こんなひどい歳はなかったし、こんな災難が待っているなんて、思いもしていなかったのだ。

歳をとると新しい経験なんてなくなっていくが、

今年は遠隔授業のために Zoom、Teams、Hangout などの使い方を学ぶことになった。

そして、外食に行くのも憚られるため、自炊をスタートさせることも余儀なくされた。

俺が今住んでいるマンションは、オール電化で炊事場も電気コンロなのだが 8 年暮らしてほとんど使ったことはなかった。俺は全て外食でフライパンも急須もないような生活をしていたのだ。とりあえず、近所のホームセンターで最低限の調理道具を買い、最初に挑戦したのはハムエッグだった。

F B で繋がっている女性からクックパッドが参考になるときていて、炒め物を作り始めた。とりあえずたくさん野菜を食べなくてはと思い、ほうれん草と豚肉、豆苗と鶏肉、レタスと牛肉など、大量に野菜と肉を炒める。それをアップで写真にとって F B に上げる。「まあ、美味しそう」というコメントが入る。それまで 30 年近くも料理から遠ざかっていたのが信じられないくらいの自炊の日々が始まった。

炊飯器も親友からもらったので、ご飯も美味しいものが炊ける。自分で炊いたご飯ってなんと美味しいんだろうと自画自賛しながら、自炊もそれなりに楽しいことを実感したのだった。

俺はこれまでもっぱら買い物はコンビニだったが、スーパーに通うようになり、そうなるにあまりの安さに目を向いてします。思えば、俺はこれまで、食費にどれだけの大金をかけてきただろう。スーパーで買い物をしていたら、今頃貯金がたくさん溜まっていたのかもしれないのだった。

6. オンラインな日々

オンライン授業が始まると、様々な人にメールやラインやメッセージでやり取りする日々が始まった。

他の先生たちもオンライン授業に慣れていないため、どうやっていいかわからない、機械音痴の先生だったら使えない人もいるだろうし、あれやこれやミスが起きる。オンラインでのテストはど

うしたらいいのか、映像はどうやって流したらいいのか、出席はどうやって取るのか、初めてのことがたくさんなので、先生同士協力しあって情報交換しないことにはうまくいかないのだ。

家に1日いると退屈なので、しばらくやり取りしていなかったかつての教え子たちにも連絡をすることになった。東京に住む教え子は旅行者勤務だが台湾人の女性と結婚していて、今年の秋には式をあげるということがわかった。京都で中学の先生をしている教え子は中学でのコロナの対応のことを教えてくれた。和菓子屋に勤めている教え子は、外国人客がいなくなって、今は仕事が全くなくて暇なんだと言っていた。

居酒屋で働いている友人は小さな店なので人件費削除のためしばらく暇をもらってしまい、奥さんの稼ぎで生活しているらしく、毎日家で料理をしてそれをInstagramに上げてくれる。毎週マッサージに来てくれる友人は、奥さん共々フリーのマッサージ師なので仕事がなく、せっかく子供を保育所に入れることになったのに子供も入園式のみで通えないと話していた。福祉で無利子のお金を貸してもらうことになったのだが、「元々貧乏だから大丈夫だけど」と言っていた。

スポーツクラブでかつてお世話になっていたイケメンのインストラクターも律儀に返事をくれる。スポーツクラブは6月から開けられればいいのだけれどと語っていた。大きな会社に勤めている人はいいけれど、小さな飲食店やミニシアター、あるいはフリーランスの仕事の人は深刻である。クラウドファンディングの呼びかけも始まった。普段お世話になっている俺としてはお金を寄付しなきゃいけないんだけど、まだ今は自分自身が余裕がない、ちょっと待ってくれ!!!

2年前に卒業した教え子からは突然写真が送ってきたりもした。そこには彼と彼の友達が写っていた。彼らとは卒業の時に食事をしたのだ。二人は別々のところに就職して、一人は関東、一人は名古屋にいたのだが、久しぶりに二人会ったので、俺のことを思い出してくれて、連絡してくれたの

だった。

最近結婚した教え子からは突然、彼が上半身裸でトレーニングしている動画が送られてきた。背面から撮られているのだが、見事な背中だ。「奥さんが撮ったの？」と訊くと、「セルフで撮ったんです」とのこと。彼とは卒業後何度も会っていて、温泉にも何度か行って、お互いに裸を見せ合う仲になっている。俺のことが嫌いだったら裸の写真なんて送って来ないだろう。彼は俺に心を許してくれている。

そんなわけで、昔の俺だったらやり取りする相手なんて誰もいなかったのだけど、今は連絡してくれる人や、きちっと返事をくれる人が確実にいるのだ。少しは自分に自信を持ってもいいのかもしれないと思ったのだった。

それにしても女つけのない生活だ。俺は女性との付き合いはとうに諦めているので、そのことになんの不自由も感じないが、死ぬまで頑なに女性を拒み続けるのもトラウマが癒えていない証拠だ。死ぬまでにはこのトラウマを解消し、せめて友人としてもっと女性と付き合えるようにならなくてはならない。

これから女性と付き合うためには女性に理解してもらうことはないと思うが、本質的な違いもあるのだろうが、生まれた時から女として生きてきた彼女たちには男の心の眩きの部分はいくら言ってもわからない。わかってもらおうとするから、女性への不信感が募っていく。今の俺はこれだけ男の友達がいるのだから、彼らと完全に同一化して、女性と付き合うという部分でも同一化するべきなのだろう。東大の先生の安富さんが言うところの「ホモマゾ」の論理を受け入れなくてはならない。男は辛いけど、俺たちは男なんだから、一緒にそれに耐えようねという男たちのホモソーシャルな価値観を分かち合わなくてはならないのだった。

女性から虐待された過去のトラウマもそろそろ封印しなくてはならない。俺は女性に傷つけられた逆転現象で、その後、相当女性を傷つけるよう

なこともしてきているのだから。

7. ニュースに目覚める！

俺はお恥ずかしいくらいにニュースを見ない。そもそも高校にまともに行っていないため政治の基礎知識がないので、ニュースを見てもトンチンカンでわからない。それに若い頃から長い間、引きこもりで自分の心にばかり意識を集中させて生きてきたため、外には目が向かず、政治には無関心だったのだ。

ところがコロナの影響で、ネットのニュースを毎日かじりつくように見るようになった。今日の感染者は何人？それが気になって、毎日夕方にはTwitterを検索している。なかなか減らなくて、減ったかと思うとまた増えて、コロナとの戦いは一進一退。もう本気でコロナ鬱になりそうだった。それが5月になって、やや収束の兆しだ。東京の感染者も1日2桁となり、関西も徐々に減っていて、四国や東北などはほとんど新規の感染者が出ていない。だけど、まだ油断はできないだろう。

本当に困ったコロナだが、コロナのおかげで、ニュースを見る習慣が付き、周りの人たちが安倍さんを嫌う理由もわかってきた。56歳になって、やっと政治に目覚めてきたのだった。

そんなわけで、この3ヶ月間は本当に慌ただしい日々だった。様々な変化が起きた。この連載をずっと読んでくれている人にはわかると思うが、この連載で自分史を綴ってきて、毎回あまりネタがないなあ、面白くないかもしれないなあと思いながら、書く日々が続いていた。

しかし、今回は次々に違ったことが起きたので、歳をとってもまだまだ人生何が起きるのかわからないなあという気持ちにさせられたのだった。

8. 『ヒキタさん！ ご懐妊ですよ』 (細川徹監督・2019)

さて、映画に関しては、京都は映画館が全部閉まっているため新しい映画は見るができない。近所のTSUTAYAも先頃まで閉まっていたので、

配信やネットレンタルで見る日々が続いているのだが、その中でこの映画をお勧めしたいと思う。

マニュアルみたいな映画である。俺は結婚していないし、子供がいないので、不妊症や人工授精のことなんか全然知識がないが、それがよくわかって勉強になる映画だ。

俺はもう結婚したり、子供を作ったりということは絶対にないはずなので、どうでもいい話でもあるのだが、ここまでして子供を作りたいと思う人が世の中にはいるのだと簡単してします。

子供なんて作ったら、病気、いじめ、受験、就職、結婚とあれこれ気を揉まなきゃいけないのに皆さん健気だなあと感嘆してしまう。

この映画、話の焦点は、子供のできない夫婦が不妊治療や人工授精を駆使してどうにか子供を作るという部分にあって、その後の子育ての部分に置かれているわけではない。だから、この人たちが果たして子供を授かった後幸せになったかどうかまではわからない。

でも、そんなのはどうでもいいか。何らかのことに囚われて、一喜一憂していくのが人間の人生なのだ。

思えば、俺は結果を求めすぎるのかもしれないのだ。結婚して、子供を作っても、幸せになれなかったら意味がない。その後のことを悲観的に考えてしまうため、一步が踏み出せないのだった。

多少は行き当たりばったりにならなくては！そんなことを思ったのだった。人間の人生は全て悲しいもの、幸せになんてなれないのだと割り切らなくては！！！！

役場の対人援助論

(3 3)

岡崎 正明

(広島市)

私の入院放浪記

こちら側からあちら側へ

ひょんなことからこの2月に、1ヵ月ほどの入院生活を体験した。

ご存じの方もそうでない方もいると思うが、私は身体障がい者手帳をもっている。その関係で、幼少期に半年ほど入院したことがある。なので入院自体は初めてではないのだが、とはいえ約40年ぶりのことで物心ついてからは初で、ほぼ未知の世界とっていい心持ちだった。

今の生活の大部分を占める「家庭」と「職場」から切り離される。それは私にとって、みんながいる賑やかな街から1人出て、先の見えない荒野をあてもなく放浪する。まるでブライト艦長と喧嘩してホワイトベースを飛び出し、砂漠を彷徨うアムロのような…。そんな心細さと寄る辺なさでいっぱいであった。親父にもぶたれたことないのに！

これまで私は父母の丈夫な家系のおかげか、広島の子田舎の水があったのか、大きな病気もケガもせず、アレルギーや花粉症などの現代病とも無縁だった。そのせいかあまり自分の体について顧みることをせず、健康に対して変な自信をもっていた。

それがこの度、精密検査や運動リハビリの学習のために入院することとなり、ようやく立ち止まって己の体と向き合い、対話する機会を得た。そこでは健康のありがたみなど、多くの入院経験者が感じるであろう気づきがあった（本当にありがたいご縁です）。

と同時に、普段対人援助職として当事者を支援するサイドの、つまりは「こちら側」からばかり見ていた景色の、ちょうど反対サイドである「あちら側」から、対人援助職をじっくり眺め、当事者をたっぷり味わうことで、初めて見えてきたもの、改めて深く理解できたことが多々あった。

私の個人的な入院日記なんかここで開陳してもしょうがないが、対人援助職の視点に

関することならば、世の中に少しは役に立つ普遍性があるかもしれない。そんなわけで今回は、私が入院生活で援助される側になってみて見えた景色の一端をご紹介しますと思う。

期せずして新型コロナ禍のタイミングと重なった。私たちの誰もが、いつ支援を受ける側になってもおかしくない状況がすぐそばに来ている。ぜひ我が事として読んでいただければ幸いである。

対等であって対等でない

「こちらが岡崎さんのお部屋になりますねー」

入院初日。ベテラン看護師さんに案内されてたどり着いたのは、縦長の2人部屋。手前のスペースにはすでに別の男性が入っていた。私は挨拶をして奥の窓側に進んだ。カーテンで仕切られたベッドとその周囲1mに満たない範囲が、私の今後1ヵ月の生活の場所として割り当てられた。

「テレビカードはスタッフ詰所前で売ってますから。あ、延長コード持ってきますねー」慣れた口調で進む説明に置いて行かれないようにと、こちらの緊張度は少し加速する。

その後トイレ・風呂場・ランドリーなどの共用スペースを案内され説明を受ける。お風呂は男女が曜日ごとに時間を分けるスタイル。当然だが、自宅のように好きな時間に好きなだけ入ることはできない。

最後にたどり着いた食堂。共用の冷蔵庫や湯沸かし器の使い方を聞いた後、いくつも並ぶ4人がけテーブルのひとつに誘導された。

「え〜と。ここ…にしましょうかね？お名前貼っておきますので、お昼からここで食事をとってください。食べ終わったらそのままでもいいですから」

あっという間に私が今後1ヵ月間食事をする場所が決定した。隣席や向かいにはすでに先輩患者の名前が貼ってあり、どんな人と食事を共にすることになるのか、否が応でも気になってくる。

彼女は当然のように主導権をとりつつ、あまり形式ばらない口調でテンポよく話を進めていく。その姿は小気味よいほどである。私は不満や納得を感じる間もなく、目の前で展開する現実を受け止めることに終始した。

ひと通りの説明が終わり、自分の病室に戻りながら私はある思いに至っていた。

内容は分かりやすく、混乱させられるようなこともなかった。具体的に教えてもらうことで、以前より入院生活のイメージもクリアにもなった。それなのに不安や戸惑いはあまり解消されない。むしろモヤッと感が増した気もする。これはどういうことか？入院初日だからこんなもんか？ほかに何か要因が？

思い当たったのが、彼女の我が家を案内するかのような“こなれ感”と、くだけた雰囲気だった。

その立て板に水のような説明は、確かに頼れる支援者としても映った。しかし同時に、圧倒的な支援者側のホームを感じさせ、その対比としてこれでもかというほど、こちらのアウェー感を身に沁みさせた。

また、彼女の話にはほとんど質問や確認がなかったのも大きかったように思う。病状や体調に関する決まり事のような問いは2、3あったものの、「分からないことはないで

す？」とか「慣れないから不安ですよ」といった、私の理解度や心情を伺う発言はなく、スラスラと説明が一方通行で進んでいった印象だった。

「自分も似たような対応をしていることがあるかも…」私はとっさに胸に手を当てていた。

対象者との垣根をあまり作りたくない思いから、私はやりとりの中で、あえてフランクな物言いすることがある。また、説明したい思いが先走りすぎて矢継ぎ早に話を進め、相手の理解度を確認できていないという事態にも心当たりがあった。

どんなに良かれと思ってした行為でも、その結果相手に不快な思いをさせては意味がない。当たり前なことだが、私は改めて何事にも長所と短所（副作用）が存在し、どんなに良いと思われるスキルや手法も、相手の背景やタイミングを見極めて使うことで、初めて生きてくるのだということを思い知らされた気がした。

私はこれまで「支援者も当事者も、同じ人間として対等だ」と思ってこの仕事をしてきた。

もちろんそれは基本的に間違っていないだろう。

だが私たちが社会のある場面で「支援者」と「当事者」という看板をつけて出会う瞬間。その立場やスタートラインは大きく違う。我々はそのことを、プロフェッショナルとして大いに自覚しなければならない。

親しみをもってただ近づくだけでは、無意識に相手を傷つける可能性もある。そんな自戒に至らせてくれた体験だった。

管理下で暮らすということ

入院が決まった当初、私は不安もある一方、どこか楽しみにしている部分もあった。

仕事を離れ、家の雑務からも解放され、のんびりと積み上げていた本を読んだり、観たかった映画をみたり…。慌ただしい日常を忘れて少しまったりできるかも…と、甘い妄想をしていた。

しかしいざ実際に入院してみると、当然のことながら病院はそんな夢の国ではなかった。妄想は蜃気楼のように消えた。もちろんそれは病院のせいではなく、圧倒的に私自身の問題であるが(笑)

あらためて気づかされたのは「管理された集団生活」というものが、いかに私たちの一般的な、いわゆる自立した社会生活と違うか、ということだった。

振り返って考えてもらいたい。

「あなたが夕食後に歯を磨くタイミングは？食後すぐ？30分後？寝る前？」

「お風呂に入るときの習慣は？本を持って入って長風呂する？先に体を洗う？それともまず湯船につかる？タオルはフェイスタオルで間に合わせる？それとも必ずバスタオル？」

「ご飯のお供がいる人？毎日欠かさずとる食材がある？ご飯派？パン派？それとも麺？」

「独り言はするほう？鼻歌は歌う？音楽を聴く？いびきはかく？暑がり？寒がり？」

考えれば考えるほど、私たちの「日常」や「当たり前」はみんな違うと分かる。

生活とは、いうなれば「個人のわがままの集合体」のようなものだ。トイレの使い方や、物の整理の仕方ひとつをとっても、その人その人の、その家その家のやり方がある。そこには多数派や少数派はあれど、絶対に正しいひとつのやり方などというものは存在しない。

しかし「管理された集団生活」というものは、個々人のそういった細かなスタイルを、すべて尊重するようにはできていない。そもそも病院であれ施設や寮であれ、管理された集団生活というものは、なんらかの目的をもち、その効率性を考えて作られた構造である。

だからいかに管理者側が工夫して利用者の自由を増やしたり、選択できる環境整備をしようとしたりしても、そこには限界がある。そのため家庭生活であれば問題ないこだわりや習慣が、集団生活では「個人のわがままだ」「嫌ならお引き取りを」という事態になってしまう。

入院生活自体は確かに雑務に手を取られることが少なく、楽な面が多いのも事実だ。炊事も掃除も人任せ。安全と安心を自分以外の誰かが考えてくれ、保障してくれる生活であり、ある意味本当に快適だ。

だが他人におのれという船のオールを預ける生活というのは、自らの判断で行き先を考えることをやめ、自分の選択に労を注ぐこともしなくなってしまう。それは結局個人の主体的な力を奪うことにつながり、やたらと他罰的・被害的になったり、防衛から諦めがちな思考に陥りがちな傾向を生みやすい。

そんな入院患者をそばで見たり、おのれ自身もそんな傾向になっていくことを感じ、私のストレスはボディーブローのように少しずつ蓄積していった。長期入院が患者のQOLに悪影響をもたらすという理論を、身をもって感じた日々だった。

これは児童養護施設の元職員から聞いた話だが、例えば食事の献立についても、施設では毎月1ヵ月の予定が事前に栄養士などの専門職によって作られるのが通常だという。学校の給食を思い出してもらくと、何となくイメージがつくだろう。

だが普通の家庭では事前に1ヵ月の献立が計画されているというのは、まず聞かない。むしろ「今晚何にする?」「カレーが食べたい!」「TVで観てたらラーメンが食べたくなった!」などという会話がなされ、無計画にその時の気分や状況で献立が決まることが多いのが普通だろう。

そのため施設で育った子たちはそういう経験が乏しく、社会に出てから困ることがあるという。なるほど。言われてみるまで当たり前すぎて、そんな日常のひとコマの持つ価値や意味に気付いていないが、その中で我々は自分の意見と相手の意見を擦り合わせたり、主体的に物事を決定していく術を自然に学んでいるのかもしれない。

また、個人的には何気ない日々の生活音や家族の喧噪が、とても恋しくなった。実は私は独り言や鼻歌がわりと多い人間で、自宅ではブツブツ言いながら活動したり、中途半端な歌を口ずさんでは生活のリズムをとっている。しかし静かな病院での共同生活では、そんな些細な音でさえ周囲に気を使い、いつもどこか気を張った状態で過ごすことになる。

災害時に避難所の体育館での生活がストレスで、車中泊や壊れた家屋での生活を選択する人が多くいたというのも、なんとなく理解できる気がした。

他人の靴

保育士でコラムニストのブレイディみかこ氏が、著書の中で「他人の靴を履いてみる」というイギリスの格言を紹介していたことがある。

相手の立場に立って物事を考える。相手の背景に思いを馳せ、そこから見える世界を想像する一。そんな態度を端的に表現した、とてもいい言葉だと思う。

私たちの価値観や選択・好悪・趣味嗜好は、それぞれの DNA と置かれた環境・経験から導き出された、実に個人的なものである。そこに唯一の正しさや「あるべき姿」などない。だから当然、こちらの正義と相手の正義はぶつかることがしょっちゅうだ。所詮私たちは、互いを完全に理解するなんて永遠にできないのだろうと思う。

しかし同時に、だからこそ相手のことを、違う立場のことを、よりよく理解しようとするべきなのだと思う。そこに新たな学びや、可能性が見つかるのだ。

我々の先祖が生物の生存戦略として個体差という作戦を選択したのは、「違い」こそが強みになることに気付いたからだ。科学技術の進歩や芸術・文化の発展は、まさしくその「違い」という名の多様性があったからこそ生まれたものだろう。

まだまだ修行中の私は靴を履き替えるだけでは足りず、仕事着を入院服に着替え、自宅を病室に置き換えてやっとここまでイメージできた…というわけだが、対人援助の職につく人にも、そうでない人にも、時には自分の靴をちょっと脱いで、相手の靴に足を入れてみることをお勧めしたい。その履き心地や、そこから見える世界を想像することは、きっと自分の世界を広げることに役立つと思うから。

臨床のきれはし Sheet9

浅田 英輔

AUGUMENT

○話し合いにならない世界

議論しにくい世の中である。

人はお互いに理解し、議論しあいながら成長していくものだと思っている。他人を本当に理解するなんてことはできないのかもしれないけれど、いくらかでも理解しようとするし、されたいと思う。誹謗中傷から議論は生まれないし、そもそも誹謗中傷する人は「誹謗中傷したい」だけであって、議論する気がないということが問題なのだと思う。我々の中にはどうやら攻撃性というものがあり、大義名分の元、暴走してしまうこともままあるようだ。ただ、無用な暴走にはペナルティもあるし、「ごめんなさい」ということもできる。自分の失敗を受け入れながら、他者の失敗も受け入れながら、意見をすり合わせ、よりよい答えを見つけていくのがよいのではないだろうか。

社会だって同じだ。ただ意見をぶつけ合ってもだめで、お互い聞きつつ、批判もしつつ、最終的なよいカタチを作っていくのが理想的だろう。

しかし、実のある建設的な議論ができているのだろうか。きちんと見えるのは自分のまわりくらいであるが、ごくごく身近な「打合せ」では議論ができることも多いように思う。しかし、少し大きな会議になると、途端に議論の場ではなくなってしまう。

「突っ込まれないような無難な資料」を用意し、議論ではなく説明でしかない場合も多いのではないだろうか。

我々の国全体について議論すべき国会があつた様子であるのは象徴的なものかもしれない。この国では、物事を推し進めるために議論は必要なく、反対意見に対しては意味のない長文を返答して黙らせ、強引に採決に持ち込み、数の暴力で押し通してしまうことが「正しさ」なのかもしれない。

議論ができなくなっているのが顕著であるのは、ネットの世界だろう。議論どころか、誹謗中傷ばかりだし、それが目立っている。

有名人などは、

目立ったところで発言する

→ クソリプだらけ

→ 撤回、謝罪

→ 発言しなくなる

といった流れができてしまっている。

無難なことしか言わない人が増える

→ 目立つことをいう人はたたかれる

→ より無難な発言が増える

となる。無難なことばかり言っていると、物事に変化が起きにくくなる。批判があっても関係なく、自分の主張を続ける人たちもいるが、そういう人たちのもとにはさらに

多くの罵詈雑言が届いていることと思う。
好きではない芸能人に「しね」などとメッセージを送るのは理解しがたい。そんな暇とエネルギーがあるなら、好きな芸能人に「すき」って送ったほうが有益じゃない？（それはそれで気持ち悪がられる可能性はあるが）

○クソリプしてる人はヒマなのか

Twitterなどで有名人が一言いうと、正当な批判があるのは喜ばしいくらいで、言いがかりといえるものが非常に多い。

「このお店のケーキおいしい！」などと書いたとすると、

→宣伝ですか？いくらもらってるんですか？（もらってないし、もらっててもオマエに関係ないだろ）

→ウチの店はまずいということか？撤回しろ。（そんなこと言ってないだろ日本語嫁）

→病気でケーキを食べられない人の気持ちを考えたことがありますか？不謹慎だ。

（不謹慎警察）

→あなたがおいしいからといって万人がおいしいと思うとは限らない。（だからなに？）

→私はおいしいとは思いませんでした。

（だからなに？）

→30年前からある老舗です。今更ですか？

（だからなに？）

いわゆる「クソリプ」（クソみたいなリプライ）の例として挙げられているものだが、実際にこういうことが起きている。インターネット、メール、SNSは非常に手軽で便利だが、その手軽さゆえ「クソリプ」も手軽にできてしまうのが難点といえど難点だ。

現実の場面においても、役所仕事をしていると感じるが、文章にしろ口頭にしろ、とにかくエクスキューズから始まることが多

い。この場合のエクスキューズとは、「事前の断り」「転ばぬ先の杖」「先にしておく言い訳」「責められる前の予防線」という意味である。

メールを「いつも大変お世話になっております」とか「お忙しいところ恐縮ですが」とかで始めるものもそうだろう。

ネットの世界でもへんな慣習ができています。Twitterでは「FF外から失礼します」だし、Facebookでは「シェアさせていただきます」だし、これらもエクスキューズのひとつといえるだろう。

※1 「FF外から失礼します」→「フォローしてもされてもいいのに、コメントさせていただきます」の意。Twitterはそもそもそういう仕様なのだから「はじめまして！ねこちゃんかわいいですね！」でいいじゃないか。

※2 「シェアさせていただきます」→素敵な記事などを、自分のページでもお知らせすることを「シェアする」という。いい意味で「仲間にもいいふらす」という感じ。そもそもシェアされたくないものはシェアできないようにできるので、「シェアする」のボタンがあるということは広めていいということ（設定しわすれだなどと思うなら、「これシェアしていいやつ？まずそうだけど？」と聞けばよい）。シェアしたことを伝えたいなら「ステキな記事、シェアしました！」でいいじゃん。なんでそんなに下から「させていただく」のよ。いっそのこと「御シェアありがとうございました」くらい言っちゃえば面白いのに。

同様に、行き過ぎた敬語も気になる。「それでは研修会をはじめさせていただきます」などというのは、誰に何をさせていただいているのかと問い詰めたくなる。「開始いたします」で十分ではないのか。「お手元にございます資料の何ページをご覧くださいなのですが、こちらにございますのが例1でございます。こちらにつきましては、皆様ご存じの通りでございまして、大変使いやすくなっております」とかもう「ございます」が耳障りすぎて内容が入ってこない。敬語はそれ自体に情報はなく、情報伝達という意味においては無駄でしかないため、その割合が増えるということは、無駄な時間が増えるということになる。

失敗を受け容れない姿勢、誹謗中傷の多さ、質問に対する的外れな回答、クソリプ、無駄な敬語などを挙げてみたが、どれも、議論を寄せ付けないことに結び付いていると思う。挙げる課題もその結果も、即時性が求められその場限りのものになる。長期的な視点は重視されず、すぐに成果が見えるものが喜ばれている。

○議論しようぜ

ここまで書いた「議論を求められてない」ということに加えて、即時性が全面に出してしまうと「議論ができないこと」も問題となるだろう。議論が、「どちらの主張が正しいのか、相手を言い負かすこと」となっているのではないだろうか。議論による結論としては、「AかBか決める」といったものになるだろうが、本当は「AのいいところとBのいいところをとって、Cという結論にする」ことが理想的ともいえるだろう。

議論ではなく、ただ自分の意見を言い合っているだけのことも多い。人の意見を取り入れるのがうまくなく、「主張を変える＝敗北」とでも言わんばかりである。非の打ちどころのない、100点満点の答えでなければ受け容れなかったり、「正しいことはひとつでなければならない」といった信念があったりする。主張に対する意見も、マイナス面を述べて相手を言い負かそうというだけでは、適切な議論にならない。

世の中って、正解か不正解か、じゃないはずだ。そんなこと誰だって知ってるし、先達として後輩に「世の中とはそういうもんだぞ」と助言していたりもするだろう。私だけが絶対正しいってこともない、っていうことも知っているだろう。でも、人はたまに「絶対にオレさまが正しい!」「落ち度があるオマエが悪い!」としちゃうのだ。

また、人はかわる。「前はAがいいと言ってたけど、今は考えがかわってBのほうがいいと思っている」なんてことも当たり前ののに、「おまえは前はAって言ってたじゃないか!信用できん!」などと、変化するのが当たり前だと知っているくせに、責める材料にしたりもする。

○政治家選ぼうぜ

政治家を選ぶ議論が例になるかもしれない。

「Aさん」→でもあいつ自民党だしな。

「Bさん」→民主党もダメでしょ。

「Cさん」→公明党なんてもってのほか。

「Dさん」→あいつは10年前にひどいこと言ってたんだぞ。

「Eさんの考え方好きだな」→5年前に失言してるからダメだ。

じゃあ誰が清廉潔白で 100 点満点なのよ！と言いたくなる。100%完璧な結論も政治家もいないのだから、自分の意見に近いことを多く言っている人、絶対反対したい主張をしていない人を選ぶのが良いのだろうと思う。(※政策は例です)

例1：この人は選択的夫婦別姓を主張しているから支持したいが、原発再稼働を主張している。これは受け入れることができないから違う人にしよう。

例2：この人は教育改革に力を入れて、水道民営化に反対しているところは賛成。消費税増税の派閥に入ってるけど、そこは仕方ないか。この人を応援しよう。

例3：そもそも何言ってるのかわからない。一貫性を感じられないからこの人はパスだな。

例4：前回、この人は「今の内閣を変える」って言ってたからいいと思ったのに、いまは現政権と同じこと言ってるじゃん。これは受け入れられないな。

譲れないこと、許せないことはあるだろうから、そこはよいとして、例えば、ただ改革すればよいというものではない「教育改革について」「水道民営化について」はさらに議論の余地があるだろう。ここで例えば、国鉄民営化や郵政民営化の功罪を考えてみるといいかもしれない。インフラとして、電気事業はどうだろう？うまくいっているところは？民営化が悪影響を与えたのはどこだろう？と話し合うといいかもしれない。「民営化は悪である」「党として民営化を進めなければならない」というスタンスでは、話が深まらないのである。

○主張しようぜ

議論に必要なのは、主張である。これがなければどうにもならない。そして、主張するのは結構めんどくさい。自分の考えを少しまとめ、足りないところは調べ、反対意見も調べてみたりしないと「自分の考えはこれだ！」としにくいからである。「なんとなくすきい」でも構わないのだが、議論の対象にはなりにくい。

「原発再稼働に反対」するのは簡単だ。核の汚染の被害は広く長くかかるからだ。じゃあ、足りない分はどうする？安全性とはなに？今あるものはどうする？廃炉後の対応は？設置している地域の経済は？などなど、考えることはたくさんある。全部を知って意見できるまでいかになくとも、「なんも知らないけどなんかイヤだからはんたーい」では議論にならないのである。

頭から否定せず相手の主張も聞きつつ、自分が調べたことをもとに主張し、意見を伝え、すり合わせることができるとが増えれば、世の中はだいぶよくなるんじゃないか、住みやすくなるんじゃないかと思う。

発	達	検	査	と	対	人	援	助	学										
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	③	1			
													大	谷	多	加	志		

第 10 号から始めた連載が、今回で 31 回目となりました（一度だけお休みしました）。今年の 4 月から、自分自身の働き方も大きく変わりました。人は、自分が立っている場所によって、感じる事がとても違うのだということを、身をもって感じました。そんな中で、この連載を今号でいったんの区切りにしようと思います。そして、次号からは新しい連載で、再スタートしようと思います。立ち位置が変わった、今だからこそ感じることを書いていこうと思うからです。今号のタイトルである「発達検査の対人援助学」は、新連載のタイトルであり、これから考えていきたいテーマの一つです。今号は、これまでの連載の最終回であり、次の連載の第ゼロ回であり、という心持ちで書いています。

この連載は 2012 年の 9 月にスタートしました。ここまで 8 年間 31 回の連載でした。この 8 年間、私の仕事の中心にあったのが、連載のテーマである「新版 K 式発達検査」です。発達検査という特性上、検査内容を直接記述することはできなかったのですが、検査を巡って日頃考えていることを、その時々思いついたテーマで切り取って、連載を続けてきました。31 回も続けられて、その気になればまだ続ける余地があるということが、この検査が持っている奥深さの一つの表れであるように思えます。

また、仕事に何か一つの軸があるということが、思考を深め、活動や人とのつながりを広げていく上で、とても大きな力になっていたことを知り、自身の置かれていた場が恵まれていたことを実感しています。人に力を与える「使命=Mission」とは、このようなものなのかもしれません。

立ち位置が変わったことで、今自分が何をするかを改めて考える機会を得ました。今度は、巡り合わせで決まるのではなく、自分で決めることが必要であると感じています。幸いにして、引き続き、研究の場も、教育の場も、実践の場も与えられています。とても恵まれています。そんなことを思いながら、スッと頭に浮かんできた新連載のテーマが「発達検査の対人援助学」でした。

このテーマを選んだ動機はシンプルで、“発達検査を用いて、私たちは何をしているのか（いったいどのような対人援助を行っているのか）”という点を、もう一度根本から見直してみたくなったからです。

「発達検査」というのは、良くも悪くも一つのツールです。その意味では、レントゲン検査とも、CT 検査とも大きな違いはないかもしれません。しかしながら、「発達検査」をめぐる関係者に生じる出来事や、それを取り巻く感情や葛藤は、他の検査とは少々異なる部分も少なくないように思います。

ここでは、他の検査との差異を生じさせて

いる要因について、発達相談という場の特徴という観点から説明してみようと思います。

一般に医学的な検査は、健診であれ、精密検査であれ、何らかの異常や病因を発見するために用いられることが大半でしょう。とくに異常所見がなければ一安心ですが、病因を特定するための検査であれば目立った異常が見つからない場合、それはそれで少々困るかもしれません。ただ、この場合でも、病因は検査した部位や内容の異常によるものではない、という形で可能性から除外していくことできるので、病因の特定に向けて一歩前進したことにはなります（実際には、偽陰性など、検査の信頼性の問題がありますが）。このように、医学的な検査では、その状況における好ましい結果が何であるかはさておき（異常が見つからないのがよいのか、病因を特定するために見つかる方がよいのか）、関係者にとっての好ましい結果はほぼ一致するでしょう。要するに、本人は異常値が出ないでほしいと思っているのに、家族は異常値を願う、というような食い違いです（2時間サスペンスならあるのかもしれませんが…）。発達検査の場合は、ここに多少の食い違いが生じる場合があります。

まず、園の先生から発達相談を勧められて、気乗りしないものの検査を受けることになったケースを想定します。この場合、相談に気が進まなかった保護者からすれば、検査上は問題ない（平均範囲内）というのが望ましい結果になります。一方で、相談を勧めた先生の立場は、これと一致する場合もあれば、違う場合もあります。「問題ない」という結果が出ることで、“先生の考えすぎだった”“うまくいかないのは先生の関わり

方の問題では”という責めを受ける可能性があるからです。発達相談への抵抗が強い時ほど、勧めた人と受ける人との食い違いが大きくなりがちです。

ほかにも、保護者が発達検査を希望し、祖父母からは“そんなことしないで…”と言われているというケースもあります。その場合、保護者は「問題ない（平均範囲内）」という結果は望ましくもあるのですが、“あなたの考えすぎだった”“うまくいかないのは育て方やしつけ問題では”という責めを受ける恐れもあります。

この2つのケースはあくまで例として挙げただけで、実際のところ、望ましい結果の食い違いについては、関係者の数だけ生じる可能性があるので、組み合わせは無数です。通常、検査場面には、検査者と子どもがいて、その間に発達検査というツールがあって…という形ですが（図1）、その背景には、その子どもの家族（両親や兄弟）の存在があるわけです（図2）。

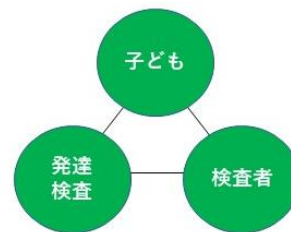


図1 検査場面の構造

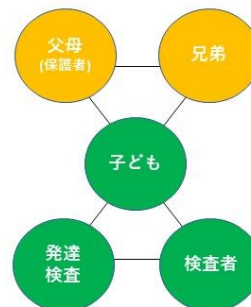


図2 検査を受ける子どもとその家族

さらに、その家族にはさらに祖父母や両親の兄弟がいたりするわけで（図3）、この発達検査の実施についてそれぞれの思いがあるわけです（もちろん、関係性によっては“関心がない”という思いの場合もあります）。

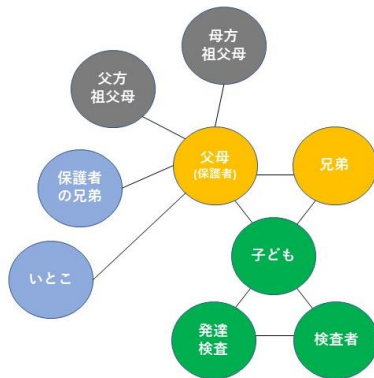


図3 検査を受ける子どもと家族(2)

そして、家族だけでなく、その子どもと関わる園や学校の思いもあります。ここでも、担任や主任、園長（校長）の中で、検査についての考えが一致している場合もありますし、そうでない場合もあります。さらに言えば、検査者自身が、所属機関の意向を背負って、発達検査に臨んでいるケースもあります（図4）。

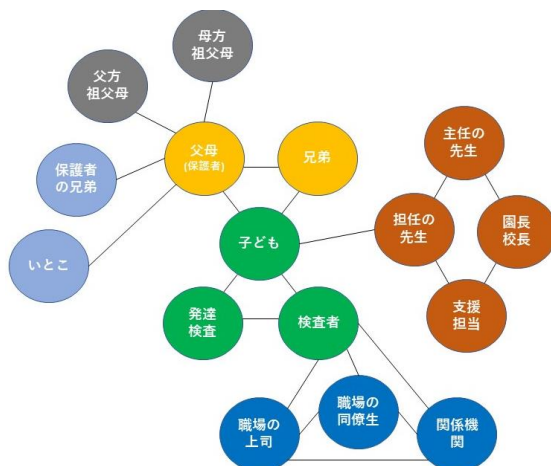


図4 検査を取り巻く関係者

そして、発達検査の結果自体は、そうした関係者の意向とは関係なく、図1の検査場面でのやりとりの結果として表れるわけです。

要約すれば、医学的な検査であれば実施の判断は医師がしますし、通常検査自体に抵抗する人はほとんどいません。また、その時点での望ましい結果についても、関係者で不一致が生じることは少ないでしょう。それに対して、発達検査については、それを受けたい（受けてほしい）という動機を持ち得る人が限定されておらず、極論で言えば、その子どもに関わる人であれば誰でも発達検査を受けることを勧める可能性があります。この時、勧めた人とそれ以外の人で、必ずしも望ましい結果が一致しているとは限りません。受ける—受けないという判断についても、日常レベルにおけるさまざまな力関係が含まれた結果としてなされることも少なくありません。

このような「発達相談」の場を考えると、狭い意味での発達検査を実施する場面だけを扱うのではなく、“そもそも発達相談とはどのような対人援助場面であるのか”という点から問い直してみることが必要ではないかと思うのです。

この連載は、31回目で一区切りです。次号からは、この「発達検査の対人援助学」をテーマに、新たなスタートを切りたいと思います。

講演会 & ライブ な日々 ㊿

古川 秀明

学校という居場所と新型コロナウイルス ～スクールカウンセラーは見た！～

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、一斉臨時休校の措置がとられ、現在（この原稿を書いている5月24日時点です）も解除されつつありますが続いています。

そこで今回は臨時休校措置が始まった3月から現在までの、学校という子供達の居場所について、スクールカウンセラー（以下 SC と表記）の立場から見た私の考えを書かせて頂きます。

一斉臨時休校中、教職員は交代で勤務します。

そして、自宅学習のためのプリントを配布する家庭訪問、電話などを通じて、子供の安否確認をします。休みが長いので、さぞかし子供達に異変が起こるのでは・・・と思いきや、みんな案外元気なのです。しかも、一斉休校に伴い、いつのまにか学校から消えた問題がいくつかあります。

① 不登校

学校に通わなくてもいいのですから当然不登校も成立しません。そして今、不登校だった子供達が元気です。学校へ行く必要がないので、誰に負い目を感じる必要もありません。同じような報告を、引きこもりの若者を専門に扱っている仲間のカウンセラーからも聞いています。新型コロナウイルスの影響で外出自粛、営業自粛、テレワークなど、

家族が家の外に出ないのは、引きこもりという状態を目立たなくします。ずっと部屋から出てこなかった不登校や引きこもりの青年が、家族と一緒にコロナ関連のワイドショーを見ながら自分の意見を言ったりしているようです。中には引きこもっている自分の経験から、楽しい引きこもりの方法を自分の家族に教えている人もいます。その意見には「なるほどなあ」とうなずける所もあり、そうなる今までは日陰者だった不登校や引きこもりの人たちに、良い意味でのスポットライトが当たり、ほんの少しにせよ自己肯定感が上がります。その結果、普段より元気になれるというわけです。このように不登校の子は休校のおかげで元気ですが、その反対に元々学校が好きで元気な子はどうかという、みんなそのまま元気です。(少なくとも私が勤務する小学校から高校まで、学校に行けないから子供がノイローゼになったという報告はありません)。つまり、休校により、学校という「場」が無くなると(機能が停止すると)今まで元気がなかった子は元気に、最初から元気な子はそのまま元気であることが確認されました。1995年にSCが導入されてから、「不登校」は学校が抱える問題 NO.1 です。そんな根深い問題を、新型コロナウイルスは皮肉にも、わずか3か月で解決してしまいました。

② いじめ

学校が休みとなり、物理的に学校内でのいじめは発生しません。私の勤務する学校でも報告されるいじめ事案はゼロです。(ラインやネットなどの見えないところのいじめも含んでいます)。子供に起こるいじめはほとんどが学校での人間関係から生まれますから、学校がないことといじめがないことは連動しているのです。その理由を学校の構造から考えてみましょう。学校は教室で区切られ、そこに同年代の子供が大勢詰め込まれます。同年代の子供を同じ場所に集めると、必ずいじめが発生します。これは子供達の性格や育った環境よりも、狭い場所に同じ歳の子供を大勢集めるという「場」の影響が大きく働いています。いじめ問題では、「社会問題」「親の育て方」「教師のクラス運営の在り方」など、様々な原因が論じられていますが、そのどれもが「学校ありき」で語られています。つまり、学校は存在しているものということの大前提にして、いじめの原因を探り、解決策を見出そうとします。そこに「もし学校がなかったら・・・」という発想はありません。それを新型コロナウイルスはひっくり返しました。もちろん学校がなく、登校できないことによる弊害は山ほどあります。しかし、いじめられていた子供にとっては、学校が閉鎖されたことで毎日の苦痛、心の傷、自殺などから守られているのも事実です。いじめは、学校という「場」がメインステージなのです。

③ 発達障害

発達障害を持つ子供の最大の苦痛は人間関係です。発達障害の子供が抱える「場の空気を読めない」「人との距離感がつかめない」などのコミュニケーションに関する問題の多くは、学校で起こります。家の中は、幼いころからその子が暮らしやすいように構造化されており、さほど問題は起こりません。発達障害を持つ子供達が、休校によってパニック

を起こしているという報告は、少なくとも私の勤務校では聞きません。家で快適に時刻表を眺めたり、ゲームをしたりしているようです。

④ 親の負担

学校がないので、食事など日常生活における親の負担は大きいでしょう。しかし、学校関係のストレスはありません。特によく学校で問題を起こす子供の親は、学校からの「実は今日も～君がこんな問題を起こしましてね」という、寿命が縮むような連絡を受けなくて済みます。また不登校の子供を持つ親は、毎朝学校に「すみません、今日も起きてこないで休ませます」という、とてもストレスフルな電話をしなくても済んでいます。

⑤ 児童虐待

臨時休校で虐待は増加しています。ただ、その増加率は想像するほど高くはありません。5月に報告された厚労省のデータによると、1月～3月の虐待対応件数は前年度より1～2%増で、コロナが影響しているかどうかは不明です。今後の推移を見守らないと何とも言えませんが、学校臨時休校で虐待対応件数が激増したのであれば、明らかにコロナが原因だと思われます。しかし現状では、子供が学校を休んでいるから虐待が増えたというよりも、親の経済状況やストレスが原因となっているのではないかと思います。

⑥ モンスターペアレントと教師の休職

子供が学校に来ないので親がクレームを入れる要因がありません。いくら理不尽な親でも「学校が悪いからコロナが蔓延した！」とまでは、さすがに言いません。

親のクレームもなければ手のかかる子供に振り回されることもない教師は、元気がないにしても、わざわざ休む必要はありません。教師にも在宅勤務が認められているので、あえて年休や時間給をとる人などいないのです。

「学校休校で発生する問題を考える」

1 <学力の低下>

休校による一番の問題は学力の低下です。だけど学校があろうがなかろうが、勉強する子はしているので成績は下がりにません。コロナが収束した後、もし学校がなくても、勉強の質だけで言えば、学校は学習塾にとっくに負けているので、学力維持は学習塾で十分です。また休校中にタブレットやzoomなどのインターネット機能を使い、対面式の授業を自宅で受けることが可能ですが、休校中にネット学習を実施した学校の生徒参加率は、毎回ほぼ100%だそうです。つまり今まで不登校だった子は教室で勉強することができなかったもので、

学力も下がりますが、自宅に居ながらのネット学習であれば授業に参加できるので、不登校で全く授業に参加できない時よりも勉強量が増えると思われます。

2＜人間関係＞

人間関係については学校でしか構築できません。しかし、それだけを考えるのであれば、同年代の子供達を狭い教室に大勢詰め込む以外の方法もあると思います。以上のようなことから、子供にとって「学校という居場所」の喪失が、様々な問題解決になり得ることが推察されます。

「まとめ」

こんなに良いことばかりがあるのだから「学校をなくしてしまえ！」などと乱暴で早計なことを言いたいものではありません。

今回の休校はウイルス感染防止の一時的な措置であり、それが当たり前になれば新たな問題は必ず起こるでしょう。

しかし今回の「一斉臨時休校」は、学校という子どもの居場所について、何か一石を投じているのかもしれない。

考えてみれば、新型コロナウイルス以外に日本中の学校を休校させる力のある存在はないのです。

不登校やいじめの解決策を考えるために、一度学校を閉めて様子を見ようという発想など誰も持っていませんし、意図的にそんなことを画策しても、数えきれないほどの問題に直面し、結局は現状維持に落ち着くだろうと思います。

ところがこのウイルスは問答無用で即実行に移させました。

コロナで亡くなられた方や、経済的に大打撃を被った方にはこれ以上の不幸はありませんが、‘教育現場’はここから何かを学ぶ姿勢があっても良いのではと思います。

学校という「場」は人間が編み出した素晴らしい教育システムです。後世に残すべき偉大なものです。

が、その制度が経年劣化を起こしていることも否めません。

教師も親もカウンセラーも、既存の学校システムの中で育っています。

言い換えれば、今の学校制度しか経験していませんし、それが揺るぎない常識となっています。

学校を閉鎖するという、自分が経験していないことを発想するのは難しいものです。

人間は未経験の領域に足を踏み入れることに強い不安と恐怖さえ感じます。

そんな臆病な私達に新型コロナウイルスは「ほら、学校を閉めたらこんな良いことがあるんだぜ」と、教えてくれているような気がします。

(そのやり方はとても脅迫的ではた迷惑ですが・・・)

今ある学校を残しながら、新しい「学校という子供達の居場所」を考える時が来ているのではないのでしょうか。

人類史上、ウイルスはいつの世も厄介なものですが、彼らを排除できない以上、共存し、逆にウイルスから何かを学ぶしたたかさも必要です。

そんな積み重ねが実を結び、いつか学校の問題が全部なくなる日が来たら素晴らしい。

あ、そうすると真っ先に SC は失業してしまいますね。

ま、ええか。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

家族と家族幻想 2

坂口 伊都



人の行動を左右するもの。

それは何だろう。

価値観、文化、年齢、立場…。

いろいろあると思うが、育てられ方
からも様々な影響を受けているよう
に感じる。

Stay Home が促され、それが緩和されつつもコロナウイルスの第2波を心配する状況下で、このマガジンが発行される頃は、どのような日常になっているのかと思いながら書いています。誰にも先が見えないストレスの中、日常を送るという今までになかった体験を課せられていますが、皆さまお元気でお過ごしでしょうか。私の生活も、な

かなか職場に出向けなくなり、Zoom でミーティングをするように変わりました。まさか、機械に関心がない私が、パソコンの画面を見ながら話をするようになるとは思わなかったです。必要に応じて、人は変化して対応していくもので、これも進化の一つでしょうか。2 月末に企画していた研修も開催できなくなり、1 回延長をして会場を押さえたのですがこれも断念し、Zoom ウェビナーのオンライン研修に切り替えることにしました。たまたま 2 月の研修担当の代役を引き受けることになり、何故かそのままオンライン研修の担当に居残りってしまいました。私の意志とは関係なく、未知なる世界に足を踏み込んでしまい、対応に苦慮しています。

また、私が講師を務める予定だった研修も会場開催は無理なので、ビデオで撮って送ってくださいと言われました。研修時間が 1 時間に短縮になったので、すぐ終わるだろうと高を括っていたのですが、久しぶりに出社したパソコンで状態が悪く、別のパソコンでプロジェクターに繋ごうと思ったら線が違って繋がられません。その線を見つ

け出すのに時間がかかり、やっと繋がったと思ったら、今度は画像が出てきません。この時点で、心の半分が折れていました。何とかビデオ撮影する段取りまでこぎつけ、ビデオ撮影をしようとする
とプロジェクターの画面に虹色の光のノイズ（テレビをビデオで撮ろうとすると出るやつです）。まじかああああ。ノイズの消し方を調べていろいろ試しましたが、ノイズを消すことはできず、あんなに苦労して繋いだプロジェクターは何だったのか。仕方がないので、パソコンにスライドショーを映し、ビデオ撮影すれば何とかかなるかと思いましたが、人と画面のバランスがよろしくない。次の策は、一人 Zoom ミーティングでスライドショーを画面共有すれば、小さく人も映り、録画可能と思いつき、これでやっと撮影に入れました。朝一から始め、撮り終えたのが15時過ぎで、1時間の研修にほぼ1日をかけてしまい、気が遠くなりました。

オンライン化と言えば、娘がこの4月から大学の新生になりましたが、キャンパスに入れないので、ゴールデンウィーク明けからオンライン授業になっています。入学当初は、右も左もわからない中、科目登録をしなければならず、親もシラバスを読み込んで悪戦苦闘。その中、ガイダンスをオンラインですることになり、先生の顔を見て話を聞けて、素直に娘が喜んでいました。顔がわかり、人柄を知ることが新生を落ち着かせるのだなと驚きました。その時からの大学に対する不

安が減って落ち着きました。人が人と繋がることの大きさを感じます。オンライン授業のみならず、9月入学の話やクラスを小規模にしていく等、これまで課題と言われてきたことが、急速に動こうとしているように見えます。

当たり前だと思われていた日常を変えていくことは難しいですが、今回のように外的要因があり、せざるを得ない状況で物事が動くのだなと感じます。新型コロナウイルスが収束した後も社会の変容が残り、新たな仕組みに組み変わっていくでしょう。

緊急事態宣言が出ている状況でも日々の生活の中でも、私たちは何を基準に行動を決めているのでしょうか。人は、誰しも価値観を持ち、そこから行動を決定していることが多いと思います。価値観とは何か。例えば、「健康、金、秩序」の3つの中なら、何を優先させますか？と尋ねられたら、何て答えますか。即座にどれかに決めて答える人もいるでしょうし、具体的な状況が見えないと決められない、あるいはその質問自体が愚問だと言うかも知れません。

今年のゴールデンウィークをガマンウィークと読み替えて言うのを初めて聞いた時、上手いことを言うなあと感心しましたが、これだけ気温が上がり、緑も芽生え色とりどりの花が咲き、天候に恵まれれば出かけたくなる気持ちが沸いてきます。海なら大丈夫だろうと出かける人がいるとニュースになると、その海岸に立ち入らないよう看板



が立てられた場所には人はおらず、隣の海岸に人が集まるっていると報道がありました。その一方で家から外に出たらダメなのだと脅迫観念にとらわれる人もいます。何を優先させようとするかで行く手が変わります。その時に抱いている価値観は、年代や置かれている立場によっても違いが出てきますが、その土台は子ども時代に刷り込まれているのではないかと感じる事が多くあります。子どもの頃に受けた影響は案外、強く居座っているのかも知れません。

誰もが、自分の生き方はこれでいいのだと思いたい。自分の生き方が間違っている誰かに言われたら、ショックで立ち直れないかもしれない。

生きていくことは、何か信じられるものを探して、背負っていくことかも知れません。

相談を受ける時、子どもが30歳を超えても子どものままであり続け、親は子どもの上に立つ者として居続けてることを良しとするのだなと感じることがあります。その時の親子は、同居や生活圏内を居住地にしている印象を受け、成人した他のきょうだい達も生活圏内に住んでいることがままあります。そこでは、強烈な権限を持つ親の機嫌を損ねないように立ち振る舞ったり、逆に弱弱しい親を囲う、親族の誰かが常に責められる立場にいて、全体のバランスが保たれている等の家族の

背景が見えます。それにプラスをして、〇〇すべきという家族内の共通した価値観が存在しているようです。

例えば、親の言うことは絶対であり、子どもはその言葉を叶えるよう努力したり、従うべきであるという価値観。それが大きくあると、それに逆らう選択肢は悪だと判別され、疑う余地がなくなります。その一方で、苦しみ、悲しみ、怒りといったネガティブな感情と葛藤している姿も見えます。対人援助職と会話をする中で、別の価値観があることを知り、その価値観に納得するが、生活に戻れば親族の揺るがない価値観と向き合わなければならないので、関係性の深さや長きに晒されてきた時間を考えれば、価値観を上書きすることはそう簡単なことではありません。

同じような価値観の中に留めようとする他の親族が落ち着いているかといえば、常にトラブルが起きていました。きっかけは、どこでもあるような些細なことですが、こじれ方が大きくなるのが特徴のようです。

よく耳にする例をあげると、成人した子どもが友人と遅くまで遊び歩いているとその親が厳しく咎めることから始まり、成人した子どもの方は、自分はもう大人で、久しぶりに出かけただけでそこまで言われないとならないのかと言い返すと、あの頃のあなたもそうだったと荒れていた頃を持ち出され、子どもの方が言葉を飲み込み、両者とも不完全燃焼のままその日は幕を閉じます。そして数日後、パッと着火するかのように激しく再燃。成人した子どもは親に自分の気持ちをわかって欲しいと必死になりますが、親の方は全く聞く耳を持たず、最終的に子どもの方が言葉を飲み込み、自分が悪いのだから仕方がないのだと己を宥め、諦めることに必死になると同時に親に認めてもらえないことの傷を深めていました。親との関係に葛藤しながらも成人した子どもは、親とスープが冷めない距離で暮らすことを選択し続けていたので、生活圏の外に住むという選択肢を考えたこと

があるか尋ねると、自分一人でやっていく自信がないと言葉を濁します。袋小路をぐるぐると回り続ける終わりのない日々がそこに見えてきました。

この親子には、子どもの自立という発想を横に置いて、永遠に続く不動の親子関係を作っていました。子どもは、大人になって自立するという社会一般の価値観をこの親子も知っていましたが、親の方は子どもがまた荒れていた頃に戻るのではないかと不安になり監視下におきたがり、成人した子どもの方は、親に認めて欲しい、わかって欲しい、愛して欲しいという思いが膨れ上がり、そのことで手一杯になっているように見えました。常日頃からお前はダメな奴、いつまでも半人前、周りにどれだけ迷惑をかけてきたかと周囲から言われ続ければ、自分が一人でやっていけるわけがない、親の近くにいないければ自分はやっていけない人間なのだと思い込んでいくのもわかります。そこに子どもの頃から続けてきた大人の顔を見て、機嫌を損ねないようにしてきた習慣と親が寂しくならないように近くにいることが親孝行なのだという価値観等が下支えとなると関係を維持していくことができるようです。

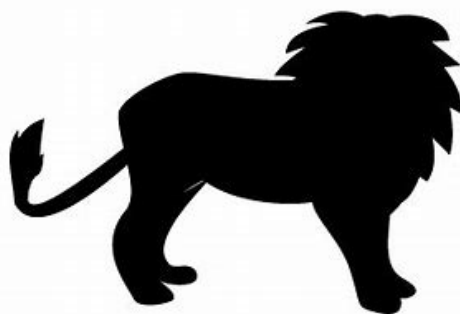
価値観を維持するためには、「正しい」や「間違っていない」という思いが必要になります。その確認ために、周りと答え合わせをし、周りが正しいと言っているのだから間違っていない、大丈夫だと安堵します。その考えを揺るぎないものにする方が自分にとって都合がいいですから、強固なものにしていこうとします。周りに同調者が複数いれば、その思いは間違っていないと自信になり、自分達とは違う意見を主張する他者を間違っていると認識します。疑う余地がない程それは、融通が利かないものになっていき、世の中に溢れる多様な選択肢の存在を見ないようにするでしょう。仮に他の価値観の多様さを認めようとすれば、今まで信じ疑わなかった己の世界が崩れることになるのでしません。自分が信じてきたものが違うのではないかと思うことに不安を感じない人間など

いません。

こうして世の中は、個人の正義で満ちていきます。戦争も「正義 VS 正義」でぶつかり合い、相手を悪と認識することで成立してます。誰もが自分を正義だと信じたい。子ども達に聞かせる昔話も悪と正義が分かれ、正義でいることを良しとして教えています。誰もが、自分のしていることは正義の味方に分類されるはずだと行動に理由や屁理屈をくつつけるいることも多いのではないのでしょうか。

そう感じる一つに、いつまで経っても途切れることの無い下手くそな謝罪会見があります。少し考えれば、違うやり方も見えてくれるだろうにと思いますが、当人は己の言動が矛盾していることを見失い、正義の味方に居続けるための言い訳に必死になっているだけに見えます。

人は自分の生き方を肯定してもらうことを望み、否定されることを恐れます。だから、自分と違う生き方をしている者が自分と立場に近い程、容易に認められないかもしれません。そう考えれば、古くからある嫁姑問題も起こって当然です。自分の生き様を肯定するために、自分と意見が食い違う者を「悪」と認識し、私の方が正しいのだから、多少強引にでも正しい方に導かなければならないと思い、そこで繰り広げられる行動に躊躇がなくなり、相手を傷つけることも厭わなくなるでしょう。想像しただけで、恐ろしく面倒くさくなります。



「自分で決めた」「私は私」と思っている、これでいいのかと確かめたい。

時には根拠のない自信に満ちたり、そうかと思えば、急に理由もなく焦燥感に駆られたりする。ちょっとした日常の変化で、気持ちも左右されているような気がする。

己の根っこにある価値観とは、どのようなものだろうと思います。子どもの頃に生き延びていくために習得しているものは、無意識の域の中に存在し続け、追い込まれていく状況に顔を出すように感じます。それは、よく身体が疲れた時に弱い部位に症状が現れるのと似ている。

いつもは冷静に考えられますが、自分の古傷に触れると、悪い癖が出る。さほど恐ろしくないものに敏感になって恐怖に落ちる。そんな時は、周りと同じようにしなくてはと焦ることがあります。我が家だけ違うことをしていないか心配になり、誰々さん家の〇〇ちゃんが塾に行き出したと聞けば、我が子も行かせないといけないのではないかと「我が子」を見るのではなく、周りを見て安心したがつている自分に気づきます。子どもの頃、親から周りとは比べられる言葉を数多く言われ、傷ついた経験がそうさせているのかも知れません。

他にも、高校生になった子どもの帰宅時間がいつもより遅く、心配もするがイライラして不機嫌

になっていることに気づきます。心配することとイライラすることはイコールではないので、怒りはどこからか由来しています。もしかしたら、自身の子ども時代、門限が厳しくて友人と遊んでいても気もそぞろになっていたことを思い出しているのかも知れません。あるいは、幼少期に夜に恐怖を感じても誰も慰めてくれず、一人で耐えていた経験が喚起されて不安になっているのかも知れません。そこに加えて、自分は親の顔色を優先してやってきたのに自分の子どもは私をないがしろにしていると八つ当たりした怒りをぶつけているのかも知れません。

ある人から、子どもから馬鹿にされたら大人の沽券にかかわると厳し過ぎる態度に出してしまうことがあると相談されたことがあります。それは、大人である自分が何かを恐れているのでしょうか。年少期から大人に従うことを強制されてきて、自信を持ってない部分を子どもが本能的に刺激しているのかも知れません。自分が冷静に考えられないと気づいたとき、自分の古傷がうずいているのでしょうか。私たちは、生きてきた中でいろいろな経験をし、時には苦い思い出もできるものです。

では、自分が認められた感じた時は、何が起きているのでしょうか。自分の存在を認められた、それは自分の考えや思いに共感してもらえた時だと思います。人が作り出す文化の中には、何が正義かをあらゆる角度から問いかけてきて、その作品から情動が動くと、それを他者と共有したくなります。そして自分と同じように感じていたのだとわかると嬉しくなって、自分の感覚は間違っていないのだと安心します。話も盛り上がりやすし、高揚感も得られます。

人は群れを成して生き延びてきた種なのだから、周りを気にしてしまうことを避けることはできないのでしょうか。どのような価値観であれ、他者との共有なしには成立しないようです。

2017年度 岩手・福島

村本邦子（立命館大学）

2月27日、アボリジニの調査でブリスベンに滞在中、安倍首相が、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、全国すべての小中高校と特別支援学校について、3月2日から春休みに入るまで臨時休校するよう要請したというニュースが飛び込んできた。一緒だったメンバーたちが、その間、子どもをどうするかでざわめき始め、仕事のキャンセルの連絡も入り始めた。同日、大学からも、卒業式と入学式の開催を中止するという連絡が入った。帰国し、あれよあれよという間に、楽しみにしていたイベントや仕事の中止の連絡が入り続ける。なるべく日常を維持したく、自分からのキャンセルはせず、3月10・11日の東京出張は決行した。メインの目的だった福島関連のシンポジウムは流れたが、共同研究者、編集者との打ち合わせ、第五福竜丸展示館訪問である。

4月7日のハラスメント研修や教授会は、通常通りキャンパスで開催されたが、同日、東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡に発令された5月6日までの「緊急事態宣言」を受け、立命館大学も全キャンパス入構禁止、授業はすべて休講となった。外出自粛で、買い物と散歩以外、自宅から出れなくなったので、私は、人生稀にみる暇人となった。でもまあ、考えてみれば、私の人生は不要不急のものばかりである（個人的には、不要不急こそ人生だと思っている）。もともと“living with virus”を主義としているが、今回ばかりは、自分は元気でも無症状者としてリスクの高い人に感染させるかもしれないというのがネックである。コロナ禍が私を土地に縛り付けた。元気なうちはあちこち飛び回って、年を取ったらゆっくり近場を回ろうと計画していたが、結果として、今回、近所を歩き回ることになった。そして、地元大阪の「土地の力」を見つけている。歴史を経て伝承されてきた災禍や民話や祭り他、これらも証人として記録に残さなければと思いつつ、今のところフェイスブックのメモ程度である。まずは、ここに少しだけ記しておこう。



2017年11月 岩手

11月2日(木)～3日(金) フィールドワーク

一泊前乗りで花巻空港着。レンタカーを借り、平泉と巖手溪を經由して、宮古のプロジェクト前にはほぼ毎年訪れる臨床心理士の友人河野暁子さんと会うために大船渡へと向かう。どこもかしこも紅葉が美しい。



早く到着したので、盛駅の歩道橋から線路を眺め、三鉄の盛駅に行ってみる。コミュニティスペースは、もうなくなっていた。そろそろ震災も過去のことになったということなのだろうか。JR 盛駅の方の待合が逆に広がっていて、山田線 11 月 5 日再開（昨年の台風 10 号の土砂崩れで再度不通となっていた）のポスターや BRT についての説明版などが設置されていた。

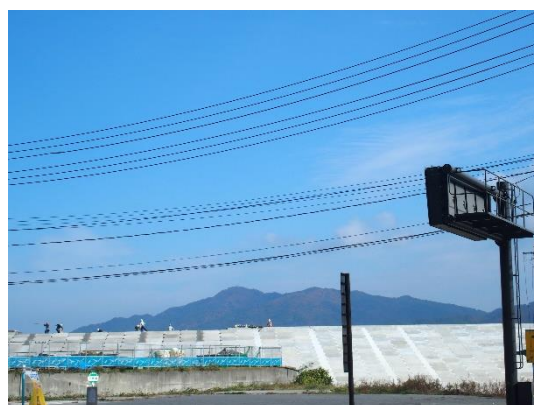
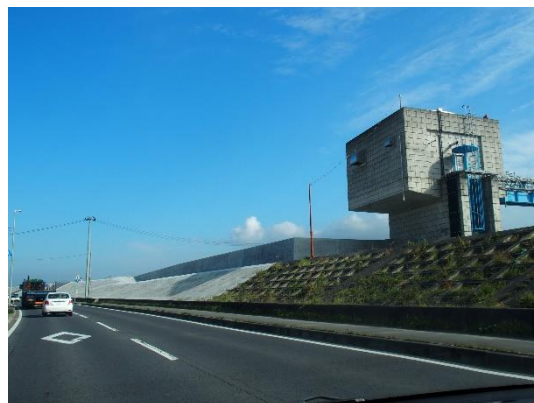
ポルコロッソで1年に一度の美味しいイタリアンを食べながら、河野さんと話し込む。

朝、大船渡温泉から美しい海の景色を見て、人間の営みも自然の一部なのだと感じ

る。即座に原発を思い、複雑な気持ちになった。

思い立って、朝、大船渡プラザホテル周辺に行ってみる。2012 年、初めて大船渡に来た時に泊まったところだ。周囲は地盤沈下であちこちに水が溜まり、ホテルの半分はまだ修理中だった。今、プラザホテル周辺には商業施設がたくさんできていて、キャッセン大船渡フードビレッジ、かもめテラス、ライブハウスまでできていた。ホテルは何か小さくなっているように見えたが、後で聞くと、実際に小さくなったんだそうだ。このあたりは、かさ上げしなければならない地区に指定されたため、2012 年に泊まった半分も取り壊され、新築したのだそうだ。



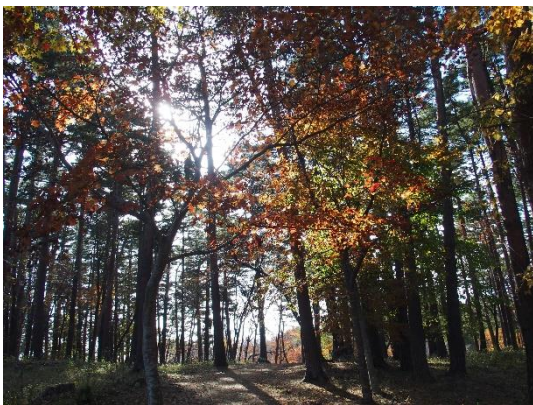


周辺は、商業施設と防潮堤の工事でにぎわっている。大船渡にはコンクリート工場があったために復興が早いのだそうだ。元JR大船渡駅の後に行ってみると、線路はなくなり、工事中だった。BRTの大船渡駅は別にある。

駅に戻る途中、ガソリンスタンドによると、お兄さんが「レンタカーですね」と言うので、時々、様子を見に立ち寄ることを伝え、「復興どうですか」と聞いてみると、「大船渡はもう復興してますよ」と明るく答えてくれた。商業施設もたくさんできて、たくさん人も来るとのこと。

駅前で車を返し、河野さんの車で北上。延々と防潮堤の工事が続く。田野畑のサッパ船アドベンチャーに参加することにして、時間調整に鵜の巣断崖に立ち寄った。





体験村たのはたネットワークには、「番屋」がたくさん並んでいる。船着き場で同乗する予定の団体を待っている間、中机船長のお話を聞く。ここの船も全部持っていたが、一艘だけは沖出しして残ったものだという。ちょうど昆布漁に出ていて、とっさの判断で沖に出て、一夜過ごしたのだそうだ。

船で1時間、北山崎の展望台下あたりまでいく。なかなか楽しい。一緒になった団体さんは香川県から来ているという高齢者14人、元気なグループだった。

船長さん（上村繁幸さん）は地元の漁師さんで、震災の話もしてくれる。発着口から見える断崖の上に赤い旗の印。上村さんがつけたという。そこまで津波がきたのだそうだ。このあたりには番屋が25棟あり、

百選に選ばれたが、被災してすべて流された。番屋エコツアーリズムのHP

https://tanohata-taiken.jp/?page_id=64

によれば

現在机浜番屋群は震災の大津波により流失後、2015年4月に再建されております。震災以前同様漁業と観光の融合した施設として活用されておりますので、お気軽にお立ち寄りいただける施設となっております。

「番屋」は本来、冬に人の引き上げた後、漁場を管理する必要から越年して滞在するための番小屋をいいました。これがのちに漁夫の寝泊りする漁場施設を指していうようになります。ニシン漁が盛んだった北海道西海岸一帯の漁村では、漁船や網を持って多くの漁夫を使う親方の住まいと漁夫の宿泊部を一棟の中に収め、豪放で機能性に徹した大型民家が「鯨番屋」と呼ばれて有名です。

机浜に現存する25棟の建築群は主に漁具の収納やワカメ、コンブの乾燥作業場を目的にしたもので、住居は時化や津波の被災から守るため、そして農耕や炭焼きをするために高低差約200メートルの高台に建てられました。その意味ではこの建築物は「納屋」と呼んだほうがふさわしいのですが、漁期で忙しくなると今でもこの施設に泊まりこみ、「番屋」としての機能も持ち合わせているのです。

「机」の地名はアイヌ語のツク・エツ（小山の・岬）が由来で、浜の周囲は北部陸中海岸特有の断崖絶壁が連なり景色がすばらしいところです。机漁港はウニ、アワビなど磯漁業の拠点として古くから利用さ

れてきましたが、昭和 43 年度から漁港整備が行われ、さらに漁港と集落を結ぶ道路も整備されてからは利便性が向上しました。現在では磯漁業のほか、ワカメ、コンブの養殖が中心となっています。この環境整備で、漁具は車を利用し集落まで運搬できるようになり「納屋」としての機能も失われつつあります。

社会環境整備や車の普及、漁業後継者不足で番屋の遊休化、廃屋化が進み、急速に漁村文化が失われようとしていましたが、「机郷友クラブ」による保存・継承活動が元で、平成 18 年水産庁の「未来に残したい漁業漁村歴史文化財百選」に選ばれ、貴重な漁村の原風景をとどめる所となっております。

上村さんの家はそこから続く坂道を上った高台にあり、そこから見ていたそうだ。道の駅たのはたで豆腐田楽と七色まん（にじまん）を食べ、龍泉洞に寄って宮古へ。メンバーと合流し、よし寿司で海鮮ちらしを食べながら打ち合わせをする。



11月4日(土) 宮古でのプロジェクト

8時半に待ち合わせ、会場へ。魚菜市場の漫画展示がなかなか良い感じ。朝取り野菜市場と自然に一体化している。通りすがりのお客さんも読んでくれている。打ち合わせ。自己紹介をし、手順を確認。

9時半から15分程、市長が来る。鷺田さんがとても喜んでいて、集合写真を撮った。市長も10年計画には驚いたようだった。FBに写真をあげるとのこと。

漫画トークは誘導に工夫が必要だが、30人くらい入ったのではないかな。市場で磯ラーメンを食べてから支援者支援セミナーの打ち合わせをする。

午後は、キッズコーナーで、「アートで遊ぼう」と「故郷の歌や昔話」。輝きの和の絵本読み聞かせの後、シンガーソングライターの小林星（セイ）さんが、宮古の伝統菓子、餃子に似た「ひゅうず」とずんだで作る「すっとぎ」の作り方の歌を歌ってくれる。クックパッドで調べた自作の歌だそう。マイクは市場全体に通っているため、それを聞いたお菓子屋のおばちゃんが「すっとぎ」の実物を持って駆けつけてくれる。少ししかなかったのと、小さく切って爪楊枝をつけ、みんなで食べられるように。魚屋さんでも、「立命さんが・・・」と噂話をされていて、市場で温かく受け入れられていることを感じる。

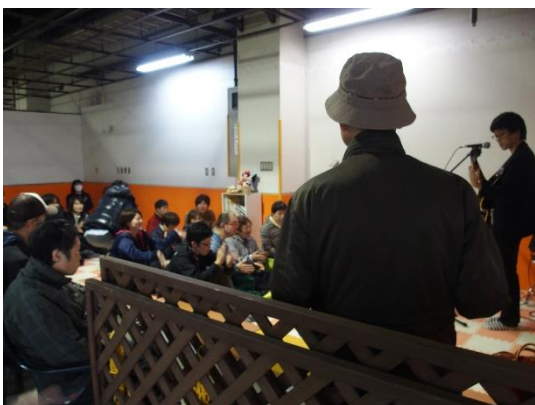
絵本は「鬼より強い嫁」、紙芝居「ふたごの星：宮沢賢治」と自作の「しろこ地藏」スキップの利用者さんがとてもよく笑い、楽しい時間だった。

支援者支援セミナーも2時間かかったが、全体的に良い手ごたえで終わる。被災地で

の事例には被災の陰が見える。支援者たちが親切すぎて、当事者が動かなくて安定してしまっているように感じた。

片付け、打ち上げ。宮古の児相、盛岡の児相から2名ずつ来てくれていて、鷺田さんがとても喜んでいる。所長も、市場の近所で漫画冊子の評判に少し評価が変わったようだった。時間経過の成果がようやく相手に伝わったかと思えた会だった。





11月5日(日) フィールドワーク

9時にホテルを出発、田老の学ぶ防災へ。いつものガイドさんが喜んで迎えてくれる。

最初にガイドを始めた時、来てくれたのが立命館の学生だった。人口が減ってきていて、時々心細くなる。毎日いると変化がわからないが、たまに来てくれる人が「変わりましたね」と言ってくれると「そうか〜」と思える。

防潮堤が進んでいて、囲まれていく。最初の予定とは違ってきている。大切な水門遺構を残して欲しかったが、ある日、突然、コンクリートで閉じられてしまった。二重に築造された津波防潮堤頂部に取り付けられた防潮堤頂部のブロックは 763 あり、これは昭和の大津波の地区犠牲者数と一致し、鎮魂の墓標であったかもしれないと言われている。

もともと防潮堤は津波をなくすものではなく、時間をかせぐものだった。実際、通常 10 分のところを 10 分かせぎ、20 分あった。避難路もどの家からも 10 分で逃げられるようにできていた。田老は死者が少ないとよく言われるが(1.7%)、ゼロのはずが多すぎる。それだけ伝承は難しい。

子どもたちが、自らの判断で山道に並び、乳幼児をバケツリレーのように避難させ、お年寄りをおぶったり押したりして全員助かった。子どもたちは、防災の知識を学校で習ったと言っている。外から嫁いできた女性が、村に溶け込もうと、おじいちゃんやおばあちゃんとよく話していたので、津波がくると皆によびかけ、たくさんの方が助かったという話もあった。

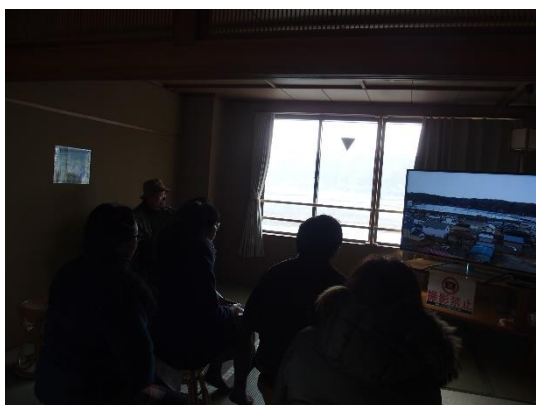
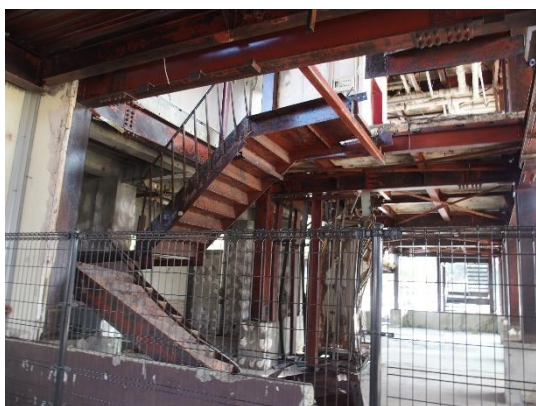


場所を移動して、震災遺構に指定された旧「たろう観光ホテル」の6階に上り、ホテルの社長さんがビデオを回した部屋で、海を見ながらビデオを観る。津波はこの建物の3階まで到達した。津波が建物にぶつかった瞬間、カメラが大きくブレて天井に向いたことがわかる。



車で南へ1時間ほど下り、「風の電話」のある大槌町の鯨山ガーデンへ向かう。

ガーデンに着くと、三陸自動車道の工事が進行中で、かつて海を臨んでいた風景が完全に遮られていた。春には道路が完成し、仙台まで2時間余りで行けるようになるが、残念なことである。何か磁場が変わってしまったような感じがした。





それから、毎年必ず訪れて、定点観測している城山公園から街を眺める。ずいぶん変化があって、大きな建物を建築中だった。来年は街ができているのだろうか。

最後に、今年も、遠野の民話の語り手である大平悦子さんのお宅にお邪魔した。萱葺き屋根の古民家だ。囲炉裏端で、薪から立ちのぼる煙に燻されながら、民話を聴かせてもらった。まずは、遠野物語第 99 話だった。明治 29 年の三陸大津波にちなんだ幽霊話で、津波で妻と子を亡くし嘆き悲しんでいた福二が、月夜の晩に、亡くなったはずの妻が男と歩いているのを見かける。驚いて声をかけると、あの世で結婚前に好き合っていた男性と夫婦になっているのだと言って消えたという話である。

大平さんによれば、福二の妻子は実際に行方不明のままである。福二の子孫も今回の津波で妻を失くし、佐々木喜善と福二は遠い親戚にあたるとのこと。大平さんは、2011 年の大震災から半年ぐらい経ってこの話を語るようになった。最初のうちは、愛する妻が死後の世界で昔の恋人と一緒にいることを知った福二のことを可哀想だと思っていた。でも、今回の震災でも大勢の方が亡くなった家族や知り合いの方と再会する夢を見たという話を聞いたり、

イタコに死者の霊を降ろしてもらって「話
ができて少し安心した」と話しておられる
方のことを聞いたりしているうちに、福二
は奥さんと再会できてよかったのではない
かと思うようになったそうだ。



この第 99 話は、私自身も、2011 年から
繰り返し繰り返し出会ってきた。最初に聞
いた時には、何て話だと、正直、驚いた。
でも、繰り返し出会い、考えたり感じたり
するたびに、違った見方ができるようにな
った。

福治は、悲しみのあまり精神を病んでい
たのではないか、今でいう PTSD のよう
ではなかったかという話も聞いた。もしもそ
うだとすれば、民話は、復興や復旧につい
ていけない苦しむ人々をも優しく包み入
れるものなのだと思う。

民話は深い。



2017年12月 福島

12月1日(金) みんなの家、セカンド

12月1日(金)、会場となるこむこむに集合して、漫画展とプログラムの設営をすませた後、ビーンズふくしまが運営する「みんなの家」を訪問した。やはり、軒先には緑色のシートがかけられた除染土がある。

「みんなの家」には毎年お邪魔しているが、いつ行っても居心地がよく、誰をも暖かく受け入れてくれる雰囲気にはほっこりする。

「みんなの家」は、子どもからお年寄りまで集まれる地域の場として2015年3月にオープンしたが、2017年4月、福島市の委託を受け、子育て支援センターとなった。震災に関わらず、一般に子育てしている人たちが集う。

それに伴い、2017年1月に復興交流拠点として「みんなの家セカンド」がオープンした。こちらは、避難してきた人や避難先から戻ってきた人たちが気軽に集え、悩みや不安を話せる場所である。

日常会話のことや子育てのことが話題になることが多いが、水の話、浄水器の話、家族の話なども出る。みんな背景は様々なので、そこで話されている内容も多様である。

スタッフとしては、ゆっくりできる場を提供すること、近すぎず、遠すぎない関係で話しやすい来やすい環境づくりを心掛けている。「たわいのない話」の大切さを大事にしている。





「大人の部活」というのもやっていて、たとえば、手作りする「ちくちく部」や写真部など。緩やかな参加でルールを作らない気軽に足を運ぶ場所になっている。

また、福島にいるお父さんたちの会である「F パパの会」というのも月1回やっている。母子避難で生活が2つに分かれている家族で、祖父母と家族の板挟みになるケースもある。

食品の放射能測定もやっている。農産物にある放射線濃度を産地別を買ってきて、それぞれ測定して今の現実を見るという取り組みである。参加者である母親たちから、「世間は安全と言っているが、それが本当なのか自ら確かめて、その現実を受け入れて明日から強く生きよう」と声が上がったのだそうだ。

NPO 法人福島30年プロジェクトの協力を得て、選択した3県（福島、山形、茨城）の野菜（根菜やきのこなど）を使った豚汁を作って、放射線量を測る試みもしたそうだ。このNPOは、行政に代わるセカンドオピニオンを提供する非営利組織として30年にわたり放射能を監視し、福島での暮らしを回復するために、学びの場を提供している。

この時の結果は、福島が最も低い検出量

であったということで、「農家の方の頑張りや、検査の徹底ぶりを改めて実感した。『自分で測る』ということは大きい。決して福島産が安全だと言いたいわけではないが、お母さんたちが安心して暮らせるなら」ということだった。聞いていて、「福島の人たちがなぜこんな思いをしなければならないのか」と怒りを感じる一方、お母さんたちの不安をひとつひとつ丁寧に扱い、与えられた条件のなかで、しっかり生きていこうとする人々に尊敬の念を感じる。

また、若者中心にビーンズ農園を始め、そこで作った野菜を測定し、料理してみんなで食べているとのこと。フリースクール見学に行ったチームは、親子食事会でその鍋をごちそうになった。変化していくニーズを常に敏感にキャッチし、地域に根づいた活動を展開していると思う。それに、ビーンズさんの冊子やチラシのデザインはいつもおしゃれである。

課題としては、地域の方ともっとつながっていく必要があることをあげられていた。来てくれる人は増えたものの、まだ「避難してきた人のためのセンター」との認識が残っているらしい。子ども夫婦の避難や引越で孤独を深めている老人たちもいる。そんな人たちもつなげていくことができたらと。

「7年の時間が経過した。そこには割り切れなければやっていけなかったこともある。ハード面は整ってきた」「活動を通して自主避難してきた人たちと再開できて嬉しかった」「復興支援は話を聞くことである」「自分で勉強しながら何ができるかを考えた。今、7年目に入ったが、福島の自殺率の高さなど課題が多い」など、当事

者でもあり支援者でもあるスタッフのみ
なさんの言葉の重みを感じる。

12月2日(土) こおこおプロジェクト

毎年好評の「クリスマスカレンダーをつ
くろう」は、今年も早々に満員締切となり、
当日は、38人の子どもと15人の保護者が
参加してくれた。スタッフ対応の限界から
人数を制限しており、毎年お断りしなけれ
ばならない方々があることは心苦しい限
りだが、「去年は落ちたので、今年は真っ先
に申し込みました!」と参加してくださっ
た親子もあった。わいわいがやがやおしゃ
べりしながら、アイディアあふれる楽しい
クリスマスカレンダーがたくさんできあ
がった。

いつものように東京おもちゃ美術館か
ら頂いたおもちゃとマットを拡げた遊び
コーナーも人気だった。

今年の漫画展は、13作品という過去最大
数の作品展示となりました。漫画トークを
にぎわい広場のオープンスペースでやっ
たのは初めてだったふあ、遊びコーナーで
子どもを遊ばせている保護者や通りかか
った人々も、断片的ではあれ耳を傾けてく
れていたようで、良かったのではないかと
も思った。

昨年に引き続き「遊びの講習会」を担当
してくださったおもちゃコンサルタント
小磯厚子さんとの再会も嬉しく、子どもや
親子を見守る眼差しに同士を感じている。





12月3日(日) 浪江でのプロジェクト

朝8時半に福島を出発し、国道114号線に入って、9月20日に開通したばかりの浪江町帰還困難区域を走った。津島・室原間の27kmで、通行許可証を持つ町民が昼間のみ出入りできるだけ、二輪は今も通行不可ということで、出入り口にはガードマンが駐在していた。浪江と飯館、葛尾を結ぶ帰還困難区域内の399号線は今なお一般車両の通行止めが続き、道が閉ざされている。窓を閉めた車中であるが、途中、ガイガーカウンターがピーピーと警戒音を鳴らし（毎時2.5mSvを超えると鳴るとのこと）、道路沿いには除染土を詰めたフレコンバックの山と堀、遠くに住む人々にはおそらく想像できないような風景がこの地の日常を形成している理不尽を見る。



浪江に入り、福島第一原発から 5km ほどの請戸地区で車を降りると、小高い丘に共同墓地があった。今年の 3 月に作られたばかりの真新しい慰霊碑もあり、死者・行方不明者 182 名のお名前が刻まれていた。津波の被害者ばかりでなく、餓死、つまり、津波に助かったのに、原発被害により救助活動ができなかったために命を落とされた方々も混じっていると聞いた。

2km ほど離れた海の方には茫漠たる光景が拡がり、堤防や防風林堤防の作業が行われていた。プロジェクトで東北に来るようになって、最初の 1~2 年、沿岸部で見た光景だった。その光景は年々変化していったが、避難解除されたばかりの土地は、まだ過去の時間の中にあるのだと思った。かつて、そこには人々が住んでいた。今は、白い塀に囲まれた除染度の黒い山があった。

海岸から 300m、原発から 6km の位置にある請戸小学校は遺構となっている。現在は立ち入り禁止となっているが、外観が残っているのことに驚く。時計は津波の襲った 3 時 38 分のまま、ずっと時間が止まっていたことを訴えているかのようだった。

絵本『請戸小学校物語-大平山をこえて』を頂いたが、これは、町の人から「請戸小の子どもたちが津波から助かった話を、避難中の町民に伝えて勇気づけてほしい」と頼まれた学生が、教員や保護者に取材を重ねて、発行したものだそうだ。請戸小学校には、当時 100 人程の小学生と教職員がいて、14 時 46 分に地震発生、51 分に避難の校内放送で校庭に集合。近所の人たちの「津波が来るから逃げろ」の言葉に、何も持たず、2km ほどある大平山へ向かう。4

年生の男の子の判断を取り入れ、15 時 15 分、大平山に入る。教頭が校舎を確認、最後に車で避難したのが 15 時 25 分で、そのすぐ後、15 時 38 分に津波が小学校を襲っている。小学校の時計はこの時間で止まっている。16 時には請戸地区全域壊滅し、16 時半に雪が降り始め、16 時 40 分、いわきの運送業者の大型トラックの人が全員を荷台に乗せてくれた。

浪江では 2 万人以上の住民が避難し、2017 年 3 月 31 日に全域避難指示は解除されたが、なお「帰還困難地域」が町内の大半を占めてる。10 月末現在で、人口 18,075 人 6,913 世帯のうち、居住人口は 418 人 293 世帯（浪江町 HP）。すでに移住して人口に入っていない人々もいることだろう。来年 4 月に新設の小中学校がスタートする予定だが、入学申し込みはまだ数人だという。

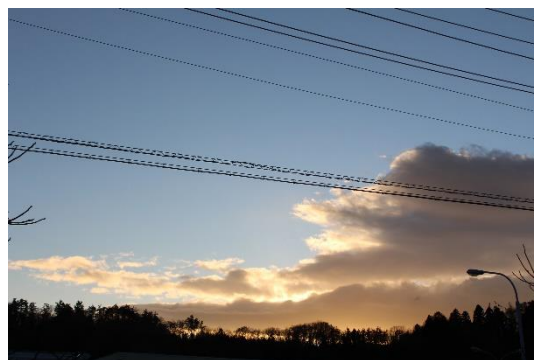
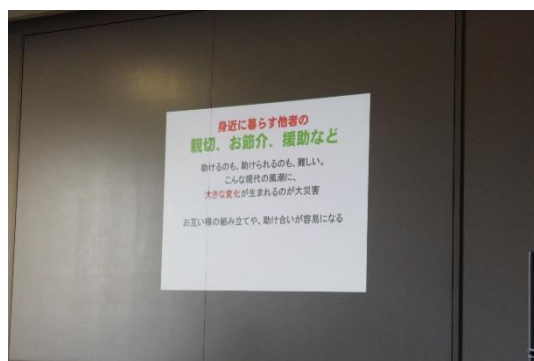






仮設商店でカレーを食べ、浪江町役場へ。休日のせいなのか、いつもそうなのかわからないが、人気は少なく、ひっそりしていた。1階ロビーには、現地の方々に設営してくださった漫画パネルがきれいに並んでおり、漫画トークには10名ほどが参加してくださった。こちらのスタッフとちょうど同じくらいの人数バランスになったので、4つの漫画の紹介後に設定された4回のペアトークでは、多くのペアで現地の方のお話を聞かせて頂くような形になった。1回のトークで4回のペアトークを設けるのは初めてだと思うが、それは功を奏したようだ。証人になるべく出向いている私たちへの気遣いなのか、あるいは外部者だから話しやすいのか、わずか5分で厚いパーソナルなストーリーを聞かせて頂くことになった。

「誰かに話そうにも、話す相手もない。町は、今、誰もいない。老人と、役場に人がいるだけ。子どもはいない」との声が多く、5分のトークが4回だけでも、話してもらえてよかったと思った。来年も訪れることができたらいいなと思った。



つづく

病児保育奮闘記

(23)

子どもサポート H&K

大石 仁美

箱庭はやっぱり面白い！

こどもがなぜこんな事をするのか、その行動が理解できない時、何を考えて、何をしたいのか、またして欲しいのかさっぱりわからない、悪さをしたからといって叱ったり、教諭したりしても、本当にわかってくれたのか、途方に暮れてしまうことも多いです。そんな時、箱庭をしてもらうと、光が見えてくるから不思議です。

私は、分からないことは子どもに聴く、子どもから学ぶというスタンスで、今まで随分助けられて来ました。語彙の少ない子どもは、それに代わる不思議な能力を持っているということも教えられました。大人にはない能力です。

小さな砂庭に、玩具を並べるだけで、なぜこんなに鮮やかに心の内面を表現できるのか、子どもは、大人のように身構えたり、意図してやるということを経験せず、自由にあるがままに、その世界に埋没するからこそ、心の埋もれた部分が浮き上がってくるのだらうと思います。

私は元会員さんで 現在中学生の不登校の子どもに、月一回のペースで箱庭づくりにきてもらっていました。「すっきりした！」「楽しかった！」

「また来たい」と言ってくれる度に、ホッと、

いずれ自分の足でしっかり歩けるようになるその日まで、そっと見守ろう。そう思っているうちに2年が経ち、そして・・・ついにその時がやってきたのです。

3月に新型コロナウイルスの拡散防止策として政府から学校を休校にするよう要請があったことで、家庭の状況は一変しました。各々忙しくて、めったに顔をそろえることのなかった家族が、同じ時間をリビングで過ごすようになり、相手の動きが見えすぎて、些細なことから姉妹げんかの日々。『なんでこんなにイライラするのかー、ペースが乱されるっ』

行動規制で部活なし、塾もお稽古も休み。発表会も中止。一人で静かにしていたい時に、横で姉にクラリネットを吹かれたら、それも何時間も練習されたら堪らない。

ただでさえ落ち着かない季節。草木が芽吹きはじめ、あらゆる生き物が目覚めて動き始めるこの季節に、今まで何もしてこなかった、いやしくても動けなかった自分、イライラして八つ当たりしてしまう自分がある。そんな自分に嫌悪を感じているのに、この非日常がイライラをさらに増幅させるのです。

「イライラするのはエネルギーが湧いてきたから

かもしれないね。」「・・・そうかもしれない。」

彼女は箱庭で、不安と怖さを抱えながら、少しずつ動き始める自分を見事に表現してくれました。そして、「いままで出来なかったことをやってみたい。お友達が欲しい。いろんな話がしてみたい。怖いけどやってみる。」

そうして自分から終止符を打って旅立っていきました。春ですね♪ 心地良い風が吹きました。

今ここに彼女の箱庭を載せることは出来ませんが、面白いのを二点紹介したいと思います。これは身内ですので、どうぞ笑って見てやってください。

小学三年生の時のＹくんの箱庭

ここに登場するＹくんは三人兄弟の真ん中の子で、幼児の時は、周囲の大人たちから感心されることしきり。優しくてよく気が付き、ママのお手伝いも進んでやるとてもいい子でした。

そのいい子が、小学生になったころから少しずつ変わってきて、三年生になるともう手の付けられない暴れん坊に変身したのです。

母親によると、「少しでも注意すると手が付けられなくなるのです。大声でわめき暴れて物を壊す。先日は風呂場の硝子をシャワーヘッドでたたき割りました。その前は外壁に石を打ち付けて穴を開けました。私も何度か蹴られました。もうお手上げです。制御できなくなるので、怖くて声もかけられない。泣けてきます。あの子をどこかで預かってほしい。自分には育てられない。限界です。」

うんうん、困った。学校ではお勉強も出来て、先生の信頼も厚い子らしいので、なにか原因がありそうです。それとなく子どもの話に耳を傾けてみると

「お母さんはいつも怒ってばかりで、話を聞こうとしない。怒らないで黙って欲しい。僕のはなしを聞いて欲しいんだ。お母さんは嫌いじゃないよ。ご飯を作ってくれるし洗濯もしてくれる。他にも色々してくれる。」

お父さんはどうなの？

「お父さんはほとんど家にいない。朝ごはんも夕ご飯も一緒に食べない。しごとが忙しいから帰りが遅いし、朝はご飯も食わずに仕事に行くよ。ほとんど会わないから好きでも嫌いでもない。」お休みの時は一緒に遊ばないの？「だって自分の部屋で寝てるし、入ったら怒られる。」

う〜ん、それじゃ元気な男の子としてはストレスが溜まるわなあ。

正面



左側から写す



右側から写す

う～ん。かなり砂場が荒れています。

まず最初に、いきなり右側におおきな川を造ったのはびっくりしました。川と分かるように石と水鳥を置きました。さらに深い堀をつくり、その中にびっしりと大きな車を隙間なく並べました。次に大きな麒麟を対立した位置に三頭置き、一頭の頭に小さなテラノサウルスを載せました。「ニワトリに餌をやっている女の子を襲おうと麒麟の頭に乗ったんだ」と話したあと、しばらくして「止めた！」と言って麒麟とテラノサウルスを取り除き、あとの二頭の麒麟は仲良く並べて置きなおしました。(母親への敵意？でも自制力あるみたい)

中ほどにある青い建物はスーパーマーケット兼レストラン。緑の丸い机の前で、母親と並んで長椅子に座り、順番待ちをしているそうです。写真ではよくわかりませんが、近くに兄と弟もいるようですが父親はいません。

彼は本当に、静かに自分に寄り添ってくれる母親を求めているということがよくわかります。そんな彼がいじらしくなりました。

母親は、育児に無関心な父親に対しての腹立ちから、イライラを募らせているのでしょう。

Yくんは、2歳上の兄にはかなわない。好きなことには夢中になってのめり込んでしまう兄は、竜王戦の一般の部で準優勝。卓球は小学生大会で優勝。ギターはクラシックだけど、気分転換にはジャズピアノを楽しんでいる兄。大人たちが「すごい、すごい！」と褒めるので、自分も兄のようになりたいと、同じように習い事に通うけれど、すべて挫折。何をやっても続かない根気のない子だと烙印を押されて、劣等感だけが残ってしまったようなのです。(兄は発達障害といわれていて、学校の勉強は出来ません。)

弟の方は、3歳からクラシックバレエを習い始め、「可愛い！」と女の子たちのアイドルで、母親も猫かわいがりするものだから、Y君としては、いい子でいる以外居場所がなかったのでしょう。

でも、もう限界！我慢が爆発したようです。

なにか好きなこと見つかったの？

「全然！根気がないから。将棋は勝てないし、卓球も習いに行ってるけど、兄ちゃんみたいになれないし、サッカーもやめちゃったし、学校の先生が、絵が上手いと褒めてくれたので、絵も習いに行ったけど、やめちゃった。根気がないから。嫌いじゃないけど。」

いろいろやってみただねえ。すごい！で、何をやっても続かないって。続かなくていいのよ。探してる、そういう時期だから。そのうち好きなことがみつかるよ。それまでやりたいと思ったことはなんだったやったらいいと思うよ。

ママに言っというてあげる。そんなに早く見つかる方が無理だって。

それから一つ聞いていいかな。堀の中に車が一杯並んでいるけど、先は行き止まりだし、これじゃ糞詰まりで、身動きできないね。どうする？「う～ん、大丈夫！エンジンふかしてババババ～ンと乗り越える!!」へえーっそんなことできるの？「出来るよ!!」

本当は、行き詰っていてしんどいはず。でも実に大きなエネルギーを内に秘めているんだと、ちょっと感動した瞬間でした。

ママにはアドバイスというより忠告をしました。この子の芽を摘まないように！些細なことでも褒める、ほめる・・・他人の前でこの子の悪口を言わないこと！それから、この子に求めるより、場面によってママが、ごめんなさい、ありがとうを言わなきゃ。当たり前だけど。

小学三年生になったTくんの箱庭

兄のYくんの反抗の波が、小さくなったり大きくなったりしながら、少しずつ収まってきたころ、末っ子のTくんの我儘ぶりが目に余るようになって

てきました。もともと甘やかしすぎで、声掛けの声まで他の子と違うのですから、バカバカしい、指摘してもママは認めないので、どうしてもありません。いずれ手に負えなくなるに違いないと思っていたら、案の定「今日は学校に行きたくない」とズル休みしてゲーム三昧。無理やり車に乗せて連れて行っても、逃げ帰る始末。ルールを作っても納得したようにみせかけて、すぐルール破り。気に入らないと、大声で泣き叫び、暴れまわるので、手の付けようがありません。つまりいた時はそこに石があるのが悪いという論理。自分は悪くないのです。以前からこの子と母親との関係を苦々しく見ていたので、ざまーみろと捨て置きました。ところがある日、本人から「僕も箱庭したい!」と言ってきたのです。ん?と思いました。が、しぶしぶ時間をとることにしました。



Tくんは夢中になって箱庭を作りました。
向こうには怪獣が暴れています。家や門、トラッ

ク等をなぎ倒し、大暴れ。人々は少しでも遠くに逃れようと必死になっています。全速力で自転車で走る人、船に乗って逃げようとする人もいます。でもなぜか家の陰で静かに座っている人が……ん?それに右端にはこんもりと高い丘?があり、大仏様がこれらの様子を静かに眺めています。これはなんだろう?なにを意味するのだろう?? 本人に聞いてみることにしました。Yくんはこの中にいるの?

「いるよ。この家の影に座って隠れているこの人だよ。」えっ?まったく意外な答えです。

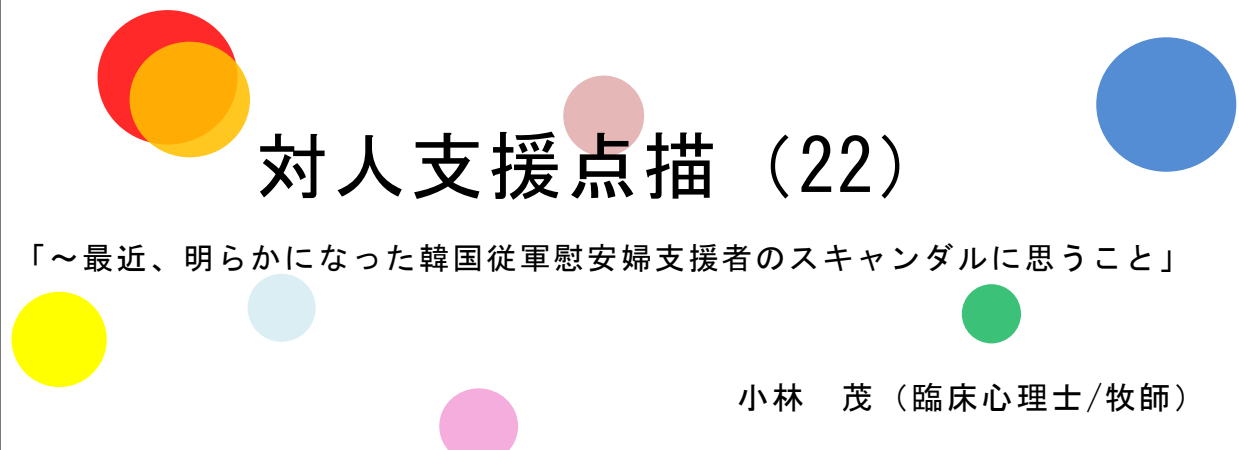
この怪獣がTくんじゃないの? 「うん、そういうときもあるけど……」なかなか正直です。

その時はっとひらめきました。この怪獣は兄かもしれない、いや、もしかしたら母親ではないか。そして、静かに眺めている大仏様は、彼が描いている理想の母親にちがいない。

そう思うと妙に納得して笑えてきました。

子育てで、理想的と思える対応をしていたとしても、真っ直ぐに子どもが伸びるとは限らないのが現実です。ハチャメチャでも、いや、怒ったり、泣いたり、時に暴力をふるうことがあっても、真剣に向き合うことを止めさえしなければ、それなりに子どもは育つものだなあと考えたことでした。ちょっと安心。

やっぱり箱庭は面白い!



対人支援点描 (22)

「～最近、明らかになった韓国従軍慰安婦支援者のスキャンダルに思うこと」

小林 茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

最初に個人的な政治的・思想的立場を述べるものではないことをお断りしておく。筆者が日本基督教団という団体にも所属し、教団全体の活動というわけではないが、少なからず従軍慰安婦問題は話題とされてきた。教団内には、そのために活動する集まりがあり、相互交流、献金（寄付行為）を推し進めてきたこともあり、気にかかる問題であった。また、それ以前に筆者が学んだ大学（神学校）には、当時、西岡 力教授がおられた。拉致問題被害者の救出活動に尽力されている先生であったが、その後、従軍慰安婦問題では元朝日新聞記者である植村 隆氏と訴訟に発展するまでぶつかり合うようになった。筆者自身は、植村氏とは面識はないが、兩人ともクリスチャンであり、検証と研究から離れて植村氏が訴訟という手段をとった展開となったのは残念な思いをしていた。また、現在、筆者は北海道に身を映して生活しているが、筆者の所属する日本基督教団北海教区は、人権活動・社会運動がさかんで、従軍慰安婦問題、植村 隆氏支援一色となっている。このような環境のなかで異論は受け

入れられない雰囲気にある。つまり、異論を唱えるのは、すなわち、人権を重んじていない人物か、右翼（もしくは極右？）シンパか、「慰安婦の人がかわいそうではないのか!」と感情論でお叱りを受ける、様相となっている。たぶん、北海教区の多くは、右も左もないのだろうが、活動している人（多くは牧師中心）との付き合いを憚って黙っている印象である。

こうしたことから、この問題を通しておこる人びとの言動は筆者の意識から離れずにいたのである。そして、今回、筆者が個人的な体験もあり、支援者が被支援者を搾取するだけではなく、その支援をすることで名声を得て、その支援を評価する人びとによっていっそう立場を盤石なものとしていく現象を考えさせられた。たまたま、その不正が当事者からの声により顕在化したのだが、顕在化以前にある問題は見逃せない問題と感じたのである。

1. スキャンダルの発端

2020年5月7日に旧日本軍の韓国人従軍慰安婦被害者、李容洙（イ・ヨンス）さんが南東部の大邱市内で記者会見を開

き、ソウルの日本大使館前で慰安婦問題の解決を求める定例の「水曜集会」を開いている市民団体「韓国挺身隊問題対策協議会」（現「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯」）など関連団体を批判したことが話題の発端となった。もう少しいうと、4月の総選挙で与党「共に民主党」の比例政党「共に市民党」から「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯」の尹美香（ユン・ミヒャン）前理事長が当選したあたりから問題が始まったように思う。現在は、尹美香（ユン・ミヒャン）前理事長を巡り、不透明な会計処理などさまざまな疑惑が浮上している。そのことを巡って、厳しい社会批判と操作が行われている。

さらに、こうしたことが契機となり、19日火曜日に旧日本軍の韓国人従軍慰安婦被害者が共同生活する施設「ナヌムの家」（京畿道広州市）の職員7人が国民からの支援が被害者のために使われていないとして内部告発する、という事件に飛び火することになった。同施設を運営する社会福祉法人「大韓仏教曹溪宗ナヌムの家」は、「日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯（正義連）」とともに代表的な慰安婦被害者支援団体である。職員らは「ナヌムの家は、日本軍の慰安婦であったと主張する韓国人女性を安全かつ専門的に支援する専門療養施設だと広告しているが、実状は支援金で運営される無料療養施設にすぎず、それ以上の治療や福祉は提供されていなかった」と主張している。

この施設も、所属教区のスタディツアーで巡る定番となっている場所であるが、先の問題に合わせて、それまで口にすることができなかった問題が一気に噴き出した状態であるといえる。

2. 臨床宗教師とスピリチュアルケア師

臨床宗教師という名称は、公共空間で宗教者が活動するために倫理規定を設け、布教を目的としないスピリチュアルケアを行う日本版のチャプレンとして名づけられた資格である。基本的に資格を有するための条件が“宗教者”であることが前提とされる。この臨床宗教師に対し日本スピリチュアルケア学会が認定するスピリチュアルケア師という資格がある。臨床宗教師もスピリチュアルケア師も所定の研修プログラムを受け認定される資格であるが、スピリチュアルケア師になるには必ずしも宗教者や特定の宗教の信者である必要がない。スピリチュアルについての定義上、当然、すべての人が資格を取得するための権利は有している話となる。

この場合、日本スピリチュアルケア学会の定義に従えば、スピリチュアルケアのなかの一部に宗教的ケアが含まれると表現もできるし、スピリチュアルケア師の資格の方が臨床宗教師よりも包括的な資格であるともいえる。

3. 問題の構造

繰り返すが、筆者は、ここで従軍慰安婦の真実の是非や、政治的・思想的立場のいずれかを擁護支持するために問題を扱っているわけではない。

ここで扱いたい問題は、①被支援者の擁護者であるべき支援者が被支援者を喰い物にしたり、自分の利益（金銭、自尊心、名誉、社会的成功など）のために利用できるのか、②その支援者を社会や信奉者が評価・称賛し、疑念の余地なくうのみにでき、修正が利かないのか、③その活動や支援者に異論や批判が出来ない風潮や、むしろ疑

念を持つ側が排斥されることになるのか、といったことである。

たぶん、心理学的に扱おうとすればパーソナリティの問題であったり、社会心理学的な説明が可能であるのだろう。

①被支援者の擁護者であるべき支援者が被支援者を喰い物にしたり、自分の利益（金銭、自尊心、名誉、社会的成功など）のために利用できるのか

広義の意味でも狭義の意味でも対人援助に関わってきて思うのは、その仕事の意義や社会的なイメージが素朴な善と捉えられていることを思う。日本において福祉事業への民間企業の参入の際にも、それ以前に当事者と当事者家族や篤志家らが築き上げてきた福祉が、行政から得られる支援費を元にした事業としてみなされるようになった。最初は、介護事業、その次に障害者の就労支援事業へと参入が増えていった。ハローワークを介して人材が集められ、事業として経営がなされるようになった。筆者の知人にも、こうした経営者（もしくは企業）のもとで働いている者がいる。残念ながら、聞く話は福祉ではなく、事業であり、経営優先である話が多い。もちろん、事業や経営という割り切りが悪いわけではない。素人が試行錯誤しながら事業経営するよりも、無駄がないといえれば確かな面がある。しかし、福祉の心や当事者主権、パーソン センタード、といった理念や姿勢がともなうかは別問題である。そこが対人支援の難しさや大事なところでもある。だが、対人支援の仕事の素朴な善のイメージは、社会に寄与している人々の素朴なイメージとともに、経営者の良いことをしているという感覚や、その事業の取り組みや

経営者が何を第一としているのかという内実は不問のままで、乖離しやすいといえる。

また、そこには、当事者のために善いことをしているという自負が自分の利益の追求と不可分に、言い換えれば公私混同に肯定されてしまっているのではないだろうか。当事者のためにしていると思っていることが、実は自分の利益追求と表裏一体となるわけである。だが、これは本末転倒といえる。実態は、当事者やそこで働く労働者の搾取以上の何物でもない。

②その支援者を社会や信奉者が評価・称賛し、疑念の余地なくうのみにでき、修正が利かないのか

筆者が浦河べてるの家という社会福祉事業所に勤めていて感じたことの一つに、人びとは事実ではなく、物語(ナラティブ)を信じるか、信じたいのだ、と気づいたことがある。

事業所自体は、たまたまテレビの取材があるまでは何の変哲もない田舎の福祉事業所に過ぎないものであった。取材を受け、着目され、書籍が出されるようになってから、全国から人が見学に来て、利用者希望が殺到するようになった。現在は、その当時のインパクトはない。しかし、書籍などは歳をとらない。見学や施設利用にやってくる人々は、書籍が出された当時の雰囲気や活動を“今のこと”と信じてやってくるのである。失礼だが、メディアも何かコンテンツに困ると、「あそこがある」と取材を入れてくる。そして、同じ話、昔の話を“今のこと”として紹介する。そして、また人びとが見学や施設利用を希望して殺到するようになる。それが無理ならば講演に来

てほしいと要望する。さらに、何かしらの関係者であることを名誉に思うのか、いろいろな方々がつながりを求めるようになる。しかし、筆者が困惑するのは、そこが創造的な活動をしていたのは20年以上も昔の話である。勤めていたものの実感として、特別な事業を行っているわけではない。むしろ、残念な現実の方が優位となっていた。浦河べてるの家が有名となった後、その後の日本の福祉事業所のなかで、もっと取り上げられてもおかしくない事業所はたくさん立ち上がったように思う。しかし、そうしたところが広く紹介されないことの違いは何かということ、物語（ナラティブ）の有無といえる。物語（ナラティブ）があることは、メディアも扱いやすいのである。本来ならば、報道は、取材をし、それまで明るいところに出されることのなかったものを浮かび上がらせることが大事であると思うのだが、そうしたこともなく安易にネタとして取材するようになる。観せるための福祉と、観せる報道、観せられる人びと、との間の物語（ナラティブ）の共有が起こる。いつのまにやら、そこで働く人自身も、それを観る人びとも、特別な幻想を抱く。そして、多くの人がその物語（ナラティブ）が現実であり、内実は関係のないのである。人は見たいものを見、それが否定されることは自分が否定される感覚とともに拒絶する。しかし、結局、そこで行きつくことは、誰のための福祉という問題であるといえる。こちらは、当事者をはじめとする生きた人間とかかわるだけにリアルな現実的なことといえる。元従軍慰安婦の問題は、当事者というリアルな現実がまっとうに、当事者からの告発という形で、物語（ナラティブ）を崩壊させ

た出来事であったと思われる。

③その活動や支援者に異論や批判が出来ない風潮や、むしろ疑念を持つ側が排斥されることになるのか

元従軍慰安婦による支援団体と中心人物の告発は、それまでの物語（ナラティブ）が幻想であったことを気づかせると同時に、それまで物語（ナラティブ）を信じてきた人に隙間を与える出来事につながったように思う。それは何かというと、異論を唱える余地ができたということである。韓国においては、従軍慰安婦の問題に意義を唱えることは、厳しい社会の圧力を受け止めなければならなくなる。繰り返すが、ここで従軍慰安婦の問題の是非は問うつもりはない。しかし、従軍慰安婦の支援者や支援団体に異議を唱えることと、従軍慰安婦の問題の是非を問うことは別次元の話であるはずなのに、このことさえも極右というレッテルや、新日的というレッテルとなるようである。物語（ナラティブ）が機能している間は、権威や権力という力を持ち、否定しようのないシステムとなる。だが、今回、当事者のためにしているという支援に立つ側が、否定しようのない当事者を前面に立てて、当事者や職員を搾取していたことが、当事者側から問題とされたわけである。物語（ナラティブ）の崩壊とともに、異論や疑念を持つ側を否定し、排斥するシステムも崩壊したといえる。「ナヌムの家」の職員による告発が、なぜ今のタイミングで告発したのかは、告発しても否定され、排斥されないで受け入れられる物語（ナラティブ）の崩壊という隙間ができたからであると指摘できる。

日本では、対人支援の現場や支援に立つ者の間で同じ問題構造がないと否定でき

るだろうか。

4. 終わりに.

対人支援に関して日ごろから問題意識を持っていた課題が隣国で起こった問題を通して、改めて考え直す機会とした。私たちは個人としても倫理感だけではなく、社会というシステムのなかで活動している。その中で、対人支援に立つ者が何を意識して搾取する側に立たないように心がけるべきか考えさせられる。筆者自身は、今のところはっきりとした答えを気づけないでいる。それでも、個人の倫理感や「誰のための支援、誰のための活動」というところへのこだわりが搾取する側に立たないための心がけとして必要なものと感じている。引き続き、考えを熟成させていきたい。

精神科医の思うこと①⑦

「触れるということ」

松村 奈奈子

2月頃よりコロナの報道が始まり、診察ではこれまでマスクをした事が無かった私も、さすがにマスクをして診察しています。

そんな3月のある日、一人の患者さんの症状が改善して、治療が終了となりました。「いつも最後の診察のお別れに、握手をすることにしているの」と私は握手をしようと手を出そうとしましたが、コロナの事を思い出して「あっ、今は握手はダメだねー」と手を引っ込めました。患者さんも「今はダメですね」と笑って最後の診察を終えました。出来るだけ触れちゃいけない日々、なんですよ。

そんなこんなで思う事があったので今回のテーマは「触れる」ということ

内科や外科と違って、一番患者さんと触れることが無い精神科。治療的にも「言語のやり取り」が基本で、「触れる」ことは治療的にもご法度に近いものがあります。言語でのやり取りの中、「触れる」という異質の交流が起こると、いろんな感情を賦活するのでは、という理由もあります。

昔、総合病院の医局での雑談で、内科の先生達に「よく人の話をながながと聞いてられるなぁ」「心の中みるのこわくない？」と言われたことがあります。いえいえ私は逆に「身体に触れたり、口やお尻の穴からファイバーを通して身体を覗き見るなんて、恥ずかしい感じがしてできません」と返答。「お互い、そんなもんなんやなぁ」と笑った記憶があります。そう、精神科で患者さんに触れることはないので、仕事で「触れる」というのは特別なんです。

そんな精神科の治療で、私が最後の診察で握手をするようになったのは、ある患者さんに求められたのがきっかけです。

まだ外来診療を始めて数年の頃、それはパニック発作の治療をしていた壮年の男性でした。経過良好でお薬もなくなり、1年程で治療は終了となりました。最後の診察で男性から「最後に握手いいですか？」とリクエストがあり、私は「はいはい」と気楽に握手しました。握手をしながら、なんだか自然に「幸せにね」と言葉が出ました。すると患者さんも「先生もお幸せに」と笑って診察室を後にしました。とっても気持ちのいいやり取りでした。

精神科は数週間で治療終了なんて事は無く、数か月以上のお付き合いが必要になります。どこかで医師と患者さんがお互いを信頼していないと、終わりが来ない治療関係です。だから、治療終了も「そろそろ終わりかな」とこちらが思った時に、患者さんから「もう大丈夫だと思います」と言い出してくれることが多く、最後の診察は病気と闘ってきた「同志の別れ」な感じになります。なんだか「握手の別れ」が似合う気がします。

その患者さんと心地よい「同志の別れ」を経験してから、私は握手をしてお別れする事にしています。「最後に握手をして終わる事にしてるけど、いい？」と聞くと、ちょっとためらう患者さんもありますが、みんな応えてくれます。「なんだかパワーをもらうわ」と言ってくれる方も多く、治療の最後だから許される「触れる」行為だと思っています。そして必ず「幸せにね」と添えるようにしています。できれば今後は精神科に來ない方がいいし、なんだかこの言葉がぴったりの気がするのです。

もうひとつ、私が患者さんの手に「触れる」時があります。それはターミナル（終末期）の患者さんの診察です。総合病院で勤務していた頃、一般外来の診察に加えて、内科や外科に入院するターミナルの患者さんの診察を依頼される事がありました。疼痛に関しては内科や外科の先生がコントロールしてくれるので、私は不眠や気分の変化に対して薬物療法や、お話を聞かせてもらう事しか出来ないのですが。

病室に訪問して、ベッドの横に座ってお話しします。多くは高齢の患者さんで、話しながら、いつもなんとなく自然に手を握ってしまいます。患者さんもまた、手に触れるのを望んでいるかのように、とっても自然に触れあっている時間です。

医大生や研修医の頃、緩和ケア専門の先輩医師のターミナルの患者さんの診察に同席させて頂いた事があります。患者さんに触れて語りかける先輩を見ていました。「触れる」ことの大切さを、教えてもらっていたのかもしれない。

京都はお寺や小さな神社が多いので、仕事帰りに寄り道して、ガラガラと鈴を鳴らし

てお賽銭を入れるのが、結構好きです。近所のお寺では、ちょっと前から感染防止のため、鈴の紐（鈴緒）に「触れないように」と紙が貼られています。うーむ、鈴が鳴らせない。

いままで「触れる」事に制限なく生活していたので、コロナの事で「触れる」事を意識させられる毎日。もちろんコロナはもっともっといろんな事を考えさせるのですが。

「触れない」日々もまた、いろんな意味で悩ましい。

馬渡の眼 2

コロナ禍における気付き

馬渡 徳子

先ず、私自身は、リスク疾患の療養中であり、大学院の調査研究対象疾患及び、監事をしている患者会も、感染症が大きなリスクとなるという現実
に直面し、当初は正直動揺した。

年度末年度当初の時期で、しかも、諸団体の定例総会や研究会、学会シーズンでもあり、さて、どのようにこの後、事を進めていこうかと、それぞれの事由の関係者で、様々なツールで話し合いを重ねながら、一つ一つ決定していくという毎日だった。およそ、同様の方々が、そのような状況にあられたのではと、お察し致します。

スマホとパソコンに向かう時間がかなり増え、肩こりと腰痛と眼精疲労が進行し、銀行引き落とし料金も、一気に、1.6倍に。ルーターとスマホが

月途中で契約設定上限超えを、毎月更新し、涙。

医師の指示で、通院リハビリも控えることとなり、「きっちりラジオ体操」と、朝晩の「瞑想法」は、昼にも行うこととした。学校・学童と保育園に通所が叶わない孫2人を、嫁ぎ先のご両親と、分担保育していたので、瞑想中に、孫たちはそのまま昼寝してしまい、その姿に癒されたりもした。

さて、私自身は、元来「かなりの心配性である」と、自覚してはいたものの、先ずは、同居・別居の家族との、日常生活上の予防策と言行動の温度差に、最初は戸惑った。

私たち夫婦は、医療関係機関に永く勤めたことから、感染症対策に多少の知識があり、モノが無ければ無いで、

その代替え手段を、専門職に聞いて信憑性を確かめ、ちょっと一呼吸おいて行動することができるという強みがある。とりわけ連れ合いの冷静さが奏効し、私の前のめりな行動の、何度もブレーキをかけてくれた。石油ショックを体験・記憶しているので、販売店回りをするとか、慌てて買い占めするといった行動はとらなかったが、局面が大きく展開する時期の報道には、本当に大丈夫かなと、心は揺れた。

また、今年は、連れ合いが市町の自治会役職を担っていることから、上半期行事の実施有無の判断対応の連続だった。決定会議が不可能なことから、上部組織とのWebや電話での判断を受けて、監事を交えた三役での電話やWeb会議を経て、その後に班長さんに電話、メール、ファックス、手紙での広報となった。こうして、次の、一番住民に密接した作業を、各班長さんにバトンを渡すこととなっていく。

班長さんの中には、「緊急事態宣言が解除されるまで、回覧は、控えるべきでは」とのご意見を頂き、玄関に「新聞、郵便物、宅配不在通知以外は投函お断り！」との貼り紙が貼ってあったので、個人的な判断で、コンビニでコピーをして、全てビニール袋に入れて封をして、個別に投函された方もおられたと伺った。

一方で、ポストに、「郵便屋さん、新聞屋さん、宅配便さん、班長さん、お疲れ様です。ありがとう。」と貼り紙を貼っておられる家も、あったそうで、その班長をしている友人から「お年寄りって、素敵だなんて。なんか、いつの間にかギスギスしていた自分の心が恥ずかしくなった。私ら世代も、こんな風に、さりげなく、感染リスクを回避して、他人を労えるように

なりたいね。」と、メールが届いた。こういう話に出逢うと、「流石は、人生の先輩方。人間社会は、まだまだ捨てたもんでないなあ」と、嬉しくなる。

また、逆に、「回覧板として、回すからこそ、地域住民間での見守りができるのでは」とのご意見も頂き、確かに、玄関先に留まってしまっている回覧板は、安否確認の貴重なサインだし、回る順番のルールが上手くいかなくなっていると、認知機能低下等のサインにもなり、班長から民生委員を通して地域包括支援センターにつなぎ、個別支援につながっていたなど、改めて、「回覧板のもつ価値・役割」を確認できた。

こうした「アナログな伝達手段のもつ地域社会での歴史的価値と役割」を、今一度確認し合い、状況の変化と伝達すべき事由の緊急性等に応じて、「多様化した伝達手段のプラス面」も活かしつつ、一方で「自治会で歴史的に受け継がれたしくみの有効性」についても、自治会が主体的に合議で選択し、次世代につないでいく機会にもなったと思う。

「情報(化)社会」における自身の情報の収集と処理能力の癖や特徴をも、率直に振り返らざるを得なかった。

発信される情報の信憑性や妥当性、信頼性、有効性を判断する力が、改めて、問われているなど反省し、真摯に研究姿勢にも、活かさなければと自戒した。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文 柳たかを

小学1年のおもいで

小学1年のおもいで 1956年の春、僕は幼稚園を経ずいきなり小学校1年生になった。

新入生時の身体検査の時、坊ちゃん刈りの小柄なヨシダ

れたことはなく、紙芝居や貸本マンガに没頭しても叱られることもなかった。

1～2年生の時の思い出で忘れられないのは、1年次の冬休み前に担任のカガワ先生からイソップ童話の「ア

リとギリギリス」の話を紙芝居に描いて、新学期にクラスみんなに上演してあげてほしいと依頼されたことだ。おそらく僕が紙芝居やマンガを描くのが好きなことが知れわたっていたのだと思う。

休みのあいだ、画家の父親の仕事場の四畳半で父のアドバイスをもらいながら、十数枚の紙芝居を完成させた。新学期に教壇を借りて上演しクラスみんなに鑑賞してもらった。それ以来、童話「アリとギリギリス」のストーリーや寓意の意味は僕の全身が記憶するお話になったが、



同年でもじつにいろいろな性格の人がいるのだと思い知った日

君に後ろから「はよ進め！」と命令口調で言われ、「なんやえらそうに！」とちょっとカチンと来たがそのイラッとした表情に気圧され言い返せなかった。

1年生は全部で5クラス、各組それぞれ約45名で男子と女子に分かれ名簿順で一列に並ぶ。僕の前には裸の上半身のあばら骨が目立つムラカワ君、僕の後ろはギョロ目のヨシダ君、最後尾にはいつもハナを垂らしジツとしてるのが苦手だったリュウグチ君。

担任のカガワ先生によるとムラカワ君は心臓に障害があるらしく、唇の色も顔色も青ざめ

ている印象で体育の授業には毎回参加しなかった。

僕の小学校の成績は5段階評価で3～4が多く、図工でときどき5をもらった。

長男の兄と違い父や母から勉強のことでガミガミ言わ



楽しく生きたいけれど油断しているとひどい結末になると知った童話

芸術に没頭するギリギリスか生活第一のアリかどちらを支持するか今でも悩ましいところがある。

やぶにらみ日記 (373)

東成区の昭和

(1) 新入生



やぶにらみ日記 (374)

東成区の昭和

(2) 新入生



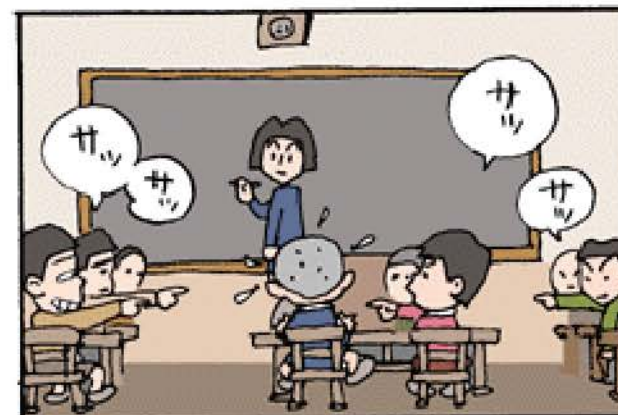
東成区の昭和

(3) 新入生



東成区の昭和

(4) 新入生



やぶにらみ日記 (377)

東成区の昭和

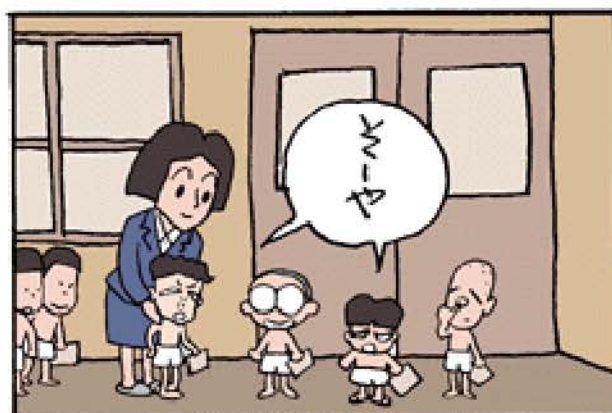
(5) 新入生



やぶにらみ日記 (378)

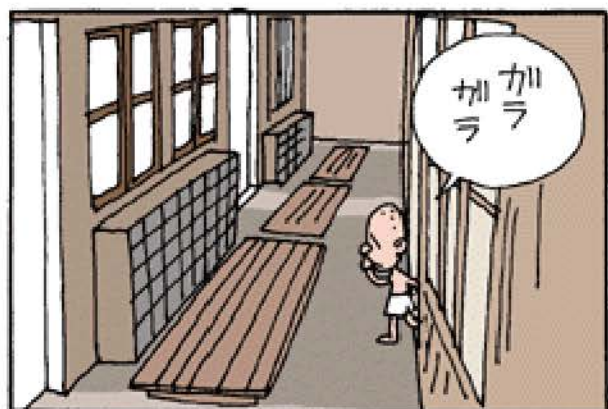
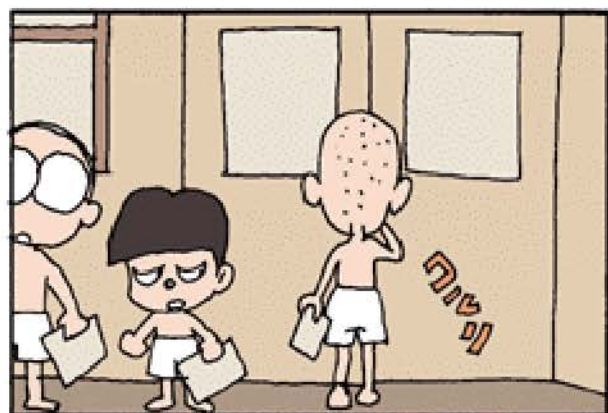
東成区の昭和

(6) 新入生



東成区の昭和

(7) 新入生



東成区の昭和

(8) 新入生





やぶにらみ日記 (383)
東成区の昭和
 (11) 新入生



やぶにらみ日記 (384)
東成区の昭和
 (12) 新入生



やぶにらみ日記 (385)

東成区の昭和

(13) 新入生



やぶにらみ日記 (386)

東成区の昭和

(14) 新入生



町家合宿 in 京都 Vol.14

～お金の使い方②～

山下桂永子

☆町家に着いてまずやること

駅から徒歩10分ほどでいつもの宿に到着。のれんをくぐり、「こんにちはー、今年もお世話になりますー」と私が少し大きめの声を出すと、「はいー」という宿のあるじの声。参加者に声をかけつつ玄関から靴のまま奥に進み、台所から靴を脱いで広い畳の共有スペースにあがりこむ。

荷物を下ろすと宿泊が初めての参加者やスタッフにはあるじが宿の説明をする。私もその説明を聞きながら「最近のおうちは、ベッドが多いだろうし、合宿とかの経験なかったら、シーツを自分で敷くとか初めてかもねえ」「毎年この自分の職業欄になんて書くか迷うんだよねーうーん」とかつぶやいたりしながら宿泊者カードに記入して、封筒とお財布、メモとペンを準備する。

☆参加費を受け取る時のプレッシャー

宿に着いた私の最初にやるべきことは、ちょっと緊張しながらの参加者からのお金の徴収と、宿泊費の支払いである。ちょっと緊張するのは普段あまり現金をもらったり渡したりする仕事ではないからなのかもしれないが、それ以上に、このお金をどう遣うことが援助的であるのかという、責任というかプレッシャーをここで感じてしまうからかもしれない。

参加者から参加費を受け取る時、その参加費は参加者が親から持たされた封筒に入っていることが多い。そしてその封筒には現金だけでなく、そのお金を持たせた保護者の方からのお手紙が一筆添えられていることがある。内容はいろいろだが、そこには引きこもっている、あるいは引きこもっていた我が子が、自分の意志で京都の寺社仏閣をめぐり、大学を見学するツアーに参加することへの不安や期待がつまっている。その保護者の不安や子どもの変化への期待に応えることに対するプレッシャーが、参加費を受け取る時の私の緊張になっているのかもしれない。



☆赤字続きの町家合宿

町家合宿の宿は、あるじのご厚意により貸し切りで泊まることができる。貸し切りなのでどの部屋で寝ようがほぼ自由だし、台所も共有スペースも好きな時間に使うことができる。他の宿泊客に気を遣うことがないのでとてもありがたい。

とはいえ、3人で泊まろうが10人で泊まろうが貸し切りなので宿泊料は変わらない。毎年お世話になっているこの宿は、京都の町家（しかも建物が文化財指定）に泊まるには、あまりにもありがたい値段設定ではあるのだが、それでも参加者が少ない場合は、お金を徴収して宿代を支払った時点で赤字が確定している年もある。

☆赤字の理由①～参加者の人数～

町家合宿を始めて最初の数年は、どうすれば赤字にならずに町家合宿を運営できるのかというのは悩みの種であった。スタッフの方から宿泊費だけでも徴収することを考えたことはあったが、自分がやりたくてやっている町家合宿に、お願いして巻き込んでやっている手前、それは気がひけるような気がしていた。どこかの助成金を申請することなども考えたが、その申請の手間を考えるととても自分にはできないような気がしていた。

となれば参加者を増やすしかないのではあるが、いかんせん自分の手の届く範囲内で不登校や引きこもりの経験者である参加者を募集して、一人ひとりと（あるいはその保護者と）やりとりをしながら当日来るかどうかもわからない状態で当日を迎えるというやり方ではそうそう参加者を増やすことはできない。

☆赤字の理由②～スタッフの人数～

しかも、ただ参加者多くなればいいというわけではなく、参加者が多くなればスタッフが足りなくなり、配慮も行き届かなくなるので、参加者の安全はもちろん、安心して過ごしてもらうことも難しくなる。スタッフを増やすということは、スタッフの町家合宿での活動費が必要になってくるし、そもそもスタッフを増やすことは参加者を増やすよりも大変である。スタッフが対人援助職であるという必要はないものの、ある程度町家合宿の援助的な意図を理解してもらったうえで柔軟に対応してもらえる方でなくてはならない。しかも2泊3日ボランティアである。

以前、あるスタッフAさんに「なんでこども（参加者）に対して、こんなスタッフ（マンツーマンに近いぐらい）必要なやろうって思ったけど、行ってみてわかった。これ、絶対必要や。びっくりした。」と言われたことがある。Aさんによると、町家合宿の私は「優しいけど厳しい。」のだそう。参加者が、京都の夏の暑さであったり、観光地の人の多さであったりで、うなだれて足が止まってしまったり、他のメンバーと一緒に行動することができなくなってしまうことがある。そうしたときに私が「ちょっと水分取って休憩しよかー。」とか「ほなここでちょっと別行動して後で合流しよかー。」と言う。他のスタッフにその動けなくなった参加者に付き添ってもらって、何食わぬ顔で他の子と談笑しながら休憩したり、

あるいは別行動で着々とスケジュールを遂行する。そのことに A さんは驚き、そのためにスタッフが必要であると思ってくれたらしい。「山下さん、こどもに寄り添うけど、にこにこ笑いながらぜーったいあきらめさせへんねんもん。びっくりしたわ。」と。

☆赤字の理由③～目に見えない心理支援～

A さんは、カウンセラーでも教員でもない。そんな A さんから「寄り添うけどあきらめさせへん」と言われて私のほうこそ驚いてしまったし、なんだかうれしくもあったのだが、よく考えてみれば、私が普段の仕事でやっていることのスタンスそのままだと思う。気持ちに寄り添い、相手が願う変化を応援することはこれまでずっとやってきたことである。

個に寄り添い、支援をしていくということは、心理的支援をやっている身としては基本（？）スタンスなのであるが、それを町家合宿という小さくとも集団の中で（しかも炎天下の観光地で）やるのが A さんには新鮮に映ったのだろう。この私の町家合宿でのスタンスは、スクールカウンセラーをしていたり、適応指導教室やフリースクールという組織や集団の中で子どもの支援に関わっているからこそ、あまり意識せずにやっていることなのかもしれない。

☆町家合宿赤字脱出

さて、実は現在、赤字はほぼ脱出している。というのも先に出てきた A さんはある子どもに関わる NPO の理事をしている。ある方のご紹介で数年前から私はこの NPO に関わらせていただくことになり、その結果、その NPO のイベントの 1 つとして町家合宿をさせていただくことで、その NPO から予算をいただくことができるようになったからである。なんともありがたい話である。が、今までは苦手な適当にしていた予算計画や領収書の計算には頭を悩ませてしまっている。





結局は感情優位かよ！

前号の対人援助学マガジンにて、「多頭飼育となると世間では「保護＝レスキュー」ばかり目立っている。SNS やニュースで流れてくるのは、劣悪な飼育環境の写真とレスキューの様子ばかりだ。」と文句を吐露し、「現場から直接救いだすことだけが「保護」ではなく、現場の環境の改善をして間接的に「保護」することだってできる。と思う。」と偉そうに書いた矢先に、保護しか選択肢が見つからない案件の相談が私が取り組むNPO「人もねこも一緒に支援プロジェクト」に寄せられました。

多頭飼育の飼い主さんに関わっている医療関係者の方からの相談でした。

『癌の末期、予後は半年以内、〇〇市在住の方が、一人暮らしの家で猫を20匹ほど飼っておられるようです。予後は長くなく、猫を含めこまめに面倒を見てくれる家族もいないため、早く猫の貰い手を探すなど手を打たないといけないと再三促していますが、体がしんどく動きにくいためか全く行動を起こしてくれません。最終的に猫を手放さないといけない必要性は理解していただけており、ご本人も、猫を保健所に連れていくことになるのはしのびないとおっしゃっています。何らかの形で猫たちを保護していただけないでしょうか。このような機関に相談することについては、ご本人からは許可をいただいております。』

そう遠くないうちに〇〇さんはお亡くなりになります。最初に病院に来られた時からいつも猫のことを気にされていて、入院期間も最短に、治療より猫優先の方なので、猫のことが片付かないと〇〇さんは落ち着いて人生を終われない気がしているんです。私は、〇〇さんの病気はもう完治させてあげられないんですが、少しでも満足して最期を迎えていただきたいと思います。〇〇さんの猫たちが安心して暮らせる場所ができれば、思い残すことないようにしてあげられるのではと思っています。』

前号で「保護せざるをえないケースと保護しなくてもなんとかなるケースの見極めが重要だ。」と書きましたが、見極めるも何も、余命という住宅の立ち退き期限よりも動かし難いものがそこにはありました。

人もねこも一緒に支援プロジェクトでは、基本、多頭飼育の保護依頼は受けていません。人もねこも一緒に支援プロジェクトがメインで関わっている多頭飼育ケースは現在 5 件、96 匹。小さな N P O にとって、96 匹はとても保護対応できる頭数ではありませんが、5 件の家族を支援するという間接支援の形をとることによって、96 匹の猫をサポートすることができています。

でも、このケースは保護しないとどうしようも無いケースです。

「うちでは力不足です、ごめんなさい。」

と断ってしまおうと何度も思いました。
相談してくださった方の気持ちが胸が痛くなるほど優しく、飼い主さんのご住所を聞いたら、今の私の家から自転車で 10 分の場所だった（そんなことある？）という恐ろしい偶然から、これは猫神様に「これは、君に対応してほしい案件なんだけど？」と言われているような気がして、悩んだ末に**引き受けることにしました**。

当分、N P O で新規の多頭飼育崩壊ケースの相談は受けられないかもしれません。
結局全頭は救えないかもしれません。

感情に任せて動いていたらキャパを超えて破滅する。そう分かっているから、今まで一生懸命理論を考えて、理屈っぽい自分で、感情的な自分の暴走にブレーキをかけてきました。でも、そうやって積み上げてきた理屈を、いとも簡単に感情は打ち破ってしまうものなんだなぁと実感しました。

私がこの「そうだ猫に聞いてみよう。」の読者だったら、

「結局感情優位かよ！今までのなんやねん！」とツッコんでいることでしょう。

というわけで、今回の「そうだ猫にきいてみよう」では、新しくかかわることになった 6 件目の多頭飼育ケースについて書いていきたいと思います。このケースはまだまだ進行中なので、「初動」について書くことになります。

初回の家庭訪問

相談者の方に同行していただき、家庭訪問を実施しました。初めに把握したい内容は、

- ① 猫の頭数（本当に20匹？）
- ② 猫の人馴れ具合
- ③ 室内の状況
- ④ 飼い主さんの意志（不妊手術、里親譲渡を自分の意志で実施したいと思っているか）

です。家庭訪問の結果、

- ① 頭数：本当に20匹。生後1～2ヵ月の子猫が5匹、4ヵ月2匹、成猫13匹でした。
 - ② 人馴れ具合：飼い主さんは全頭抱っこ可能。初対面だと、逃げる。
 - ③ 室内の状況：かなり悪い。物が多い。飼い主さん宅にいる状態では里親募集困難。
 - ④ 飼い主さんの意志：手術、里親譲渡の意志あり。
- と分かりました。



当初は、全頭の不妊手術をしたうえで一旦飼い主さんのお家に戻し、里親探しをしていこうと考えていましたが、飼い主さんのお家にいる状態では里親探しは不可能だと分かりました。計画を変更して、私の仕事場で無理なく預かれるのは2匹なので、2匹ずつ引き出して、1匹里親に出たらまた1匹保護するというサイクルを繰り返していくしかないと考えました。

さらに、パッと見ただけでも妊娠していそうなメスが1匹いました。5月という出産シーズンであることを考えれば、今月中に数匹のメスが出産してもおかしくない状況でした。全頭の不妊手術が急務です。通常であれば、福祉機関や行政に話にあって、どうぶつ基金さんの多頭飼育救済チケットをなんとか取得してもらいたところですが、どうぶつ基金への申請経験のない行政を説得して行動に移してもらうには少なく見積もっても1、2ヵ月がかかります。それを待ってられる状況ではないので、自費での手術が必要ということになります。ただ、飼い主さんはご自身の医療費で生活が圧迫され、病気のせいで働くことも困難になっているため、生活保護申請の準備をされている状況でした。

つまり「人もねこも一緒に支援プロジェクトで費用を捻出して、一刻も早く全頭に不妊を実施する必要がある」ということがわかりました。

一斉不妊手術の段取り

自費で全頭の不妊手術が必要となるので、月に2日間だけオープンする「大阪ねこの会さんの一斉有料手術」の日に手術を依頼したいと思いました。それが一番、低価格で1回で多頭の手術を実施することができます。今月の手術日を調べると、家庭訪問の2日後と3日後が手術日でした。明後日に手術をお願いするためには、明日の夕方と明後日の朝に猫たちを保護して手術会場へ移動する必要があります。

初回家庭訪問の次の日には猫たちを不妊手術のための病院に連れていくという、なんとも無茶苦茶なスケジュールですが、この機会を逃すと次は1か月後になり、猫の頭数は増えているはずです。飼い主さんにも大阪ねこの会さんにもOKをいただけたので、あとは15匹を運べるサイズの車の手配と人手の確保が必要です。車は知人に2日間自分の車と交換をお願いし、人もねこも一緒に支援プロジェクトのスタッフに手伝える人がいないか聞いたところ、2名のスタッフが手伝ってくれることになりました。

一時預かり・保護ボラさんのお願い

「2匹ずつ引き出して、1匹里親に出たらまた1匹保護するというサイクルを繰り返していくしかない」と家庭訪問時は思いましたが、室内の環境と物の多さを考えると、手術した猫を一旦お家にもどすことは現実的ではないと思えてきました。一旦もどしたら、再捕獲が難しくなってしまうかもしれませんし、手術と一緒にしてもらおう駆虫もウイルス検査も無駄になります。これは、人もねこも一緒に支援プロジェクトだけで抱えずに、SOSを出そうと決意しました。

自分のFacebookで自分のお友達限定の公開設定にして、猫の保護または、預かりボランティアに協力してもらえませんか？と呼びかけました。命を預ける以上、だれでもいいとは言えません。活動内容や飼育環境を知っている知り合いの中で、手を挙げてくれる人が居た頭数だけは、手術後お家に戻さずに保護してもらおうと考えました。

結果、SOSを出してから一晩で、10名の方が声をかけてくださり、15匹分の受け入れ先が見つかりました。正直ちょっと涙が出ました。まさか全頭の受け入れ先の目処がつくとは思っていませんでした。

切実なSOSを出し、手を挙げてくれたボランティアさんたちによって、ここの猫たちの命は救われます。でも、里親募集を始められる状態にするまでのケアに時間がかかり、里親募集をしたとしてもなかなか声がかかりにくい、つまり長期的にボランティアさんのキャパを埋めてしまう可能性がある猫をボランティアさんをお願いすることによって、その空気があれば命が救われていたかもしれない未来の命を失わせてしまった可能性があることを私は忘れてはいけなかったと思いました。嬉しさと苦しさ半分半分の感情でした。

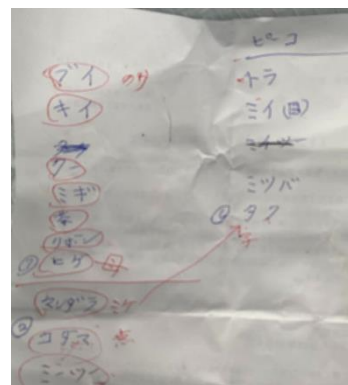
一斉手術

手術前日の夕方と、手術当日の朝に飼い主さんが頑張ってケージに入れてくださったのが全部で10匹でした。残りの5匹はお家の中を逃げて隠れてしまい、捕まえることができませんでした。



手術と同時に、里親募集をするにあたって、必要な3種混合ワクチン、ウイルス検査、ノミダニ駆除を全頭に実施してもらいました。

飼い主さんが作ってくださった名前リストと、捕まった猫たちの写真を照らし合わせると、残っている5匹はオス4匹、メス1匹だと分かりました。最後のメスは急いで保護することにして、残りの4匹は先に保護した子たちが落ち着いてから対応していこうと考えました。

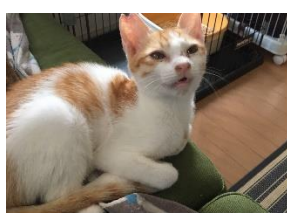


それぞれの保護先へ

- ・生後1～2ヵ月の子猫と4ヵ月の子猫1匹の計5匹は、川西TNR地域ねこの会さんが保護してくださいました。



- ・茶白の4ヵ月の茶君はボランティアのHさん。
- ・耳血腫持ちのキイ君と、年齢の割に歯石がたまっているミーツーはボランティアのIさん。
- ・警戒心の強いりぼんちゃんはボランティアKさん。
- ・人懐っこいヒゲちゃん、ミギ、マンダラはネコリパブリック岐阜店さん。
- ・腎臓の病気と膀胱麻痺疑いで里親譲渡が難しいブイ君は終生保護として、アニマルサードアイズさん。
- ・怖がりのコダマちゃんと、あとから保護できたミイちゃんは、私の事務所で駆虫が完了するまで保護し、その後ベットの会議室さんへお願いする予定です。



茶くん



コダマ



ブイ君



ミイ



ミギ
ヒゲ



ミーツー
キイ



マンダラ



りぼん

現在、飼い主さんのお家にいるのが4匹。1匹はギリギリまで飼い主さんと一緒にいてもらい、残りの3匹は、私の保護場所に空きができ次第保護してきたいと思っています。

ざくっとここまでの収支

この半月でどれくらいの費用がかかっているのかを出してみました。人もねこも一緒に支援プロジェクトではスタッフの交通費は自分持ちになるので、ガソリン代やスタッフの

家から現場までの電車賃は含めていません。保護猫の食費や猫砂代も含めていません。ざくっとの費用です。

寄付		支出	
2020.5.15	M様 5,000	2020.5.14	獣医療費（子猫治療） 1672
2020.5.16	Y様 20,000	2020.5.16	獣医療費10匹分 70,000
2020.5.16	W様 20,000	5.16~18	高速代 10680
2020.5.17	K会様 30,000	5.16~19	パーキング代 2200
2020.6.1	K会様 10,000	2020.5.16	獣医療費(血液検査) 14630
		2020.5.16	獣医療費(駆虫薬) 6600
		2020.5.19	新幹線 21,620
		2020.5.19	静岡タクシー 4740
		2020.5.28	三毛獣医療費 17930
計 85,000		計 150,072	

まだ保護まちの猫が4匹いるので、費用はさらにかかる見込みです。保護してくださったボランティアさんたちがそれぞれ将来的に負担してくださる医療費や食費を含めて、この案件にかかわる費用をだすとする、とおおよそ30万円くらいにはなりそうです。

約3年前に、77匹の多頭飼育ケースの一斉不妊手術を実施し、お家に戻した際の収支が「そうだ、ねこに聞いてみよう No.8」に掲載していたので、比較してみます↓。

お金の状況

- ・HPにて、物品寄付（Amazon 欲しいもののリストを作成し紹介）を呼びかけた。

区分	内容	科目	詳細	金額	
費用	事業費	消耗品費	首輪用紐等	¥648	現金
費用	事業費	消耗品費	首輪用紐等	¥1,512	現金
費用	事業費	消耗品費	養生テープ	¥408	現金
費用	事業費	消耗品費	セロテープ等	¥596	現金
費用	事業費	消耗品費	ペットシート等	¥4,706	現金
費用	事業費	獣医療費	エイズ白血球検査費5頭分	¥15,000	現金
収益	その他収益	物資寄付	M様（キャットフード）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	N様（キャットフード）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	K様（キャットフード）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	匿名（'ビニールシート×5）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	匿名（'洗濯ネット×20）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	K様（洗濯ネット×54）	¥0	物資支援
収益	受取寄付金	寄付金	D様	¥6,500	現金
収益	受取寄付金	寄付金	O様（里親さん）	¥5,000	現金
支出				¥22,870	
寄付				¥11,500	

- ・一番高額な避妊去勢手術費は（公財）どうぶつ基金の事業を利用し無料で済んでいる。
 - ・一斉避妊去勢手術に際して使用したハイエースのレンタル費、ガソリン代は、協力してくださったボランティアさんが負担してくださった。
 - ・交通費はそれぞれ自己負担している。
- 多くの方がボランティアとして協力してくださったことにより、なんとか乗り切れた。

どうぶつ基金さん利用、かつ保護ではなくお家に戻す方針だったこともあり、猫の頭数は今回のケースの 3.85 倍ですが、費用は 6 分の 1 以下でした。具体的に費用の違いが比較できたのは有意義でした。今回のケースが完結した時に、最終的な比較をしてみたいです。

実践と記録は不可分の両輪

実は、この対人援助学マガジンの締め切りを過ぎてしまうことがかれこれ、3 回ほど続いてしまいました。編集部の皆様にとっても迷惑をかけてしまっていました。テーマが思いつかないとか、仕事や NPO の活動が忙しいとか自分の中で色々言い訳を作っていました。そして今回のマガジンの締め切りでも原稿を提出できなかった私に、編集長の団先生が

実践と記録は不可分の両輪。

それができている限り、社会の信頼を損なうことはありません。

と戒めのメールをくれました。ものすごくはっとしました。グサッと刺さりました。それを忘れてしまったら、私なんてただ偉そうに書いたり話したりしている若造です。私を講演の場に呼んでくれる人がいるもの、マガジンを読んでくれる人がいるもの、人並みよりは多い実践の記録と省察の積み重ねから生まれるリアルな理論がそこにあるからだと思わなければいけません。

実践の伴わない理論は机上の**空論**だし、記録と省察の積み重ねが伴わない実践は**闇雲**です。有効な予防手段という**光**はどこにあるのか。リアルな実践の記録と省察を丁寧に積み重ねていきながら、その先に見つけていくしかないんだと、再認識できました。

空の雲を払い光を見つけるために、これからも、自分の実践活動とその記録や省察を、ドタバタなケースも含めて、皆さんと共有していきながら積み重ねていきたいと思います。

ご意見、質問などは下記メールアドレスへどうぞ。

筆者



小池英梨子

仕事：ねこから目線。～ノラ猫専門のお手伝い屋さん～

ボラ活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ボラ活動：大学ねこ連盟 U-Cats 事務局

お問合せ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から

28

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

人間はずっといろいろな困難と向き合い、それを乗り越えてきた。その結果が今である。このコロナウィルス問題も、いずれ乗り越えていくのだろう。人類が生まれ、文明が生まれてからずっと、人々はその知恵を働かせてきた。今回のことが未来の人にとって先人の知恵となる。そんな思いを込めて、今回は下記の9個。

- 五十歩百歩ごじゅうほひゃくほ
- 凝っては思案に能わずこ じあん あた
- 碁で負けたら将棋で勝て
- 尽く書を信すればことごと
すなわち書なきに如かず
- 琴柱に膠すことしにかわ
- 子供の喧嘩に親が出るけんか
- 子に過ぎたる宝なし
- 子の心親知らず
- 子は親を映す鏡うつ

＜五十歩百歩＞

差はあるが、本質的には同じであること。
似たり寄ったりであること。 出典 孟子

この故事の出典の話は以下の通り。

中国、戦国時代に、梁の恵王が、「自分は凶作の地の人民を豊作の地に移すなど、人民に対していつも心を配っている。これほど他国よりも善政をおこなっているのに、人民は自分を慕って各地から集まってこないのはどうしてだろう？」と孟子に尋ねたとき、孟子は戦争をたとえにして、「鎧、兜や武器を捨てて逃げ出す者がいて、ある者は五十歩退却し、ある者は百歩退却して止まったとします。この時五十歩逃げた者が百歩逃げた者を、自分よりも臆病だと笑ったらどうでしょうか？」と言った。王は「それは間違いだ。五十歩しか逃げなかったからと言って、逃げ出したことには変わりがない」というと、孟子は「王が其の道理を

お分かりであれば、人民の数が隣国よりも多くなることを望みなどしない事です。(人民が苦しむのを凶作のせいにするようでは、他国の政治と大差はありません。)」と答えたという。

どちらでもそう大差ないことで悩んでしまう人に時々会う。

以前、赤ちゃんの体温計のことで、耳で測るのとおでこで測るのとどちらが良いかと聞いてくる人がいた。色々あると悩んでしまうものだ。おでこで測るのは少し高めに出るのだと医療関係者から聞いたことはある。しかしそんなに大差はない。どちらもどちらだろう。使いやすいほうを使えばよい。要は測れば良いのだ。こういうことが時々ある。

誰でも、大きな差があれば選択しやすいが、余り差がないことについては悩んでしまう。大差がないならどちらでも良いのだから、鉛筆を倒して決めても問題ない。

しかし、不安が強い人は、そのちょっとした差で悩んでしまうのだろう。相談でいらした人のそうした質問に、「どちらでも良い」という答えではあまりにも不親切だろう。

メリット・デメリットがはっきりあるなら、その両方をそれぞれについて説明し、その上で考えてもらうが、最終的に決めるのは相談に来た人である。

例えば、部活選び。テニス部と卓球部とどちらが良いか？本人が好きな方を選べばよいのだが、選べないときどうするのか？テニスで必要な経費と卓球で必要な経費の比較、部活として楽しみたいのか、真剣に選手として頑張りたいのか、部活のレベルと本人の部活に求めるものなどもしっかり聴いて行かねばならない。そもそもそうし

たリズム感が必要なスポーツが向いているかどうか検討事項になる。決め手が見つかればよいが、見つからないときは、この諺を伝え、差は多少あっても、本質的には変わらないことを伝えてみる。どちらも道具の面を使って玉を打ち返すスポーツだし、シングルとダブルスがある。コートの大ささ、走る量は異なるし、点数の数え方も異なるが、どちらも似たスポーツではあるのだと。

五十歩と百歩は確かに五十歩の違いがある。人の歩幅は慎重×0.45と言われている。160 cmの生徒なら、72 cm。72 cm×50=3600 cmつまり 36m の差が出来ることになる。これを大きいととるか小さいととるかは、人それぞれかもしれないが、目標とする距離が長ければ、36m は大した違いではない。故事では逃げたことに変わりはないからということなので、それを借りれば、歩いたことに変わりはないということになる。似たようなことで、大差がないなら、あまり拘らないことが生きやすさにつながる。

英語では・・・

As good twenty as nineteen.
(二十も十九も似たようなもの。)

A miss is as good as a mile.
(小さな失敗も大きな失敗も、失敗であることに変わりはない。)

<凝っては思案に能わず>

物事にあまり熱中し過ぎると、かえって冷静な判断が出来なくなること。心にゆとりを持つことが大切だということ。

これは、どんな人にも言えることかもしれない。ついつい何かに熱中してしまって、大事なことを忘れたり、約束に遅れたり、他のことに気持ちを向ける余裕が無くなったり。熱中する物によっては、多大な迷惑を掛けたり、自分自身が失敗の道をたどることもある。

集中すると周りの人が声を掛けても聞こえない。その為に親に怒鳴られてしまう子もいる。しかし、集中することで素晴らしい仕事をする子もいる。寝食をわすれてしまう、トイレに行くのも忘れる、そんな集中力の子もいる。それを否定したくはないが、出来れば、どんな時でも、周りが見えるように、集中し過ぎないことが出来ると、もう少し楽になれるかもしれない。そんなことを伝える時にこの諺を使っている。

<碁で負けたら将棋で勝て>

一つのことで失敗しても、くよくよせずに別のことで取り返せという教え。

一度失敗すると立ち直れない子がいる。高校受験では、先生方が失敗しないように導いてくれるため、殆どの子が無事合格する。

高校に入ったとたんに、自分の力が周りの子に比べて劣っていると感ただけで、学校に行けなくなってしまう。勉強だけが全て、成績だけが全てだと思っているから立ち直れなくなってしまうのだ。勉強がダメなら他のことで頑張ればよい。

何か一つでも得意なものを見つけられる子は幸せである。しかし、それを見つけて

あげるのも親の務めかもしれない。勉強が苦手でも、料理が得意なら、スポーツが得意なら、工作が得意なら、おしゃべりが得意なら、何でもよいではないか。

ドラえもんに出てくるのび太君のように、勉強はからっきしでも、優しくて、あやとりや早抜きが得意で、愛すべきキャラになれば、明るく前向きで、周りの人を温かい雰囲気にしてくれるだけで、愛されるようになる。

折り紙が得意な子もいた、絵が得意な子がいた、将棋が得意な子がいた、スポーツが得意な子がいた、演技が得意な子がいた、歌が得意な子がいた、ダンスが得意な子がいた。得意なものはないけど、素直な子がいた、優しい子がいた、笑顔がかわいい子がいた。何でも良い、1 つ得意なものが見つけられれば、輝ける。

こんな事を伝える時にこの諺を使っている。

<尽く書を信ずればすなわち書なきに如かず>

どんな書物も完全ではない、批判の目が必要であることのたとえ。書物を読むときに、書かれていることを全部丸呑みするのなら、かえって読まない方がよいという意から。原義では「書」は『書経』を指したが、現在では一般の書物の意味で用いられる。

出典 孟子

最近は「書」ではなく「ネット」かもしれない。ネットで何でも調べ、その情報に振り回されている人が結構いる。そういう人には、この諺がぴったりだと思っている。

＜琴柱に膠す＞

規則に拘って融通がきかないこと、臨機応変の処置ができないことのたとえ。琴柱を膠で固定すると、音の調律ができないことから。

琴柱＝弦を支えるため琴の胴に立て、位置を変えて調律する道具。膠＝魚などの骨や皮を石灰水に浸してから煮て濃縮し、冷やして固めた者。接着剤として用いる。

出典 史記

最近では中学校で琴を習う学校もあるようなので、この諺を理解してもらいやすくなった。琴柱を動かさないようにしたら、音が安定するのではと思う人もいるかもしれないが、1つ1つの弦の音程は決まっているので、その調整のため、琴柱は動くようにしておかねばならない

バイオリンの駒は外せるが、動かすことは殆どなく、弦の張の強さで調律する。そして抑える位置で音階が生まれる。つまり、琴柱はバイオリンの弦の張を調整するねじの様な役割である。従って動かないと調律できない。

このことから、琴柱を固定することが、融通が利かないということに通ずるのである。

マニュアルに頼る人が増えてから、臨機応変に動けない人も増えた。教わっていないことはできないというのでは学びは深まらない。試行錯誤や、見て学ぶことが求められていた時代には、誰も教えてはくれなかった。自ら想像し、創造していく力は、学んだことの般化から生まれてくる。

見聞きしたこと、体が覚えたことに加えて、発想の豊かさが臨機応変につながる。発想の豊かさには丁度琴柱の様に、自由に動く思考が必要だ。

＜子供の喧嘩に親が出る＞

つまらないことに余計な口を出すこと、大人げないことのたとえ。子ども同士他愛のない喧嘩に、それぞれの親が干渉すること。

この諺が実践されるケースが増えている。子ども同士がしっかり喧嘩できれば良いのだが、最近の子どもたちは、喧嘩せず、どちらか一方がやられる。そしてやられた側は親に訴える。或いは親が気づいて問い詰め、相手の言動をすることになる。可愛い我が子に対し一方的とはいえ、ちょっとした意地悪や悪口や仲間外れにするなどと言うことがわかれば、親は黙っていない。まずは学校に電話し、担任に確認する。担任は「双方から話を聴きます。」とか「調査します。」と言って確認に入る。その結果に親が納得すればよいが、納得できなければ、更に親の腹立ちがヒートアップする。そして、校長室に怒鳴り込みなどと言うことも間々ある。一方、親がこんな風にどんどん出ることで、子どもは引くに引けなくなる。「大したことではなかったのに・・・。」と思う子もいるし、「そうだそうだ、あんな奴、責められればいいんだ！」と思う子もいるだろう。どちらにしろ、問題は子どもから離れて行ってしまう。そのため、ますます自分のトラブルを解決する能力を失っていくことになる。

いじめに対しては、放っておくわけにはいかないが、ちょっとしたすれ違い、勘違いなどと言うことも多々あるのが子ども同士の関係である。まずは本人に解決させてみよう。解決方法を一緒に考えてあげよう。それでもダメな時はそれこそ親の出番になる。

＜子に過ぎたる宝なし＞

どんな宝も子どもには及ばない、子どもは最上の宝であるということ。

子どもは宝だということをあまり大きく言うと、子宝に恵まれない方を傷つけることになるのかもしれないが、子どもを育てているお母さん、お父さん向けにこの諺を使っている。生きることに必死だと、つい子どものことは二の次にしてしまう。金銭的に余裕があれば、物で埋め合わせをする保護者もいるが、子どもたちが欲しいのは、物ではなく、寂しさを埋めて欲しいという願いである。離れていた時間の分だけ、休みの日や空いている時間に、しっかり話を聴いてあげたり、遊んであげたり、スキンシップをとったりできればよいのである。どんなにお金を稼ぎ、豊かな暮らしになったとしても、子どもとの関係が醒めてしまって、子どもが保護者との関係を切ってしまったら、後からいくら悔やんでも始まらない。

今、目の前の子どもに、精一杯の愛情を注げれば、子どもは、反抗期も思春期も超えて、保護者との良い関係をいずれ持てるようになる。子どもを育てることは大変だし、責任も重いが、子どもを育てながら親

も育つし、子どもの成長を見て行けるしあわせも、いつか感じられたらと、この諺を伝えている。

＜子の心親知らず＞

親は我が子の本心を案外わからないものだということ。また、いつまでも幼いと思っていると、成長している子どもの気持ちを理解できないということ。

前述の様に、子を宝と思って一所懸命育てていても、子どもの心がわからない事は在る。小さい頃は速く大きくなれと思っているのだが、大きくなっているのに、いつまでも子どもだと思って対応していると、厳しい言葉を浴びせられることも良くある。「親の心子知らず」という諺に対する、子の反撃のようなこの諺は、思春期の子を持つ親に主に教えている。

親が思っているほど子どもはいつまでも、親の助けが欲しいとは思っていない。子どもが親をうるさがったり、うっとうしがったりするように育てられれば、むしろ子育ては成功だと伝える。

＜子は親を映す鏡＞

子どもの振る舞いを見れば、どんな親かを知ることが出来るということ。また、子どもの考え方や行動には親の価値観が反映されるということ。

小さいころから、親の真似をしてそだてきた子どもなのだから、親に似るのは当たり前である。父親がテレビの前で寝そべ

ってみていると、同じ格好をして子どもが見ているという光景に出会った母親は案外多い。

食べ物の好みが親と同じになったり、物の言い方や行動が親に似ることも多い。大きくなると娘と母親の声が電話では区別がつかないなど言うことも良く聞く。子どもの言動に、ハッとしたことがある親もいる。

だからこそ、親は自分の言動に気をつけねばならない。一所懸命働く姿をみせること、言葉で伝えるだけではなく、実践して見せることで、より上手く伝わる。言葉遣いや人との関わり方、食事の癖、行儀や姿勢など、良いお手本を示せる大人であることが求められている。

英語では・・・

As the old cock crows, so crows the young.

（親鶏が時を告げるのと同じように、若鶏も時を告げる）

出典説明

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の言行を門人が編纂したもので、「大学」「中庸」「論語」と共に四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、霸道（武力による政治）を否定して王道（人徳による政治）を提唱している。

史記・・・百三十巻

中国時代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「^{きでんたい}紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

うたとかたりの対人援助学

第14回 京都のわらべうたを歌おう

鵜野 祐介

オンライン授業の模擬体験

この連載はこれまで、筆者がうたやかたりについて各地で取材して記録したフィールドノーツを元に構成しようと心がけてきました。ところが、今般のコロナ禍によってフィールドワークはできず、さりとて古いネタを使いまわすのも気が引けます。

そこで思いついたのが、筆者が担当している「教育人間学実習Ⅲ」のオンライン授業用シナリオと、受講生のコメントを紹介するというアイデアです。

オンライン授業には①「同期型」、②「非同期型」、③「複合型」があり、①は「ビデオ会議ツールのZoomなどを使って教員と学生がリアルタイムで双方向の授業を行う」、②は「教員がオンライン上に準備した教材や資料、音声、動画に学生がアクセスして学び、オンライン上で課題やコメントシートを提出する」、③は①と②を組み合わせたものです（朝日新聞 Edu A5月24日）号p.1より）。

「教育人間学実習」は5回シリーズで、当初は「1. うたあそび、2. 絵本読みかたり、3. 紙芝居上演、4. 昔話を聞く、5. 昔話を語る」という計画でしたが、お手玉や絵本や紙芝居は手もとにない受講生が多いと思われたため、わらべうたを歌い、民話（民間説話）を語ることに絞って、上述の②の方式で実施することにしました。今回ご紹介するのはその第2回「京都のわらべうたを歌おう」の授業（5/20）のために、WEB上に掲載したシナリオの一部です。

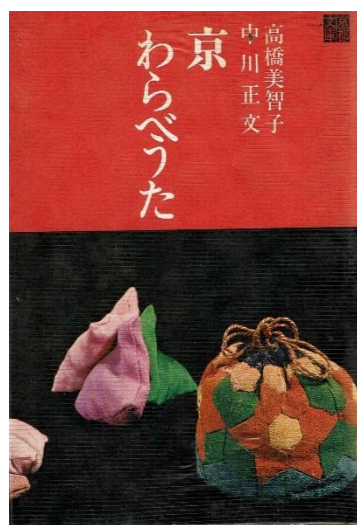
読者の皆様も、実際にオンライン授業を受けているつもりで読んで歌って下さい。また、受講生（教

育人間学専攻3回生）が寄せたコメントを、今後の実践に活用していただけると嬉しいです。

京都のわらべうたを歌おう

本学衣笠キャンパスの所在地は京都ですので、京都のわらべうたを5曲紹介します。類似するうた（「類歌」）は全国各地にありますので、ぜひ自分の出身地の類歌を調べてみてください。今回参考にしたテキストは、採譜・高橋美智子、文・中川正文『京わらべうた』（駸々堂出版1972）です。本書は『日本わらべ歌全集』（柳原書店1978〜）よりも6年早く、地元の出版社から「京都文庫」の一冊として出版されたもので、装丁や構成にも細やかな気配りが感じられる上品な書籍です。

今回紹介する5つの唄はいずれも配信動画サイトYouTubeで聴くことができます。メロディーを確認して、自分でも繰り返し歌ってみてください。



「優女」(子守唄)

優女 優女 京の町の優女

売ったるものを見しょうめ

きんらんどんす あや ちりめん
金襴緞子 綾や緋縮緬

どんどん縮緬 どん縮緬

これは本願寺八世の蓮如上人が作ったと伝えられる子守唄です。その真偽は定かではありませんが、元は、正月の万歳の寿詞（ことほぎうた）として歌われていたものの一部分と考えられています。

中川正文は次のように解説しています。「京のおんなを、やしょうめ——優しい女と感じる視点は、たぶん旅びとの目か、物乞いの目ではなかったろうか。都として、室町幕府の所在地として、諸国から数おおく流入してくる旅びとや法下師たちの目に映った、京の繁栄に対する一つの憧憬や媚びがもたらした、ふしぎに明るい中世風の雰囲気をつたえた、まとまった曲である。

京の子どもたちは、こういう歌で、ほんとうに眠りについたものかどうか。むしろ気分が華やかではすみ、眠れないのではないか、という疑問すら起きてくる。それほどまでに音楽性の高い、さわやかな曲だ」（高橋・中川 1972：90）。



「愛宕さんへまいって」(しぐさ遊び唄)

愛宕さんへまいって 細道とおって
花いっぱいぬすんで 毛虫にさされて
ほうぼうで目もろて

口惜しや腹だちや 音羽の滝や ところてん
コチョココチョコ

これは子どもと対面して、唄にあわせて手ぶりとしぐさを交えながら歌う遊ばせ唄です。本来は相手の顔や身体に触っておこなうスキンシップの唄ですが、今回は自分の顔や身体を触って、やってみてください。

- ・「愛宕さんへまいって」＝頭を4回タップする（軽く叩く）。
- ・「細道とおって」＝頭から眉と眉の間を指でなぞって下がる。
- ・「花いっぱいぬすんで」＝鼻をつまんでもぎ取ろうとする。
- ・「毛虫にさされて」＝両方の眉を2回ずつタップ
- ・「ほうぼうで目もろて」＝左右の頬と目を順番にタップ
- ・「口惜しや腹だちや」＝口とお腹を2回ずつタップ
- ・「音羽の滝や ところてん」＝小便の出る場所と肛門付近を1回ずつ押さえる。
- ・「コチョココチョコ」＝脇の下をくすぐる。



音羽の滝は清水寺にある滝です。また、心太（ところてん）を作る際、ピストンを押すと穴からムギューと出てくる心太に、肛門から出るウンチを連想した感性には感心します。

「子どもたちは、コチョコココされる最後の瞬間をびくびくして予測しながら、目や鼻などをおさえていくスリルを味わう。子どもたちの心の動き方を巧妙にふまえた遊ばせ歌だ。こういうものは集団保育

では、なかなかできないものである。親子や兄弟などではじめてなし得る、個人的なゲームなのだ」(同上99)。

コロナ禍が一段落したら、家族や親戚の子どもにぜひ試してみてください。

「ひとめふため」(羽根つきのうた)

ひとめ ふため みやこし よめご
 いつやの むさし ななやの やつし
 ここのや とおや
 ひやふ みやよ いつやむ ななや こことお

「京の正月は、おけら詣りで明ける。祇園八坂神社の神火を火縄にうつし、それをわが家に持ち帰り、雑煮の火種にするのだ。(中略)そして元旦は、いつもつきぬけるような晴天で、深く澄みきった青い空をあおぐことができた。四方拝*が終わって戻ってきた子どもたちは、通りへでて羽子板をついた」(同上13)。(＊四方拝：年のはじめに天地四方を拝して年災をはらい豊作を祈る儀式。平安時代以来の宮中行事だが、戦前の子どもたちは元旦の朝登校して、講堂で行われるこの儀式に参加させられていた)。

数え唄になっています。これを歌いながら、何回羽根をつけたかカウントするのです。「やつし」とは「おしゃれ」のこと。つまりこの遊びは女の子によって行われたようです。唄のメロディーあるいはイントネーションが、舞妓さんが使うような典型的な女性の京ことばなので、繰り返し聞いて歌って、京の風情を味わってください。

ひとめ ふため

ひとめ ふため みやこし よめご
 いつやの むさし ななやの やつし
 ここのや とおや ひやふ みやよ
 いつや む ななや こことお

「京の大仏つあん」(かごめ遊びの唄)

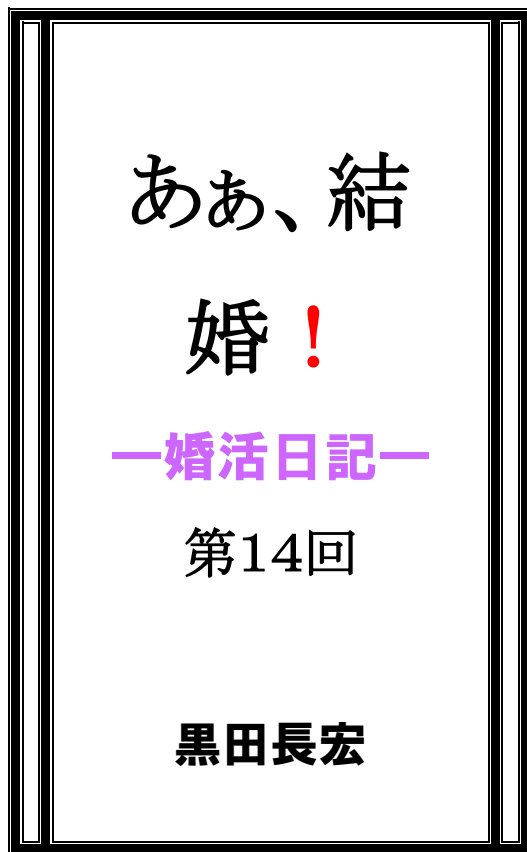
京の京の大仏つあんは 天火で焼けてな
 三十三間堂が 焼けのこった
 アラどんどんどん コラどんどんどん
 うしろの正面 どなた
 おさるキャツ キャツ キャツ
 ○○さん
 (当たらなかった場合)
 違いました 違いました 松のかげ
 (当たった場合)
 ようさいた ようさいた

遊び方は、目をつむってしゃがんだ鬼の周囲を、手をつないで輪になった子どもたちが、歌いながら回ります。「後ろの正面どなた」で鬼が目をつむったまま立ち上がり、鬼の真後ろの子どもが「おさるキャツ キャツ キャツ」と歌うと、鬼はその子の声を聞いて名前を当てるのです。名前を言い当てられたら、その子が次の鬼になります。声色を変えて、名前を当てられないよう工夫していたようです(同上116参照)。今回は歌うだけですが、いつか実際に遊んでみてください。

京の大仏つあん

おう の おう の だいぶつ つあんは てんびで
 やーけてな さんじゅうーさんげんどうが
 やけのこっ た アラ どんどん どん コラ どんどん どん
 うしろの しゅうーめん どなた
 おさる キャツ キャツ キャツ ○○さん!
 ちがいました ちがいました まつのかげ
 ようさい た ようさい た





<2020年4月5日>

1日にも少し書こうかと思ったのだが、3か月は長いようで、もう締め切り日があつという間な感じにさえなってきた。日記なのだからこら辺で少し書いておかないと思った。

新型コロナウイルス真っ最中で先が見えない今……。私のライフワークの結婚難問題改善。『婚難救助隊』のホームページは、ユーチューブでの私のアピールを前面に押し出す形にして続けているが、ブレイクしない。

あるマッチングサイトに近場の人が出てきたので、条件が少し理想とずれる面があるものの、依頼の文章も添えてみ

た。反応があるだろうか。結婚難はじわじわきて、気づくと手遅れのような感じだが、生命的には新型コロナウイルスのほうが怖い。しかし悪玉コレステロールが下がるという市販薬をアマゾン経由で購入してみた。明後日には届くのではないだろうか。どうにもコレステロールだけが下がらない体質のようである。

<4月13日>

昨日久しぶりに某マッチングサイトでマッチングしてくれた人が出た。今日帰宅したら返信が入っていて、また返信した。今度こそメル友から続けばよいのだが。

<4月19日>

(私自身のブログや SNS に既出した文章)

感染者や死亡者が世界で万単位で出ている真っただ中にこうしたことを書いていくのは批判や炎上ものだろうが、過剰に動くようになってしまった人類が外出自粛というストップをかけられることで、有り余る工業製品などがストップしたり購入が控えられると、空気や水などの自然環境については悪くなっていないのではと推測する。交通事故死も今年は減るはずだ。実際には、茨城県にも特例措置が出されたいので他都道府県からの来県者が減るのかも知れないが、数日前の通勤では正月や盆やGW 以外の平日に早朝から足立区とか品川区とか湘南まで、何の用事がある

のかという車が6台前後も入りこんでいて、今日も家の前の川で若者4人が舟で釣りをして通り過ぎていった。民主主義自由社会では自粛をしない人も出てきてしまう。その過剰が、サッカーのワールドカップや世界野球などの渋谷あたりの群衆とゴミの跡だったりするのだろう。

こんなコロナの危険な出来事にも、自然環境や働き方や、汚してしまったことや、過剰に品物があふれなければ生活が維持できなくなってしまう社会の仕組みや、裕福といわれる国での貧富の差などの異常な状態が、この不自由な時期に考え直される面も後々出てくるのかも知れない。それを体験できるためには、まずこの時期を生き延びるしかない。外出の自粛で集団感染が早く収まる可能性があるというならば、ここは外出自粛すべきだろう。付け加えれば、私がライフワークにしたい結婚難問題の解決にしても、プレイボーイやプレイガールの自由さが、男女の関係を乱し、感染させ、援助交際や不倫や離婚などを増大させ、結婚したいのに出来ない真面目な男女を多く生み出してしまったのかも知れない。多種多様な商品のように平常時には喜ばれるが、選択を遅らせ、手に入らないような高価なものまで手に入れようとして生涯を終えてしまうようなことが、結婚難問題にもあるのではないか。だからといってどんな人やものでもいいというのは感情が許さない。そうした感情を形成したのが自由で多様性ある社会構造だったのではないかと、この不自由な時期に感じさせるので

はないか。だから、夜のプレイゾーンからの感染者の問題が

オブラートにくるんだような言い含め方で言われたのではないか。愛する夫婦の家庭ならば、相互感染の危険もあると同時に、妊娠や出産が増加するかも知れない。人体を傷つけるウイルスだからその存在に対しても思考は難しくなるが、人類の作り上げてしまった資本増大の方法論を反省、再考させる意味も持っている変革の大きな出来事になるのかも知れない。

<4月19日の2>

新型コロナウイルスで考えたことを貼り付けるために開いたら、まだ13日の続きが書かれていなかった。翌々日に早々とブロックされてしまった。マッチングアプリは競争が激しすぎて永遠にマッチできないのかも知れない。私のような人にとっては。

<5月9日>

今回も私自身再婚に成功しないまま提出となってしまうし、個人事業の『婚難救助隊』にしてもブレイクしていない。新型コロナウイルス禍というすごいことになってしまった今回だが、立派に経営していたところでさえ窮地に1か月や2か月で追い込まれるのだから、いかに個人事業というか、婚難救助隊という方法を社会的有意にすることが難しいことであるかを思い知らされてもいる。某マッチングアプリも2人ほどちょっとだけ相手が反応したが、返したら2人とも速攻でブ

ロックという、またまた持ち上げられて落とされるというストレスを与えられた。しかし、新型コロナウイルスの影響で考えてしまって婚活アプリをやってみたと書いている女性を幾人かみかけた。こういうのは東日本大震災の時にも幾らか生じた事柄だと思う。人は寂しくなったり不安になると人を求めたくなるということか。しかし、新型コロナウイルスがある程度終息すると、喉元過ぎれば熱さを忘れるで、元気で強い女性たちは、あなたは一人で生きられるのね。状態に戻るのだろうか。今、婚難救助隊のホームページを見たら、あと8人で5000人閲覧を達成する。これは実現可能だろう。去年の1月23日からスタートして、フェイスブック広告で月1万円を限度にして宣伝してきて、この数字なのだが、関心をもってくれているのは4人程度だと思う。そのうち2人はけっこう、私のユーチューブ動画を閲覧されているようだ。これを少なくとも1000000倍にしなければ、結婚したい人は誰でも結婚できるという社会変革には結びつけないだろう。どうやって個人事業として生活費までまかなえて自営できるのか方法がわからないが、いまや男子小学生がなりたい職業の上位にあるというユーチューバーを目指して結婚難を救助できる実力を養成したいという作戦しか思い浮かばない。そのために、勤務先の休日の前の晩にはビデオ化した映画を1本観るというノルマをけっこう達成していたり、休日にはユーチューブを1本必ずアップするというノルマを課してけっこうやっていたりする。継続は力なりならば、ブレイク

の可能性だって無いわけでは無いのだと信じて、今回はもう提出させていただこうと思う。次回は新型コロナが落ち着いた社会になっていてもらいたいものだし、私自身はマスメディアに関心を持たれるようなユーチューバーになっていたらいいのにな。もちろんパートナーが見つかっていたらそれが本当の目的なのだけれども。

【PBLの風と土 第13回】

安定的な行動・状況の背景に根ざす信念

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見（5回目：AAUの実践の特徴、6回目：学習プロセス、7回目：問題設定、8回目：指導法）を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきています。

1. コロナ禍において前置詞に着目する

前回の結語でも示したとおり、本連載「PBLの風と土」も4年目を迎えるにあたって、新たな展開に入る予定としていた。1年目はデンマークのオールボー大学（AAU）に滞在する中で、1974年の開学以来、全学部で導入されている同大学のProblem-Based Learningについて、ユネスコチェアプログラムに採択された工学系だけではなく、その理論的・方法論的な枠組みを整理することに努めた。2年目は隔年開催のPBLに関する国際会議「PANPBL」の世界大会「PBL2018」に参加した際にご縁をいただいたアイルランドのTerry Barrett先生の書籍を取り上げ、Problem-Basedな学習において成果だけでなくプロセスを重視する意義、そもそも問題とはどのように設定するのか、さらには教員の教授法として学習者を中心とした学びのコミュニティにどう介入していくのかについて、AAUの事例との比較も重ねながら解題した。そして3年目は7月にミネソタ大学のAndrew Furco先生を招聘してのサービス・ラーニングに関する国際シンポジウムの開催を踏まえ、立命館大学サービスラーニングセンターにおける地域参加学習の実践事例と教育法の解説を、シンポジウムの紙上再録も交えながら展開してきた。

4年目の連載では、筆者が指導を担当してきた受講生のインタビュー調査などにより、サービス・ラーニングの手法を通じた地域参加学習によってどのような学びと成長がもたらされたのかを焦点を当てていくと、前回の連載を脱稿し

た2月末時点で予告をしていた。しかし、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の感染症（COVID-19）の拡大は、4月からの新年度を迎える大学にも、大きな影響をもたらした。筆者が勤務する立命館大学では、3月16日に副学長によって「4月5日(日)から5月2日(土)は感染拡大防止期間とし、授業は教室では行わず、WEBを活用した形態に切り替えて行います」と連絡され、講義型・演習型ともに、授業設計の大幅な見直しが求められることになった。講義型については授業担当者によって概ね判断や決断が及ぶところであったものの、演習型の科目の中でもサービス・ラーニング手法を用いて地域と大学とを頻繁に往復し実体験を通じて集団的に学ぶものについては、開講の可否について検討を重ねる水準まで議論が及んだ。¹

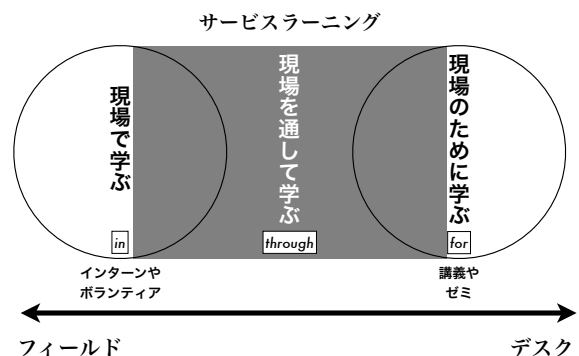


図1： サービスラーニングという学習方法の構図（山口, 2020, p.40）

連載第9回でも触れたとおり、サービス・ラーニングは現場での活動（action in the field）と地域のための学び（learning for the field）の双方を通じた（learning through action）教育法

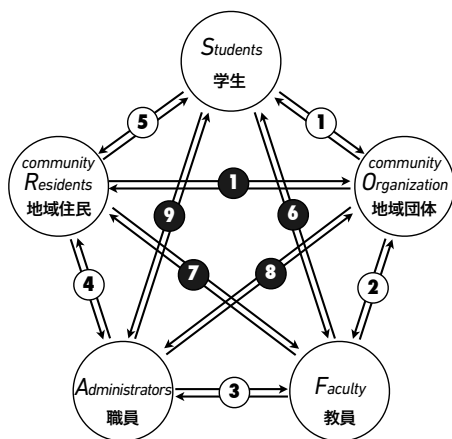


図2：SOFARモデル（連載第9回の再掲）
（Bringle et al., 2009, p.5をもとに筆者作成）

である。そのため、同じく第9回で紹介したインディアナ大学-パデュー大学インディアナ校のサービスラーニングセンター長を務めたロバート・プリングル氏らによる5角形の図解「SOFARモデル」（Bringle et al. 2009）が象徴するように、Student（学生）、Organization（受入団体）、Faculty（教員）、Administrator（職員、特に管理職）、Residents（地域住民）の5者関係をよりよいものにしていく必要がある。そのため、通常であれば何をどのようにすればいいのかを考えていく手がかりとしてSOFARモデルを援用するものの、COVID-19が深刻化する状況下では、リスクコミュニケーションへの手がかりとして、何をしないことが大切かを探ることになった。結果として立命館大学は、4月7日に大阪いばらきキャンパス（OIC）が設置されている大阪府も対象として政府が緊急事態宣言を発したことにより、4月8日から5月6日までは全キャンパスの授業を休講（4月7日発表、<http://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=1716>）、そして5月7日以降も緊急事態宣言が継続された場合も春学期を通

じてWEBを活用した形態の授業を実施（4月21日発表、<http://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=1725>）という方針を採ったため、一部のサービスラーニング科目は閉講（「全学インターンシップ」）もしくは図3のとおり受講生に対する受講辞退の特別措置（「シチズンシップ・スタディーズ」）を図ることにした。²

メディア・アーティストの落合陽一（筑波大学准教授・学長補佐）先生は、3月27日のnoteというサービスを用いて執筆している『落合陽一の見ている風景と考えていること』の「アフターコロナというよりは、あと数年「ウィズコロナ」で生きていくための世界観に移行し始めた」と題した記事（<https://note.com/ochyai/n/nb0d-d29c3a6f0>）において、「全てがオンラインに移行できるわけでもない」という「この状況下でどうやったら自分の能力を発揮して付加価値を作れるか、それにはどういう行動指針が必要なのか」を考え、「重要なのはアクションプランと環境の安定だ」と述べている。「ウィズコロナ」という視点は、COVID-19という感染症が収束し、SARS-CoV-2というウイルスによる社会的影響（コロナ禍）が終息するときを展望することは、決して「ビフォーコロナ」の状況への回帰を実現することにはならないし、場合によっては「ビヨンドコロナ」という具合に、感染症を無きものとして、あるいは巧妙に回避することも妥当ではないことを気づかせてくれる。そこで今回は、空気感染はしないエンベロープウイルスのため石けんによる手洗いとうがいで感染対策が可能、といった医学的な知見をもとにして「ビフォーコロナ」な状況を実現するのではなく「ウィズコロナ」の状況下で、現在進行形で模索している地域参加学習のあり方について、現時点での記録を残すという観点で記していくこととしたい。その際、前回の予告のとおり、TEA（複線径路・等至性アプローチ）の理論を援用しつつ、述べていこう。

2. 体験学習は不可逆的時間で進行する

今回から4回にわたり事例として検討する予定としていたのは、立命館大学サービスラーニングセンターが、その前身とするボランティアセンターの時代から「地域活性化ボランティア」という科目名で展開してきた「シチズンシップ・スタ

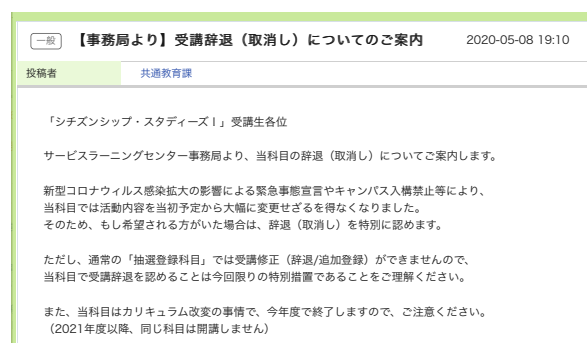


図3：受講取消の特別措置に関する受講生向け案内（教養C群科目「シチズンシップ・スタディーズ」）

ディーズI」である。この科目については、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムの採択を通して構築したプログラムの背景と枠組みについてまとめた論文（富田ら，2009）や書籍（桜井・津止，2009）、そしてその後に教育効果を定量的な分析により明らかにした論文（木村・河井，2012）、さらには複数名の教員の教育実践を比較して授業改善への手がかりを探った報告（山口ら，2018）など、既に多くの研究で取り上げられてきている。中でも、山口・河井（2016）による学習評価と実践評価のあり方について取り扱った研究では、セメスターを横断した通年型科目として、夏期休暇中に現場において集団的な活動が重ねられていくことによって、時に受講生内に学びと成長への意識の差をもたらすものの、受講生どうしによる形成的評価によって、自らの学びへの内省が促されると共に実践の意義の再詳述がもたらされることで人格的な成長を遂げると整理された。その際に確認されたのは、体験学習における失敗の経験を受講生に継続的な学習に対する挫折の契機とならないよう、指導・監督が重要となる、ということであった。

図4は、「シチズンシップ・スタディーズ」が、1年を通してどのように展開されるのかを図化したものである。集団的な活動を行う、いわゆるプロジェクト型の科目であるが、予め受入先から示された活動計画のもと、一人ひとりがチームの一員としてどのように地域社会が抱える課題に対して問題解決への貢献が可能な目標設定をし、大学と現場とを行き来して1年間を過ごすことで目標の達成を目指すという構造になっている。受講生らが戸惑うのは、何をどのように実施するかと

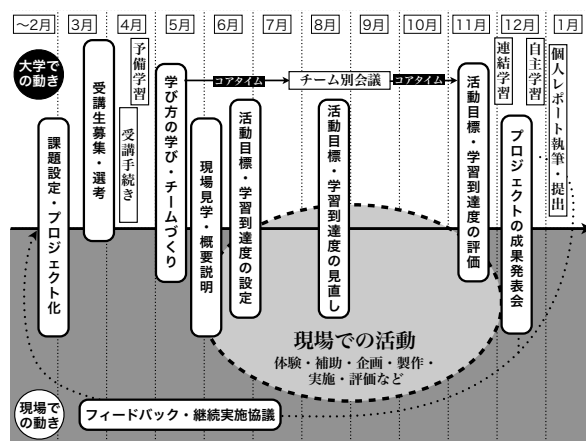


図4: 「シチズンシップ・スタディーズ」の流れ
(例年、受講ガイド等に掲載・提示)

いう行為の目標と、そうした行為が着実に実施されることによって何がもたらされるのかという成果の目標と、2種類の目標を関連づけて活動計画や役割分担の具体化を図ることである。ところが、いざ文章で目標を明文化していく段になると、行為目標の主語が受講生らであるのに対して成果目標が地域社会などが主語となるにもかかわらず、「私たちが〇〇を行うことで△△についての□□を学ぶ」という具合に、自主企画の内容を示した上で学習目的で地域社会に関わっていく上での姿勢が文章化される傾向が年々強まっているように思われる。

そして今回、COVID-19の拡大により、応募時点では受講ガイドに示されていた活動が白紙されて、オンライン授業によって地域社会への貢献を前提とする授業が展開されている今、受講生らはチームビルディングと目標設定の双方でかなりの苦慮を重ねている。通常であれば、SOFARモデルになぞらえれば、F（教員）から学び方を学ぶ（事前学習1～2）と、地域社会に足を運んでO（受入団体）から活動の全体像や受講生らへの期待と共に現場の一員として歓待を受ける（オリエンテーション）。そして、活動の現場で向き合うR（地域住民）の存在に関心を向けられるようになることによって、自分たちがすべきことは何か、と同時に何ができるのか、さらに個々の関心や力量をもとにすればこの機会に挑戦したいことを何か示すことができないかを議論してチームでの行為目標と成果目標の合意形成を図った上で、その一員として自らが何を学び成長したいかの学習目標を定める（事後学習3）。その後は大学で定期的に集まり、必要に応じてA（職員、特に専門職）の支援も受けながら、現場での活動を重ね、活動期間全般でも中間段階となる夏期休暇の中盤に目標の中間評価と必要に応じて見直しの機会を迎えることになる（中間ふりかえり）。

つまり、通常であれば、図5に示すように、事前学習を起点として、現場に触れる（見る・知る）ことで、新鮮な間隔を大学に持ち帰って（考える）、それをもとに目標を定めて（問いかける）、現場からのフィードバックをもとに（悩む）夏期休暇中に設定された各種活動に携わりながら、いよいよ現場に慣れていく、という流れに乗っていく。ちなみにこの図5は岡田（2007）

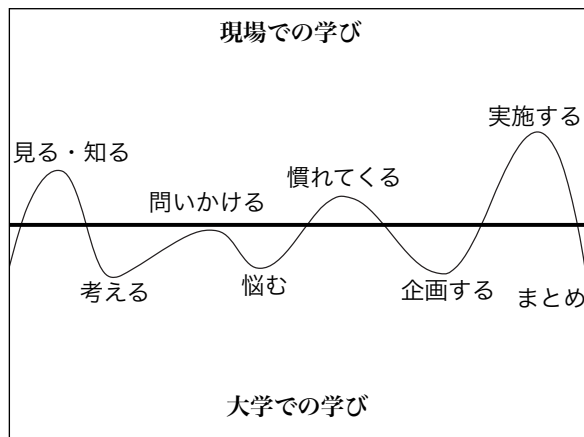


図5：シチズンシップ・スタディーズ受講生の立ち位置（岡田,2007によるハリウッド映画の典型を参考に）

がハリウッド映画の時間進行に対する主人公の感情の浮き沈みと鑑賞者の感情移入の典型パターンを単純化した図解に言葉を添えたものであり、筆者が事前学習2において受講生らに提示してきたものである。この典型パターンをサービス・ラーニングの展開パターンと重ねた理由は、「上げたままだったらお客さんが家へ帰れない」として、2時間映画であれば110分のところで気持ちを落としていく場面を入れる、ということが、活動を通じた学習をするプログラムにおいて、「現場での活動をやりっぱなしで終えない」や「活動報告会で武勇伝を語って自己満足に浸らない」あるいは真逆で「反省の弁で敗北宣言をして失敗の要因を他人や環境のせいにはしない」という事前の注意喚起のためでもある。ただし、それ以上に重要なことは、試行錯誤を繰り返しながらも、絶対的な時間進行は止めることができず、いわば非可逆的時間を前提に何らかの交流や挑戦を重ねていく必要があること、そして小さな失敗を重ねながら（それを大きな挫折せず）物語が進行するよう努力する必要があると理解を促すことにある。

3. サービス・ラーニングでの等至性は

このように、地域社会での活動と、それをもとにした学習プログラムであるサービス・ラーニングでは、非可逆的時間を前提に議論ができるとすれば、TEA（複線径路・等至性アプローチ）による理論的・方法論的な検討が相応しいものであることが所与の前提とすることができる。TEAとは「生命・生活・人生をまっとうする場のあり方、そこで生きる人間のあり方を描く」（安田・サトウ, 2017, p.213）ものあり、流れる時間に対し

て、ある人（たち）のある時点からある時点までのLifeを図解（TEM：Trajectory Equifinality Modeling）して、出来事の意味と価値を見える化する研究方法である。その際、いくつかの選択を定めた時点や選択を迫られた場面（分岐点）と、分岐点を経て葛藤や紛争が解決された理想的な状態（等至点、自ずと同時にその対極化された状態も含めて）を想定できることになる。

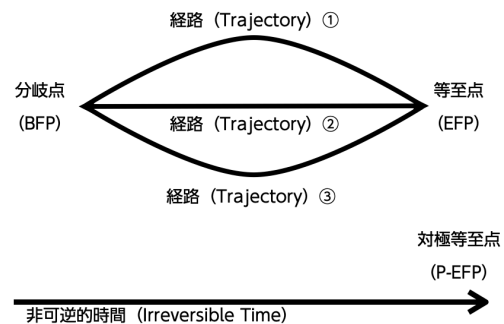


図6：極めて単純なTEM図（安田・サトウ, 2012, p.2に一部筆者が加筆）

図6をもとにすると、サービス・ラーニングでは「受講する／しない」（厳密には応募して許可される／されない）という分岐点がある。仮に分岐点（Bifurcation Point）において「受講許可」となった場合、複数のクラス（例えば、①は時代祭、②は減災、③は草津街あかり、など）に所属して活動と学習が進められることになる。受講した以上、成績評価を通じて単位が付与されるという等至点（Equifinality Point）を通過することになるが、途中で受講を辞退した場合や消極的な受講を重ねれば単位が付与されないという両極化した等至点（Polarized Equifinality Point）にたどり着くことになることが説明できる。ただ、コロナ禍におけるサービス・ラーニングのプログラムでは、こうして単純に「合格／不合格」へと至らないのが特徴的である。そのため、より緻密なTEM図の作成過程を経ることにより、ある到達点に至るまでに、どんな促進要因（Social Guidance：SG）と阻害要因（Social Direction：SD）の影響がもたらされるのかを、現実的に現象を分析・解釈しつつ、また予備的に考察することにより、リスクコミュニケーションを図ると同時に、アクティブ・ラーニングの授業デザインを協働で展開していく手がかりを得ることができる。

図7は、実際に今次のCOVID-19により、受講辞退者が発生したクラスにおける受講生の心理状態

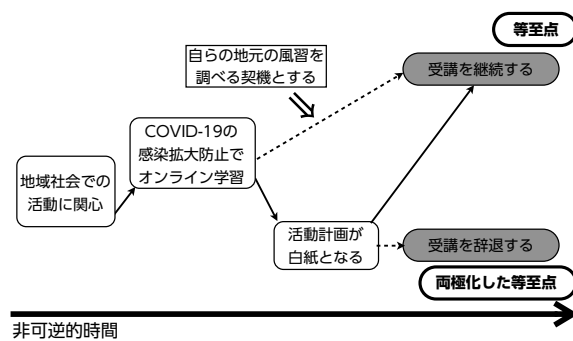


図7：活動計画白紙を経た受講の継続・辞退への径路（安田・サトウ, 2012, p.18をもとに筆者が作成）

および行動を図化したものである。9名のプロジェクトメンバーは、ほぼ共通して地域社会での活動に関心を抱いて選考に応募し、受講許可となったものの、選考結果の発表後に少なくとも春学期の授業は全てオンラインで実施されることになり、当初予定していた地域活動（神社の見学、地域の見守り活動への随行、など）は全て白紙となった。そうした計画変更が求められた場合も、当初の予定であれば、キャンパスや活動現場に一堂に会していたが、COVID-19の特有の事情として、3密（密閉・密集・密接）の回避が求められた。よって、このクラスではビデオ会議システム「Zoom」によるリアルタイム通話で意見交換を重ねていったところ、一部の参加者は通信容量を抑えるため、またプライバシーを主張したため、人見知りのため、そもそもビデオ通話に不慣れなため、そうした複数の理由が混在する中で、結果として全員の顔が分からない中での意見交換が数回重ねられることになり、自ら積極的に発言できないことに引け目や負い目を感じた受講生や、受入先のコーディネートのもとで活動することに期待を寄せていた受講生は、結果として受講辞退への道を歩むことになった。

図8は、受講辞退への道を歩んでいく中で、活動計画の白紙が決定した際にオンライン学習を通じて提案ができた場合とできなかった場合との違いに、どのような要因があったのかを検討し、TEM図に盛り込んだものである。図7では、いわゆる調べ学習によって受講継続への意欲を持つ可能性を示唆したが、実際、筆者が担当しているクラスでは、今年度の当初計画にあった活動が白紙となることによって、長年にわたり実施されてきた地域社会の伝統文化や習俗が今年度で断絶し未

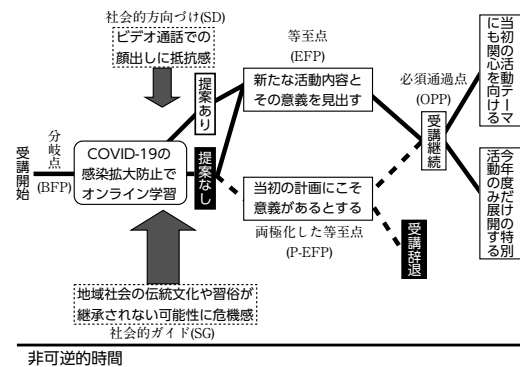


図8：促進要因・阻害要因を踏まえた履修径路の類型化（安田・サトウ, 2012, p.43をもとに筆者が作成）

来へと継承されなくなるのではないかと危惧を抱く受講生がいた。それを契機として、改めて自らの地元ではどのような祭礼などがなされているかに関心を向けた受講生がいた。それによって、新たな活動内容に意義を見い出せなくとも当初の内容にこそ意義があると捉えた受講生は、文字通り「関所」（安田・サトウ, 2017, p.210）を通過（必須通過点：Obligatory Passage Point）し、計画は白紙となっても次年度以降に活動が継続・発展するように何らかの取り組みを重ねていきたいという意欲を抱くことで、受講継続という径路を取るという径路が開かれたのだろう。

4. やはり「ために」より「ともに」で

冒頭に記したとおり、連載4年目は立命館大学サービスラーニングセンターによる地域参加型学習プログラムを通じて、過年度の受講生がどのような学びと成長を遂げたのかを追う予定であった。ところが、コロナ禍を受けて今年度のプログラムの展開に大きなもたらされた。そこで、改めてサービス・ラーニングを教育法として用いたプログラムの特徴を確認すると共に、当初、理論的・方法論的観点として援用する予定であったTEA（複線径路・等至性アプローチ）を用いることで、どのような困難さが伴うのかについて検討を重ねた。それにより、オンライン授業によって受講辞退という選択肢が与えられること、またそれでも受講を継続する選択の背景を整理した。

それにより、今回は進行する時間の流れに対して、各々がどのような選択を迫られ、それらをどのように選択をしていくのか（図7）、絶対的な時間軸（不可逆的時間）に対する選択の促進要因・阻害要因に関心を向けた（図8）。ただ、そ

うして図解する、また解釈を重ねる理論であり方法論としてのTEAでは、人々の意思決定の背景を分析する上で、より深い観点が示されている。端的に言えば、個別具体的な活動（第一層：アクティビティ）の背後には状況を意味づける記号（第二層：サイン）があり、活動や状況の安定をもたらすには個人や集団に核となる価値観が発生する（第三層：ビリーフ）という「発生の三層モデル」の存在と機能が示されているのである。今回はこのモデルを明示的に解説・援用しなかったものの、図8の作成・解釈を通じて触れた、来年度以降の継続可能性を担保するという使命感をもとにした意思決定は、第三層のレベルを背景とした選択であったことがわかる。

「ウイズコロナ」とは、飛沫感染対策のためにマスクの着用が効果的とされる中で「ビフォーコロナ」な状態であればできていたことを、何とかして実現するということではない。ここで、大規模かつ広域に被害をもたらした地震と津波と原子力災害という複合型の災害であったに着目して、梅原猛先生が東日本大震災を「文明災」と捉えたことに改めて思いを馳せることとしたい（島、

2011）。図らずも、治療薬もなく無自覚感染で発症時に重傷化する場合があることなどから、「正しく恐れる」ことが指摘されているのも、とされることにも通じるところがあろう。立命館大学国際平和ミュージアムの安斎育郎名誉館長が、放射線という見えないものに対して「事態を侮らず、過度に怖れず、理性的に向きあう」大切さを示し続けた点を、改めてコロナ禍でも引きつけたい。

今回は減災をテーマとしたクラスを履修した学生がどのような学びと成長を遂げたのかを取り上げる。放射線被害を「過度に恐れる」声もあって、受講当時は積極的に関わることができなかったものの、受講終了後に遠隔地から現地に頻りに訪れた当時の思いなどに触れていくことになる。そのため、授業と課外自主活動の効果的な連携の可能性についても触れることになる。本連載第10回ではAndrew Furco先生のスライドを複数紹介したが、その中の図3のとおり、地域貢献・市民参画は「ToよりFor、さらにInよりWith」という具合に、より深い水準に達することを改めて認識させてくる好例を示すことができるだろう。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement. *A Journal of Service Learning & Civic Engagement*, 1(1), 1-20.
- 桜井政成・津止正敏. 2009. ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践. ミネルヴァ書房.
- 木村充・河井亨. 2012. サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究——立命館大学「地域活性化ボランティア」を事例として. *日本教育工学会論文誌* 36(3), 227-238.
- 岡田斗司夫. 2007. 「世界征服」は可能か?. 筑摩書房.
- 島大輔. 2011. 梅原猛・哲学者：原発事故は「文明災」、復興を通じて新文明を築き世界の模範に. *東洋経済オンライン* <https://toyokeizai.net/articles/-/6624> (2020年5月31日閲覧)
- 富田沙樹・近森節子・徳永寿老・真田睦浩. 2009. 立命館大学における「サービス・ラーニング」モデルの構築. *大学行政研究* (立命館大学大学行政研究・研修センター紀要), 4, 33-48.
- 山口洋典・河井亨. 2016. サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. *京都大学高等教育研究* 22, 43-54.
- 山口洋典・秋吉恵・宮下聖史・木村充・河井亨. 2018. サービス・ラーニングにおける「メモの書き方ガイド」の導入—ジャーナルの厚い記述につなぐために—. *立命館高等教育研究*, 18, 147-161.
- 山口洋典. 2020. 他者とともに学ぶサービスラーニング. 立命館大学. 「未来を拓く」. 立命館大学. 40-41.
- 安田裕子・サトウタツヤ. 2012. TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開. 誠信書房.
- 安田裕子・サトウタツヤ. 2017. TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房.

【注】

- 1 筆者が講義系科目で受講生にどのような周知を行ったかは、関西学院大学の岡本仁宏先生を中心に設置・運営されているFacebookの公開グループ「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」にて4/2に投稿 (<https://www.facebook.com/groups/146940180042907/permalink/148218256581766/>) し共有した。
- 2 5/3の時点で、LMS (Learning Management System：学習管理システム、立命館大学では朝日ネット社のmanabaを導入) により次の2点を授業担当者として受講生に周知した。「(1)全ての授業スケジュールは変更せずにオンライン授業での開催などにより実施します。(2)全ての春学期の活動スケジュールは現時点では白紙とし、夏期休暇中及び秋学期の活動については、受入先等（平安講社第八社・平安神宮）及び立命館大学の方針が決定次第、案内します。」

〔12〕 寺田接骨院 寺田弘志

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

「先生、最近何か面白いテレビドラマありました？」

「『鬼滅の刃（きめつのやいば）』っていうアニメが面白かったです。ネットで観たんですけどね」

「ああ、名前だけなら聞いたことがあります」

「かまどたんじろうという少年が、鬼に家族を皆殺しにされるんですが、たんじろうの妹のねずこが鬼の血を浴びて鬼になってしまいます。たんじろうは妹を人間に戻す方法をさがして旅に出ますが、修行をして鬼を倒す鬼滅隊に加わります。鬼はきぶつじむざんという一人の人間からはじまっていて、むざんの血が体に入った人は、死んでしまいか、鬼になってしまいます」

「ほー」

「鬼を倒す方法は二つ、日輪刀という特殊な刀で首を切るか、日光をあびせること。首以外、どこを切られてもすぐに傷が治ってしまって死なない鬼が、日光を浴びると一瞬で消えてしまいます」

「あっけないですね」

「はじめは、どうしてそんなに強い鬼が、日光に当たるくらいで死んでしまうなんて、ありえない設定だなと思って

いたのですが、鬼ってウイルスのことなんじゃないかと気づいたら、ガラッと見方が変わったんです」

「鬼がウイルス？」

「ウイルスは日光に弱くて、お日様に当たると短時間で死滅してしまいます。患者のふとんや衣類を日光に当てると良いことは、ウイルスが発見される前から知られていたようです。夜はウイルスが死滅しにくいので、感染リスクが高まります。そこで、夜は鬼が出てあぶないから出歩くなと昔の人は戒めていたんじゃないでしょうか」

「なるほどー、そういう見方も面白いですね」

「西洋の吸血鬼の話にも似たようなものがあります。日光に当たると灰になってしまうので、昼間は吸血鬼がいませんが、夜に出歩くと吸血鬼にかまれます。夜行性のコウモリにかまれてウイルスに感染しないように、吸血鬼伝説が生まれたのかもしれません」

アルコール以外の感染防止対策を検討していたときに注目したのが、殺菌灯です。

紫外線を照射することで、ウイルスが除菌できます。

小児検診をされているお医者さんが、殺菌灯について

「10W タイプなら5m距離で90秒、2m距離なら3秒、1m距離なら0.7秒、50cm距離なら0.2秒で新型コロナウイルスの殺菌が終わる。灯体も軽いので組み合わせで使い勝手の良いハンディ殺菌灯を作ることが出来る」という書き込みをされていました。

殺菌灯を使えば、非常に短時間でウイルスを除菌できます。

10cmの距離なら0.1秒もかからないはずです。

熱で新型コロナウイルスを除菌するには「80度10分（厚生労働省）」（別のデータでは「92度15分」「60度30分」「100度1分」）が必要という報告があり、熱で除菌するのは非効率です。

殺菌灯から出る253.7nmという波長の紫外線は、太陽光の1600倍の速さでウイルスを増殖できなく（不活化）することができます。

これを参考に、私もハンディ殺菌灯を作り、治療に使う用具やカーテン、壁、ベッド、床、椅子、受付、トイレ、待合室の雑誌などをせっせと除菌しています。

とはいっても、患者さんの目の前では紫外線除菌はできないので、患者さんが電気治療をしている時間やお帰りになってからの時間にです。

さらに、紫外線照射ボックスをつくり、手洗い後の手指やコインなどを除菌しています。この紫外線照射ボックスは、除菌をした手でスイッチを触らなくてもいいように、足踏み式スイッチにしてあります。

紫外線を含む日光には、一日に15分～30分（冬場は1時間）当たることが必要ですが、殺菌灯については手指の消毒以外、なるべく当たらないよう、裸眼で直視しないよう、気をつけています。

これから夏までに、エアコンに入る空気を殺菌灯で除菌して、空気除菌できるようにする計画です。

なお、日本発の技術「222nm 紫外線殺菌・ウイルス不活化ユニット」はウシオ電機が開発したもので、ウイルスは除菌するけれども、人体の皮膚や目にはまったく無害な殺菌灯です。

例えば、ライブハウスで照明のように使えば、感染のリスクを減らすことができます。

早く販売されるようになってほしいものです。

紫外線のほかにも、次亜塩素酸水を除菌に使うことにしました。

「先生、これなんですか？」

「これは加湿器なんですけど、次亜塩素酸水っていうのを噴霧して、ベッドやカーテン、床を除菌しているんです」

「ジアエンソなんかかってなんですか？」

「プールで消毒するときに使うやつってわかります」

「あー、あの、においのするあれ？」

「そうそう。あれの薄いやつを噴霧すると、だいたい水道水くらいの塩素濃度になるんですけど、ちょっと、におったらごめんなさいね」

「そこから出てるんですか？」

「小型の加湿器やから、見えにくいですけど、こうやって手をかざしてもらったら、わかりませんか？」

「ああっ、ほんまや。出てるわ」

「ここはカーテンで区切られてるから、小型の加湿器を各ベッドのそばに1台ずつ取り付けたんです」

「上手に付けはったね。けど、たいへんですねえ」

「そう。いまたいへんなんですよ。ベッドや枕を使うたびにアルコールで拭くでしょ。次亜塩素酸水を噴霧して、それから毎日、紫外線の出る殺菌灯をこうやって照らしてね、除菌してるんですよ」

「へー、めっちゃたいへんですよん」

「ここでクラスター発生させたらあかんと思って、がんばってるんです。ところで、今日はどんな具合ですか？・・・」

次亜塩素酸水というのは、消毒薬ではなく、食品添加物の中の殺菌料で、ウイルスを除菌する効果が高いと厚生労働省が以前から認めています。

アルコールが不足してから、経済産業省は、次亜塩素酸水をアルコールの代用品として物を殺菌するのに使えないか、N I T E = 製品評価技術基盤機構に検証させています。5月29日NHKなどの報道機関は「N I T Eが、新型コロナウイルスの消毒に次亜塩素酸水は、現時点では有効性

は確認されていないとする中間結果を公表し、噴霧での使用は安全性について科学的な根拠が示されていないなどとして、控えるよう呼びかけた。また、7種類の界面活性剤が新型コロナウイルスに対して有効であるとも公表した」と報じました。

NHKなどの報道では、次亜塩素酸水は効果が無く、噴霧を控えるよう発表されたと受け取れます。

しかしNITEの資料を読んでも、「効果の判定にはまだ至っていない」、「次亜塩素酸ナトリウムを噴霧しないようにと厚生労働省は注意を喚起している」という内容です。噴霧については、無効だというWHOや中国国家安全健康委員会などの意見と、有効で安全だという日本電機工業会などの意見が併記されています。後者はデータなどを示していますが、報道ではあまり取り上げられていないようです。否定的な意見のほうは根拠がなく、あくまでも意見です。

厚生労働省の資料では、次亜塩素酸水は、ウイルスに対して除菌効果があり、次亜塩素酸ナトリウムや塩化ベンザルコニウム以上の殺菌効果があるとされています。

次亜塩素酸ナトリウム（ハイターやブリーチを薄めたもの）で新型コロナウイルスを消毒できると厚生労働省は知らせているので、それより除菌効果の高い次亜塩素酸水で消毒できるか、調べるまでもないように思えます。

しかも、会社や医療機関、福祉施設、宿泊施設、店舗などで、すでに次亜塩素酸水を対策として導入し終えているところも多いというのに、まだ、検証を終えていないということです。

新型コロナの検証をする前に、インフルエンザウイルスで予備の検証をしていたというのですから、訳がわかりません。

反対に、厚生労働省の資料では、塩化ベンザルコニウムはウイルスに対して除菌効果がないとなっているのに、5月29日NITE発表の新型コロナウイルスに対して有効な7種類の界面活性剤に塩化ベンザルコニウムが入っています。

いったいどっちを信じればいいのでしょうか。

塩化ベンザルコニウムから他の消毒方法に変えた人は怒っているのではないのでしょうか。

塩素には、確かに毒性があります。塩素ガスは非常に毒性が強く危険です。

次亜塩素酸ナトリウムは、酸と混ぜると塩素ガスを発生させて危険です。

しかし、塩のように毒性が少ない塩素化合物もあります。次亜塩素酸や塩酸のように、体内で作られて、免疫や消化に使われる塩素化合物もあります。

次亜塩素酸が有機物（ウィルスなど）に触れると、有機物からアンモニアを奪ってクロラミンという物質と水になります。

次亜塩素酸は、水道水の除菌に使われている次亜塩素酸ナトリウムの80倍の除菌速度があります。

除菌効果が高い上に、すぐに分解されるので、安全性が高いと言われています。

体内でも、ビタミンC（アスコルビン酸）と反応して、塩になるだけです。

半面、すぐに分解されるので、長期保存が難しいのが欠点です。

水道水に次亜塩素酸ナトリウムが使われるのは、次亜塩素酸よりも安定しており、すぐには分解されないからです。プールや浴場での除菌も、次亜塩素酸水（イソシアヌル酸系塩素剤などによる）が使われています。

もし、次亜塩素酸水の噴霧が問題だとしたら、プールや浴場で水やお湯、湯気を浴びるのも問題になるはずです。

そうすると、日本の多くのプールや浴場が営業できなくなります。

食品加工の現場や料理店でも、食材や調理器具などを洗うのに次亜塩素酸水が使われています。

次亜塩素酸水が効果がないという判定が出たら、ただでさえ混乱している現場は、いっそう混乱するでしょう。

それもさることながら、判定を出すなら、もっと早く出すべきです。

判断が遅すぎます。

当院では、10 ppmから20 ppmの次亜塩素酸水をアルコールが不足したときの代用品として用いることにしました。

N I T E の判定が出るのを待ってられません。

また、加湿器で噴霧する方法も、ウイルスを減少させるというデータがあるので使い続けることにしました。

(WHOは噴霧は推奨しないと言っています。WHOはマスクは効果がないと言っていましたが、日本人の多くはマスクを使っています。WHOは台湾から新型のウイルスの警告が早期にあったのに、中国からの要請に基づいて、3月11日までパンデミックではないと言い続けました。いまのWHOを私は信用することができません)

10 ppmの次亜塩素酸水を噴霧すると、拡散して0.1 ppm程度になります。

労働安全衛生法上の空気中の塩素濃度に関する基準は0.5 ppmで、加湿器に接近しすぎない限り、基準を上回ることはありません。

日本の水道水の残留塩素濃度は0.1 ppm～1.0 ppm程度とされています。

プールや公衆浴場の残留塩素濃度は0.4 ppm～1.0 ppmと定められています。

ですから、0.1 ppmならプールや公衆浴場につかっているよりも塩素による健康被害のリスクは少ないと言えます。

ちなみに、WHOは、飲料水に含まれる残留塩素濃度は5 ppm以下としており、生涯毎日5 ppmの水を飲み続けても健康に影響がないとしています。

日本人なら、5 ppmの水はくさくて飲めないでしょう。そんな水を飲み続けるようにWHOに言われたら、あなたはWHOの指示に従いますか？

専門家によって、言うことが正反対なこともあります。

たとえば、加湿については、賛否両論があります。

湿度が高いほうがウイルスの寿命が延びるのは事実です。

だから加湿は良くないとする説があります。

一見すると正しいように思えますが、ではどうして空気の乾燥する冬場に風邪やインフルエンザが流行しやすいのでしょうか？

湿度が低いと、ウイルスを含んだ飛沫（5 μm以上）が乾燥して小さな飛沫核（5 μm以下）になります。

小さな飛沫核は、いつまでも空気中を漂いやすくなり、また、肺の奥（肺胞）まで入りやすくなります。

飛沫が乾燥して飛沫核になると、失活するウイルスもありますが、新型コロナウイルスは乾燥しても3時間は感染能力を有していると言われています。

つまり飛沫感染だけでなく、空気感染すると考えたほうが良いのです。

飛沫は重力で2 m以内の床などに落ちて、そこで乾燥し、死滅すると言われています。

あなたなら、除湿して飛沫を乾燥させるのを選びますか、加湿して飛沫を床などに早く落ちさせるのを選びますか？

湿度が高いほうが、気道の粘膜が保護されるということもあります。

飛沫は、体内に入ると上気道で捕捉されるので、鼻水などとともに体外に排泄されやすくなります。

飛沫核になって、肺や肺胞に達した場合、体外に排泄されるのに時間がかかります。

ウイルスが粘膜についてから感染するまでに3時間くらいかかるらしく、その間に排泄されるほど感染のリスクは下がるので、上気道で捕捉される飛沫のほうが、肺胞まで侵入する飛沫核よりもリスクは少ないと考えました。

つまり、加湿して飛沫が乾燥しないようにしたほうが、飛沫が早く床などに落ちて、新型コロナウイルスに感染するリスクは下がると私は判断しました。

NHKの報道を知ったあとも、当院では、各ベッドごとに小型の加湿器を置いて、次亜塩素酸水を噴霧することにしました。

政府だろうとWHOだろうと専門家だろうと、言うことが100%正しいということはありません。

次亜塩素酸水が消毒薬として代用できるかどうかさえ判定できない。

治療薬は、よその国が薬事承認したら、日本でも薬事承認する。

10万人あたり0.5人以下の新規感染者という基準を作りながら、達成前に非常事態宣言を解除する。

そういうブレブレな

自分でよく調べて、吟味して、早くどうするか決断して、やり通す――W I T Hコロナの時代とは、そういうことがますます必要になる時代だと私には思えました。

以下は寺田接骨院の感染症予防対策です。

マスクの着用、患者さんごとの手洗い・消毒、ベッドや枕、電気治療機器の導子などを患者さんごとにアルコールでふく。

患者さんには、来院時、除菌済みスリッパをお使いいただき、お帰りの際に使用済みスリッパ入れにご返却いただく。来院時に、手指の除菌をお願いする。（70%アルコールまたは紫外線照射による）

せきエチケット、マスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保をお願いする。

発熱時は、通院を控えていただく。

玄関ドアやトイレドア、手すりなどを、人が触れたときに除菌する。（アルコールなどでふく）

トイレには、使い捨てのペーパータオルとシートペーパーを用意する。

おつりを渡す際、硬貨や紙幣は除菌したものをお渡しする。できる限り換気する。（窓を開放しておくか、30分に一度、数分間換気扇を回す）

待合室、施術室のスペースごとに、次亜塩素酸水を噴霧する。

患者さんが触れるところを紫外線除菌する。（玄関・トイレ・受付・待合室（椅子・雑誌など）・施術室（カーテン・壁・ベッドの下など））

ウォーターサーバー備え付けの紙コップおよび紙コップホルダーを1個ずつ除菌して、ビニール袋で個包装する。ウォーターサーバーはタンク交換時に、内部を消毒、洗浄する。

タオル、マット、サポーター、牽引用ベルト、テーピングテープ、ハサミなど施術に使うものは、お一人ごとに除菌したものを使う。

タオルをすべて抗菌加工したものにする。

毎日体温測定する。（発熱があれば休院する）

現代社会を『関係性』という観点から考える^⑫

対人援助職が家族のケアを担うとき(1)

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

この連載でも幾度か触れてきましたが、私は長年家族介護を続けています。実母、実父（存命）、義父母（義母は存命）の介護のほか、母方伯母の看取りも経験があります。

今回は、こうした経験をベースに、「対人援助職が家族のケアを担うとき」というテーマで書かせていただきたいと思います。意見はあくまで私見であり、また事例については個人情報保護のため、私を含めた家族介護従事者の体験を幾つか組み合わせたものであることを申し添えます。

1 はじめに

「介護の社会化」を目標に介護保険制度が導入されたのが平成12年、今から20年前になります。ただ、一気に「介護の社会化」が実現したわけでは当然ありません。家族が相応の役割を果たさなければならない状況は今なお続いています。

また、ここで述べる「家族に対するケア」とは、介護保険が適用されるケースばかりではなく、比較的長期の療養を必要とする家族の心身の疾病などを含むものとして論じさせていただきます。今回は介護保険に関係するものについてのべさせていただきます、次回は介護保険以外の事例を取り上げたいと思います。

学業と就業と疾病・障害を抱える家族（親世代、祖父母世代、きょうだいなど）のケアの両立に苦慮している「ヤングケアラー」に対する注目がここ数年高まっています。私自身も病弱な実母の入院付添いは小学校高学年から経験してきました。実母の体調によっては諦めなければならないこと（クラブ活動など）も当然ありましたし、実母の体調不良による家計の状況も薄々理解できていたので、進学や進路の決定は比較的早期の段階で決めていたように思います。一人っ子でもあったので、将来は自分が親の面倒を見るのだということを前提とした進路決定でした。幸い奨学金や支えてくださる多くの方々のお力添えもあり学業は全うできましたし、そのことには今でもとても感謝しています。しかし、同じ状況の子供世代を今日の前にすれば、当時の自分と同じことをせよとはとても言えないと断言できません。ここはもっと手当が必要な部分と考えています。

家族の病気や障害の存在は、「そのケアを行う」という目標のもと、家族メンバーの凝集性を高めるように機能することがあります。健康な家族であれば、世代間境界や夫婦間連合などをきちんと保ち、適切な役割分担を行うことも可能かもしれません。ただ、「家族だけ

らあたりまえ」という「正論」で全てを解決しようとする、前回の連載のように、家族関係が大きく崩れることもあります。また、「ケアをする」「ケアを受ける」ことはパワーバランスの均衡を保つための配慮が必須であり、それが崩れれば不適切なケアや家族介護従事者の心身の消耗につながります。家族だけで抱え込まないよう、インフォーマル・フォーマルな支援が入りやすい状況下で行われることが適切だと考えています。

2 対人援助職が家族のケアに直面するとき 医療機関において

私が更生保護官署に奉職後も実母の長期入院などは続きましたが、一番大きな出来事は実母のクモ膜下出血の発症でした。当時私は更生保護官署から一時出向して少年院で勤務していましたが、在院生を指導中に急遽病院から連絡が入り、指導の現場を交代の先生に任せて病院に急行したことを昨日のことに思い出します。第一報では病名はわかりませんでしたが、病院到着後の幾度かの検査を経てクモ膜下出血と診断が確定し、急遽開頭手術が行われることになりました。脳血管に関する疾病のなかでも特に致死率が高いものであることは当時の私でもわかっていました。術後の状態も非常に厳しいもので、最終的には再度開頭手術をし、脳内に溜まった水を腹膜内に流す機器を埋め込む手術をすることになりました。

こうした手術の立ち会いなどをしながら、なんとか勤務を継続するため病院の近くに素泊まりの宿を確保するなど、最悪の事態も想定しながらも長期戦となるケアの準備を進めていました。その時に医療従事者の方から折に触れていわれたのが、「(取り乱す御家族も多いのに) 職業柄が落ち着いていらっしゃいますね」「いつも冷静ですね」という内容の言葉でした。ただ、

これは「職業柄」(保護観察官という職業はあまり知られていませんでしたが、少年院の法務教官といえば、それが正しいかどうかは別として、イメージがしやすかったのかもしれませんが) というよりは、非常時モードのスイッチが入るとまずは確実に目の前のことをこなす、という行動パターンが出ていただけにすぎなかったと思います。ただ、緊急事態にはまず冷静に状況を分析すること、自分のなすべきことは何かしっかりと見極めて迅速に行動することについては、現場で培われてきたものも多分にあったと今では思います。

また、出向中でもあり、現場に穴をあけてはいけないという意識も強くあったと思います。対人援助職はチームで動きますし自分だけで仕事を抱え込むことは決して褒められたことではありません。特に当時の少年院は過剰収容のピークで現場は非常に繁忙であり、私の不在中に同じチームのメンバーにどれほどの負担がかかっているかということを考えると、一日も早い復帰をと考えていました。

3 対人援助職が家族のケアに直面するとき 在宅介護において

実母は一時は「立って自宅に帰ることはできないだろう」と言われていましたが、医療スタッフの献身的なケアもあり、幾度かの転院を繰り返しながら、約1年ぶりに自宅復帰をすることができませんでした。自宅復帰イコール在宅ケアのスタートですので、様々な手続に奔走することになりましたが、家族介護従事者である私が連携すべき機関が医療機関から福祉機関に変わった際、私自身が自戒していたことがあります。

介護保険導入当初でもあり在宅介護をする支援する現場も役所も混乱していました。それゆえ、家族介護従事者に対し「あなたは収入がある分、老老介護よりもマシですよ」といった

言葉が悪意なくかけられたり、支援者の質にもバラつきがあるように見受けられました。私自身が高齢者福祉を少し学んでいたこともあって、そうしたことがどうしても目についてしまいました。在宅介護のスタートにあたり気が張っていたことも確かです。ただ、そうした時に相手方に感情的な態度で意向を伝えることはよろしくないと思いました。特に自分が仕事と介護の両立で余裕がない状態の時には、理詰めで言ってしまうがちな点には特に注意しなければと考えていました。

在宅介護を続けていく上では在宅介護に関する福祉機関の協力が不可欠です。連携を阻害するような言動は慎むべきだと思いました。ただ、在宅介護の要となるケアマネージャーの方の基礎資格については最初に確認し、実母の状態に応じたケアプランが立てていただけるようにしました。在宅介護から施設介護への移行期に当たっては、身体機能の劣化も進んでいましたので、看護師としての経験で母親の状態の見立てをしていただけるケアマネージャーの方に本当に力になっていただきました。

4 対人援助職が家族のケアに直面するとき施設介護において

母の在宅介護は10年に及びました。その間私が長期間の研修で自宅を不在にせざるをえなくなったり、実母の入院のたびに老人保健施設でのリハビリを経て在宅介護に戻るといったことも重なりました。業務と在宅介護の両立も限界に達しており、特別養護老人ホームへの入所となりました。私自身はもう少し頑張りたい気持ちがありましたが、私が不在中に外に出てしまうなどの事故も重なり、自分の気持ちよりも実母の安全を優先する決断をしました。

実母は思ったよりも早く施設生活に馴染み、

スタッフやメンバーさんにもよくしていただきました。ただ、施設長の交代が重なり、施設全体の雰囲気が落ち着かなくなり、事故も相次ぐようになりました。

実習生がフロアに入っている間に起きた転倒事故による頭部外傷などの際には当方への連絡の入れ方などに疑問を感じたこともあり、今後の再発を防ぐ意味でも、そうした事故が発生した場合の対応方針（厚生労働省の指導により予め規定しておくよう指導されている）の開示を求めましたが、その際に施設長から「やっぱり法務省の方はお堅いですね。他の御家族は『預かっていただくだけでもありがたい』とってくださるのに」と言われたりもしました。私からは「個人的にどうこうというのではなく、危機管理をどうなさっているのか確認することで、再発を予防していただきたい」と伝えるに留めましたが、この状態では同様の事故は再発するだろうと感じましたし、実母をゆだねることに不安を禁じえませんでした。

結果的に、差し歯の誤嚥事故で入院となり、「胃ろうを造設すれば再度の受入れも検討できる」という条件が施設側から示されました。当時は同じ特別養護老人ホームでも「胃ろうゼロ」を目指す先進的な試みをしているところもありましたが、当該施設では胃ろうの造設が積極的に進められていました。家族も納得できないままやむなく手術に踏み切りましたが、先のクモ膜下出血の際に埋め込んだ機器や度重なる手術による癒着も激しく、何よりもそれらの情報が施設から医療機関に引き継がれておらず、手術室に入ったものの胃ろうの造設は中断され、施設に帰る見込みはなくなりました。以後私は母のターミナルケアのための病院を探すことに奔走することになりました。

5 対人援助職が家族のケアに直面するとき

療養型病床において

病院については当時私が生活していた仙台の官舎近辺で探すこととなりました。地元の福祉関係者から情報を得ながら、大阪から仙台への母の移送は民間救急に依頼することになりました。この時の調整を振り返ってみると、自分の福祉的な知識やネットワークを総動員しました。民間救急の協力を得ることなどは、業務で得た専門的な知識が役立ちました。結果的に3月間という期間限定ではありますが母を受け入れてくれる療養型病床が見つかり、幾度かの転院を経て、終身型の療養型病床に落ち着きました。そして私はここで母の看取りを行うことができたのです。

6 私自身が留意していたこと

対人援助職としての経験が長くなればなるほど、自分の所属している組織の文化や方針以外は見えなくなるという隘路に陥る危険性があると感じています。また、業務ではなく家族のことになると、感情も揺さぶられる場面が少なくありませんでした。

しかし対人援助職といっても様々な機関があり文化も異なります。私は業務における多機関連携や、職能団体において司法福祉(更生保護)について理解を求める活動を積み重ねていくなかで、それをまさに体感していました。状況が前に進まない時には確かに焦りも感じますが、自分の職域と相手の職域の方針や文化の違いに思いを致すように心がけていました。

例えば、介護保険におけるケアプランには「見守る」という言葉がよく出てきます。ただ、私にとっては、具体的な内容や見直しの期限などが明記されていないため、不安に感じる部分もありました。そうした時には、そのことを冷静に伝え、具体的にどのように行うのかということを確認するようにしていました。

また私の実母のように支援の場が次々と変

わっていく場合には、情報が支援者サイドで確実に引き継がれるとは限りません。例えば、胃ろうの手術の際には、既往歴などの引継ぎができず、手術室での手術中止という事態になりました。

こうした場合、家族が情報をコンパクトに整理し、引継ぎをしていくことも重要と思われます。

7 介護においても重要なのは「関係性」

最後に事例を2つ提示します。両者とも大切な家族に良いケアを望んでいましたが、前者は「こんなのはだめだ」と独自の価値観に基づくダメだしを繰り返し、後者は家族の状況をしっかりと伝え支援して欲しい内容を明確に伝え、感謝の念を伝えることも怠りませんでした。

その結果、前者は「クレーマー」「地域の社会資源を使いつぶした」と言われ、担当者は幾度となく交代し(ダメ出しをだされるため)なんとなく引き気味になってしまう状況となり、息子世代が介入するまで膠着状態が長く続きました。一方で後者は、家族と支援者が共に考えるという体制が出来上がり、できる限りの支援体制が構築されていきました。

そうした意味では、家族介護従事者にも、関係性を構築するスキルが求められていると思われます。

そして何よりも大切なのは、家族が孤立しないことです。感謝を込めて記すのですが、私はこれまで家族介護従事者として過ごしてきました。数え消えない方からのお支えをいただきました。異動(転勤)に対する配慮といった大きなことももちろんですが、日常生活の中でのちょっとした声かけによって「私は支えられている」という実感を持つことができました。介護という観点においてもあらゆる意味での関係性が重要だと考えています。

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 11

朴 希沙 (Kisa Paku)

番外編！緊急企画！！

～夜な夜なコロナ～

前回は、マイクロ・アグレッションに関してよく聞く疑問や自分も感じていた疑問について Q&A 形式で考えてみました。今回も、引き続き Q&A について考えてみようかと思っていたのですが...

ここ数ヶ月、新型コロナウイルス感染症によって人々の生活は大きく変化し、マイクロ・アグレッションどころか、中国にルーツのある方を始めとしたアジア人に対する差別や暴力事件が世界中で顕在化しました。日本も、その例に漏れません。日本社会では、中国人に対する差別発言やヘイトスピーチがインターネットを中心として吹き荒

れました。また政府からの 10 万円の現金給付を始めとした、この国に生きる人々に対する金銭的支援に関しても、日本国籍に限るかどうかといった議論において、外国人差別の問題が噴出し続けています。

また新型コロナウイルスの感染状況に関しても、一時は日本もニューヨークでのような感染爆発が起きるのではないかと思われていましたが、今の所落ち着きそうな様子も見られています。感染の拡大が収まれば、私たちはこれまでと同じような生活を送れるのでしょうか？ 今後は、どのような知識が必要なのでしょう？ そこで、今回は番外編として改めて新型コロナウイルスそれ自体の性質や、それが与える社会的影響について考えてみよう、と緊急企画!!～夜な夜なコロナ～としました。

と、言っても私は正直感染症や新型コロナ

ウイルスについては全く詳しくありません。そこで、今回は夜な夜な新型コロナウイルスについて勉強を重ねるスペシャルゲストの某 I さんをお招きし、私の素朴な疑問に答えていただくとしました。

Q. 夜な夜な新型コロナの勉強に明け暮れる某 I さん、自己紹介をお願いします

A. 京都市民で、現在は民間で Deep Learning を専門にした仕事をしています。感染症の専門家ではありません (笑) 大学・大学院では、物理や数学を学んでいました。新型コロナウイルス感染症に関しては、1 月末頃から強い危機感を感じ (妻が妊娠中のため)、WHO や厚労省の公表資料、日本の有識者の見解、Our World in Data といった疫学的データベースを参照しながら、仕事も片手間に毎夜勉強しています。

Q. それはご苦労さまです。現在通勤はされていますか？

A. もともと徒歩圏内の職場でしたが、4 月から完全リモートになりました。ただ、これも最初は職場の反発が強くありすぐには実現しませんでした。人により、危機感の程度が異なったためです。

Q. 確かに、コロナに関しては、人によって危機感の持ち方が大分違う気がします。これはどうしてなのでしょう？

A. まず、新型コロナウイルスのリスクが人によって大きく異なることが影響しているだろうと思います。例えば、基礎疾患のある人や高齢者、妊婦の方々等はハイリスクとされている一方で、無症状や単なる風邪のような症状で終わる人もいます。なお、妊婦は新型コロナ特有のリスクが高いわけではありませんが、肺炎などにかかると重症化しやすいとされています。

また、専門家の間でも新型コロナウイルスの脅威に関して意見が分かれています。専門家の間では、人類が今までに経験したことのないやっかいなウイルスであるという見解は共有されています。それは、潜伏期間が極めて長く、多くの人が軽症であるものの一部の人には重症化や致死的なものになるというような点です。これは感染を完全に抑え込んだりすることが非常に難しいことを示しています。実際に日本でも多くの病院で院内感染が発生し、死亡者も出ています。しかし、一部の専門家は、「風邪とどれほど違うのか」「インフルエンザより致死率が低い」という人もいます。

Q. 「コロナよりインフルエンザの方が危ない」「致死率は高くないからそこまで危険ではない」という話を聞くこともあります。この意見についてはどう思いますか？

A. まず、新型コロナにおいて重要な点は、人それぞれリスクが異なるということだと思います。そのため感染者全体の中での致死率でもって、脅威を判断することにはあまり意味がありません。新型コロナの場合、基礎疾患の有無や年齢等により、致死率が

大幅に異なるからです。しかし多くの場合「致死率」と言った際には、感染者全体の中でのそれについて言及されるにとどまっています。

また、感染防御が非常に難しいことから、大量の感染者が短期間に発生し、医療を圧迫することで副次的な（新型コロナウイルス以外の）被害が発生します。幸い日本では医療崩壊は起きていませんが、それが起こった国々では多くの死者が発生しています。

ちなみに WHO の公式見解は、2009 年に流行した新型インフルエンザよりも致命的、だとされています。

Q. 世界的には感染者数や死者数は増え続けていますが、日本で感染爆発が起こらなかったのはどうしてなのでしょう？

A. 様々な仮説がありますが、明確なことは分かっていません。ただ、東アジアの国々（韓国・台湾・中国沿岸部等）やシンガポールは、日本と同様人口あたりの死者数が欧米よりもはるかに低いことが分かっています。一部の専門家はこのことになんらかの理由があるだろうと考えています。これは個人的な考えですが、アベノマスクを始め日本政府や専門家会議の感染防止対策が優れているようには見えないので、日本の現状を説明する隠れた要因がなんらか存在しているというのは説得力があるように思えます。

Q. 今感染拡大は落ち着いてきているよう

に見えますが、これで日本のコロナは収束していくと思われませんか？

A. 残念ながら、そうは思いません。いわゆる第一波は収束したというのが多くの専門家が合意するところですが、一方で第二波第三波が発生することも同様に確からしいと思われています。「ハンマー・アンド・ダンス」というモデルがあります。感染が急速に拡大すると、医療崩壊を防ぐためにも極めて強い行動制限（ロックダウンや日本の緊急事態宣言等）が行われ、これを「ハンマー」と呼びます。日本でいう「徹底した行動変容」にあたります。そうした急速な感染拡大が一旦収束した後も、小規模な流行は何度も発生します。この状態を「ダンス」と呼びます。ワクチンの開発や、極めて有効な治療法といったゲームチェンジャーが現れなければ、このハンマーとダンスの状態を繰り返すことが予想されます。これがいつまで続くかは不確かです。例えばワクチンが出来ることにより完全な収束に向かうことは考えられますが、ワクチンがいつ出来るのか、そもそも作る事が可能なのかも現時点ではわかっていません。

Q. まだまだ気は抜けないということかと思いますが、感染予防としてはどんなことをすべきでしょう？マスクは有効なんですか？

A. まず市販されている使い捨てマスクには、予防効果はないけれど自分がうつさないという効果があると考えられています。そのため、欧米等ではそもそもマスクをあまり

着用しません。一方で、東アジアにはマスクをつける生活習慣が従来からあり、欧米からは奇異の目で見られていましたが、先に述べたように人口あたりの死者数の低さから、マクロな視点では感染の拡大を防止する効果があると考えられるようになりました。つまり、潜伏期間が長く比較的軽症の人が感染を拡大してしまうという新型コロナの性質に対して、集団的にマスクを着用するというのは、感染拡大を防止する上で一定の効果があると世界的にも考えられるようになったのです。

個人が出来る感染予防としては、やはり手洗いに尽きると思います。正しい手洗いの仕方については、さまざまな動画が公開されているので参照されることをおすすめします (<https://youtu.be/3PmVJQUcm4E>)。また、エタノール 70%以上の消毒液による手指消毒も有効です。注意が必要なのは、エタノール濃度が高くなければ十分な効果が望めないなので、購入時にエタノール濃度を確認し、70%以上を選ぶようにすることです。実際市場ではエタノール濃度が 70%以下の消毒薬がたくさん売られており、それに気づかず購入し消毒については安心してしまうケースが多いです。また消毒薬の中には新型コロナに有効であるが、人体に対して有害なもの、例えば次亜塩素酸ナトリウム（漂白剤）等も存在するので、注意が必要です。とくに次亜塩素酸ナトリウムを霧吹きなどで空間に散布するのは絶対にやめましょう。また洗剤や漂白剤をベースにした消毒薬をふきんなどに染み込ませて消毒した場合や、残った薬剤を水を含ませたふきんでしっかりと拭き取るようにしましょう。

Q. 新型コロナウイルス感染症の流行により、社会はどんな影響を受けましたか？

A. 現代社会にはいかに不要不急の「仕事」に満ちていたかをみなさん感じたのではないのでしょうか。新型コロナの登場以前と以後では社会構造は大きく変容するだろうと思います。例えば人と人とが対面で接することは明らかに減少するでしょう。またそもそも、対面で接する必要があるかが厳しく問われるようになると思います。もちろん介護等は対面が必須である一方で、会社の不要不急の会議等はなくしていくべきでしょう。

現代社会は観光やサービス産業といったものが拡大し続けてきました。しかし今回の新型コロナの流行によりそうしたあり方が一気に瓦解してきているように思います。

新型コロナにより単純に人との交流が阻害されているように感じるかもしれませんが、一方で新たな可能性にも開かれています。例えば大学の授業を考えてみると、これまでは入試で選抜された一部の人のみが高い授業料を払って対面の授業を受けることが出来ました。しかしデジタル化により、通信環境さえ揃えば誰でも授業を聞くことが出来るようになります。聞くことを阻むものがなくなるわけです。このように特に教育の分野において、これまで少数の人々のみが享受していた機会がより多くの人に開かれていくチャンスにもなるのではないかと思います。私は本来教育や知識というのは、無料であらゆる人に開かれるべきだと強く考えています。そして通信技術の

発達がそれに寄与する可能性があると思っています。今回のコロナ禍により望むと望まざるに関わらず教育現場でのオンライン化が進むでしょう。それにより、このような知のオープン化は自然な流れとして起こってくるのではないかと期待しています。

一方で監視社会の到来を危惧する声も聞こえてきます。感染拡大防止には疫学調査、だれがどこでどのように感染したか、を追跡していくことが重要ですが、ここに IT 技術を使うことで、人々の動きを非常に精密に知ることができます。日本でも携帯電話の GPS を使ったコンタクトトレーシングの議論が始まりました。精密な疫学調査を低コストで実現するのは望まれることですが、日本のようにプライバシーや個人情報保護のリテラシーが低く、人権意識の希薄な国ではその危険性は無視できません。個人的には Google と Apple が共同で推進している GPS を利用しないコンタクトトレーシングに期待しています (<https://www.apple.com/covid19/contacttracing>)。この仕組みの詳しい内容は割愛しますが、これを悪用するためには Google と Apple、そして公衆衛生当局が共犯にならないうと難しいので、それゆえに不正は起きにくいだろうと思います。

以上、今回は夜な夜な新型コロナの勉強に明け暮れる某 I さんをお招きし、お話をお聞きしました。個人的には、新型コロナにより格差の問題に新たな一面が加わるのでは、と危惧しています。リモートワークができない職種とできる職種、接客業等感

染リスクが高い職種と低い職種がはっきりすることで、経済的に貧しい人々にハイリスクの仕事が流れていく状況が現在もあると思います。これまでも、劣悪な職場環境や低賃金の問題がありましたが、そこにさらに感染症へのリスクが加わるとなると事態はより深刻になると思います。また経済格差は人種間の格差とも関連が深く、米国等では人種による致死率にも差が出てきています。仕事自体を失う人も多くおり、家に閉じ込められた状況の中で女性や子どもなど社会的に弱い立場にある人たちにしわ寄せがいき続けています。そういった意味で、社会的視点からもコロナの問題を捉えていくことは欠かせないと思います。

また今回は専門家の先生ではなく京都の一市民である某 I さんにお話をうかがいました。ニュースの見出しやメディアの報道にのみに右往左往されるのではなく、一般の人々の中に感染症に対する現時点での正確な理解や知識を持つ人が増えることで、命を守る行動や偏見の防止、社会状況に対する理解が人々の中で深まることが重要ではないかと考えています。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑩『イグアナの娘』

迫 共
(浜松学院大学)

萩尾望都さんの作品には社会福祉や対人援助を考えるのにヒントとなる作品がたくさんあります。今回は短編の名作「イグアナの娘」を紹介します。わずか 50 ページの作品ですが、テレビドラマ化されたこともあり、よく知られたお話だと思います。

主人公はふたり姉妹の姉、青島リカ。母親のゆりこは、リカの出産直後からリカが醜いイグアナのように見えてしまい、パニックになってしまいます。「うそ！うそ！ 違う、トカゲだわ！」

ちなみにイグアナは爬虫類の一種で巨大なトカゲのような姿をしています。生まれたての赤ちゃんがお猿や宇宙人のように見えるという話はよく聞きますが、イグアナとは…。夫は「マタニティ・ブルーか？」と心配します。夫だけでなく、周りの人には普通の可愛い赤ちゃんにしか見えません。

ゆりこには長女のリカがイグアナに見えて、どうしても愛することができません。なのに、次女のマミは、普通のかわいい女の子に見えます。ゆりこはマミを溺愛する一方で、リカには冷たく、厳しく接することになります。写真には普通の人間の子どもとして映っているのが、ゆりこには不思議でなりません。

「マミと比べてリカをけなすなよ」とたしなめる夫に、ゆりこは泣きながら「リカはまるでガラパゴスのイグアナよ」と口走ります。リカは寝室のドア越しに聞いてしまいました。

翌日、母親の化粧道具を使おうとしているところを見つけたリカは、思わず問いかけます。「ママ、わたしイグアナだからみにくいのか？」 ゆりこはひきつりながら「イグアナなんて二度といっちゃいけません！」と叱りつけます。

授業中、落ち着きがないリカですが、担任は学級訪問の際、ゆりこにリカの成績の優秀さ

を伝えます。「IQテストは全校一でしたから、落ち着いて勉強すれば成績あがると思うんですがね...」。ゆりこは「リカって頭いいの？ マミちゃんよりも？」と驚くとともに、「イグアナのくせに...まあ、なまいき！！」と思ってしまいます。

ゆりこの誕生日に90点台のテストを見せたリカは、「なんで全部100点じゃないの！」と叱られます。「誕生日にこんなの見せられても嬉しくない」という母に、リカは、手鏡をプレゼントに贈りますが、今度は「ムダづかいばかりして！ お店に返してらっしゃい！」と責められます。あまりの理不尽さにリカは泣きながら「あたしがイグアナだからママはあたしがキライなんだ」と言ってしまいます。

リカは自分でも自分をイグアナだと思うようになります。手鏡は川に投げ捨ててしまい、「神様が、イグアナと人間の、魂と体を入れちがえたのよ」「あたし大きくなったらガラパゴス諸島に行って、あたしの本当のお父さんとお母さんを探そう」と考えます。

リカは他人の目には美人に見えます。ですが本人はずっと自分をイグアナだと思っています。ラブレターをもらっても、からかわれているとしか思えません。

妹のマミは、ある日、進路指導で姉の大学の偏差値が高いことを知ります。「おねーちゃんてほんとに頭よかったの？ あたし、ずっとおねーちゃんのこと…グズだのブスだのバカにして…」。リカは「いいの。あたしはママのいうようにイグアナなんだから」と返します。マミが「おねーちゃんもいけないんだよ。そんなふうに自分でいじけて」と言いますが、リカは「いじけてないの。事実なの」とそっぽをむいて取り付く島もありません。

リカにはボーイフレンドができますが、イグアナである自分が彼を食い殺してしまう夢を見てショックを受け、別れを決心します。「一生、恋愛なんてできない」と悲しんでいた時、巨漢の牛山と出会い、彼なら食いついてもケガひとつしなさそうだと安心感をもちます。

リカは大学卒業とともに牛山と結婚。親元を離れて札幌で暮らすことになります。

盆にも正月にも地元には帰らず、リカは幸せな生活を過ごします。子どもが生まれた矢先、実家からの連絡が入ります。

母のゆりこが急死したのです。リカは帰省の道すがら「わたしホッとしてる。ちっとも悲しくない。悲しくないのがむしろショック。やっぱり冷血動物のイグアナなんだ！」と感じます。

実家に帰ると、冷たく横たわる母の顔には白い布がかけられています。親戚のお婆さんから促されて顔を見ると、そこにはなんと、イグアナの顔をした母が眠っていました。

驚いて取り乱すリカ。「わ、わたしの顔にそっくりよ！」というと、お婆さんが返します。

「前から言ってたのよ オ　ゆりちゃんとリカちゃんはよく似てるっていうと、ゆりちゃんは怒ってたけど、やっぱり似てるわよねえ」…

リカは母の枕元で、ガラパゴスのイグアナ姫だった母を空想します。魔法使いのおばあさんに人間にしてもらい、「イグアナだったことなんて忘れて人間として生きるわ」と誓った母。それなのにイグアナの娘が生まれたために、絶対に正体を知られたくなかった母。「わたしを産んで、愛せなくて苦しかったでしょう」…

納骨をすませたリカは牛山とわが子のもとに帰ります。リカは赤ちゃんが母に似ているように見えて可愛く感じなかったのですが、空想のガラパゴスにいったとき、「何かが浄化された」と感じました。「あたしも苦しかった。母に好かれたくて、でも嫌われて。母を愛したくて、でも愛せなくて」「でももういい。あたしは夢でガラパゴス諸島に行って母にあった。あたしは涙とともにあたしの苦しみを流した」。そうして夫とわが子とともに木漏れ日の中を歩きながら、リカはどこかに母の涙の気配も感じとっています。

『イグアナの娘』のような寓話的な物語については様々な理解が可能です。ですが児童家庭福祉の立場からは、母子関係の問題を感じざるを得ません。

まず連想されるのは「虐待の連鎖」です。母ゆりこの育ちのエピソードは作品では描かれていませんが、ゆりこ自身が不適切な養育環境で育ち、認知の歪みをもっているようです。自分に似た娘のリカがイグアナに見えるのです。ゆりこは自尊感情の傷を自分では消化できず、その傷をなかったことにして日常を送っているように思えます。心の傷をリカに投影するから、リカが醜いイグアナに見えるのでしょう。勉強ができるリカを喜ぶのではなく「なまいき」と感じてしまうのも認知の歪みを感じさせます。反面、マミは過度に理想的な娘と認知されています。

不適切な養育環境はリカの認知も歪ませます。「自分は醜いイグアナなんだ」という誤った信念を「事実なの」と言い切り、恋愛のチャンスも自分からつぶしてしまいます。リカの認知の歪みは、リカ自身が現実世界でもまれる中で、ゆっくりと回復していきます。作中では最後までリカはイグアナの姿で描かれます。他人の目から見たリカが人間に描かれているのはわずか数コマです。

結婚生活を送ることは、私達に生まれ育った原家族を客観的に見るチャンスを与えてくれます。リカは親元から離れて結婚生活を送ることで、さらに現実感覚を回復したのでしょう。亡くなった母の枕元で、リカは母が自分にそっくりな顔をしていたことに気づいて、驚きます。あれほどまでに自分を拒絶していた理由が、目の前に横たわっていたのです。

「虐待の連鎖」に翻弄される人がいることも事実ですが、断ち切ることもできます。赤ちゃんが母に似ているように感じるリカでしたが、イグアナの孫にはせずに済んだようです。

『イグアナの娘』は、設定を読み込んでみると実に恐ろしい物語ですが、作中にはそれに反してほのぼのとありふれた日常もふんだんに描かれています。実はこんな家庭は、私達の身近にたくさんあるし、私達自身の家庭も、実はリカの家庭とそう変わらないのかもしれないと気づかせられるのです。

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 10～

<新型コロナウイルスの拡大>

杉江 太郎

～新型コロナウイルスの感染拡大によって～

この数か月、新型コロナウイルスの影響を大きく受けている。これは、私だけの話ではない。おそらく、ほとんどの方が何らかの影響を受けているはずである。

養護学校に通う A 君は、突然の臨時休校に伴い、翌日に予定していた卒業式に参加が出来ず、大好きな先輩の式典に立ち会えなかった。卒業式は卒業生のみで行われた為、在校生である A 君は不参加となり、そのまま春休みに突入し、新学期は始まっていない。

この4月に中学校3年生になった B ちゃんは、5 月に予定していた修学旅行が延期になった。一応の時期は決まっているようだが、本当に実施できるかは疑わしい状況である。この先の高校受験にもどのような影響があるのかはわからない。

大学生になったばかりの C 君は、入学式もなくなり、前期のオンライン授業が決まったらしい。それでもまだ始まっていない。施設を退所したばかりにも関わらず、途端に自宅待機を余儀なくされている。

母子家庭の母親である D さんは、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、働いていた工場が閉鎖となった。D さんは派遣社員であり、収入が途端に激減することとなり・・・。

運動部に所属する E 君は、休校に伴い、部活が休みとなった。目標としていた大会も中止となり、自宅で過ごす時間が増えている。母と過ごす時間が増え、母からの小言が増えてしまい・・・。

福祉職場勤務の F さんは、不要不急の業務をなくすように言われ、さらに在宅ワークを命じられた・・・。個人情報を持ち帰れない中で、いったい何が出来るというのか。

ここに書いた物語は、一部はフィクションであり、一部はノンフィクションである。しかし、このマガジンを読まれた方は、みな想像がつくような話ではないだろうか。

～新型コロナウイルスの影響？～

私は、児童相談所で働いている。児童相談所は、子どもの福祉のために設置された行政機関である。新年度に入って、新型

コロナウイルスの影響なのか、私の職場は『子どもを心配する連絡』（＝通告）の件数が減っている。

一般的には、通告件数が増えることに伴い、各種メディアは、「虐待が増えた」と報道される。しかし、実際に虐待をする親が増えているのかと言われれば、陽の目を浴びる方が増えたという言い方が正しいのではないかと思う。つまりは、虐待をしている親が増えたのではなく、社会が虐待と呼ぶようになった行動のパターンが増えたり、今までは、家庭の中で潜んでいた不適切な養育が、表舞台に登場するようになったりしたのである。

では今回の新型コロナウイルスの騒動下における通告数の減少はどのように捉えるべきなのであろうか。

それは、学校が休校になったことも含めて、不適切な養育（虐待含む）をキャッチする機会が減少しており、益々家庭内で潜在化するようになったという考え方が一般的なようである。確かに学校や保育所などからの連絡（通告）は、減少している。このことが、新型コロナウイルスに影響してなのかはわからない。なんせ、通告が入るかどうかは、受け身の私たちからすれば、運任せ的な要素を多分に含むからである。しかし、日ごろあるはずの緊急対応がなく、緊急対応が発生していた日常が大きく変化したことは紛れもない事実なのである。通告件数が減っているということは、その分、子どもを心配する

連絡が減っていると捉えるべきであろう。

～出来ることは何か～

正直、休校が広がり、子どもの発信をキャッチできる機会が減ることや、Dさんのように収入が減少すること、E君のように家庭内での不和が高まることは予想し易いのではないか。そのことで、家庭内がストレスフルな状態になることはあり得る話であろう。

そのようになる予想がある中で、以前の通り、とりあえず連絡（通告）を待つというスタンスでいることに私は違和感を持った。そうならないように何か出来ないのかと考えた結果、今できることは、各家庭がそのような状況に陥っていないのか確認をすることだと考えた。

ということで、昨年度に関わった家庭に対して、アウトリーチ（電話連絡）しようと考えた。児童相談所が関わる家庭の件数は、毎年のように増加傾向にある。過去に関わった家庭で、特に継続して関わっていない家庭に対して、理由がないにもかかわらず連絡を取ることは、まずあり得ないことである。

～共通の話題～

順に連絡をしてみて驚いたのが、ほとんどの家庭に連絡が繋がり、それぞれの家庭の状況を語ってくれたということである。児童相談所の関わりに対して消極的な方は正直多い。メディアでは、相談機

関としてではなく、介入機関として報道されることが多いため、そのことも影響しているのかも知れない。誰しもが家庭に「介入」されていい気持ちにはならないはずである。

今回、電話をする中で、最初は、「私何かしましたか？」と、児童相談所から電話が入ったことで、不安になられる方もいた。しかし、新型コロナウイルスの影響を心配して、昨年度に関わりのあった家庭に順に連絡をしていることを伝えると、皆様納得し、近況を語ってくれた。

これは新型コロナウイルスについて、共通の話題として扱えたことが大きいのではないだろうか。またそのことで個人が責められることはないという安心感もあるかも知れない。

もし、そうだとしたら、普段の業務は、「共通の話題」として扱えていないということになる。またそもそも児童相談所は、その電話の1つだけでも相手を不安にさせてしまうような機関だということになる。それは関係性の構築で言うと、マイナスからのスタートということである。これでは、うまくいく話もうまく進むはずがない。日常の相談援助の在り方を考えさせられる結果である。

～もらえるものはもらってね～

今回の電話連絡では、最後の締めくくりに「もらえるものはもらってね」という言葉を多く使用した。その言葉だけで、み

な、何の話をしているのか理解できる『共通語』としての効果があった。先に配布が決まった、マスクのことだと勘違いする人は一人もいなかった。

実際、国の動向のなかで、その対象は、「制限を設けた上で30万円」から、「全員に10万円」と変化している。金額が妥当かどうかは別にして、「全員」に「10万円」給付するという結果になったことで、「もらえるものもらってね」という言葉が効果を発揮したのである。もし、対象者に所得制限があれば、軽々しくもらってねとは言えなかっただろう。相手の所得状況を聞くわけにもいかず、もらえるかどうかわからないけど、取り敢えず相談に行ってねでは、もし相談に行ったとしてももらえない可能性があるわけで、その言葉では歯切れが悪すぎる。

当然、私のお金ではないので、私がもらってねということについて、他人のふんどうで相撲を取っている感も否めないが、その言葉のおかげで、やり取りは随分スムーズになった。

日常の業務の中でも、『お金』という必需品を媒介することで、他者との交流は円滑にいきやすいと感じている。この場合、『お金』は受け取る側の「動機」として存在し、それを調整・伝達する側の「手段」としても存在する。手段として利用するためには、誰が対象になるのか、申請方法はどのようなかなど、その制度全体を把握しておかなければならない。マスク

では双方にとっての「動機」「手段」としては弱すぎたのである。(まだ届いていない地域もあるかもしれませんが・・・)

～柔軟性を持ち続ける～

この間、厚生労働省より、新型コロナウイルス関連の児童について、児童相談所で何とかするようという通達が出ている。実際に、親が感染し、子どもを養育できなくなったことで、児童相談所が一時保護したという自治体もあるらしい。現場では、職場内での感染を防ぐために四苦八苦していることだろう。

戦後の浮浪児対策からスタートし、非行、不登校、虐待という歴史がある。今年は、『疫病』がその歴史に加わることになった。本当に児童相談所は、社会の要請により何でも求められる機関であると実感する。その柔軟性があるからこそ、やり甲斐があるのだが、その柔軟性を利用されてしまうと、途端に主体的に動けなくなってしまう。

児童相談所でもし『疫病』も対応するということになれば、それは、ある意味、『虐待』だけの機関ではないことを宣伝できるかもしれない。児童相談所はあくまでも子どもに関する相談機関である。

今回、通告こそ減ったものの、新型コロナウイルスの調査やその準備などで時間を要することになった。地域の現状を知る中で、子どもへの影響などを考えさせられた。新型コロナウイルスがどのよう

に終息していくのかは正直わからない。終息した際に、児童相談所には何が求められるのであろうか。子どもの生活は一体、どのようなものになっているのであろうか。そのときに、少しでも柔軟に対応できるようにその準備をしておかなければならない。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども ～ゆりの日常～

春の風 —15歳— (中編)



松岡園子

昨日までと同じ電車に乗り、同じ道を歩く。

朝、9時前。十一時には最初の社員さんが来る。味噌汁やうどんの準備が間に合うだろうか。昨夜、寝る前に、頭の中で何杯も味噌汁を作った。大根、人参、油揚げ、わかめ、ねぎ——。明日は何が来るのかな。本社から届く味噌汁の具材は日替わりだから、その日にならないとわからない。だから全部考える。もし大根が来たら、いちょう切りにしよう。まず縦半分に切って、それをさらに半分でいいのかな？ いや、短冊の方が食べやすいかもしれない。だったらまず薄く切って……。もし油揚げが入っていたら……。油抜きをしないと……。あれこれ考えている間に、いつの間にか眠ってしまっていた。

目が覚めると枕元の時計は6時前を指していた。

「5分前かあ。目覚まし時計より早く起きた」

しばらくぼんやりとしていたが、急にエンジンがかかったように布団から飛び起きた。一階に下りて台所を覗くと母の夏子が、スクランブルエッグを作っていた。

「今日から1人やわあ」

返事があるかどうかはその日の調子による。今日はどうだろう。背中を向けていた夏子の表情が見え隠れすると、視線や目の形をまず見る。目の前のフライパンに向いている視線、丸い目の形。大丈夫そうだな。目の形が三角や一文字に見える時は、しんどそうにしていることがこれまで多かった。

「うーん、早く出るの？」

そう言いながら夏子がお皿のスクランブルエッグにケチャップで円を描いた。ゆりの肩からずっと力が抜けた。朝ごはんなど何もなかった時のことを思うと、毎日同じおかずでも食事を用意してもらえていることを嬉しく感じる。夏子にとっては、毎日することが同じだということが安心材料になるんだと、最近わかるようになってきた。

今朝のことを思い出しながら歩いているうちに、お菓子工場の食堂に着いた。10台のテ

ーブルが 2 列に分かれて並んでいる。それぞれのテーブルを囲む 80 ほどある椅子を見ると、膝のあたりがぞくつとした。まずお茶用のお湯を沸かして、お味噌汁の出汁をとって、うどんのつゆ用のお湯も沸かして……たかさんのことが頭の中を駆け巡る。東側の窓からは太陽の光が強く差し込んでいる。開いた窓の隙間からは、六甲アイランドへつながる赤い橋が見える。ゆりは今日が晴れで良かったと思った。外の景色が暗いと、自分の気持ちを奮い立たせることができるかどうかわからない。

「おはようさん」

振り向くと、このお菓子工場で清掃の仕事をしている影山さんの細い目がこちらを見つめていた。

「おはようございます」

「今日のお弁当はまだ来てへんな」

そう言いながら影山さんは、うどんの出汁を取る鍋に水を張り、火にかけた。影山さんの手は次から次へと動き、食材庫からかつお節や巾着袋を出していく。

「お茶のパックは……？　ここか」

「え……っと」

「だいたい毎日見ててな、わかつとうからなあ。味噌汁は 50 人分ぐらいやろ？」

「はい」

影山さんは、ゆりが食堂に着いてからしようと考えていたことを順番に片付けていく。影山さんの仕事は大丈夫なんだろうか。違う会社の人だし、違う仕事をしている人なのに、ゆりの仕事を手伝っていても良いのだろうか。影山さんの鍋を持ち上げる手は、厚い皮でおおわれているようにごつごつとして見える。

ゆりも冷蔵庫を開けた。昨日、余分に炊いておいたうどん用の油揚げを出そう。今日のうどんには、甘辛く味付けをした油揚げにとろろ昆布、かまぼことネギをのせよう。油揚げの入ったタッパーに手を伸ばそうとした時に、台車の音がエレベーターホールの方から聞こえてきた。

「お弁当が来た……かな」

ゆりは台車を押す配送の人を出迎えようと、食堂の入口まで向かった。台車が近づいてくるにつれて、1 番上の段に入っている薄茶色の油揚げと細ネギが見えてきた。

「あ、玉ねぎ……」

玉ねぎのことは昨夜の考えの中になかった。切り方を考える。細いくし切りにした玉ねぎが真っ先に思い浮かんだ。

「おはよう。今日から二宮のおばちゃんはおれへんのか？」

ゆりの顔を見るなり、配達員の中条さんが言った。

「今日からは 1 人です」

ゆりは軽くうなずきながら食堂を見渡した。中条さんの視線がゆりの額へと向いているのがわかった。今日はそんなに暑くないのに、額が汗ばんでいる。中条さんの顔がコンロの

前で動きを止めない影山さんの方へ向いた。

「おはようさん。お姉ちゃんだってやれるやんな」

影山さんの声が、エコーがかかったように食堂中に広がる。コンロに火をつけようとかがんでいる影山さんは、ゆりに話しかけているようだった。ゆりは、黙ってうなずきながら中条さんに会釈をした。中条さんは、清掃のユニフォームを着て調理をしようとしている影山さんを変だと思わないのだろうか。

「強力な味方がおってよかったな」

中条さんは弁当箱の入った番重を降ろし終えると、ゆりにだけ聞こえる声でそう言ってエレベーターホールの方へ向かっていった。

ゆりが中条さんを見送っている間に、影山さんは保温庫の中にご飯の入った弁当箱をつめようとしていた。

「あの……ありがとうございます」

ゆりがそう言うと、影山さんが一瞬だけ微笑んだように見えた。上向きの眉毛と細い目のせいか、普段の影山さんは怒っているように見える。ショートカットで動きも素早く、どんな仕事でもこなしていきそうな勢いのある人だ。だけど、こんなに手伝ってもらってもよいのだろうか。影山さんだって自分の仕事をしないといけないはずだ。何と切り出そうか。

「今日は玉ねぎやな」

影山さんはまた元の表情に戻り、1番上の番重に視線を移した。

「あ、切らないと」

「お湯は沸いとおからなあ、大丈夫そうやな。さ、はよ行き」

時計を見ると、9時半を過ぎたところだった。あと1時間ちょっと。ゆりは、1番上の番重を持ってコンロの前まで運んだ。コンロにかけられた鍋は、小学校の給食のおかずが入っていたものとそっくりで、ゆりは『給食鍋』と呼ぶことにしていた。給食鍋からは湯気が立ち、中ではかつお節入りの巾着袋が沸騰したお湯と一緒にゆらゆらと揺れている。ゆりはカバンからブルーのエプロンを取り出し、腰ひもを後ろで結んだ。

「くし切り、くし切り……」

玉ねぎの薄皮をむいていく。まな板の上で上下を切り落とすと、つんとした匂いが鼻の奥まで広がった。包丁で薄く切り始めると、目を開いていられないほどの痛みが両目にも広がる。鍋の中で揺れるかつお節入りの巾着袋を菜箸であげる。熱い雫が巾着袋からしたたり落ちるのを、菜箸と蓋で押しはさんでさらに搾りとる。切った玉ねぎが給食鍋に入ると、下から沸きあがる泡にのってふわふわと浮いたり沈んだりしだした。

「その間にネギを刻んで。今日の具は玉ねぎとワカメやな」

玉ねぎを見つめているゆりに、影山さんが番重から出したネギを渡した。ゆりは、前に教わった通り、輪ゴムでネギの根っこの方、真ん中、先の方の3か所を留めた。軽く水浴びをしたネギは、まな板の上で大人しくまとまっているように見える。

ネギを切り、うどんのつゆを味付けし、油揚げの油抜きをして甘辛く炊く。味噌汁の味付

けをして、かまぼこの湯通しをする。どれもいいかげんにはできない。1つ終わったと思えば、また次にすることが追いかけてくる。時計の針を見るたびに思ったよりも進んでいて、額や首の後ろが熱くなってくる。

準備も全部終わったと思って時計に目を移すと、10時45分になっていた。もう準備だけで今日の仕事が終わったような気がする。でも、まだこれからだ。

「影山さーん、そろそろ休憩の時間やあ」

勝手口の方から、影山さんと同じユニフォームを着ている女性が2人、ゆっくりと入ってきた。そのうち、小柄な方の女性が食材庫からタッパーを取り出した。タッパーの中からは、ガラスか陶器のぶつかり合うような音がした。

「ありがとうなあ。全部やってくれたん？」

「いつもの所やろ、やっといたで」

「おおきにな。さ、お姉ちゃんも休憩しよ。11時から重労働やで」

テーブルを見ると、4人分のコーヒーが置かれていた。椅子に腰かけると、肩や背中にくっついていて大きな塊が背もたれに吸い込まれていくような気がした。

「じゃあお姉ちゃん、頑張りや。私らはもうひと仕事するさかい」

休憩が終わると影山さんと2人の女性は、勝手口から出ていった。11時になると、最初の社員さんが来た。ゆりはその動きを目で追う。社員さんは保温庫からご飯の入った弁当箱を取り出している。その横に積まれているおかずの入った弁当箱をトレイにのせて、ゆりの方へ近づいてきた。何か言わないと。

「こんにちは」

味噌汁の必要な社員さんだ。お椀はネギを入れて50セットぐらい用意してある。ゆりはお椀を1つ取り、味噌汁をすくって入れた。ネギがふわりと表面に浮く。ちゃんと味付けができていだろうか。何度も味見をした。でも、味見をしすぎて、最後の方は味がわからなくなり、味噌を足したり、だししょうゆを足したりした。もしかして、足しすぎたんじゃないんだろうか。味噌汁は、煮つめると味が辛くなってしまうと祖母がよく言っていた。だから10回以上、味見ばかりした。

社員さんはテレビに1番近いテーブルにつくと、いつも通りという感じで食事をしだした。社員さんにとってはいつもと変わらないことでも、ゆりにとっては一大事だ。ひとくち目の後の表情が気になる。社員さんは味噌汁のお椀を手にして、ひとくちすすった。社員さんの表情はそれまでと変わらない。じゃあ、大丈夫ということかな。もし辛すぎたりしたら、顔が歪むだろうし。そんなことを考えている間に、次々と社員さんが訪れだした。そこからは、もう味付けのことを考えている間もないくらいに、味噌汁やうどんを渡すことに追われた。

1時前になると、社員さんの姿もまばらになってきた。

「もう終わりやな」

後ろからした声に振り向くと、使い終わった湯飲みを入れるバケツを抱えた影山さんが

立っていた。

「あの社員さんで終わりですか？」

ゆりは帽子をかぶった 50 代ぐらいの男性を見て言った。

「たいていそうやな。ほんまにお姉ちゃんの仕事、重労働やさかいな」

そう言いながら抱えていたバケツから湯飲みを出し、洗いだした。

「あ、いいですよ。やります」

「疲れたやろ。あんたはテーブルからやかんを片付けてきて」

影山さんは両手で湯飲みを洗いながら、あごで後ろのテーブルを指した。こんなに手伝ってもらっても良いのだろうか。でも影山さんがいなかったら、今日の仕事を終えることができただろうか。

湯飲み、給食鍋、やかん——使ったものを洗っていくごとに、身体にまとっていた重い塊も洗い流されていくような気がした。

「じゃあお姉ちゃん、今から学校やな」

影山さんは洗い終わった湯飲みを拭きながら言った。

「……学校のこと忘れてました。行ってきます」

ゆりは、はあとため息をついてから笑った。まだ今日の仕事が終わったわけじゃなかった。

「また明日なあ。お先に」

そう言って、影山さんは帰っていった。時計は 3 時過ぎになっていた。足首とふくらはぎに鈍い痛みを感じる。立ち仕事なのは、本社でのベルトコンベアーの仕事と同じだ。でも片付けひとつにしても、仕事を担うのが自分しかないということが違う。今、痛みを感じている足は自分だけの足ではなく、皆の足でもある。

「重労働やさかい……」

影山さんの声が聞こえてくるような気がした。

5 月に入り、定時制高校の生活にも慣れてきた。だけど、勉強は仕事とは違って、しなくても困るのは自分だけだ。いや、自分だって困らないかもしれない。それに、座って先生の話を聞いていると、身体の疲れと眠気が一気に押し寄せてくる。だから机に突っ伏して眠ってしまうこともある。先生は寝ているゆりに 1 度は声をかけるが、その後はそっとしておいてくれることが多い。

また昨日までと同じ電車に乗り、同じ道を歩く。朝、9 時前。食堂に着くと、すでに影山さんの姿があった。

「お姉ちゃんな、今は大変やけどな、今やった分は絶対にあとで役立つから」

影山さんは、洗った手を拭いたハンカチをポケットにしまいながら、食堂の椅子に腰かけた。ゆりも座った方が良さそうな気がして、椅子に腰を下ろした。

「今、こうやって働いている分、お給料がもらえるやろ。でも、稼いだお金は無くなることがある。取られることもある。けどお姉ちゃんが勉強して得た知識は、お姉ちゃんが生き

ている限り誰にも取られないし、自分を助けてくれる。お姉ちゃんだけのもんや。だから、しんどいと思うけどな、勉強をがんばり」

ゆりの目を見つめている影山さんの目が、少し赤くなっているような気がした。

誰にも取られない知識。そんなこと、考えたこともなかった。目に見えるものの方が価値があると思っていた。でも確かに目に見えないものは、取られたり無くなったりしない。ゆりはこれまでそういうことがあったかどうか考えてみたが、なかなか思い当たらない。自分を助けてくれるってどういうことだろう。目に見えないものは、そこにあるということを感じにくい。

1時過ぎ。今日も終わった。張りつめていた気持ちが緩んでいくのを感じる。ゆりがこっそり『最後の社員さん』と呼んでいる男性もそろそろと弁当箱のふたを閉めて、片付け始めた。

「ありがとう。ごちそうさん。これ、ちょっとだけやけど持って帰り」

給食鍋を流しに運び終わったゆりが振り返ると、調理台に1番近いテーブルにビニール袋が置かれていた。袋の横には最後の社員さんが立っている。ビニール袋の中には丸くて茶色いものがたくさん入っているように見えた。よく見ると、チョコレートが20個ほど入っている。

「もらってもいいんですか？」

最後の社員さんは、目を細くしてうなずいた。

「よく頑張っとおからなあ、ご褒美や」

最後の社員さんはそう言って、がははっと笑いながら食堂を後にした。誰もいなくなった食堂でゆりは袋に入ったチョコレートを見つめた。影山さんの言っていたことはこういう種類のことなのかな。目に見えない何かがチョコレートになったのかもしれない。それが何なのかが、まだわからないけれど。

袋の口を鼻に近づけると、濃く甘い香りがした。

(後編につづく)

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

第 9 回 「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

—— 家族の団結力 ——

一宮茂子

はじめに

生体肝移植治療は否応なく患者・家族を巻きこみます。なぜそうなるのでしょうか？それは「誰がドナーになるのか？」という命にかかわる重要問題を避けては通れない現実に向きあう必要があるのもその一因です。今回は移植前の時間軸においてドナー探しからドナー決定にいたるプロセスで患者・家族に葛藤が生じました。しかし移植後や、その後の時間軸において周囲からさまざまな支援を得て、困難な事態を乗り越えた事例を紹介します。

対人援助マガジン第 34 号 337 頁～341 頁の図 1 とその図の解説で紹介しましたように、生体肝移植治療は 22 のファクター、17 のアクター、3 つのタイムが、同時進行で複雑に絡み合って相互作用を及ぼします。そして、その結果は移植にかかわった人たちにポジティブにもネガティブにも影響を及ぼします。以上のことを次章の夫から妻への夫婦間移植の事例から紹介します。

1 事例紹介

夫である徹さん（仮名：60 歳代）は、妻（60 歳代）と息子 3 人（全員 30 歳代）の 5 人家族です。当時の徹さんと息子 3 人は会社員として働いていました。妻は 50 歳代まで 20 数年間、会社員でした。妻は感染時期が不明な B 型肝炎を患い、数年前から徐々に悪化して肝硬変から肝臓癌になりました。そのため地元病院や Y 病院で内科的治療や外科的治療を受けていました。ある日、妻は体調が悪化して発熱と同時に、肝臓癌治療のために皮下に埋め込まれたリザーバー^(注1)あたりから出血したため、地元病院へ救急搬送されました。そこで数日間処置を受けて Y 病院へ転院となりました。その当時の妻は、腹水（肝臓の機能が悪い状態）があり、命が危険な状態でした。このときに医師から勧められた治療法が「移植」であり、これ以外に選択肢がなかったのです。その移植とは、急を要するため脳死移植ではなく生体移植を意味していました。それは移植術の 3 ヶ月前ことでした。

2 生体肝移植治療の特徴

対人援助マガジン 33 号 352 頁で紹介しましたように、生体肝移植治療には 8 つの特徴が

(注1) 体外から容易に薬剤を投与できるように皮下に埋め込まれた小さな器具。

あります。それは、(1)代替療法がない、(2)移植をしないと患者は死亡する、(3)生体ドナーが必須、(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となる [安藤 2002]、(5)他者には依頼しにくい、(6)ドナーの負担や犠牲は金銭や時間で分配できない、(7)ドナーは誰かひとりが全面的に担うしかない、(8)時間的制約がある、ということです。

このような生体ドナーを必須とする生体移植は残酷な治療だと言えます。かといってこのままだと患者が亡くなるのは確実です。家族は移植治療があることを知りながら、何もせずに弱っていく患者をただ見まもるだけ、という事例もあるかもしれませんが、少ないのではないかと推察します。私が移植医療現場に携わっていたとき、助かる治療法を知り得たからには生体移植を選択する家族を多く見てきました。徹さんも同様に考えていたのです。そのため移植前の最も重要な要因として「誰がドナーになるのか？」という問題が顕在化してきました [一宮 2016]

3 ドナーはどのようにして決まっていくのか？

対人援助マガジン第 34 号 337～341 頁の図 1 やその図の解説で紹介しましたように、患者は「余命告知」を受け、家族は最終的に「生体肝移植」を選択しました。移植を選択した時点で「ドナー決定」となる事例もあれば、家族や親族からドナー探しいわゆる「ドナー候補者の選定」が始まります。そして「インフォームド・コンセント」を経て「ドナー決定」となる事例が多いのですが、移植治療を勧めた地元のかかりつけ医から大まかな説明を受けて、家族内でドナーが決まることもあります。Y 病院では通常、移植術までに「インフォームド・コンセント」が行われます。それは日時を変えて通常 3 回行われ、最終回で正式に「ドナー決定」となります。

3.1 ドナーの倫理的条件

2007 年以降の現在では、親族関係者でない他人でもドナーになれるようになりました [日本移植学会 2014] ^(注2)。しかしそれ以前の Y 病院は、ドナーは誰でもなれるわけではなく移植施設によるドナーの倫理的条件という縛りがありました。それは原則として血族 3 親等以内の親族（両親、子ども、きょうだい、おじ、おば、甥、姪）あるいは配偶者でした。ここに姻族は含まれていません。今も昔もドナーとして最も重要なことは、他人に強要されてドナーになるのではなく、自発的な意思で提供を希望する人に限るということです。

妻の立ち位置から見た上記の倫理的条件にあうドナー候補者は、配偶者である徹さん、子ども、あるいは妻のきょうだいになります。妻は 8 人きょうだいですが、そのうち兄と姉の 2 人はすでに亡くなっていました。存命中の妻のきょうだいは 50～60 歳代です。しかし、徹さんの語りには妻のきょうだいにドナーを依頼した語りは見当たりませんでし

^(注2) その際の留意点は、有償提供の回避策、任意性の担保などです。また提供意思が他からの強制ではないことを家族以外の第三者が確認します。「第三者」とは移植に関与していない者で、提供者本人の権利保護の立場にある者で、かつ倫理委員会が指名する精神科医などの複数の者です [日本移植学会 2014]。

た。その理由は、自分たち夫婦には 30 歳代の子どもが 3 人いることから、万が一のことを考えると妻のきょうだいには依頼しにくい心情であったと推察されることに加えて、家族内の問題は家族内で解決しようと考えていたのだと思われます。

3.2 ドナーの医学的条件

医学的条件とは、ドナーとしての適応可否にかんする医学的視点から見た条件です。それは、健康状態、年齢、血液型、体格、感染症の有無、組織適合性などです。ドナーは健康体であることが望ましいのですが、ほかに候補者がいない場合や、移植を強く希望するときには、糖尿病、高血圧、脂肪肝などの持病があったとしても、術前に治療してコントロールされている場合には、ドナーになることもあります。ドナー年齢は、おおむね 60 歳までが望ましいとされていますが個体差が大きいため、一律的に線引きするのは難しいとされています。血液型はレシピエントと一致しているか、適合とよばれる問題の少ない組み合わせが望ましいのですが^(注3)、血液型が全く異なる不適合移植でも可能です^(注4)。この場合、移植後の超急性の拒絶反応が起こる可能性があります。その拒絶反応を抑えるために大量の免疫抑制剤を使用することから感染症を合併しやすいといわれています。感染症として B 型肝炎、C 型肝炎、梅毒、HIV（エイズ）などの感染者は、原則的にはドナー不適応とされています〔江川・上本 2007〕。

ドナーの肝臓は、画像診断 (CT 検査) によりその大きさが予め把握できるとされており、成人間移植の場合は、患者と同じくらいの体格の人が提供すると、移植肝臓の大きさとしては適しているとされています〔田中絃一監修, 2004: 9〕。

このような医学的条件を徹さんの事例に反映すると次のようになります。(1) ドナー年齢は 60 歳までが望ましいのですが、徹さんは 60 歳代と高齢であるため、若い年齢のドナーよりリスクが高くなり、移植の成功率や回復状態などに影響を及ぼす可能性があります。(2) 徹さんは糖尿病という持病があります。そのため移植術前に 1 ヶ月間入院して血糖コントロールをおこない全身状態を整えたうえでドナー手術を受ける必要がありました。(3) 血液型は徹さんが O 型、妻は AB 型で一致していませんが、O 型から AB 型への移植は適合移植となり、問題の少ない組み合わせです。またそれ以外の医学的条件としての問題は見られませんでした。

3.3 ジェンダー規範／家族規範

ドナーには倫理的条件や医学的条件以外にも規範があります。それは対人援助マガジン第 37 号 235 頁で紹介しましたようにジェンダー規範と家族規範を指しています。

(注3) 血液型適合移植とは、問題の少ない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーの血液型が O 型→レシピエントの血液型が A/B/AB 型、A/B/O 型→AB 型の移植です。

(注4) 血液型不適合移植とは、輸血できない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーからレシピエントへの血液型が A/B/AB 型→O 型、A 型→B 型、B 型→A 型、AB 型→A/B/O 型の移植です。近年の血液型不適合移植は、その後の進歩により経験をつんだ施設での成人症例の成功率が 80%にたっているため禁忌にはならないとされています〔江川・上本 2007〕。

ジェンダー規範とは、江原由美子 [2001] の「ジェンダー秩序」の論考を参考にして定義しました。その「ジェンダー秩序」とは、「状況」や「社会的場面」のいかんを問わず、「性別カテゴリー」と一定の「行動」「活動」を結びつけるパターンがあります。その秩序の成立は「性別分業」と「異性愛」からなります。「性別分業」とは「男は活動の主体」、「女は他者の活動を手助けする存在」という位置づけです。「異性愛」とは「男は性的欲望の主体」、「女は性的欲望の対象」として両性間の非対照的な力が重要な構造特性をもつと述べています。この説明を参考に、ジェンダー規範とは、女性是他者のサポート役、男性は活動主体であり、女性を性的対象とするような権力があることを指しています。具体的には 3.4 のレシピエントである妻の心情や 3.5 の夫である徹さんの心情に現れていますのでごらんください。

家族規範とは、家族としての責任を意味しており、家庭内の地位、就労の有無、収入の有無、ライフステージ、続柄などが関わっています。さらに家族規範には優先順位があり、出生の順位、親等関係上の近さ、傍系より直系家族が優先するという順位があります。3.5 の夫である徹さんの心情に現れていますのでごらんください。

3.4 レシピエントである妻の心情

妻の兄と姉は肝臓癌のため 60 歳代で亡くなっています。妻も同じ肝臓癌であり 60 歳代であることから「自分も同じ病気で死ぬのでは？」という不安や恐怖が語られています。

ドナー候補者の選定を行っていくプロセスで、徹さんは妻のこころの揺らぎを感じ取っていました。妻も「ホントは子どもということやった」と、最初は子どもがドナーになることに同意していたことを語っています。しかしその後の妻は「子どもはイヤ…それなら私はこのまま終わったほうがいい」と自らの意思を明言したのです。この語りは、子どもを育み護る母親としてのジェンダー規範に基づく語りと言えます。そうするとドナー候補者は夫である徹さん以外にいないことになります。レシピエントからドナー依頼をすることは、強制や圧力をともなうことから倫理違反となります。そのため妻が言語化した「子どもはイヤ」という本心と思われる語りには、夫である徹さんにドナーになって欲しいという言外の意味が含まれていることがわかります。肝臓の一部を提供するドナー手術は、ドナーには何のメリット也没有ません。万が一の事態で死亡する可能性もゼロではありません。だからこそ、このようなリスクを承知でドナーになるということは、ドナーの自発的意思で引き受けることが重要なのです。

3.5 夫である徹さんの心情

死の不安や恐怖を抱えている妻から、子どもを傷つけてまで自分が生きながらえるくらいなら、このまま死を選ぶという意味内容の意思表示を聴いた徹さんは、子どもをドナーにするのではなく「亭主として、私の肝臓が使えるなら」とドナーとして自発的な意思表示をしたのです。さらに夫であり父親でもある徹さんは「妻をこのまま旅立たせてしまったら、

3 人の息子が結婚しないままで夫として親として悔いが残る」とも語っています。この語りの「亭主」とは「家の主人」を意味していることから、家族を護る家長としての責任、つまり家族規範であり、さらに夫として妻を助けるジェンダー規範も内包していると言えます。

こうしてドナー候補者の選定で子どもは除外されました。念のために「子どもさんにドナー検査はしなかったのですか？」というインタビューの質問にたいして徹さんは次のように語っています。妻は感染時期が不明な B 型肝炎から肝硬変、肝臓癌になったことから「子どもにも（妻から感染した）B 型肝炎があるかもしれない」と考えてドナー候補者から除外したのです。医学的にこのような肝臓のウイルス感染症は、移植後再発する可能性があるため、3.2 の医学的条件で述べましたようにドナーは適応外となります。その結果、徹さんの肝臓が「使えるのなら私にしよう…それを最後の賭にしよう」と、ドナーになることを自ら決断して妻に伝えたのです。

このようなプロセスを経て言語化された徹さんの心情は、その後の夫妻や家族の関係性に、今までとは異なった変容をもたらすこととなります。これらの詳細は 9 章で紹介します。

4 インフォームド・コンセント

徹さん夫婦は移植術までにインフォームド・コンセントを受けています。フォームド・コンセントの概要は対人援助マガジン第 36 号 294 頁を参照してください。さらに具体的な内容は対人援助マガジン 37 号 254～255 頁を参照してください。ここでは徹さんの語りからインフォームド・コンセントの受けとめ方を見ていきます。

インフォームド・コンセントはプライバシーの保てる部屋で、1 回約 2 時間かけて移植コーディネーターが同席のもと移植外科の医師（移植医）がおこないます。1 回目は徹さん夫婦 2 人で説明を受けたのですが、このとき妻は「恐ろしい」と感じて以後は同席していません。妻のように移植治療の詳細内容を知らないがゆえに移植術を決断できるレシピエントもいるということがわかります。2 回目は徹さんと子どもが同席、3 回目は徹さんと妻の弟が同席して説明を受けています。

4.1 高齢のためリスクはやや高い

徹さんは移植医の説明を「分かった」と次のように受け止めていました。それは「肝臓は左（葉）と右（葉）の大きさに差があって、赤鉛筆で（肝臓や血管や胆管の）繋ぐところと切ったところを書いて…詳しく分かりやすく説明（があり）…脅かすところ（リスク）もはっきりと言われた。ただ手術したら完全に治るのではなく、成功率は 100%中の 73%、あなた方は 60 歳を越えているからこれよりは少し危険率が高い」とのことでした。このような厳しい内容でも最初から説明があるところの準備ができるため、徹さんは「キツク言われた方がいい」とポジティブに受け止めていました。

4.2 予想外の高額医療費

ところが医療費の説明では移植医にたいしてネガティブな感情を抱いたことを語っています。それは妻の肝臓癌には「保険が効いて 300 万円くらいという情報をほかから聞いて知っていた」のですが、移植医の説明では、最初は癌が「3 個だったが今は 4 個になり…実費（約 1000 万円）になるけど、どうやろう？」と医療費が予想より高額になったのです。この説明を聞いて移植術を断念する家族はいるかもしれませんが、徹さんのように妻の命にはかえられず何としても手術を受ける事例が多いと推察します。そうすると 1000 万円という高額の医療費を準備しなければならず、徹さんが移植医に「不信感」を抱き、「動揺した」のも理解できます。

これまでの肝臓癌の移植術は私費扱いでしたが、2004 年より肝硬変に肝細胞癌を合併している場合にはミラノ基準に限り保険適用となりました。ミラノ基準とは肝臓外に癌の転移がなく、肝臓内の脈管に癌の侵襲がなく、癌が多発の場合 3cm 径が 3 個以内であり、単発であれば 5cm 径以内 1 個とすると規定されました [田辺 2009]。2000 年代中頃に移植術を受けた妻は、当初の癌は 3 個でしたが、それが 4 個に増えたため医療費が私費扱いとなったのです。

徹さんの語りには、予め移植医から肝臓癌の移植術にはこのような保険適用外となりうる場合があるという説明を受けた語りは見あたりません。移植医たちは専門知識がありますが、門外漢の徹さんには突然のことに混乱して移植医に「不信感」を抱き、あまりの高額な費用に「動揺した」ことはうなずけます。

結局、医療費は 3 人の子どもたちの支援によって解決するのですが、その詳細については 6 章で紹介いたします。

5 移植後の回復状態

肝臓は 2 つに分割できることと、肝臓の一部を切り取っても再生することが可能という臓器特異性があるため、肝移植が可能となります。他の臓器にはこのような特異性はありません。そして、レシピエントに植えられた肝臓は、数週間から数ヶ月で必要に応じて増殖再生し、その人の成長とともに発育していきます。もちろんドナーの肝臓も同様に数週間から数ヶ月でほぼ元の大きさまで再生します [田中ほか 1992]。

現代では成人間のドナーの肝臓提供は、ドナーの負担を考えて右葉より小さい左葉の肝臓を提供するようになっているようです。しかし 2000 年代中頃の徹さん夫婦の場合、ドナーが提供する肝臓は肝臓全体の 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植が行われています(対人援助マガジン第 33 号 348 頁の図 1 ドナーの肝臓切除部位参照)。

これらを押さえたうえで術後の回復状態を見ていきます。

5.1 予定通りに経過したドナーの術後

通常、ドナーの入院期間は 2 週間です。徹さんは高齢であるため若い年齢のドナーより

もリスクが高いと説明を受けていましたが、術後に大きなトラブルは見られず順調に経過しました。入院期間は予定通り 2 週間でした。ただ胆汁の漏れを予防する目的で胆管チューブが入った状態で退院することになりました。胆管チューブは退院後 1 週間の外来で抜去となりました。

術後合併症もなく「見本みたいに」予定通りに経過した徹さんは、入院期間中は頻回に妻の病室を訪問して経過を見ていたことを次節のように語っています。

5.2 順調に経過したレシピエントの術後

レシピエントの妻は、術後数日間は ICU（集中治療室）に収容されて、心臓、肺、腎臓、その他の臓器を監視しながら、移植された肝臓がうまく働いているかなどの濃厚な術後管理や処置やケアを受けます。手術後はたくさんのチューブやドレーンが身体とつながっていますが、どれも全身状態を知るために大切な命綱です〔田中監修 2004: 26〕。その後の妻は一般病棟の個室に収容されました。入院中の徹さんは、頻回に妻の病室を訪問して術後経過を見ていました。最初は妻の身体に「管がいっぱいついていたのが、段々減っていったので、よく（なっていることが）分かった。私（徹さん）が退院するときには、赤い血（液）混じりのパイプ（ドレーンの意味）が 2 本あったのが 1 本になっていた」と自ら確認できたことで妻の術後経過が順調であることを実感しています。その後の妻は大きな術後合併症や拒絶反応もなく術後 69 日間で退院となりました。

6 さまざまな支援——経済的／心理的／人的／社会的

ドナーとレシピエント、家族の 2 人が同時に手術を受ける生体肝移植術は、身体的、心理的、経済的、社会的に、患者や家族に大きな負担や不安をもたらします。そのため移植前から移植後、移植後 1 年以上から終末期の時間軸において様々な支援が必要となります。支援内容は、医療的支援、心理的支援、人的支援、経済的支援、社会的支援、代替療法（宗教など）があります。徹さんの事例で最も大きかった支援の順にあげると、まず高額医療費のための経済的支援、次に親族や近隣住民の心理的支援、親族による人的支援、国による社会的支援の語りを得ました。以下にその内容を紹介します。

6.1 高額医療費にたいする経済的支援——全額支援した息子たち

徹さん家族には独身の 30 歳代の息子が 3 人いて、全員が就職していたことから、息子たちにはある程度の貯蓄があったと推察されます。さらに息子たちの立ち位置から見ると、生命の危機状態にある母親を助けるために、高齢で糖尿病の持病がある父親がドナーとなって犠牲と負担をひとりで引き受けたうえに、さらに高額な医療費が必要となる事態に父親が「動揺」していたのを知っています。息子たちは若くて健康体であったことから、父親ひとりが負担と犠牲を引き受けたことに負債意識があったように思います。そのため息子たちは何らかの協力をしたいと考えていたのではないのでしょうか。

2 章の生体肝移植治療の特徴で紹介しましたように、ドナーの犠牲や負担は分担できませ

んが、高額医療費の金銭支援なら分担できます。その結果、息子たちは自発的に分担して医療費の全額を支援したのです。徹さんは、「子どもというのは親の前では、兄弟仲が悪く見えるんやけど…今期…兄貴を立てて、兄弟同士の絆が深くなった」と感じていたのです。

6.2 心理的支援——賞賛／労い

徹さんが命がけでドナーとなって妻を助けたサクセスストーリーは、「入院中は次々に見舞いに来てくれて『ようやった』（と賞賛や労いの言葉をかけてくれて）…ドラマみたいで主人公のような気持ちになりました」との語りは、ドナーにたいする心理的支援と言えます。その支援は妻を助けたドナーの夫としてポジティブな意味づけをもたらしています。

私が臨床現場にかかわっていたころ、徹さんの事例とは真逆の事例がありました。周囲から懇願や圧力を感じてドナーになりましたが、レシピエントは術後数ヶ月後に死亡し、ドナーは長年術後合併症で苦しみました。しかし、レシピエントや家族からは一言も感謝や労いの言葉かけがなかったのです。常識では考えられないことが現実にはありました。このようなネガティブな現実には氷山の一角だと思います。現実にはもっと多いと推察しますが、批判を恐れて顕在化しないだけだと思います。

6.3 人的支援——安心感／負債感

人的支援とはもちろん文字どおり人力による支援ですが、もうひとつ大事なことが含意されています。それは人的支援をするという行為のなかに心理的支援が含まれていることです。

徹さん夫婦が入院中は妻の姉が自宅に来て家族の身の回りの世話をしています。とは言っても子どもたちは 30 歳代の働き盛りで、子どもたち自身で炊事、洗濯、掃除など、その気になれば可能だと思えます。関節に持病がある妻の姉は、移植術で動揺しているように見えたため、子どもたちは数日後に妻の姉の世話を断っています。しかし、心配して駆けつけてくれた妻の姉の心情は家族にとって嬉しかったに違いありません。

6.4 社会的支援——年金

徹さん夫婦は長年会社員として働いてきました。徹さんは術前のインフォームド・コンセントで、高齢者の移植後の経過は若い人のように「どうこう言えない」と移植医から説明を受けていました。そのため徹さん自身が術後に「仕事ができるのか、身体が元にもどるのか分からないため手術前日に退職」したのです。

移植後には高額な医療費が必要と理解したうえでの退職であったため、インタビューが「すごい決断でしたね」と話を向けると次のような事情を語っています。それは「65 歳になったら年金生活をするというのが前（提）にあったから救われた」ということでした。それと 6.1 で述べましたように「子どもたちが入院費用は全額支払ってくれた」のです。

このように子どもたちの金銭支援を素直に受け入れることができたのは、将来設計としてあと数ヶ月で年金生活になるという確かな着地点があったため、「自分たち夫婦は長生き

して年金をもらって、それを子どもたちに返そう」と考えてのことだったのです。

7 社会復帰——退職後の再雇用

徹さんは術後 5 ヶ月目から退職した会社に再就職しています。そして「元いた職場でひと月に 10 日～12 日くらいの確率で、パートで働いてい」と語っています。私は新たな職場ではなくて「元いた職場」で働いている徹さんは、長年働いてきた職場経験から、社会復帰にはストレスが少なく済むのではないかと感じました。

移植前の妻は主婦業でした。徹さん夫妻がインフォームド・コンセントで重要と受け止めていたことは、「手術前よりも手術後に家族の支援が一番必要となる」ということでした。しかし退院後の妻は「家事は自分がする」と言って徐々に主婦業に戻っていったようです。そのため社会復帰の明確な時期は不明です。

8 医療的フォロー体制

退院後のレシピエントは原則として免疫抑制剤を生涯にわたって内服する必要があるため定期的な外来通院が必要です。Y 病院の外来では血液検査やエコー検査などをおこなって、その結果をもとに免疫抑制剤を微調整します。

ドナーの医療的フォロー体制として Y 病院にはドナー外来があります。ドナーも年 1 回の定期健診は必要です。徹さん夫婦は Y 病院の隣県に居住していましたが、通院可能な距離と思われることから、定期的に来院しています。

9 関係性の変容

本稿のはじめにで紹介しましたように移植治療には 22 のファクター、17 のアクター、3 つのタイムが、同時進行で複雑に絡み合っ相互作用を及ぼします。その結果、この事例では、(1)移植前のドナー決定のプロセス、(2)子どもたちによる高額医療費の支払い、(3)近隣地域住民や周囲の人たちからヒーロー扱い、(4)移植後数年以上へたレシピエントの心情の変化、(5)インタビューがもたらしたもの、として 5 つ関係性の変容が見られましたので以下に紹介します。

9.1 ドナー決定のプロセス

3.1 や 3.2 で紹介しましたように最初は子どもがドナーの予定でしたが、最終的に妻は子どものドナーを拒否したため、夫である徹さんがドナーにならざるを得なくなりました。徹さん自身は妻の意向を聞いて即断したのではなく、以下のように自分自身が納得した語りが得られました。

徹さん：「どうやら私ら（夫婦）が仕事も離れてこれから 2 人でゆっくりできるという矢先にね…少しの蓄えもあったけど…その蓄えを妻の命と交換できるんだったら、僕自身…ひとりで生きていても、妻と一緒に生きるほうがまだいいし、とい

う気持ちもありました。それを聞いたら妻は泣いていましたけど（涙声）。」

徹さんはインタビュー時に、ドナー決断のプロセスを思い出すと涙ぐむほどに様々な感情が蘇ってきて涙を流し、声を詰まらせながら語ったのです。そして徹さんがドナーを決断した後、それまで「憎たらしく感じていた妻が変わったように感じます。愛おしさを感じるんですわ」としみじみと語られたのです。

移植前のこの時間軸で、妻の命の期限を知り得たことが、これまで共に生きてきた夫婦のありようをふり返る機会になっていたのです。その結果、妻が変わったように感じた徹さんとの関係性は、徹さん自身が変わったことの裏返しであり、「私自身はできた女房のおかげでここまでできた」という心情を吐露されたのだと思います。妻の生命危機という状況が、夫である徹さんと妻の関係性に変容をもたらしたと言えます。

9.2 子どもたちによる高額医療費の全額支払い

母親を助けるために持病のある父親がドナーを決断し、さらに高額な医療費に動揺した父親の様子を見て、親の背中を見て育った子どもたちが何らかの支援をしたいと思ったのは自然な成り行きのように思われます。また子どもたちが唯一出来ることは、緊急事態にあって支援可能なことは金銭支援だったのです。それが最も重要な課題であったことも確かです。家族なら言葉にしなくてもお互いに事情は分かっていたように思われます。こうして徹さんを悩ましていた高額医療費の問題は、子どもたちによる全額支払いで解決しました。その結果、以前にまして親子間、兄弟間の「絆が強くなった」と徹さんは語っています。

高額医療費を短期間に準備するには、募金では時間的に無理があり、金融機関から借金するには支払期限や利息の支払いなどを考えなければならず、親族から借金するには負い目を感じてその後の関係性に影響を及ぼすことが考えられます。徹さんのように家族内で高額医療費が準備できるならば、親族から借金するよりも負い目は少ないと思われます。

対人援助マガジン第 37 号 258 頁で紹介した母から子への親子間移植では保険が適応されず高額医療費が必要でした。この事例ではドナーである妻の夫が夫方親族から借金をして支払っています。その結果、夫は借金をした親族には負い目を感じて社会的距離が遠くなりました。さらに家庭では借金の原因となったレシピエントである長男を疎ましく思う父親（夫）の微妙な感情を、レシピエントである長男が感じとって家族関係がギクシャクするというネガティブな関係性となりました。このように借金問題を親族間で解決した事例の関係性はネガティブですが、家族内で解決した徹さんは家族とポジティブな関係性となり、前者とは大きな違いが見られたのです。

9.3 近隣地域住民や周囲の人たちから「ヒーロー」

6.2 で紹介しましたように、徹さんは入院中に「ドラマの主人公」のような気がしたことを経験しました。さらに退院後は「部落の人はみんな知りました。ホンマにそんなことができるなんて…だから人気者になっています」との語りは、移植が成功して妻が生きているからこそ言えるのであって、ドナーもレシピエントも何らかのトラブルで元の日常生

活にもどることができなければこのような心情にはなれないと思います。

あるドナーは移植後 5 年以上経過しても職場ではヒーロー扱いされていると語っています。1989 年から始まった日本の生体肝移植件数は年間累計で 9,136 例です [日本移植学会 2019]。やはり身近に生体肝移植を経験したドナーが少ない現実から、このような現象が見られたのだと思います。

9.4 移植後数年以上へたレシピエントの心情の変化

移植後 10 数年経過したころ、たまたま徹さん夫妻に出会いました。2 人とも移植後の定期健診で Y 病院に来院されていたのです。両人ともお元気そうでなによりでした。レシピエントである妻に以前から気になっていながら聴けなかったことを尋ねました。移植後のレシピエントはドナーに感謝の気持ちがあることはわかっています [一宮 2016]。ドナーによってはもっと感謝されてもいいのではないかと思う人もいますが、私はいつまでこの感謝の気持ちが続くのか知りたかったのです。

妻がいうには「半年も経ったらそれまでの夫婦のようになった」とのことでした。ということはいつまでも感謝の気持ちは続かないと言うよりも、元の生活を取り戻すための命がけの移植術を乗り越えたため、ドナーもレシピエントも元の感情に戻るのは自然なことではなかろうかと思いました。しかし心底では今生きていることに感謝するならば、ドナーが助けてくれたから今生きているわけだから、ドナーにたいする感謝の気持ちは生涯忘れることはないと思われます。

9.5 インタビューがもたらしたもの

私は医療関係者として移植医療に約 20 年携わってきました。その頃はまだ移植医療が始まって年数も浅かったことから、参考文献も少なく、明らかでないことがたくさんありました。そうすると移植を体験した当事者に聞くしかなかったのです。私はレシピエントではなく、リスクを承知で犠牲と負担をひとりで担うドナーの心情を知りたかったのです。そのひとりが徹さんでした。徹さんはドナーになった自分の経験を次のように語っています。

徹さん：「当時の気持ちを聴かせてくれと言われてね、胸がつまって、内心感激していた…妻や子どもや親戚に言えへんことを聴いてくれるということは嬉しかった。自分がドナーになって妻の命を救うことができたことは、不幸な反面、幸せやなあと思う…こんなことお金を積んでもこんな境遇を与えてもらえる訳じゃないし…最初、神さんは何でこんな試練をあたえるのかなあと思ったけれど、こういう試練を与えてもろうて、乗り越えるのもひとつの人生とちがうのかなあと思って…私自身も大きく大人になって精神的にゆとりができた…」

誰かに話すことで自分の心の重荷をおろせるときがあるように、私も同じ立場なら同様な感情を抱いたと思います。このような結果から研究という名目でしたが、インタビュー自体がドナーの心のケアになっていることがわかりました。その前提に医療関係者であるインタビューアとドナーである徹さんとラポールがとれていたことが大きかったと思います。

おわりに

この事例は移植前のインフォームド・コンセントの時点から高額医療費の問題が生じたことで一時期、移植医に不信感を抱きネガティブな関係性となりました。しかし、移植後の時間軸上で息子たちの金銭支援によって高額医療費問題が解消したのみならず、移植が成功したことで妻は生きながらえました。その後の療養期間中の徹さん夫婦は、大きなトラブルはなく過ごしています。

このような出来事は長い人生から見るとほんのわずかな期間であったはずです。しかし、この期間の経験は徹さん夫婦や家族にとって、妻の生命危機を乗り越えて命をつなぐことができた達成感と、それによってもたらされた家族の団結力。その結果、移植医に対する不信感というネガティブな関係性は消失し、夫の犠牲と負担によって妻が生きることが、ドナーにポジティブな意味づけをもたらしたばかりではなく、家族の絆がなおいっそう強くなったのです。このような経験はなにものにも代えがたい出来事として、家族それぞれに記憶されたのです。

その後の息子たちはそれぞれ結婚して幸せな家庭を築いています。昔なら助からない命でしたが、高度先進医療によって救えた命です。このような成功事例は移植医療に関わった移植関係者のひとりとして嬉しく思います。

10 文 献

- 安藤泰至, 2002, 「臓器提供とはいかなる行為か?——その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167
- 江川裕人・上本伸二, 2007, 「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.
- 一宮茂子, 2016, 『移植と家族——生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.
- 田辺稔, 2009, 「肝移植: 内科医のための基礎知識」『今日の移植』22(2): 151-160.
- 田中紘一・間中大・田野龍介ほか, 1992, 「生体肝移植の現況」『外科診療』34(7): 895-901.
- 田中紘一監修, 江川裕人・高田泰次ほか, 2004, 『いのちの贈りもの 肝臓移植のためのガイドブック』, 京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部.

11 オンライン文献

- 日本移植学会, 2014, 「日本移植学会倫理指針」
(http://www.asas.or.jp/jst/pdf/info_20120920.pdf, 2020.5.23確認).
- 日本移植学会, 2019, 「臓器移植ファクトブック 2018」
(<http://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2018.pdf>, 2020.5.21 確認) .

こころ日記「ぼちぼち」その②

まちの保健室

脇野 千恵

まずは、科学的な視点で！

共に2年生の所属になったM先生との学校生活が始まりました。生活科の中に位置づけた性教育の研究と教材作りに専念する毎日でした。

その当時の低学年の性教育のテーマは、「からだを清潔に！」・「命の大切さ」でした。年間2時間、主に参観日をねらって授業公開されていました。

からだの洗い方などから、自分のからだを清潔にすることの大事さを教えます。

「命の大切さ」では、みんなの命はお母さんから生まれてきたこと。児童一人一人の家の人から、生まれてきたときのエピソードの手紙を書いてもらい、みんなで共有する授業です。「お母さんが産んでくれたんだよ。大変だったんだよ。家族もとっても喜んでくれました。」と言っていました。写真を持ってこさせていた時もありました。子どもたちには、生まれてきて良かった、だから命は大切にしようと思わせる学習でした。

しかし、M先生と性教育について議論するうちに、「それっておかしいよね？」とい

う結論になりました。本当にお母さんは産んで良かった、子どもは生まれてきて良かったと思っているのかな？家族には色々な形態があるのだから…。

M先生からは前任県での人権学習の研究などから学ぶことが多く、彼女の人を人として見る鋭さに引き込まれていったものです。そこで新たに性教育の学習計画に取り組むことになりました。

まず、子どもたちへのアンケートをしました。「みんなのいのちは、どこから来たのかな？」「どうやって生まれてきたのかな？」という質問をし、文章で書けない子には、絵で描いてもいいよと投げかけました。子どもたちは、実に色々なことを書いていました。今でもそうですが、家庭での性教育はなかなか実践されていない状況です。ちゃんとした答えを書く子はいませんでした。知識のない子どもたちの実態から、今の時期にこそ、ちゃんとしたことを教えるべきだと考えました。

その頃、私は性教育の民間の研究団体で学び始めていました。その研究会では、できるだけ幼少期から科学的なからだの学習を教えることをテーマにしていました。

行き過ぎた性教育？

M先生と計画した学習内容です。

①「たいせつなわたしたちのからだ」

ヒトのからだの外から見える部分の目や耳、口、髪の毛、手、指、などの働きについての学習です。

例えば、睫毛や眉毛の働きについて語ると、子どもたちは「へえー」と感動してくれます。ただし、色々な事情で障がいを持つ人もいますので、そこは配慮が必要です。そして、女の子と男の子の違うところに気づかせ学びます。学習中の子どもたちの関心事は、やはり性器の部分です。恥ずかしがったり、喜んだり大騒ぎです。なぜか男子の性器の愛称として「ちんちん」という言葉があるのに、女子の性器の愛称はありません。卑猥な言葉は色々あるのに…不思議ですね。

※今は、LGBTQ という多様な性別があり、男女だけに限らないことを学ぶようになっています。

②「命の誕生」

人の命ができる仕組みについての学習です。児童の事前アンケートを提示しながら、実は『お母さんの命の元と（卵子）お父さんの命の元（精子）が合体して、あなたたちの命ができたんだよ』と語ります。

子どもたちは、新しい事を学ぶと次々に色々な疑問を投げかけてくれます。小さい子が、「なんで、なんで？」とうるさく言うのと同じです。この学習をすると、必ず子どもたちの誰かが、『先生、どこで合体するの？』と質問します。（この言葉が出ることをねらって仕組む授業ですが…。）さらに『どうやってするの？』、『いつするの？』まで出てきます。

ここでの学習のメインは「性交」を教え

ることです。科学的に正しくが基本ですが、どのような絵（あるいは図）で提示し説明するかが大切な課題です。

「人の命は、お母さんの体内にある子宮という部屋に、お父さんの命の元を送り込むことでできる。そして、お母さんの膣口から生まれてくるんだよ」と説明します。（生まれ方には色々ありますが…）

性交のことをセックスとも言っていると付け足しますが、本来セックスは性別の意味です。「性交」のテーマは奥が深く、成長の段階によって伝え方が大きく違ってきます。

小学校2年生でもセックスという言葉に反応する子もいますが、ほとんどの子どもたちは、素直に「なんや、そうやったんかぁ」といった表情を示します。なぜなら、自分がどうやって生まれてきたのか？という疑問に答えてもらったからです。自分の存在を意識する大切な時期です。父や母がいない子も、みんな同じようにそうやって生まれてきたことに、安心感を持つことができます。科学的な事実を伝えることの意味がここにあります。



教材として選んだ絵本があります。

『せっくすのえほん』という絵本は、28年以上前のものですが、やさしくほのぼのとしたタッチの絵を大きく紙芝居にしました。絵本の冒頭部分は「あなたは畑で生まれたの?」「卵から?」「おもちゃ屋さんで買ってらったの?」といった言葉から始まります。子どもたちは「そんなはずない、ちゅうちゅう!」と大盛り上がり。ただ、「お母さんとお父さんが結婚して、赤ちゃんができた」という部分は、今の時代にはそぐわないかもしれません。



もう一冊『あかちゃんはどうしてできる』というオランダの絵本があります。私自身の3人の子どもたちに毎晩読んで聞かせたものです。ヨーロッパでは早い時期からこのような本で子どもたちが学んでいたのですね。「あかちゃんはどうしてできる」という題名が好きです。

どの学習もそうですが、子どもたちに提示する教材は、十分に配慮しなければならないと思います。授業のめあてとかけ離れてしまい、事後の感想を読みがっかりすることがあります。特に性教育の学習では、絵であれば人物の表情、色合いなど。図であれば、正しく描かれているか。理解できるものか。何度も試行錯誤しながら授業案を考えました。

これらの性教育の学習実践は、子どもたちと共に学ぶ良い機会となりました。保護者の理解も得ることができ、学校での性教育の必要性を強く懇願されました。

しかし、M先生と私の一番の悩みは、管理職、同僚からの授業内容への反発でした。大きな原因は、「性交」を教えたことです。学習指導要領の逸脱?

子どもが性交したらどうする?

行き過ぎた性教育そのものだ!

この時から、私の性教育実践の険しい道のりが始まりました。

つづく

「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～④」

M さんの怒り

高名 祐美

「なんの手続きの話や?」。私の顔をみると、M さんは静かに尋ねてきた。「今日は、手続きの話ではないです。M さんのお顔、見に来ました。」と私は答えた。「退院して、家での生活はいかがですか?」と続けた。「どうって・・・」とつぶやくような返事。入院中とはまるで違う M さんだった。声が小さく、弱弱しい。新聞紙を顔にかぶり、抗がん剤の点滴を受けている。こちらに顔をみせない。視線を合わさないのは入院中もそうだった。違うのは声の音量と話しぶりだった。

M さん、65 歳、男性。独居。瓦吹き職人としてこれまで生計をたててきた。その技術はなかなかのものだという。結婚歴はなく、両親はすでに他界。親族は市内に住む姉ひとりだった。彼に特徴的なのはその髪型。のびし続けた長い髪（2メートルくらいか）を後ろでひとつに束ね、その髪をビニールでつつんでいる。ビニールでつつむのは、神聖なる髪がけがれないようにするためだ。その束ねた髪を体にまきつけ、洋服の一部に洗濯バサミでとめていた。髪の毛にからだを守ってもらっている、そんな印象をうける M さんだった。

M さんは、大腸がんで手術を受け、人工肛門を造設した。その状況は永久的で、今後

の生活において自分でパウチ交換ができるようになることが必須だった。しかし、彼の極度の潔癖症と易怒性が看護師による指導を難渋させていた。手術後傷の治り具合が悪く、体調がよくない日が続き、入院生活が長引いていた。ほんのちょっとしたことで激高するため、彼とのコミュニケーション、ストマケアの指導など、日々看護師は対応に苦慮していた。

そんな M さんが、退院後は別人のようだった。何が彼を変貌させたのか。「M さんの怒り」とその後の変化を通して「受容」について振り返ってみたい。

私のかかわりのきっかけは、身体障害者手帳とストマ用装具の助成制度についてだった。申請について説明する際、お姉さんの来院をお願いし、姉の予定に合わせ日時を決定した。約束した日時に病室を訪ね、自己紹介し、身体障害者手帳について説明を始めた。顔写真が必要であると伝え、自宅に適当な写真があるか尋ねたが、「ない」と。

SW：では、顔写真、どのように準備しましょうか。

M：ないものは仕方ない。ここで（病室で）看護師に撮ってもらう。

SW：私が撮りましょうか。今、カメラを持ってきますね。

（カメラを持参し、看護師に姿勢を整えてもらうよう同席をお願いしたが）

Ns：体を起こしましょうか。このままじゃ（臥床したままの姿勢）うまく撮れませんよね。

（体を起こして、1～2枚シャッターを切って写真撮影をした）

M：（撮影後、急に怒り出して）なんや、お前は！いきなり来て！ぐちゃぐちゃいいやがって！写真撮るっていうなら、前もって話しておけ！急になんや！馬鹿野郎！こっちは体がつらくて寝ていたいのに！

と、怒鳴り声をあげる。予想外の事態が起き、私は動揺した。しかしつとめて冷静に、初対面で写真撮影したことを詫びた。そして、Mさんの体調の良い時に改めて写真を撮らせてもらうことを告げて退室した。それがその時できた対応だった。クライアントをこれほど怒らせてしまったのはほぼ初めての経験だった。その後、お姉さんと面接。これまでの生活状況をお聞きし、身障手帳の申請手続きをお願いした。

1か月後、身体障害者手帳が交付になり、お姉さんが本人のところへ持参した。手帳を確認したMさんは、看護師を通じて「写真を写したあいつをここへ呼べ！障害者手帳だなんて、カッコ悪い。意味がわからん」と。手帳に貼付された写真の写り具合が気に入らないと激高されている。私は求めに応じて病室訪問し、Mさんに問いかけた。

SW：障害者手帳が届いたのですね。

M：（怒り口調で）障害手帳って。「障害」ってなんや？かっこわるい。蓄便袋がどうとかって。これ（障害者福祉サービスの冊子）を読めっていうけど、意味がわからん。これを全部説明してほしい。

市から発行されている「障害者が利用できる福祉サービスの手引き」について、説明を求められた。一読したようで、下線を引いたり、なにかメモを書き込んだりしてある。Mさんに利用可能なところをかいつまんで説明を試みるが、説明を最後まで聞かずに、自分の疑問を口汚い言葉で伝えてくる。

M：癌だというのに。あれもこれもあてはまらない、4級ってどういうことや。なんの意味がある？障害手帳？こんな写真貼られて！あんなときに写真を撮るから、こんな変な顔になってしまったんや！この写真、取替えてできないのか？

自分が活用できる制度が少ないこと、顔写真が気に入らないことなど、怒りをMSWにぶつけてくる。乱暴な言葉が次々発せられる。自分が障害者に認定されたことが受け入れられないのか、罵声が続く、こちらの説明には耳を貸してもらえない。とうとう私はつらくなり、Mさんの言葉を受けとめきれなくなった。これ以上、Mさんのそばで「受容」の姿勢がとれないと判断した私は「Mさん。そんなに怒ってばかりいられては説明もお話もできません。そんなに怒るのであれば、ここにはもう来ませんから。」とその場を去り、病室のドアを閉めた。そのままデスクに戻り、自分がと

った態度はどうだったのだろうかと振り返った。

その数日後に医師の病状説明があり、同席した。癌のリンパ節・肝臓への転移が見つかり、更なる抗がん剤の治療が必要だという内容だった。Mさんは、医師が説明している間、ずっと立っていた。抗がん剤治療の説明を聴いた後、一言。「転移・・・ 癌は取れたって聞いたのに。袋までつけたのに・・・ 転移はないって言われたのに。もうおしまいかな。手術して、袋付けて、なのにまだ・・・ 抗がん剤したら髪の毛、抜けるやろう？ もうおしまいや。あとのくらいの命なんや？」いつもの怒り口調ではなく、小声でつぶやくように話すMさんだった。2時間近く立ったまま医師の説明を聞き続けていた姿は、私や看護師を怒鳴りつけるMさんとは別人のようだった。

悩んだ結果、Mさんは副作用が比較的に少ない抗がん剤の治療を受けることを選択した。脱毛だけは受け入れられないMさんだった。そして退院が決まり、抗がん剤は外来で開始することになった。退院間際になっても、ストマのことで看護師とバトルを繰り返していた。私は、その後Mさんから2回呼び出しを受けて病室訪問した。1回目には「もう来ないんじゃないのか？」と静かに問いかけられた。「静かに会話ができるならば、私にできることはさせてもらいます」と私は答えた。相談の内容は、福祉の手引きの内容や確定申告のことだった。おだやかにMさんは質問を投げかけ、自分の疑問をひとつひとつ解決していく、そんな流れの面接だった。最後にMさんは「わかった」と数回繰り返した。退院がせまっていた日の面接では、「わ

かった」と答えた後、カバンからお菓子を取り出し、「これ、持っていけ」と差し出した。いつものように視線は合わさないままだった。とても嬉しかった。「私に？ありがとう」と受け取った。そして「そんなに怒るのであれば、もう来ませんから」と言ってしまったことを恥ずかしく思った。私の言葉にMさんはその時、どんな感情を抱いたのだろうか。

Mさんは自宅へ退院し、独居生活の中で外来化学療法が始まった。初回の治療に来院したMさんと面接を試みた。それが冒頭の場面である。

Mさんの言葉の中で、何回か繰り返されるフレーズがある。「もう、おしまいや」。

M：癌になって、手術して。こんな袋つけて。袋だけでも面倒なのに、転移だなんて。もうおしまいやろう。自分には親もいないし、あとを継いでくれるものもない。独りや。後始末をしてくれるものもない。今のうちに「終いの準備」をしておかないといけない・・・なんでこんなことに。

癌を抱えての独居生活。ストマ造設による身体の変化、それを受け入れられないうちに転移の告知。転移に関する病状説明があったのちは、激高しなくなったように思う。Mさんの怒りは、癌との闘病のエネルギーだったのかもしれない。「癌」「蓄便袋」「障害者」「転移」「抗がん剤」。これまで無縁だった言葉がMさんの日常生活に次々と出現し、不安でどうしようもない。どこにもあたりようのない怒りをぶつける相手が私たちだったと、今はそう理解している。化学療法室で抗がん剤を受けるMさ

んと向き合うことで、Mさんの生きる世界に少し近づけたような気がした。終始穏やかに小声で話すMさんに、入院中の自分の対応を心から反省した。

援助関係において、「受容」は基本的な態度である。クライアントの怒りを受けとめきれなかった自身の態度を振り返った。

「怒り」の背景にあるものを理解し、自分の感情を吟味して今後もクライアントに純粋な気持ちで向き合っていきたいと思う。



原田牧場 Note

Page 2

原 田 希

新型コロナウイルスの予防が第一の日々。もともと業務に、牛の感染症予防、牛から人へウイルスや菌を媒介させないための衛生管理が含まれる酪農家は、よりいっそう意識を高めての生活です。外出を控える自粛生活、家族が始終顔をつき合わせているステイホームもごく日常。ストレスはありません。

唯一の不便は、学校をはじめ、地域会や婦人部、勉強会、酪農運営組織の集まりができないこと。都会のようにネット環境が整わないため、今後も手立てを考えながらになるでしょう。リモートを使った対策案をニュースで見るたび格差を感じますが、何十年もネット環境は進む気配なしでしたから、期待はできません。

給食や飲食店の休業で牛乳が余ってきている状況については、保存のきく商品に加工する対応もぎりぎりのところまでできていると聞いています。昔も、生乳に食紅をつけて捨てた、大量のバターを酪農家が買い戻した、生産を減らすため牛の体調はさておき、餌を減らさざるをえなかった、牛を淘汰した、などの苦い記憶が酪農家にはあります。わが家の食卓でも生産調整対策は一番の話題です。

3月の初め、父の十三回忌のため大阪へ帰省し、北海道に戻ったら従業員が辞めていました。私からコロナをうつされる可能性があるから、とのことでした。ネットに出している求人には、住み込みの短期アルバイトの応募が増えました。本州で派遣の仕事がなくなった方や留学が延期になった方、外国人の方もいました。うちも人手は必要だし、何か力になればと考えたものの、なにもできませんでした。牛への感染もあるかもしれない未知のウイルスから牧場と家族を守るのが今はやっと。新型コロナの解明が進み、畜産業版予防策を確立するまで、相互の助け合いは出来ないのかな。と もやもやする気持ちを押さえて求人を取り下げました。本州から2ヶ月遅れの5月に桜が咲きましたが、なんともせつない春の到来です。（北海道では、せつない＝やるせないという意味でも使われます）

さて、テレワークになり家族で過ごす時間が増えて大変だと聞くようになりました。牧場は365日仕事も家庭も一緒。きげんよく暮らせるよう実践していることを書いてみたいと思います。

1. 「どうだった？」と声をかける…発信者は何も差さずにそう聞くだけ。受け手側が自由に内容を想像して答える会話法。「何が？」と聞き返すのだけはNG。時には、受け手が何について返事してるのか？を発信者が当てるクイズになったり、受け手側のポロリ発言も期待できる。

お風呂の湯加減、今日の体調、仕事の進み具合、夕御飯の感想、取りたてて発するまでもない普通の返事でももちろんだいじょうぶ。話題を探さなくても「どうだった？」と発するだけで会話がスタート。

2. 家事に疲れたら自由食にする…みんなのための食事作りをしないので、各自で作るか買うか自由にしましょうの日。誰かのために作る食事はやりがいでもあるけど、相手のことを考えすぎて負担になる日もあります。自分のためだけに作った食事を楽しむ日。便乗したい家族には一食 500円で販売します。牧場の家族は優しく、出したものはすべてだまって食べてくれますが、私ひとりが大阪人で味覚の違いもあるし、自由食の日どんなものを買ってくるか？を見ていたら、意外な好みを発見することもできる。いつだったか、牧場の父さんに1週間で一番おいしかった料理を聞いたら、「韓国のに」と答えたのには笑ってしまいました！がんばりすぎの自分をすぐさま脱ぎ捨てた一言。その他、飲み会の送迎でも代行運転のタクシー代より少し安い代金をもらっていました。家事や手間の賃金換算で、戻ってくるやりがい。受け取ったお金は家族のことに使います。家族間でお金がぐるぐるしている楽しい遊び。

3. シミュレーションを楽しむ…田舎の家は玄関の鍵を閉めません。気になって仕方がない私は、悪党が入ってきたらどうするの？と問いかけてみました。悪党というワードがおもしろかったのか、「悪党」ってどういうのよ？北斗の拳に出てくるいかにもなやつ？それともショッカー程度？と悪党の考察から始まり、家の中で隠れられる場所はどこか、撃退するための家族の配置はどのようにするか？防御装置はどこに作るのか？やっぱり階段かな、と実現可能な範囲での想像を広げます。問題点をあぶり出して、解決策を考えるやりとりを楽しく繰り返したのち、だから、施錠しましょうね！っていうオチで笑っておわるのですが、暮らし、経営の危機管理のひとつと考えています。マジ？そんなことある？あるかもしれんよなあ！を常に持つ。いつかの実践に備えた柔らかい脳、シミュレーションで鍛えています。

その他にも、目が合ったらニコッかニヤツとする。めちゃくちゃいそがしい時ほど、ごちそうにする（反対に記念日は照れくさいのでスルー）。血がつながらない私が代表して家族のことをほめる（肉親で長年同じ仕事をしているとほめ合わない）。ほめたあとに別の気になってる件をちょっとダメだしし、ほめ殺しにはしない。などがあります。牧場に暮らす限りは、ずっと家族と顔を突き合わせます。サラリーマン家庭育ち、ひとり旅好きの私は苦痛に思う時もありました。が、不自由に思える生活でもちょっとした工夫でおもしろがっていきたいです。

最後に、牧場の父さん母さんに聞いてみました。 仕事も家庭もおなじ、ずーっと一緒に
いられる秋けつは何ですか？ 家族と一緒に生活しかしたことがない、これが普通だから
秋けつはない、とカッコよく答えてくれた父さん。そのあとに母さんが「無視！ややこし
い時は」と発して、はっと顔を見合わせたふたりの温度差には大笑い。秋けつは母さんが
握っているようですネ。



筆者 原田 希 ハラダ ノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住。自身も酪農家に。

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や、

女性の農業者向けの勉強会、道外からのお嫁さんの会のお世話係を担当



みちくさ言語療法—ことばの発達と障害の臨床より—

(2) コミュニケーションの学習と脱学習

工藤芳幸

面白き事なきやりとりを面白く

前回、STの仕事について「人どうしが生きていく上で重要なことばやコミュニケーションの困り事について、その解決や解消を手助けする仕事」であり、「その対象や方法についてはいろいろあり、狭義の機能訓練から、コミュニケーション手段や環境の調整、本人や保護者への助言など」と書いた。機能訓練という立ち位置から言えば、STの臨床において、遊びや言語課題などの直接的な働きかけにおいて言語のインプットを質・量ともに十分に与えるということは重要なスキルである。特に語彙学習の方法論として一般的なテキストにも掲載されている（呼び方は様々だが、Focused stimulationともいう）。これはこれで丁寧に取り組んでいく必要がある領域だ。

一方で「コミュニケーションとはどういうものか？」ということに気づいてもらうことが大きなテーマだ。人とのやりとりが今一つ上手くつながらない、楽しめないという子たちもいるからだ。あるいは言葉はたくさん知っているが、コミュニケーションでは上手く使えないという場合も少なくはないからだ。言語臨床においてはコミュニケーションを楽しめるようになることが前

提であり基本的目標であると言って良い。

どんな教材を使うにせよ、何かを「教え込む」のではなく、教材を媒介にしてコミュニケーションを楽しむことに心を砕く。STであるからには自分自身が子どもにコミュニケーションを楽しんでもらえるような、良き話し相手、コミュニケーターであるかどうかということが大事なことなのだ。

そうは言うものの、実のところ私にはそこまでの自信はない。むしろ話し下手で周囲から助けられてコミュニケーションをしているという思いが強い。だから、「ものすごく楽しい！」を演出できているようには思えない。せいぜい私は子どもが面白くないなあと思っていたことをちょっと面白くするとか、なんだか上手くいかないことを少し上手くいくように手助けするとか、そのあたりを目指している。人のお話を聴くことで楽しいことがあるとか、やりとりしてみたら意外に面白いなとか、こういう手段を使ったら伝わるなとか、ちょっとした気づきを演出できたら良いなと思って仕事を続けているのが正直なところである。楽しいだけでダメでは？という批判があるが、楽しくて張り合いがあるものでなくては広い意味での学習が促されないのではないだろうか。

コミュニケーションは学習されるもの

発達途上の子どもにとって、コミュニケーションは学習されるものである。大まかには子ども自身の内的な認知・言語能力の発達と子どもが意図的または無意図的に発信した行動を周囲の大人がどのように拾い、返してきたかということが相互に絡み合って学習が実現する。子どもたちはそれぞれが獲得している非言語的な手段や語彙・文形成の力を用いて、周囲とコミュニケーションを取ろうとする。そうやってコミュニケーションをすることによって、コミュニケーションの力を身につけていくものだと思う。

ただし、大人の生きている認識世界や言語システムとは当然ズレが生じるために、大人が思うようには伝わっていないということも往々にしてある。そもそも「通じなさ」があるのが大人と子どものコミュニケーションである。そのズレも含めてコミュニケーションを楽しめると良いのかも知れないが、そんなに単純なことではないことも承知している。そうであれば「話が通じにくい」、「指示が伝わらない」などの相談案件が生じることもないだろう。私自身も子育てや重い障害がある方との関わりで幾度となく袋小路に迷い込んでしまったことがある。通じなさを何とかしようと手持ちの力で努力した結果、子どもにもあるいは大人にも、社会的に受容されにくいコミュニケーションが学習されてしまうこともある。こうした現象を私は「誤学習」と呼んできた。「子どもが悪い」ように聞こえてしまう言葉かも知れないが、コミュニケーションは双方向のものである以上、こうした「誤学習」は一方の問題に帰することはできず、周囲の人と暮らしてきた歴史の中で形成されたも

のであると捉える必要がある。

名前を呼ばれると泣くトオルくん

母親からの相談で出会った3歳の男児トオルくん。まだ言葉が十分に出てはいない。「初語が遅かった」「ことばがゆっくり」「ことばのキャッチボールが難しい」「名前を呼ばれるたびに泣き出す」という相談だった。特に最後の「泣き出す」ということに困っているらしい。初回面接で少し離れた場所にいたトオルくんの名前を呼ぶと、確かに泣く。大泣きする。初めて会った私だけではなく、母親でも日頃関わっている大人が声をかけても同じように泣く。感覚過敏の影響があるのかとも思ったが、それだけではないようだ。対人不安が強くて知らない人に寄っていかないということでもなく、むしろ興味を持って近寄ろうとしている様子があった。しかし、名前を呼んだ途端に泣く。詳しい事情はわからないが、どうやら名前を呼ばれるということが非常にネガティブな感情を引き起こしているように見えた。そこで取り敢えず興味を持った玩具を使って無言で一緒に遊び始めた。少し乗ってきた頃合いで「トオルくん」と呼びかけると、やはり泣いて手が止まった。気にせず淡々と「トオルくん、ほら」と玩具を渡し、遊びを続けてもらおうと泣き止んだ。そのままやりとりしながらまた「トオルくん」と呼ぶと泣き出すが、気にせず遊びを継続していると、3、4回で呼名しても泣き出す様子がなくなった。遊びの場面を離れると、泣きそうになる様子はあったが、その初回面接だけに留まり、2回目以降のセッションでは呼ばれて泣くことはなくなった。

恐らくトオルくんは「名前を呼ばれる＝怒

られる」という学習をしてしまっていたのかも知れない。1回の負の経験が大きく作用してしまったのかも知れないし、指示が伝わらない状況で怒られるということを繰り返していたのかも知れない。少なくとも初回面接での遊びで名前を呼ばれてもいつも悪い状況は起こらないことを理解してくれたようであった。

言語発達臨床におけるアンラーン

トオルくんのようなコミュニケーションにおける学習を生じてしまうことは少なくはない。最近、こうした状況への対応を説明するのに、アンラーン（Unlearn）という言葉が合うのではないかという気がしている。この言葉は1年程前に立命館大学の中村正先生から論文指導を受けた際に教わった言葉である。中村先生は対人暴力の研究をする過程で「Violence is learned, It can be unlearned.」という言葉と出会ったそうだ。暴力は学習された問題解決行動である以上、脱学習もできるという意味であり、当時の社会的学習理論に依拠する言葉であるという。アンラーンは学び直しや脱学習と訳すこともできるが、一旦学んだことを解きほぐし、再構築するという意味合いもあって、射程が広い言葉のようだ。ヘレン・ケラーもこの言葉を使っているそうで、彼女は大学で多くのことを学んだが、それを「アンラーン」する必要があったのだという。即ち学んだことを応用していくには、そのままの状態ではなく、自分の中で応用できるように再構築することが必要なのである。

私たちは皆、一旦は親、学校、社会、などそれぞれの生活圏の中で既存の枠組みに則った学習をする必要がある。社会化や文化

化である。しかしながら、成長や発達の過程で新しい課題に直面した時や、新たな社会問題に遭遇した時に、かつて学んできたことだけで対応することが困難な場合がある。また、時には暴力のように社会的に受容されない行為で問題解決することを学んでしまう場合もある。そこでアンラーンという発想が必要になる。

トオルくんは自閉症スペクトラム障害（ASD）の疑いがある子だった。彼のコミュニケーション行動にも ASD 特性が絡んでいるだろう。しかし、その行動は周囲との相互交渉の過程で身につけた反応の仕方である。アンラーンすることで、これまで互いに気づかず、採用されなかったコミュニケーションの方法を周囲との間で結び直したのだと言えるだろう。

臨床現場では「何をどう教えたら良いのか？」という問いが関係者から投げかけられることが多い。もっと言葉かけをしたらよいのか？どんな教材を与えたら良いのか？といった問いである。こうした問いは幾度となく投げかけられる。他人からだけではなく、自分の中でもこの問いを投げかけている。しかし、何かを足していくという発想だけでは問題が解消しないこともある。既存の問題解決行動の問い直し、その背景にあるシステムの問い直しなど、アンラーンの発想が言語発達臨床にも活かせるのではと思い始めている。

※本文中の事例は複数の事例を再構成したものであり、子どもの名前は仮名である。

〈参考・引用文献〉

景井充・杉野幹人・中村正（2019）『“教育から学習への転換”その先へ Unlearning を焦点に大学教育を構想する』文理閣。

かけだ詩 ①

そだちと臨床研究会

川畑 かわばた
隆 たかし

ご挨拶

かけだし

前期高齢者

二度目の退職

そだちと臨床研究会

掃除とゴミ出し

対人援助マガジン

かけだ詩

二度目の退職：一度目は京都府児童相談所、二度目は京都先端科学大学（旧京都学園大学）。そだちと臨床研究会：子ども家庭相談実務経験者の心理職八名（梁川恵・大島剛・菅野道英・衣斐哲臣・笹川宏樹・宮井研治・伏見真里子・川畑隆）が個々にあるいはチームで、児童福祉や教育分野他の支援者を支援する活動を行っている。活動歴は二十八年ほどになる。

彩(いろどり)

対人援助は

タイ人援助じゃないって

すぐわかるほど

業界の外にも

知られているんだろうか

虐待担当課長は

虐待をしてるんじゃないからねって

一言いっておきたくなる

それは 丸々

冗談ってわけでもないか

対人援助マガジンは

対人援助についての雑誌だって

思うのがふつうだけれど

どこまでがそうで

どこからがそうじゃないんだろう

ミスチルの「彩」は

目の前の茶碗

それを作った人が

いま自分を助けてると

たしか歌ってたと思う

そんな彩をねらおうか

ただの間違いか
そうじゃないか
助けてるか
助けられてるか
お呼びじゃないか
それでも行く…

アナログ戻し

原稿用紙は
分厚く束になったのがいい
万年筆は
太めで黒のを使おうか
こんな下手な字だったつけ
丸めて捨てて
箱への座りのいい文字を
せつせと積み直す

書いては二重線で消し
楔をうっては挿入する
あっちこつちと入れ替えて
これ 推敲と言うんだっけ

楔や推敲
国語辞典をすべる指の
なつかしさ
引出しの奥に虫眼鏡を発見する
真つ黒なシミや虫食いの
路線地図のよう
丸めて捨てて清書かな
いや このままがいい これがいい

アプローチ

テニスを習いたくて
講習会に申し込む
だんだん後悔が加速してくる
前日がマックス
ラケットは握らないことになる
そうなることはわかっているから
入るべき箱は作らない
ジョギングも
それ用のウェアは揃えない
詩を書く

助詞を主語から切り離したくなる
文頭の助詞の居心地を尋ねる
次第に馴染んでもきたようだ

詩を進める
この主語にはこの述語
文法を敬うと お前は余分だと言いたくなる
アンバランスのバランスも捨てがたい

形から入る
それもまたいい
：って
これもどこかで聞いた
台詞の形

飾り

不名誉教授だったら貰ってやるけどなあ
そう意気がついていた

名誉教授なんて名誉な人じゃないと
貰えないもんだと思ひ込んでいた
学部長が言った
あなたでも貰えます

いきなりソレが目の前にあらわれた
私は要りません 年寄りの代名詞は
口を突いて出た そう予定していたから
何かいいことありますか 金一封とか
べつにそれで給料をいただけたりは：
そうですね しませんよね
不名誉教授だったら欲しいかも：
やっぱりこぼれ出た

学部長が怪訝な面持ちで部屋を出たあと
不首尾はなかったよなと反芻した
それでいいと思った
でも そのあと
アレがあつたら いま使えたのに：
捨てた電気製品がちらついた

妻に確認した
アンタの好きなようにしたら：
ウン やっぱり要らない それでいいよな
アンタがよかつたらそれで：

妻が娘たちに尋ねたらしい
くれると言うんだから貰つとけばいいのに
子どもっぽいな
要らないのなら使わなかったらいいだけ：
妻の作戦
娘たちの巨像の前ですばむ肩
そして学部長への電話

かけだ詩① (川畑 隆)

退職後は
名誉教授の入らない名刺が入った名刺か…
途切れないこだわり
結局 名誉教授も小さく座っている
飾りは飾り
飾らない意気が消沈したのではないが
飾らないことで飾る自分にも
すこし飽きてきたか

たじろぐ

おとうさん
と孫娘が呼びかけてくる
おばあちゃん
はサーちゃん
おじいちゃん
はターちゃん
のはずだが
四歳は
おとうさん
と力強く呼ぶ

パパは
パパで
みんなが
ターちゃんを
おとうさん
と呼ぶからだ
という推理
でも
サーちゃんは
サーちゃん
家の中で
だったらまだいい
庭で
おとうさん！
おとうさんは
身の置き処がない
川畑さん
外で産ませた子を
引き取った
…かな？
ご近所の耳が
そう聴いた
…かな？
それって
違いますから…
呼ばれるのも

なかなか慣れないが
つられて名乗るとき
おとうさんの口は
尻すぼみ

他ではない
言葉：

「おとうさん」
が四歳の中に産み出す
のかもしれない
たしかな口ざわり
と耳ざわり

そのまぶしさに
おとうさんは
いつも
たじろぐのだ

二度 たじろぐ

ねえねえ 何してるの？
何してるかわからないから
何かしてるもんだと思うから
幼な子は尋ねる

テレビを観てるの
ちよつと口ごもる
たしかに観てたけど
ホントに観てたんだろうか

なんで？

ときた

面白いから：

とってつけた釈明

アンタ 何してるのよ！

：息してる

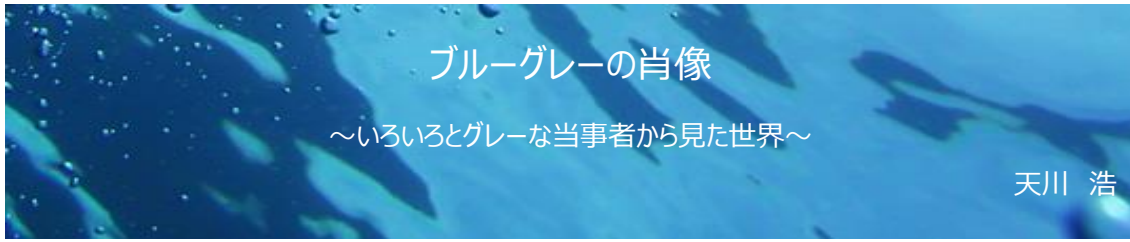
反抗的な小学生の私は
案外 深かったのかもしれない

ねえねえ 何してるの？

ホラ またきた

答えにたじろぐ

ろぐろぐ



第1回 「あなたはだれですか？」

■はじめに

みなさんはじめまして、天川 浩と申します。私は今まで、いろいろな仕事をしてきて、一番わからなかったことがあります。それは自分についてです。

みなさんは、自分のことをどれだけわかっていますか？

女性である、男性である、何歳である、どこに住んでいる…などの、いわゆる個人情報ほどなたでもお答えいただけると思います。後に出てきますが、これすら私には難しい問いだったりします。

では、「あなたはどこに所属していますか？」という問いについては、いかがですか？

会社員である、非正規社員である、主婦である、学生である、や、〇〇商事勤務である、〇〇大学の教授である、何某の子供である…人のとらえ方によって、若干、答えにバリエーションがでると思います。

では、「あなたはだれですか？」という問いになるといかがですか？

この質問になると答えられる人と答えられない人が発生すると思います。

単純に名前を名乗ることができる人、考え込んでしまう人…

「汝はいつれか？」という問いは哲学的で、人間の本質について問われているように私はとらえてし

まいます。簡単には答えられないイメージがします。

私が最近、目にする人々の中には、自分が何者かわからず苦しんでいる方がたくさんおられます。「なんやそんなことか？あほらしい」と思う方もたくさんおられます。人によっては、その問いに、簡単に答えられるからです。しかし、現実には答えられない人が結構、おられます。私もその一人です。

■「HSP」との憂鬱な日々

最近たまに耳にされることが増えたのではないのでしょうか？

米国の学者、エレン・アーロンによって提唱された「Highly Sensitive Person」(非常に敏感すぎる人)という言葉の頭文字をとった略語です。

何でもカテゴライズすることに、疑問を持つ方もたくさんいらっしゃると思います。精神科医のかたでも、その定義自体を否定している方もいらっしゃいます。

米国精神医学会のDSM-5などが精神疾患の判断基準とされていますが、HSPは精神疾患ではなく、あくまで性格の一種だとされています。

疾患でないのなら日常生活に支障はないだろうとよく思われます。本当にまったく支障ないのでしょうか？答えはNOだと思います。少なくとも私にはとてつもない支障があります。

追々、出てくると思いますが、HSP はいつも最悪のシナリオを頭に描きがちです。

たとえば、職場でプレゼンの大役をまかされました。普通の方なら千載一遇のチャンスだと言ってモチベーションをアップさせることでしょう。しかし、私には憂鬱な日々の始まりになってしまいます。HSP の特徴として、刺激に対して、快不快にかかわらず自動的に反応してしまうという面があります。その刺激を受けることによって、そこから様々な思考がどんどん波紋のように広がっていくことがあります。

「自動思考」とか呼ばれているこの状態は、私の経験上、良い方向にいくことはあまりありませんでした。文字どおり、始まった瞬間に、「最悪のシナリオ」を描いてしまいます。膨大な思考が 24 時間続き、その課題の遂行にどのような支障があるかを、脳がフル回転して計算し、その計算はリアルタイムで実施され、支障についてのリストが追加され膨らんでいきます。プレゼンが終わるまでこの計算は続いていき、夜は眠れずに明日についてのメンタルリハーサルが、ぶっ通し続いていきます。そして、プレゼンの当日は、プレゼンに対する批判や否定に怯え、消極的になってしまいます。結果は人並みに出ますが、印象に残らず、あまり力を入れていなかった人の案が選ばれたりする。私には、睡眠不足と疲労と傷ついた自尊心が残ります。

帰りの電車に乗っている場面でも HSP は発揮されます。くたびれたサラリーマンの愚痴、OL 達の上司の悪口、高校生の友人を嘲笑する言葉、主婦たちのマウントの取り合い……それら全てが私の心に直接、聞こえてきます。そんな SF みたいに心に声が聞こえてくる訳ないじゃない、そう言われることの方が多いのですが、これは現実です。HSP は無意識に同じ空間の雰囲気や、まさに「空気を読む」ように感じ取ってしまう特徴があります。人の動き、表情、しぐさ、言葉尻、あらゆる角度から、

五感を通して、一瞬で私の脳に情報が流れ込めます。一步その空間に入った途端に、その場所にいる人の状態を把握してしまいます。特に人が意識・無意識問わず発するマイナスの空気感には、いち早く反応していきます。例えば、小声で酔っ払い同士が喧嘩を始めたとしたら、それに一番早く気づくのは HSP の人間でしょう。他の人が通りすぎてしまうような些細なことが、HSP には連続で情報として半自動的に蓄積していきます。

SF の主人公なら、その情報を活用して、悪事を暴いたり、多くの人を災害から救ったり、大きな達成感とカタルシスを得られる場面ですが、私たちの生きている日常でそれが活用されることは無きに等しいかと思います。

これをお読みの多くの方も、そんな訳ないに決まっている、妄想だと感じる人は少ないないと思います。しかし、20 人に一人の割合で存在すると言われる HSP の人々には、なんとなく私の脳内で起こっている現象に少し共感していただけるかもしれません。

私はこの連載の中で、私の経験してきた事象にスポットを当てて HSP の世界の入口へみなさんを誘いたいと考えています。

それがスラップスティックなコメディに見えたら良いかな、と、あまつさえ考えています。

何故なら、HSP は感じない人にはわからない感性だからです。HSP 気質を持たない人に、それが決して悲劇の連続であると思ってほしくないからです。本当は少しは悲劇に思ってほしいという面もあります。何故なら、HSP 気質により二次障害である精神疾患に苛まれ、生きづらさを抱える人が多いという事実がそこにあるからです。同時に、どうにかして生きづらさを回避できる道があると思います。青と灰色しかないキャンバスでも美しい絵が描けると思うからです。悲しい青と、理解できない灰

色が美しいと思う瞬間もあるからです。

ブルーグレーの肖像は結局、どのような印象を世の中に与えていけるかということは、私にとっても挑戦であるし、新たな地平線を見つける旅路でもあります。

私たち HSP 当事者が、他者にどういった影響を与えられるかという研究は、近年になって最前線の研究テーマになりつつある分野です。

HSP を「乗り越えた」アドバイザーによる啓発本なども少なからず散見できますが、どれも密教の秘術のようにハードルが高く、到底、到達できない理想郷のような側面があると思っています。

「乗り越える過程」の当事者による考察があっても私は良いと思うし、そのような本を渴望する自分が、そこにはいたりします。

皆さんには、こういう存在がいるのだな、くらいに思ってもらえたらよいかと思います。妖精のような架空の存在ではなく、隣人のように確固たる存在でもない。今は、そんな段階であると、自分では認識しています。そのような立場を与えられた「ギフト」な存在として、これからの HSP 研究に一石を投じていけたら良いかと思います。

どうか温かい目で、見守って頂けたら幸いかと存じますので、よろしくお願い申し上げます。

■参考文献

『「気がつきすぎて疲れる」が驚くほどなくなる「繊細さん」の本』 武田友紀(2018)



応援、母ちゃん！

－子育てしながらはたらく母たちの日常－

たまむら ふみ
玉村 文

はじめに

これは、33歳で初めて子どもを産み母になった女性、対人援助の仕事をしてながら生きる日常を描く物語です。個人の日常の「あるある」を描き、その「あるある」から「次の一歩」を目指す子育て応援の連載にしていこうと思います。個人の体験がみんなの「あるある」になって、さらにそれが社会化されていく、そんな機能になれば良いなと思って。

子育てと応援

子育て初心者の生活では様々な問題に出会います。特に、夫の転勤で知り合いのいない地域暮らしでの子育て初期は、「孤立感」との戦いでした。人と話さない、家に子どもと2人

きりの状況が軟禁状態に感じられるほど。少しずつ子どもと外出できるようになると、いわゆるママ友との交流を求めて近所の子育て支援拠点に出かけるようになりました。そこは、これまで必死だった子育てを「楽しい」と思える瞬間がたくさん起こる空間でした。この子育て支援拠点では、子育て親がお互いを支え合う場です。この場は、1対1でのいわゆるカウンセリングではなく、似たようなニーズをもつ人たちがグループで支え合う、コミュニティとしてのカウンセリング機能を持っています。それは、応援する／されることを通して力を得られるという体験でした。

応援すること・されることが力になるという経験は、遡れば高校時代に出会って大学生まで続けたチアリーディングから始まります。アメリ

カンフットボールや野球などの応援に行っては、観客と一体になって選手を応援する役割を楽しんでいました。ポンポンを持って踊り、ハーフタイムに演技を披露して、観客の応援を倍増させて選手を元気づける行為。他者への応援が力になるのだという実感を得ました。また、応援することが自分にも還ってくる、自分も元気になる経験でもありました。わたしは、同じ衣装、同じ髪型をして女の子集団でいることも好きでした。その中でも「集団として目立っているけれども、個人としては没個性」という立場に安心感を得られる、そんな思春期時代を過ごしました。

大学院ではそんな経験を生かして、「応援」をテーマにチアリーダーと思春期・青年期の社会心理を明らかにする研究に取り組んでいました。仕事として対人援助職を選んだのも、高校生の時に会ったチアリーディングの延長線上の選択だったように思います。そのくらい、他者への応援はその人々の力になると思って、応援されて結果を出そうと努力する人たちを間近で見ることでパワーをもらっていました。

わたし自身が母親になる前までは、自分は応援する方だと思っていました。でも、子どもを産み母になってみると応援されることを強く望む自分がいました。ここでの応援は、ケアという概念も含む広く意味での援助として考えます。「がんばれ、応援しているよ」という言葉や、「わかるよ、わたしも」という共感の姿勢は、心に沁み込み、応援されているように感じられます。応援は「一人ぼっち」ではできない。他者が必要なのです。

ここで文章にすることも、応援されるための一歩でもあります。もちろん、子育てを応援する意味もあります。わたしは、子育てや仕事との両立を応援してほしい、そしてわたしも誰かを応援したいという思いがあります。これまでは文章を書くことは好きでしたが、人に読ませる文章を書ける自信はなく、特にリズム感のある文章やユーモアのある文章を書ける人たちのことを尊敬するだけ。わたしはそれを読んで、消費する方が合っていると思っていました(今もそう)。わたしの父が「文章が上手になりますように(父自身が論文を書く際に苦労していたから)」と名付けた「文」という名前は、名前負けで単なる記号としてしかわたしの中には根付いてはいませんでした。「小学校1年生で氏名の漢字すべて習うんよ」が、自己紹介の時の定番になり、それで覚えてもらえることだけが恩恵でした。

応援される人の作法

対人援助サービスの業界では、近年、「他者に助けを求め、快くサポートを受け止める力」をいかに育てられるかが話題になっています。「受援力」と言ったりします。なぜそのような力が必要なのでしょう。それは、援助は援助者の一方的な行為ではなく被援助者との相互作用の中で形づくられるためです。他者に対し適切にHELPが出せること、そんな「受援力」を高めるためには、他者への信頼感が重要です。HELPを出して助けられた経験がなければHELPは出せないでしょう。他者信頼がある上で、受援力を「他者から応援を引き出す力」として捉え、応援される人とはどんなものかについて考えてみました。そんなことを考えたのは、母親になって日々の生活の中でぶつかる細々

した問題を前に、他者からの応援を欲するようになったからです。子育て初心者の方は、自分で自分を応援する自己完結ができませんでした。今も応援されたい自分がいます。そうして他者からの様々な応援をもらうなかで、応援されるにも作法があるのだと気づいていきました。応援しがいのある人になることということ。

応援しがいのある人になるにはいくつかの行動特性があると思います。経験的に得たいいくつかの要素を分類してみると、【1】共通言語【2】弱さを見せること【3】チャレンジする姿勢【4】楽観性／弱者のままでいいこと、【5】応援された結果も見せるという5つです。

【1】 共通言語

HELP に気づいてほしい時に、周囲から察してもらえなかったことは誰もが経験していることと思います。特に共通体験をしていない人から応援されるときには、その人にわかるように伝えないと応援やケアが必要な人に見えないようです。例えば、わたしはこんな経験をしました。まだ出産して2～3週間のこと。寝てばかりの新生児と家にいるときにお祝いで訪ねてきた独身の友人に「育休ってヒマでしょ、何するの？」と率直に尋ねられました。「早く仕事に復帰したいでしょ。」わたしはその時、驚いて状況を説明。2時間以上連続して寝られない細切れ睡眠で頭がぼーっとしながら、回復中の身体で子どもの世話をする一日のタイムスケジュールを伝えました。何もしていないように見えても、赤ちゃんが何かアクションを起こすとすぐさま対応する、文字通り【24時間待機中】の状態です。24時間

お世話をする訳ではないのですが、赤ちゃんの要求に応えるために待機をし続けなければならない状態のこと。その頃、3歳児を子育て中の友達からは、「子どもを預かってあげるから、たまには一人になる時間がないと自分がしんどくなるよ」という実感のこもった、そしてありがたい手助けがありました。共通体験をしていると察して手助けしてもらえることもありましたが、共通体験がない場合は伝え合う必要があります。決して子どもがいる人といない人が互いに分かり合えないということではなく、共通言語によって理解し合えば応援し合えると思うのです。

【2】 弱さを見せること

共通の体験がなくても見た目で弱っている、手助けが必要だと感じられる装いをしていくことも応援ポイントです。両手に荷物を抱えて子どもを抱っこしてマンションに入ろうとするときに、「ああ、大変そうだ」とドアを開けてくれる隣人は多いでしょう。子育て支援拠点で、こんな光景を目にしました。毎日、1歳の女の子を連れてくる20代後半のお母さんがいました。ある時、子育て支援拠点の広場の中でお母さんが横たわっていました。「ぎっくり腰をやってしまいました」と。そんな腰の状態を娘をベビーカーに乗せてやってきたとのこと。1歳児を自宅で一人みるよりも、子育て支援拠点に連れて来たほうがマシだ、と思ったのでしょう。彼女と仲の良いママ友の一人が湿布を買いに走り、彼女の腰をケアしてくれました。「わたしも腰が悪いからわかるわ。子どもいると腰に負担がかかるよね」と。

【3】 チャレンジする姿勢

何かにチャレンジしている人がいると、周りには応援することが多いと思います。わたしは、育休中に資格試験に挑戦すると周囲に言ったときに、いろんな応援をしてもらえました。言葉だけでなく、勉強で忙しいだろうからと夕飯の差し入れをくれた方もいました。「落ちたら恥ずかしいから黙っておいて受かったら周囲に伝えよう」という人は、勉強している過程での応援が得られないのではないかと思います。わたしは、資格を得るという結果よりも、子育て中に何かと両立するという過程の方に目標を置いていました。周囲は合格という結果になるように応援してくれたと思いますが、勉強するというプロセスにおいて力をもらっていました。育休中に資格の勉強をしている子育て女性には他にもいました。子育て支援拠点では、お昼寝中の子どもの横で試験本を読んでいる母親たちに遭遇しました。仕事に関係のある資格を取っておくつもりと、子どもの昼寝時間を利用して勉強されていました。公の場でそのような姿を見せようと、周りも自然と応援する雰囲気になります。

【4】 楽観性

弱っていることが応援されるポイントではありますが、ずっと弱い・ずっと困っている人だと応援者は減っていつてしまうように思います。また、自分の殻に籠もって弱さを表さないこともそうでしょう。「打てば響く」が実感できないと応援しがいがないためです。これは【5】の応援された結果を示すことにもつながるのではないかと思います。

【5】 結果を見せる

結果を出すといっても、試験に合格するか、何かに勝つかかそういうわかりやすいことだけではないのです。逆説的ですが、受験を応援してくれた人に、不合格という結果であっても「応援しがいなかった」とはならないでしょう。「結局、受験会場に行かなかったんだ」という結果だと落胆させるのではないのでしょうか。たとえ不合格という残念な結果になったとしても、目標達成に向けて努力する姿勢やプロセスは示す必要がありそうです。

以上の5つの行動特性は、応援しがいのある人になるためには重要だと思います。応援されるための作法ともいえるでしょう。とはいえ、応援されることを目的に生きている人はいないわけで。なにか目標や困ったことがあって、他者の力を必要としたときに、必要な応援を手に入れるための知恵だと受け止めてもらいたいです。プロスポーツやアスリートへの応援とは少し違うかもしれないです。また、いわゆる支援機関の制度を使ったサービスとも少し異なる部分はあるでしょう。制度上のサービスはその範囲が決まっていて、成果と限界が明確にあるものです。

子育て支援じゃないよ 子育て応援

制度を使った子育て支援はたくさんあります。わたし自身もその枠組を活用して、子育ての情報を得て、子育て親達と出会っています。また、住まいの近くの保育園に子どもを預けています。さらに、子どもの健康や発達について、保健師さんやかかりつけ医の専門知を提供してもらうこともあります。加えて、国の児童手当

制度の対象世帯でもあります。児童手当とは、「家庭等の生活の安定に寄与する」とともに「次代の社会を担う児童の健やかな成長に資する」ことを目的として、中学校修了まで年齢に応じて現金給付がなされるものです。

ここでは、たくさんの支援策があるから十分だ、と言いたいわけではないのです。かといって、不十分な点を指摘して新たな制度の提案をするほど制度を熟知しているわけではありま

せん。子育て支援というと、個人が行うものだけでなく自治体が行っているものから国の政策まで幅広い意味を含んでいます。ここでは、子育て支援行政や政策についての一般的な問題解決への政策提言ではなくて、とても個人的な実践からの気づきを共有していきたいと思っています。個々の実践が社会化される、そんな機能になれば良いと思って書き続けてみようと思います。



育休で 子連れ同伴 資格試験



ここでは、育休中に資格を取得する、いわゆる「意識高い」子育てとキャリアアップの両立を図ろう！なんてことを言いたいわけではありません。

ではなぜ「子連れ資格」を書かねばならないのか自分に問いかけてみました。それは、出産は自身のキャリアについて考えざるを得ない、場合によっては変更を伴う大きな転機になると思うためです。子育て女性のキャリアについて、多様な実践や取り組みはあります。子育て女性の等身大の選択と決定は、これらに悩む女性達の実践のヒントになるでしょうか。前半は、

自分の経験を振り返って気づいたことをまとめ、後半はママ友のYさんのキャリアの活かし方を紹介していきます。

これまで出会った子育て女性たちは皆、一度は働いたことのある方ばかりで、育児休業の制度を活用して子育てしている方が大半でした。そして、みんなそれぞれ「当たり前のように」、出産後も自身のキャリアの維持、変更、発展を考えられていました。社会的にも、第一子出産後も仕事を続ける女性は増加していま

す。内閣府(2016年)の調査では、第1子出産前後に女性が就業を継続する割合は53.1%であり、年々上昇しているようです。「保育園落ちた、日本死ね」というTwitterがニュースに取り上げられる、保育園入園に向けた活動「保活」という言葉が市民権を得るほど、子どもを保育園にあずけて就労する世帯は増加しています。

なぜ育休中に受験をすることにしたのか

そもそもは妊娠中、時間をもてあまして資格取得のため学校に通い始めたことから始まります。横浜で働いていた職場は土日休み。妊娠中は習っていたヨガに通うこともできなくなったことも一つの理由です。休日の2日間を夫と一緒にいると、たわいもないことで喧嘩に発展してしまいます。それぞれ熱中するものも趣味も違うし、ずっと一緒にいることはお互いに窮屈に感じるタイプなのです。自宅と職場にしか知り合いがないこともしんどかったように思います。仲間がほしい。比較的短期で結果が出る目標もほしい。今思うととても甘いと思うのですが、出産後の育児休業中は時間があって暇だろうから何か家でできることがほしいと思っていました。時間的な余裕も生まれ、子どもが生まれた後も働き続けたいなあと、そうだ資格を取ろうと思い立ったのです。

そんなこんなで、資格取得に向けて半年間スクーリングすることになりました。そのプロセスで試験仲間ができ、その仲間たちから勉強だけではなく出産の応援もしてもらえたことは思わぬ副産物でした。スクーリング最終日に修了書もらい、試験日まで勉強を頑張ろうなどと言いました。グループで勉強をしようとするクラスメイトもいました。「まずは出産、頑張っ

てね。試験はその後」と声をかけてくださる方もいました。子育てが一段落し、自身のキャリアアップのために学びに来られた主婦の方からは、「これ、よかったら使って」と、男の子用の小さなスーツのお古をいただきました。「小学校入学式で使ってずっとおいてあったの。良かったら7年後に使ってね」と。ずいぶん先のことだと思いながらも、その気持ちがありがたくて心がじんとしました。そんな出会のあったスクーリング期間でした。

スクーリングにかかった費用は、半分は公費負担です。その手続のために、スクーリング最終日の次の日にハローワークに行きました。横浜のハローワークは、中華街のそばにあります。中華街でお土産を購入し、その足で新幹線に乗って京都へ。里帰り出産のために、京都に帰ってきました。出産までの時間はとてもんびりしたものでしたが、出産には2日かかり想像以上の痛みを伴った慌ただしさでした。

育休中は暇じゃない

出産前には、育休中は時間があるだろうから、試験勉強をしようと思っていました。今考えると、なんてのんきな考えなのでしょう。育休中は全く暇ではありませんでした。特に、子どもの入院というトラブルで、これまでの人生で初めて2日間徹夜し、脳みそがブルブル、フリーズした経験をするようになります。完全母乳育児をしていたため、3時間毎の授乳は断乳まで続けました。つまり3時間以上続けて睡眠を取れないのです。細切れ睡眠を何ヶ月も継続すると、集中力は落ちてしまい、万年寝不足状態。頭がぼーとした状態で、試験勉強なんて。

記憶力の低下から、暗記は進みませんでし

た。文章を目で追っているだけで、記憶には残らない、これは時期が悪かったかなと焦りを感じました。でも、結果的に育休中に試験勉強をしたことは良かったと思っています。それは、合格という結果を手に入れたからというわけではなくて、勉強をするプロセスにおいて発見と発散があったからです。子育てという答えのない、日々変わる問題と向き合うっていると、試験勉強は答えの決まっている問題ばかりでラクだと感じてしまいます。4つの選択肢の中に答えがたった1つの問題なんて、喜びさえ感じます。子どもがお昼寝中に取り組む過去問題は、子どもが起きるまでの時間制限を気にしながら集中力が高まる気がします。一つ解いて答え合わせまですると、とってもスッキリしました。

試験勉強は、答えがある喜びだけでなく、アウトプットする機会にもなっていました。アウトプットするには他者や場、機会が必要で、それらを自分で作らないと忙しい日々流されていってしまいます。過去問題でストレス発散、なんて共感されないだろうと思っていたら、ママ友の一人から「勉強、楽しいでしょ」と連絡が来て、これって「あるある」なんだと気づきました。お互いテストが好きなわけではなくて、それくらい発散が必要だったことに涙が出ます。

目標に向かってコツコツできることがあることも育休中の自分にはフィットしました。目標がないと毎日にメリハリがなくなってしまう。我が子は日々成長しそれが面白いとはいっても、やることといえば家事、子どもの世話のルーティン。終わりが無いものばかり。終わりのある目標がほしい。とはいえ、大きすぎる目標もしんどい。「我が子を立派に育てる」なんて目標は、願望としては良いけれど、目標にして取

り組むには大きすぎて手に余ります。目標が達成できるとしても何年先の話でしょうか。それよりも「我が子が寝ている1時間～2時間の間は勉強する」という目標は、育休中の時間感覚にフィットしました。

試験日は子連れ同伴

受験当日は、授乳時間のことがあり夫と子どもも同伴で会場へ行きました。お昼休みに落ち合い、授乳。すでにお腹が空いていた子どもに夫が離乳食を与えており、おっぱいなしでも満足げな様子。なんとか少しは飲んでもらって、そこでお別れ。わたしは午後からの試験に会場に戻りました。試験が終わり、帰り道は一人、なんだか脱力感。試験のこと、子どものことで気を張っていたんだと、少しのんびりした気分を味わいました。

試験が終わり帰宅すると、子どもはちょうどお昼寝中。夜まで待たされたおっぱいは張ってきています。でも疲れたな、眠いなあと搾乳はせずに寝てしまい、発熱。乳腺炎になりかけていました。慌てて搾乳し、桶谷式母乳マッサージの予約を入れました。

そんな一日が終わって、なんとか試験日をクリア。試験日以外のプロセスは充実していましたが、試験日当日はハラハラ、バタバタ。いつものルーティンと違うことをすると、少しずつズレが出て結果的に自分に返ってくるなあと思います。試験勉強は日常生活に落とし込めていたけれど、試験日は非日常体験、目まぐるしい一日が終わりホッとしました。

育休中は暇じゃない。だけど育児以外にもすることはありますし、子連れだからと諦めること

はないと思います。子どもが生まれたら子ども中心の生活になるでしょう。子どもはかわいい。24時間365日一緒にいて、子どものことだけを考えて世話をして、それができる人もいます。でも、わたしには育児以外の時間が必要なんだと思います。目標も必要です。それが育休中に必要でした。わたしは、子育て中でも自身のキャリアについて考え、できることをしたいと

思っていて取り組んでみました。子どもをもつ女性のキャリアなんて大きなテーマですが、なんてことない日々の積み重ねが自身のキャリアにつながっていくのだろうと思っています。

📢 子育てに 活かすキャリアの 使い方 📢



1歳半の女の子を育てる Y さんとは横浜市の「子育て支援拠点」で出会いました。「子育て支援拠点」とは、親子で行ける施設で、遊び道具等があるフリースペースです。「絵本の読み聞かせ」や「産後ビクス」など、子育て親のニーズの高いプログラムも設定されています。各区に1ヶ所、横浜市の補助金事業として NPO 法人が運営しています。

Y さんは、食品メーカーの研究職に15年以上勤務しています。長く仕事をしていると、自分は結婚しないかもしれないと思っていた時期もあったそうです。でもひょんなことから、飲

み仲間の年上の男性と30代後半で結婚し、妊娠出産しました。子どもは1人、これ以上はもう望まない。なので、子どものためにしたいと思っていたことを全てしたい。育児書もたくさん読み、気になることは調べたり相談したり自然と知識も豊富です。子どもの頃ずっと学級委員長をしてきたタイプで、他のママ友からの相談を受けたり、面倒見の良さが長所です。子ども好きの夫は40代の年齢に似合わず、とてもフットワークが軽いタイプ。土日には、母親と子どもばかりの「子育て支援拠点」にも父子で通ってきます。40代の夫の両親は高齢だし、Y さんの親は九州に住んでいます。必然的に、夫婦

で子育てする連帯感覚があります。つまり、上世代に頼れないこともあって、横の関係で支え合う意識が高いカップルなのです。

そんな Yさんは、育休中に、その知識や経験を生かして、子育て親のための「離乳食講座」(ごはん研究所)を子育て支援拠点で開いてくれました。30名以上がともに学ぶ3回講座です。各回ともに、前半はYさんの専門職で培った知見が紹介され、使える情報についてのレクチャーをしてくれて、その後、グループに分かれて参加者同士の状況を共有しながら悩み相談会の構成です。専門家情報と横のつながりの両方の機能をプログラム化したものです。

ちなみに離乳食ってとっても大変。何が一番大変って、離乳食の進め方やガイドラインはあっても数年スパンで変わってきていて、さらに食物アレルギー問題もあります。これも年々実践が変わります。以前はアレルギーの原因になる食べ物は除去しましょう、が主流でしたが、近年は少しずつ食べさせましょう、に変わってきています。子どもにチョコレートやスパイスをいつから与えて良いかなんて基準も明確にありません。本によって食材の与える時期が異なります。調べれば調べるほど、情報過多で何を基準に選択すればよいのか判断しにくいのです。保育園に入園させるなら、保育園給食が食べられるように入園までに食べられる食材を増やしたい、でも子どもは食べむらがあってなかなか進まない。離乳食の常識は年々変わっていくので、上世代とのギャップも大きいことも問題だと思います。卵の与える時期が典型的で、アレルギーへの配慮から昔はできるだけ遅くすることがスタンダードでしたが、今は離乳

食初期から与えても良いことになっています。などなど離乳食の悩みがない保護者と出会ったことがないくらいです。もちろん役所等で専門家である栄養士さんや保健師さんに相談ができます。でも、離乳食は毎日のこと、毎日相談もできない。自然と子育て親同士で会って話して知恵をもらい合うことが多くなります。それぞれ人に聞いたり、本を読んだり、スマートフォンのアプリを使ったりと工夫をされています。

この「離乳食講座」(ごはん研究所)は、子育て親当事者であり、専門職でもある Yさんが、専門的な知見と当事者のニーズをうまく組み合わせたプログラムとして行われました。専門的な知見とは、「味覚を司る味蕾は生まれてから成長していくこと」「子どもの月齢に応じた胃の容量について」など、子育て親の素朴な疑問に答えてくれる「科学版知恵袋」のようなものです。このような取り組みは、まさにコミュニティカウンセリングの実践だと思います。Yさんの実践は、自身のキャリアを自分だけのために使わずに、知恵を開き共有する場を作ったことです。こんな実践は、対人援助のキャリアの描き方だと思います。

子育て中のアウトプットはスッキリします。だからこそ、誰かにとって役立つアウトプットをするために、自身のキャリアを使いたいと思います。Yさんの実践は、自身のキャリアの上手な使い方を知らせてくれます。そんなYさんも、職場復帰に伴って研究職から事務職への異動を余儀なくされています。キャリアの変更は、彼女の人生にどのような影響を与えるのでしょうか。

2015年頃から一コマ漫画を大きなキャンバスに描くことを続けてきました。小さなサイズのケント紙にペンと水彩絵の具で描くというこれまでの1コマ漫画の表現形式では十分に伝えられないものがあること、アクリル絵の具で刷毛や筆で描くダイナミックさに魅力を感じていること、ユーモアアートとしての見せ方にこだわって描き続けてきた作品は2018年度の漫画家協会賞カートゥーン部門の大賞を頂きました。

あらためてこの場で私なりのユーモア表現をご覧いただければと思います。

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

縛る

伊勢の二見興玉神社、二見ヶ浦にある夫婦岩の風景は、関西の人間には馴染み深いモノだ。
お伊勢参りは江戸時代の読み物や落語の世界にも登場して当時の人々の伊勢神宮への深い信仰心がうかがえる。
今は平和学習や災害学習などの教育的意義を重視した修学旅行が中心になっているが昭和20年代の大阪の小学校の修学旅行はお伊勢さんが定番だった。
近鉄特急で大阪上本町から1本という地域性もあったのだろう。私も伊勢神宮前で撮った小学校の修学旅行の集合写真をはつきりと憶えている。

土産物店ではこの夫婦岩のミニチュアの置き物やその絵の描かれたベナントを買って帰る友人も多かった。
海面に突き出した男女の岩を繋いだ後から、朝日が上ってくる風景も年賀状の定番イラストとしてよく使われた。
緑結びの神社としても有名なが、男女を繋ぐのがこんなに太くて切れそうも無い綱だと、どちらに取っても辛い夫婦生活になるのではと思ってしまう。
切れそうで切れない、そのためには双方の気配りや思いやりが必要となる赤い『糸』が一番ふさわしいんだろうな。





握手

鳩が平和の象徴と言われるようになったのはいつ頃かなのだらう。
多くのポスターやカートゥーンにはたくさんさんの白鳩が描かれてきた。
日本ではタバコのピースのデザインが最も象徴的なモノの代表だろう。
しかし若い頃、エジプトを旅行した折、ランチで鳩の丸焼きが名物料理として出た事があって、その時に鳩に対するイメージは世界共通ではないことを感じた。
握手も西洋では相手に対する敬意と親愛の情の表現として当たり前なことだが、東洋ではその習慣は元々無かったものだ。
そして最近では新型コロナウイルスの影響で握手を避けるようになった。

お互いの言葉や所作で心を通わす行為がどこかでハラの探り合いという風に見えるようになったのは寂しい話である。



進化

昨日まで出来なかった事が突然出来るようになる事がある。
自転車に補助輪なしで乗れるようになった時や鉄棒で逆上がりが出来た瞬間もそうだ。
でもこれは『進化』というより『成長』と言った方が適切だろう。
そんな小さな成長に出会った時の感動は結構大きい。
我が子がハイハイの時期を過ぎて、立ち歩きが出来るようになった瞬間もそうだ。

もちろん、人類が2足歩行を始めた瞬間は歴史的な『進化』の瞬間であつたろうが、周囲はそれをどんな気持ちで眺めていたのだらう。
もしかするとそれは誰にも認識されないままだったのかもしれないし歩き始めた本人にも何が起ったのかわからない不思議な感覚だったのかもしれない。
『必要は発明の母』と言われるが、進化にもそんなフレイズが合うようだ。
しかし、それと平行して退化して行くモノもたくさんある事に人は意外と気が行かない。



F-30号

クリック！

『群衆の中の孤独』という想いを若い頃にいつも感じていた。

他社とのつながりを求めながらも繋がれないもどかしさを思いながらひたすら絵を描く事で自分を主張し続けていた。

ネット社会になって人のつながり方は大きく変化した。

パソコンの画面は世界中に繋がる入り口となったがそれぞれのプライバシーや個人情報に侵されたり盗まれる事も多くなった。

どこかで誰かが自分を見つめている。そんな不安からパソコンのカメラレンズを塞ぐ事も常識となった。今夜も誰かが、誰かの部屋をクリックしている…

空気注入

芸能人の家のルーツを
探るテレビ番組が話題
になっている。
先祖代々の家系図があ
るような家は少ないだ
ろうが、自分の2代前
の家族の事でさえ知ら
ない人も多い。
親が自分の子どもや孫
に自分の人生を語る機
会も減ったように思う。
人生で得た知識や技術
や体験は記録できるほ
んの一部を残してその
死とともに消滅するが
『才能』は見えない所
で受け継がれて行く。
毎日、孫の相手をしな
がら、喜々として絵を
描き続ける孫の姿に、
幼い日の自分が重なる
瞬間がある。



F-30号



老老対決！

突然キレル老人が増えて
いるらしい。
もともと頑固オヤジやカ
ミナリオヤジは何処にも
いたが、最近の老人は意
味も無くキレルらしい。
老人同士の喧嘩はもとよ
り、タバコを注意した幼
児の首を絞めたり通りす
がりの幼児を殴ったりと
、以前は考えられなかつ
た事件が多発している。
65歳以上のこの手の事
件は、年間の一般刑法犯
の20%近くにのぼると
いうから、単に老人が増
えたというだけでは済ま
されない気がする。
団塊世代が子どもの頃、
出会った老人たちとは違
うある種の『障害』を持
つ老人たちは、その団塊
世代なのだ。
戦後の日本をがむしやら
に生き抜いてきたモーレ
ツ世代が、そのエネルギ
ーの吐き出す場所を失っ
てもがいているようにも
見える。

編集後記

編集長(ダン シロウ)

編集中の大事件を思い出すと、2011年3月の「東日本大震災」。マガジン第4号の校了間近だった。大慌てで、とにかくあの時期の対人援助について、思うところを書いた。

そして今回、2020年3月、第41号の迎えた大事件は新型コロナ禍だ。

息長い作業を続けていると、いろんな事に遭遇してしまうのは当然だ。不安がったり、誰かを批判したりではなく、対人援助学マガジンの視座から、今回の事態を騒ぐのではなく、見つめている。

とはいえ、正直なところ、疫病の蔓延で都市が破滅してしまうような話は、過去の世界史の中のことだと思っていた。武漢市のロックダウンだって、わざとらしい強権発動の訓練の印象がぬぐえなかった。

なのに、そう時間がかからないで、仕事場のある京都も空っぽになった。錦市場の異常な混雑ぶりを見ていたので、最近の閑散ぶりには驚きが隠せない。過剰インバウンドをアテにしていた業種は、突然の災難で廃業に追い込まれる話も聞こえ始めた。

私のWSや講演、講座なども、3月からすべて中止、延期になった。仕方ないことだし、復旧後も、元のようにはないと思うので、冷静な検討、分析が必要だろうと思っている。私など、ネバならない仕事でも、立場でもないの、事態の収束を待って、新たな枠組みを思案しなければならないだろうと思っている。

対人援助学マガジンはコロナ禍の影響を受ける仕組みにはなっていないので、粛々と継続するだけである。むしろ今回、原稿の到着が全体に早い。

こんな時には、自分の身边に形成されたシステムを吟味しておくことだ。誰かにあおられたり、刷り込まれたりしているモノはこの際、整理縮小するきっかけだと思うことだろう。

編集員(チバ アキオ)

家族との面接をしていると、誰かが亡くなっているときには、その死因や経過をできれば聞くとよいといわれる。家族の死は基本的にはストレスであろう。ただ長く患っていて、余命も言われていて、本人も苦しんでその後迎えた大往生といわれるような死と、朝「行ってきます」を最後に、突然訪れた死は異なる。それは突き詰めると予測されていたか、予測されていなかったかの違いである。

今回のコロナは予定されなかった経験を全国民がした。不本意なこともたくさんあったのは言うまでもない。そんな中で、私は4月の変化を予定していた。そう言った違いが他の人とあるんじゃないと編集長にご指摘を受ける。本人としては納得。と同時に私が変わったのか、世界が変わったのかわからない思いもたくさんあった。

変化は必ず起こる。変化は避けられない。永遠に続くものはない。そうであるならば、その変化をどう自分の人生に起こすことが、より満足度があるかに直面させられた。

少なく見積もっても、経験する変化のパリエーションも多様な方がよい。ワンパターンであることと、うまくいかないことが組み合わさると真性ワンパターンのドツボに陥るからである。

こうもできる、ああもできる、から、今回はこれを私はする。となれば自分の決断であり、自分の選択であり、結果としてのリターンがある。

マガジンを書く、マガジンを編集する、マガジンをネット上で掲載する。仕事でもなく、義務でもない。未来に対して、自分ができるところをするという選択ができることは、必ず自分に返ってくると信じる。

編集員(オオタニ タカシ)

今号から目次のページ入れを担当しました。今後、ページ関係でミスがあった場合、私由来です。目次編集の作業をしてすぐ、とてもやり慣れている作業であると感じた。手を動かしながら頭の中を探ると、発達検査の換算表を作る作業と酷似しているとわかった(マニアックですみません)。この得点からこの得点までの人は、発達年齢が〇ヵ月相当

で…、という表を作るのですが、これは目次に置き換えると「このページからこのページは、〇〇さんの連載で…」にそのまま置き換わります。これまでの経験の何が、後に活かされるかなんて、わかったものではないと改めて思います。

今号は、執筆者短信にも、連載の内容にも、新型コロナウイルスの影響が色濃く表れました。誰もが予測していなかった不確実な未来の方に、大きく舵が切られたとすることができるかもしれません。ですが、自分の人生には予測可能な範囲のことしか起こらないというのも、思考があまりに貧しいのかもしれませんが、人には予想外のことも起こると織り込んだ上で、なお人を支える対人援助の営みについて、引き続き息長く考えていきたいと思う、マガジン 11 年目の春です。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町4-3-8
ランプラス二条御幸町4-0-2 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻41号

第11巻 第1号

2020年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第42号は2020年09月15日
発刊の予定です。

原稿締切2020年08月25日！

執筆者募集

11年目を迎えたマガジン。新たな書き手を求めています。

新たなジャンルからの、書き手の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、

自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌です。必要な回数を、心置きなく書いていただけます。

ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いします。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

キングコングは団塊世代の子どもにとってアイコンだった。

スマホ登場前の世界を変えたのは「ウォークマン」。あれで音楽を聴く人間の行動が激変した。

そんな時期のCMにチンパンジーがウォークマンで音楽に聴き入っているのがあった。たしかその前の猿は、「猿でも反省できる」というキャッチコピーのCMだった。

摩天楼の上のキングコングは、怪物の役回りを果たして、飛行機を落とそうとしたが、このキングコングはじっと音楽を聴き入っている。

映画「猿の惑星」の登場はこの頃だったか？調べれば分かることだが、面倒くさい。

ただ、近年の人間（権力者）は、洋の東西を問わず無知で野蛮なのが加速している気がする。嫌な時代への突入感プンプンである。

(2020/06/15)